才媛淑女絶好伴侶

女子文壇

花圃

明治三十八年三月一日發行（毎月一回）
明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可



第壹巻

第三號

東京
女子文壇社發兌


東京 平尾賛平製
日本美人はらいろ粉
聖路易萬國大博覽會名譽銀牌
ダイヤモンドハミガキ
元祖 小町水

本號より紙數を増し新たに「英文」を巻末に載す

▲注意＝此目次を御熱覽の順次内容閲讀を希望す

女子文壇 第壹巻第參號

目次

▲本誌の自慢＝號を重ぬるに從ひ内容良好、無類の割安なるは獨特の自慢也

本號には懸賞圖書の披露あり☞

名譽賛成員

（イロハ順次第不同）

文學博士　井上哲次郎君
哲學館大學長文學博士　井上圓了君
少年世界記者　巖谷小波君
文藝倶樂部記者　石橋思案君
石井研堂君
醫學士　石原喜久太郎君
二六新聞記者　江見水蔭君
理學士　飯島啓君
東京府女子師範學校教諭　岩本ふく子君
甲府商業學校教授　池田朝長君
東京府師範學校訓導　今村武男君
帝國大學、高等師範、日本女子大學教授　文學博士　萩野山之君
慶應義塾教授　林毅陸君
太陽記者　長谷川天溪君
女子教育奬勵會東京女學館幹事　西田敬止君
島根縣女子師範學校教諭　錦織竹香君
衆議院速記者　新井田次郎君
太陽記者　鳥谷部春汀君
東儀鐵笛君
獨逸學協會早稻田大學講師　文學士　長連恒君
東京女子高等師範學校講師　文學士　尾上柴舟君
文學士　大町桂月君
獨逸學協會學校長　大村仁太郎君
大和田建樹君
大塚楠緒子君
仙臺第一中學校教諭　大宮宗司君
東京府女子師範學校教諭　大塚治六君
外國語學校教授帝國大學講師文學士　岡田正美君
東京府女子師範學校教諭　岡田ふみ子君
女子圖案會理事　岡田不崩君

東洋女藝學校講師　岡みち子君
醫學士　岡本武次君
博文館發行戰爭實記記者　押川春浪君
新潟縣女子師範學校長　川面松衞君
市立下關商業學校教諭　川崎又次郎君
萬朝報記者　茅原華山君
川崎默堂君
女子英學塾教師　河井道子君
河合英忠君
醫學士　樫田龜一郎君
福岡縣東筑中學校長　金澤來藏君
鏑木清方君
女學世界記者　勝間恒彦君
春日廓悟君
吉田晩稼君
武内桂舟君
文學士　武島羽衣君
文藝倶樂部記者　武田櫻桃君
攻玉社教師　竹貫登代多君
少年世界記者　竹貫直人君
東京心性學館主　高橋邦三君
大阪新報社總務部長　高橋雄峰君
萬朝報記者　高橋鬼川君
田邊太一君
醫學士　田村光顯君
太陽記者　田山花袋君
市立甲府商業學校長　田崎要君
中學世界記者　鷹野止水君
博文館編輯局主幹　坪谷善四郎君
女子英學塾主　津田梅子君
早稻田大學講師東京中學校教師　土谷詮敎君

名譽賛成員

（イロハ順次第不同）

文學士　中内蝶二君
醫學博士　中濱東一郎君
中村千代松君
中里峻峰君
三井同族會書記長　成瀬隆藏君
日本女子大學校長　成瀬仁藏君
東京府女子師範學校教諭　永田とめ子君
學習院教授　南日恒太郎君
農科大學講師文學士　村上辰午郎君
村岡良弼君
中學世界記者　上村左川君
博文館出版部長　內山正如君
文學士　久保天随君
熊本私立尚絅高等女學校教諭　栗田正治君
文學士　栗林己巳藏君
法學士　熊倉操君
學習院教授　山口弘一君
博文館副支配人　山田靜三君
高等師範學校教授　山田萬太郎君
山中古洞君
在農科大學　山田鶴之助君
東京府共立女學校監督子爵　矢井康義君
萬朝報記者　松井柏軒君
女學世界記者　松原廿三階堂君
前田曙山君
福井學圃君
東京女學館教授　國分操子君
太陽記者　國府犀東君
東京府女子師範學校教諭　小寺あや子君
加持世界記者　小林雨峰君
文學士　幸田成友君

農學士　近藤仙吉郎君
文學博士　姉崎正治君
東京女子高等師範學校教授　東基吉君
竹柏園主幹　佐々木信綱君
東京女子高等師範學校教授　佐藤球君
醫學士　佐々倉永三郎君
獨逸學協會學校講師　佐藤吉次君
横濱商業學校教諭　坂本盛一君
市立下關商業學校長　齋藤軍八郎君
學習院教授　北里闌君
太陽記者　岸上質軒君
少年世界記者　木村小舟君
文學博士　三宅雪嶺君
日本女子大學校教授　三宅花圃君
三宅克巳君
都新聞記者　宮川鉄次郎君
博文館出版部　宮川大壽君
日本女子大學校教授文學士　鹽井雨江君
獨逸學協會學校講師文學士　芝葛盛君
獨逸學協會學校講師文學士　志田義秀君
愛國女學校講師京華中學校教諭　鹿田熊八君
東京府女子師範學校教諭　神通せき子君
從二位伯爵　東久世通禧君
廣津柳浪君
獨逸學協會學校講師　守屋荒美雄君
本居直臣君
籾山衣洲君
雪中庵雀志君
學習院教授　杉田義雄君
慶應義塾教授　菅緑蔭君

（以上三號〆切迄に賛成員並寄稿の快諾を得たる芳名追加）

百聞は一見に如かず《本誌前號略目》

好評　**第壹號要目**　四版

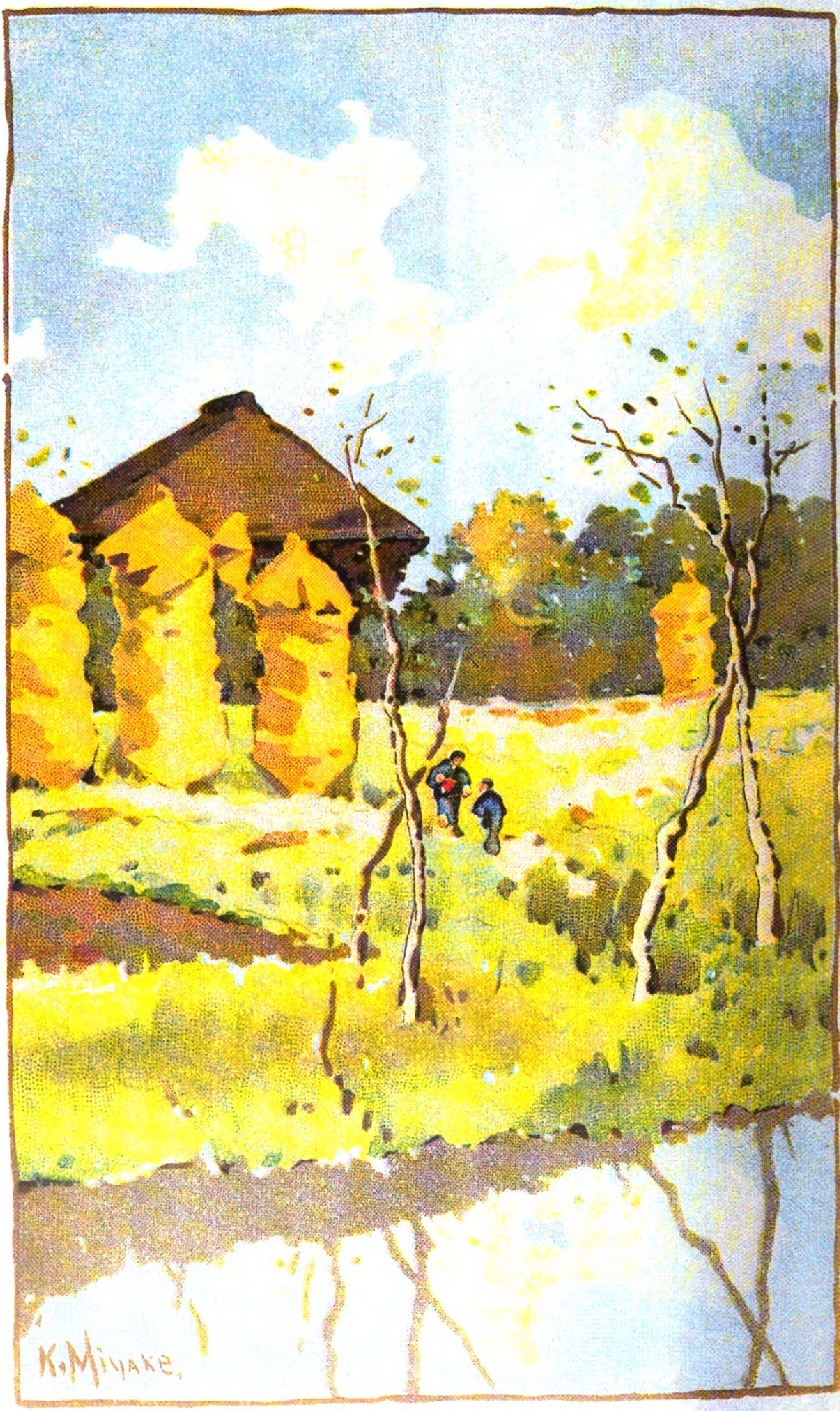
▲水彩密畫
○初日の出(石版七色刷)……三宅克巳
▲寫眞口繪
○選評諸家肖像……小額面
○女子文壇發刊之辭(社說)
▲名家文壇
○軍國婦人の任務……坪谷水哉
○獨逸哲士の婦人觀……長谷川天溪
○男女の別を正しうすべし…從七位 小川直子
○女子文壇の發刊を祝す……高橋邦三
○歌の糸口(一、その名目)……大和田建樹
○國文評釋(竹取物語一)…文學士 中內蝶二
○春のうた(八首)……從二位伯爵 東久世通禧
○破窓の寒梅……文學士 鹽井雨江
○水車小屋……佐々木信綱
○あゝ一年(先師の壹週年忌に)……文學士 尾上柴舟
○湯の宿(七首)……大塚楠緒子
○女子文壇の發刊を祝して……國分みさ子
○家庭と下女との關係……湖月
○御題お伽噺……木村小舟
○冬季吟(六句)……巖谷小波
其他才媛淑女の手に成る▲美文▲消息文▲雜文▲小說
▲新體詩▲短歌▲俳句の懸賞詞文皆豐富なり
◎第四版二月中旬賣切れなり當分增刷せず
◎殘約五百部以上に達すれば增刷所望に應ず

最寄書店に無くば　　每號懸賞詞文滿載　　本社へ注文を乞ふ

好評　**第二號要目**　五版

▲水彩密畫
○早稻田の雪(石版九色刷)……三宅克己
▲寫眞口繪
○皇太子妃殿下○皇長孫迪宮殿下○皇次孫淳宮殿下
○棚橋絢子女史○奧村五百子女史○下田歌子女史
○跡見花蹊女史○鳩山春子女史○三宅花圃女史
○第二聲(社說)
▲名家文壇
○女子の文學……文學博士 萩野由之
○國文評釋(竹取物語二)……文學士 中內蝶二
○月香……文學士 久保天隨
○湘南の春……竹貫直人
▲家庭
○婦人の道義……松井柏軒
○儒教的倫理の一節……岸上質軒
○和樂なる家庭……慶應義塾教授 菅學應
▲女流小影
○棚橋絢子○跡見花蹊○奧村五百子○下田歌子
○鳩山夫人○安井哲子
其他才媛淑女の手に成る▲美文▲消息文▲雜文▲小說
▲新體詩▲はがき文▲短歌▲俳句の懸賞詞文豐富なり
▲編輯だより▲誌友俱樂部皆面白く必讀の價値あり
◎第五版殘部僅少賣切れると增刷せず

春の郊外



三宅克己先生筆

東京三間印刷

「三宅花圃女史寄贈」



「上段」右より五人目故樋口一葉女史「中段」中央故中島歌子女史、右より四人目天野爲之氏夫人左より四人目三宅花圃女史なり

故中島歌子女史舎中面影 （十五六年前撮影）

谷中の朝霜

弘田ゆき子

けふ一月の三十日はかけまくも畏かれど、先帝の御祭り日、雲の上には何事かおはしますらむ。

日の御旗戸毎にはまだ掲げもあへぬ霧にまぎれて、たち出づる學びやの門、小石川、本郷も夢の間に、岡の邊の思ひの家をもよそにしてやがて迷ひ入る谷中の墓地、日さすや何處、あゝ片時も忘られぬそのおくつき處。

金子家を弓手に見てわけ行けば、朝日の光りきらきらとさして霜うちけぶる木々の梢に、名も知らぬ鳥の聲かすかなるあたり、生垣は見えぬ。色も香も床しかりし萩の舍の刀自は、此處に眠らせ給へるなり。しかも、父君母上と御墓をならべましつ。かけずくづれず、千代をも經べきこのいしぶみ、緣身にしむ小松を見るにも、ありし霜夜の御物語り、雪の朝のつひの御供など、かき數へ思ひ出づれば今更にかへらぬ昔のこひしくて、君を思ふ心ばかりの桃の一枝に袖の露をも汲み添へつつ、暫しぬかづき居つるうしろより、何がし家、何子と記したる花たては處せきまで並べられしか。

まことや、師の君の御情は柞葉の母にもまさりぬ、ちちの實の父にもおくれざりき。さればこそ、おはさずなりての今日この頃泣く子なしても慕ひよる人々の高きいやしきしなはあれど、狹き袂も濡れまさりつ。やがてかへり見勝ちに踏み迷ふ小路のおく、切り下げ髮のそれか、あらぬか、見覺えある何がしの君、さては、同じ御心にてと嬉しきものゝからは悲しく、追ひしきてまみえ參らするも、唯だ夢の心地のみせられぬ。

あはれ世に悲しきものゝ極みなる死といふもの、如何に厭へばとて、誰れかはよそにのがれはつべき。親に先だち、いとし子を殘し、あるは夫に別れ、姉妹に離るゝ際にこそ、いとゞ心の闇をも添はめ。されど、されど、師の君中島の刀自はさるべき大方の御名殘りも惜しみ給はで、けにたぐひなき御榮えをとゞめ給ひぬ。何をか後の御榮えといふ、和子か、たからか、譽か、皆あらじ、見ぬ世の後の誠の榮えは、道の廣きに在り、志を繼ぐ者の多きに在り。あはれ、我が師の君その青柳の靡ける御姿、その御情の玉の御聲こそ、再び仰ぐすべなからめ、重ねて聞かむ折はあらじ。さはれ、かりの此の世に何か恨みむ。懷かしの師の君は、長しへにながらへませり。今ゆく末の萬代をかけて敷島の道の奧に、はた我が女子大學に、文の林の繁かむ限り、詞の園の榮ゆく程は、其の御心の花の移り香、いかで、いつかは、誰れか、此の世に、と心も空にたゞずむ折りしも、つき出だす上野の鐘、雲井に高く響き渡りて我れにかへれば、さても、恥かし。我が身一つをもとの木陰に、猶も谷中の霜ばしら、あゝ、物狂ほしと人やとがめむ。』

龍子

又さらにぬらしそへたる袂かな
ひとのまことを見るにつけても

山中古洞先生筆



梅

櫻



大野靜方先生筆

女子文壇

第壹巻第叁號

三月一日發兌



女性と文學

文學は學問の花也、人世の一大快樂也、男子のみ之に與つて女子之に遠ざかるの理は莫し、而も古來洋の東西を問はず、文學者としての男子頗る多きも、女子の文學者たるは甚だ稀也、是れ女子が先天に、家政てふ大責任を負ふ者なりとは謂へ、畢竟するに女子が文學に對して、冷淡なりしに因らずんばあらず、文學の意義固より廣博なれども、要する所、内面よりして人間悲喜の情態を發き、萬有自然の妙境を描くに外ならず、故に文學の事は豪放の性情を有する男子よりも、寧ろ優婉、精緻、溫和の性情を有する女子に最も適ふものたる也、否、女性は文學者としての天職を有する者たる也。



俗謡茶話

文學士 志田素琴

○羽子歌や手毬歌の聲は、だん〳〵聞えなくなつたが、鶯の歌は、日増しにおもしろくなつてきた。とかく世の中は歌の世界で、世界は實に歌を以て滿たされてゐるやうに思はれる。「花に啼く鶯、水に棲むかはづの聲を聞けば、生きとし生けるもの、いつれか歌を詠まざりける」といふ、千年前の歌聖の言葉は、今日に至つても眞理である。しかし歌には、細工を用ゐた歌と細工を用ゐぬ歌、即ち自然の歌と人工の歌とがある。人工の歌は、巧みは即ち巧みであるが、しかし其中に僞り飾つた所がある。自然の歌即ち俗謡は、幼稚は即ち幼稚であるが、しかし其中に天眞爛熳の趣があつて床しい。余は今、日毎聞いた鶯の歌も聞えず、徒然なまゝに、何がな氣慰みにと、是等自然の歌人工の歌の彼此似よつたものを思ひ浮べて見た。つまらぬものだが、春の夜の茶呑咄の種に、諸孃の一粲に供することにした。

○伊豫國宇和島の御座船唄の第六葉歌の中に、

　君が代の久しかるべきためしには、ヱイ、かねて
　植ゑにし住吉の、松はめでたあのゝ、ゑいそりや
　わかえだもゑい〳〵、榮えるのんゑい、この葉も
　ほんし。

といふ唄がある。又大和國春日祭若宮神樂舞歌に、

　君が代の久しかるべきためしには、神も植ゑけむ
　住よしの松ゃ禮。

といふ同じ唄がある。さうして、これは共に、榮花松の下枝の、

　君が代の久しかるべきためしにや
　　神も植ゑけむ住吉の松

といふ歌から來て居る。

○催馬樂歌の、

伊勢の海の淸き渚の潮間に、莫告藻や摘まむ、貝や拾はむ、玉や拾はむ。

といふ歌と、風俗歌の、

玉だれの瓶を中に居ゑて、主はもや肴求に、肴とりに、小よろぎの磯の和布かけあげに。

といふのと、土佐日記の舟子の歌の、

春の野にてぞ音をば鳴く、わか薄にて手をきるきる摘んだる菜を、親やまぼるらむ、姑や食ふらむ、かへらや昨日の菜を、僞言をして、賒わざをして、錢もてこず、おのれだに來ず。

といふのと、歌の趣味に於いて、非常に能く似て居る。

○誰袖海といふ草子に、江戸の言葉をそしる處に引いた盆踊唄に、

ことしの盆は、ぼんともおもはない、かうやが燒けて、もかりがぶつこけて、ぼんかたびらを、白て着た。

といふ唄がある。然るに北越の富山地方にはやる三才唄に、

盆が近かなる、紺屋が燒ける、盆のかたびら、白て着た。

といふ、同じ歌がある。

○今一つ、富山近在の盆踊唄に、

踊るも跳るも今夜ばかり、明日から田圃の草刈ぢや。

といふ歌かあるが、早き小町踊(即ち七夕踊)の唄に、之と幾んど同じ唄がある。即ち、

盆々ぼんは今日明日ばかり、あしたは嫁のしほれ草。

といふのである。

○越中飛驒境の五箇山といふ村の、筑子踊といふ踊の唄に、

向ひの山に光るものなんぢや、星か螢か黄金の虫か、今來る嫁の松明ならば、さしあげて燃せ痩男。

といふ唄があるが、徳川の末にはやつた「やしよく

節」といふ唄に、

向うへちら〳〵見ゆるは、月か星か螢か、月ならば拝みませうが、たゞし螢ならお手に取ろ、ヤシヨ〳〵尤もぢや。

といふのがある。

○上總銚子の濱で歌ふ船唄に、

舟は新造でも艪は新木でも、船頭さんが無けりや走りやせぬ。

といふ唄があるが、之と同じやうな唄が、北越地方にはやる「エンヤラ節」といふ唄にある。それは、

富山はなれて越後へ行けば、エンヤラホイノサ、そりや押せそりや漕げ面楫を、舟が新造でも艪は新木でも、お前さんが乘らなきや動きやせぬ。囃。

といふのである。

○嘗て、坂正臣、大口鯛二の兩氏が、吉野へ遊びに行つた時、丁度其晩、雨が降り出したから、正臣氏は、とりあへず「月見つゝはた花見つゝありかむを今宵しも降る醜の醜雨」とよみ、鯛二氏も「散るかたは散りもすらめどこの雨にまだ見ぬ奥の花や咲くらむ」と詠んだ。すると、如意輪寺の住僧も、

塵もなきあしたの花を見せむとや
散らさぬほどの夜半の春雨

と詠んだが、これは恐らく、隆達節の小唄として有名であつた、

おもしろの春雨や、花の散らぬほど降れ。

といふ唄から來たものであらうと思はれる。



月香（承前）

文學士　久保天随



月香作家

腰元は、餘の事なりとて、今は腹に据ゑ兼ね、家の主人賈公の歸るを待ち、有の儘を告げて訴へばやとて、小姐に相談し

けるに、月香は、之を押し止め、我等は、元と錢を以て購はれしものなれば、さばかり善くもてなさるゝを願ふべからず、賈婆は、げに行き屆かぬふしありとも、そは賈公の預るべきことにも非ず、若し之を言ひ出でなば、世にも稀れなる主人の芳志にも違ふべし。我等は、言ふまでもなく、前世の戒業拙く、世にも薄命のものなれば、自ら諦めて、何事も耐え忍ぶこそ善けれといひける。ある日、賈公旅より家に還りけるに、門に入らむとする折しも、ゆくりなくも、例の腰元が、屋外に出でゝ水を汲むに遇ひけるが、その顏、唯だ一目見しばかりにて、前よりも色黑く窶れたるを訝かしみ、我は姫君に冊いて在るべき由、其方に言ひ付け置きけるを、誰が命じて、水など汲ましめしぞ、桶は其儘に棄て置きて人を呼びて爲さすこそ善けれといふに腰元は、水汲む手をたゆめて、いたく心に感ぜしものの如く、覺えず、睫毛に涙の露を宿せし樣、いかにも、いぢらしげなれば、賈公は、如何なる故にやと、なほも仔細に問はむとしけるに、腰元は、手にて降りそゝぐ涙を拂ひつゝ、對もなさで、その儘、あはたゞしく走せ去りける。賈公は、心中甚だ疑ひ、やがて、家に入りて、妻と相見し折、石小姐と腰元とは、その後、何事もなきかと尋ねけるに、妻は、さりげなく、何事もなしとぞ答へける。たま〳〵、己が家に歸り來してとなれば、事ざま繁りて、こまやかに、詰り問ふ暇もなく、おもはず幾日をか打ち過ぎける。或る日、賈公近きほとりの家より還りけるに、妻なるが、居間に見えざりければ、厨の方に赴きて尋ぬる折しも、かの腰元が膳部を整へて持ち行くに遇ひつ。と見れば、供ふる膳とてもなく、右の手には堆く盛り上げし一椀の飯を捧げ、左の手に載せし空碗の中には、わづかばかりの野菜を入れける。賈公は、淺ましく覺え、ひそかに隱れて之を窺ひしに、腰元は、石小姐の居間の方へぞ走せ去りける。賈公は、かの膳部、誰の食するにや、一片の肉もなきをとて、その儘、厨の方へは行かずして、忍びながらに、石小姐の居間に赴き、戶の隙間より覗き見れば、うたてや、小姐は、かの賤しげなる膳

部を物するにぞある。さしもの賈公も、之を見て、心中大に怒り、やがて、妻を呼びて、責め問へば、妻もさるもの、少しも、ひるむ氣色せず、肉だにあらば、などて供へざらむ、又かの腰元、自ら來りて運ぶなれば、言ふが儘に打ち任せしのみ、いかで、さばかりの勢を惜むべきと、事もなげに言ひ退くるさま、憎さげなり、賈公いへらく、我は、彼の腰元を小妲に册けて置けとこそいひつれ、厨に立ち働く者ども、少からざるを、人なみに使ひしは、誰が業ぞ、いつぞやも、かの腰元、兩眼に涙を浮べ、門外に水汲むを見しことあり、おもに、家の者ども、強ゐて爲させしにこそあらめ、いかなれば、汝かくばかり、恩を忘れ、義に背きて、石小妲をおろそかにしつる。家には、數多の肉もありながら、世に情なき食事、奉つるは、如何なる心ぞ。我たま〳〵家に在る折だに、此の如くなれば、旅の不在の中はさてこそと思はる。げに今度還り來て見れば、彼の人々、色さへ黒み、艶なくぞ覺ゆるといへば妻は妬ましげに、世に賴母しき心づかひ、彼の人、年ごろにもなれば、妾にもするにやあらむといふ。賈公腹立たしげに、愚かなること、愧づかしくもなく、言ひちらしけるよ、汝の如き、物の道理辨へぬ者に向つて、彼此言葉を費すは要なし、明日を始として、我は心利きたる家の者におほせ、日ごと、別に肉菜を買はせ、御二人に供へまつらむ。かくて、家の經濟に關係なければ、汝も悦ばしく思ふなるべしといへば、妻は、それ然るべしと頷きしものから、なほ何やら、分らぬ樣に口の中にて呟きける。これより、賈公は、別人に命じて、日ごとに肉菜を求めしめ、厨の者に調理させてぞ進めける。正に是れ、

人情若比二初相識一、　到底終無二怨恨心一、

賈昌は、かくの如く、おのが心ゆくばかり、小妲を養はむとて、その後、一年あまりは、旅にも出です、妻はなか〳〵煩なきに安んじて、その儘しばし事なかりける。月香、賈公の家に引き取られてより、月日に關守なく、はやくも、五年を過ぎて、今は人とはなれりけるを、賈昌つく〴〵思ふやう、いかで、好き婿を尋

ね、嫁かせ參らせばや、その後こそ、自らも安心して、旅に出て、生理をも爲すべきなれ、たゞ妻たるもの、賢からねば、之と相談すとも、事整ふべくもあらず、又かゝる折には、世に見にくからぬ支度もせではといひて、爭ふこともやあらむに、常に心を痛めける。折ふしに、申し入るゝもの無きにあらねど、門地賤しきは、うせ玉ひし石知縣を辱かしむる恐れありとて承けひかず、いさゝか名望あるは、たゞ人の家に養はれしものを娶らば、世に好事といはれむとおもひてや、絶えて、打ち聞ゆるものなかりければ、しばし時を待つこととゝし、妻も此頃は前に似ずして、謹むが如く、見え家の生計も定まりければ、いつまで空しく在るべきにもあらずとて、遠く出で立ちて、商を爲さむと思ひ定めつ。數日の前、妻を呼びて、石小姐と腰元とを、決して、おろそかにせざる樣、繰り返し〳〵、十たびあまりも、丁寧に敎へ戒め、又石小姐にも申し聞こえ、再三その心を慰め、腰元をも善き樣になだめ、扨て改めて妻に申し渡しけるは、かの人品、汝に比して、幾百倍といふほど勝るなれば、ゆめな高ぶり侮りて、もし我が言ふこと用ひざりせば、家に歸らむとき、夫婦の緣も、それまでなるべしと、嚴かに申しふくめつ。又常に申し付けし召使の男及び厨の者どもに懇に命じ置き、さては心安しとて、はじめて、草枕、旅の衣を身にかけて鹿島立しけるとなむ。

　臨岐費盡丁寧語、只爲當初受德深。

さても賈昌の妻なるは、夫、家に在りし折、石小姐と腰元とを大切にし、その爲に、一たびは、爭せしほどなれば、後には、表面のみこそ、いとも謹みて見ゆれ、心の中は、面白からず、折もあらばと思ひ居たりし程なれば、主人の旅に出でしより　わつかに三日といふに、今は己が天下とおもへる氣色凄まじく、食事など、少し後れしときは、忙しく厨の者を呼び立て、打擲せし上、罵つていひけるは、汝等は、すべて我が家に雇はれて命を繼ぐものなるに、如何なれば、かくは我儘なる。そは彼の女めを恃として、我を侮る故なるべし。主居たまふ日は、それにても濟むべけれど、今は

不在なるを、その守る刀自の敎に背きなば、思ひ知らす事こそあれ、かのかゝり人、飯食ふとも、自ら持ち運ぶべければ、我に問を缺いてまでも仕ふるに及ばずといひ、又賈公が申し付け置きし家の者をも責めて、肉菜の料とて預け置きし金をさへ取り上げつ。よろづの樣、前にもまして、愈よ甚しけれども、月香は、愛しとも思はずして其日を送りける。ある日、腰元は、顏洗ふ湯を取りに行きしに、わづかに殘りしは皆冷えて、水の如くなりしかば、大に呆れて、しばしは、物をも言はず、かの妻は、之を見て、汝が牙婆の家に在りしとき、いかで、溫き湯にて顏洗ふなどの贅澤をなすべきと喚きければ、腰元は、耐らえ〱し今、なか〱に堪へがたく、常にも似ず、口を反へしていひけるは、我、自ら水をも汲み、火をも燒きて沸かし、絕えて、厨の人々を煩はすことなきを、さばかり宣ふは、餘の事なりと怨ずれば、妻は愈よ腹立ち、汝、さきの頃、わざと水汲んとて家の外に出で、泣面して、主に見せ、その御蔭にて、我を苦しめしを忘れしや、今日は是非、その方の帳合を濟まさねばならず、汝すでに水を汲むことも出來、火を燒くことを出來る以上、これより、日ごと〱、家にて用ふる水は、すべて、汝一人にて汲むべく、火も殘らず燒くが善し、もし心に悔しと思はゞ、主の歸るを待ち受けて、又ぞろ、吼え面、見するこそよけれ、我は追ひ出さるゝも、絕えて、困りもせじなど、毒々しげに言ひ放つを、月香、居間に在りて、洩れ聞きしかば、あはたゞしく進み寄り、腰元の爲に罪を詫びければ、腰元も亦た本より愚なる婢のことなれば、よろづに行き屆かず、何事も姬上に免じて赦し玉へといふ。賈婆は、愈よ怒り、姬上とは何ぞ、姬上ともいはるゝもの、我が家に來らるべき謂なし。そは世にも淺ましき百姓の家なれば、姬上とは如何なる品級のものにや心得ず。汝、何者なれば、さばかり我を侮る。我は氣輕きものなれども、人に抑へらるゝを願はず。今日は是非とも、其故聞かねば濟まず。姬上といふも、したゝかの錢を償はねば呼ばれた義理にもあらず、我こは、賈家の妻、人にかく物い

はるゝ覺なしと、息をもつかず、言ひ罵るに、月香は取り付かむ島もなく、心弱き姫御前の涙を流しつゝ、おのが居間にぞかくれける。これより、かの惡婆は、家の者に命じ、石小妲と呼ばしめずして、只だ月香と呼び棄てにせしめ、腰元には、きびしく命じて、厨に居て、水を汲み火を燒く務を當てがひ、暇あるも月香の居間に入らしめず、月香の食事するときも、厨に來て自ら持ち運ばしむることゝなし、又下部に命じて、腰元の夜の具を、おのが部屋に運ばせける。かくて、月香は、その夜更くるまで待ちしも、腰元來らねば、詮方なく、自ら布團をのべ、寒き夢をば結びける。かくて、又幾日をか過ぎし後、賈婆は、月香を喚び立てゝ外に出でしめ、其暇に居間の戸を釘付にしたりければ、憐れや、月香は、外面にさまよひつゝ、夜は腰元と一つ床に臥しける。それさへあるに、ある時用事なきに呼び立て、敷居の外に畏らせ、何事をも言ひ付けざれば、月香は、身をかゞめて伏し居たりけるを、かの惡婆は、得たりと打ち喜び、墓地に走せて、かの鎖せし居間にひとり、忍び入り、あらむ限の者を運び出し、夫なるがさきに心をこめて贈りし絹地の數々、すべて、おのが葛籠の中に推しかくし、夜具さへも取り收めける。月香、之を知り、心の中、情なしとおもへども、聲をさへ出さず。かくて或る日の事、賈公旅より文を寄せ、數々のものを石小妲に贈るべしといひ、又妻に命じて、怠なく謹みて事へ、遠らずして、我が還る日を待てとあり。賈婆、その品々をも取り收め、さて心におもひけるは、我あくまで石家の二人を耻かしめければ、夫、歸り來りなば、必ず痛く懲さるべし。かくて、重ねて、面目なき態なすも、智慮なきことなり。かの老亡八、この二人の瘦馬を養ひ、如何にせむ心にや。旅に出づる折、言ひ置きしこと用ひざれば、夫婦の緣を切るといひしが、もと御目出たき人の、かばかり不良の心を起すも訝し。月香は、面もよく、すべに人となりしなれば、油斷はならず。馬鹿見せらるゝは、我のみにして、その折、悔むも、遲かるべし、人にして、遠き慮なければ、近き憂あり、一にして做

さゝれば、二も休まずとかや。好し、思ひ付きたり、彼等二人の身を賣りて、此處に置かねこそ善けれ、老亡八、歸り來らむ折、怪みて一騷なすは、知れたことなれども、行きし處、分らずして、購ふこと出來ずば、それ迄のこと、これより妙なる計はなしと、おぞくも思ひ定めける。正に是れ、

眼孔淺時無二大量一、　心田偏處有二奸謀一、

（次號完結）

國文評釋作家



國文評釋

文學士　中内蝶二

竹取物語（三）

◎龍の首の珠の條（續）

かぐや姫すゑむには、例のやうにては見にくし、とのたまひて、うるはしき屋をつくりたまひて、漆を塗り蒔繪をし、いろへしたまひて、屋の上には、糸を染めて色々に葺かせて、うち〳〵のしつらひには、いふべくもあらぬ綾織物に繪をかきて、間ごとに張りたり。

（釋義）かぐや姫すゑむには云々　赫映姫は、この物語の冒頭に見えたる通り、世の常の人にすぐれて、清く美はしく、家の中に光りみちわたるほどの方なれば、これを妻に迎へたりとて、その住むべき家、普通のやうにては甚だ見ぐるしかるべしと、大納言自から心に語りて、新に美麗なる御殿を搆へたるなり。すゑむとは、座らしむ、人を置くなどの義、例のやうとは、普通のやうの義、屋とは御殿の義○蒔繪　漆にて畫をかき、その漆の未だ乾かざる間に、金銀の粉、螺鈿などを蒔きつけ、後に光を生ぜしむるなり○いろへしたまひて　彩色することなり、壁などを美しう色どりたるなるべし○糸を染めて云々　糸を色々に染めて屋根を葺きたるなり、もとより、糸を瓦、板などのかはりに葺きたるにはあらず○うち〳〵のしつらひ　以上は、御殿の外の搆

への飾にて、これは、御殿の內の、室毎〳〵の裝飾なり、しつらひとは、搆へ、飾りなどの義○いふべくもあらぬ綾織物　綾織物の見事なること、言葉にも述べがたしとなり○間ごとに張りたり　室毎〳〵の障子などに張りたりとなり。

もとのめどもは、みな追ひはらひて、かぐや姫を必あはむまうけして、獨りあかしくらしたまふ。

《釋義》もとのめどもは云々　赫映姫を迎へむとする故、これまでの妻どもは、悉く離緣して追ひはらひてとなり。めは妻のことにて、こゝには、大納言の北の方、妾などをいへり○かぐや姫を云々　必赫映姫を迎へて逢ふべき支度をしてとなり。こゝに、かぐや姫にとあるべきところを、かぐや姫をとあるは、これ古文の一格にて、昔は、かゝる物云ひぶりありたるなり○獨りあかしくらしたまふ　大納言男の家來等には、いづれも龍の首の玉をもとめよと命じて、出て立たせ、妻妾等には暇をとらせたれば、たゞ獨り、赫映姫を迎ふべき時の至るを樂しみに、其日〳〵を明かし暮らしたまふなり。

つかはしゝ人は、よるひる待ちたまふに、年こゆるまで音もせず、心もとながりて、いとしのびて、たゞ舍人ふたり召しつぎとして、やつれたまひて、難波のあたりにおはしまして、問ひたまふことは、大伴の大納言の人や、船に乘りて龍殺して、そが首の玉とれるとや聞く。と問はするに、ふな人こたへていはく、怪しきことかなと笑ひて、さるわざする船もなし。とこたふるに、をちなきことする船人にもあるかな。えしらで、かく云ふと思して、我弓の力は、龍あらばふと射ころして、首の玉は取りてむ。遲く來るやつばらを待たじとのたまひて、船に乘りて海ごとにあるきたまふに、いと遠くて、筑紫のかたの海に漕ぎ出でたまひぬ。

《釋義》つかはしゝ人は　龍の首の玉を取りに出發せしめし人はとなり○よるひる待ちたまふに云々　歸り來る日を今日か、あすかと、夜も晝も心にかけて待ちたまへど、月日は空しく過ぎて、やがて其年も越えて翌年となれど、何の音信もなしとなり。

音は、音信のこと○心もとながりて　待ち遠しくてとの意○いとしのびて　甚だひそかにの義○舍人　左右近く親しく仕ふる侍○召しつぎ　近く召使ひて、取次などに使ふものなり○やつれたまひて　人目につかぬやう、微服して出づるなり○難波のあたり　あたりとは、邊の義にて、今の大阪近邊を云へるなるべし○おはしまして　行きたまひてとなり○大伴の大納言の人や云々　以下とや聞くまでは、大納言が、船人に問ひたまひし言葉にて、其大意は、大伴大納言より遣はしたる人が、船に乘りて海に出て、龍を殺して、其首にある玉を取りたりといふ噂を聞かざるかとなり。人やのやは、取れるにて結び、とやのやは、聞くにて結べり○船人こたへて云々　船人は、大納言の言葉を聞くより、龍を殺して首の玉を取るなどいふことは思ひもよらず、怪しきことを云ふものかなと、嘲笑ひて、其樣な龍を殺すといふやうな仕事をする船もなしと答へたるなり○をぢなきことをする云々　臆病なる

返答する船人なるかなとの義にて、大納言が高慢の言葉なり。をぢなきとは、か弱きの義○えしらでかく云ふと思して　武勇あるものは、龍を殺すことたやすしと云ふことを、船人ども得知らずして、此の如きかよわき返答するものならむと、大納言心に思ひてとなり○我弓の力は云々　以下遲く來るやつばらをまたじまでは、大納言の言葉にて、我が弓術のすぐれたることを、船人に向ひて誇れるなり○ふと射殺して　ついチョット、たやすく射殺してとなり○遲く來るやつばらを待たじ　自から龍を射殺して玉を取る故、遲く歸り來るやつ等を待つにおよばずとなり。やつばらとは、人を罵りて云ふ言葉にて、こゝには大納言が、おのれの家來等を罵りて云へるなり○悔ごとに云々　あなた此方の海上を、龍をもとめて乘りまはるなり○いと遠くて云々　次第〳〵に漕ぎゆくうちに、遠く出でゝ、紀伊の海、土佐の海よりなほ遙に、筑紫の海の方まで出てたりとなり。

（未完）

もとのしづく

三宅花圃

もとのしづくは、花圃女史先に人のかゞみなりとて、野村望東尼の生涯を麗はしき筆もてものせられ、梓に上されしを、こたび特に本誌の爲めにとて寄贈されたれば、號を逐ふて掲ぐることゝはなしぬ

記者識

一　平尾の山の井

春風の福岡藩に心つくしの名もかぐはしき野村望東尼といへるなむ、一生のあらましたゞひまれなる、まことに人のかゞみなるべし。

花浦の松の葉しろく置霜の、消ゆるもあはれ一盛り、辭世によみ出けむ時には、天つ日つぎの光さしそひなむ御代の末を、かく疾からむとはいかで思ひかけてむや、まして亡後の身の幸は、夢にだにしらず、平尾の山の井、濁りたる世に住みわびて、思はぬ方にはわれさすらへたる實にあはれなり、かくばかり世にぬけ出たる人さまを、神佛のまなし子などいはむこそことさらめき興さめたれ、ふり分髪のはじめにはさのみことなるふしもなかりしとぞきく、黒田家の世臣浦野重右衛門勝幸の三女にして文化三年丙寅九月六日福岡城内谷廐後てふ地に生るといふ、浦野家の祖は元龜天正の頃より黒田家につかへ、長政にしたがひ朝鮮其他の戰場に勳功いちじるしかりしとぞ、それより十數代を經て、重右衛門勝幸あり、三百石を食し、四男四女を生む、長男半太夫勝廣故ありて別家し、次男平太夫勝達家を嗣ぐ、この二人は先妻の出なり、後糟屋植木村良、今泉興七の女みち子を納れ二男四女を生ましむ、長女たか子吉田彌右衛門信古へ嫁し、三男藤太郎今井家に嗣となり、次女いち子幼より他に養はれ高谷彌太夫に嫁す、其三女もと子ぞ、贈正五位望東禪尼として、世にしたはるゝ人なりける、四女は世を蚤うし、末男憲右衛門桑野家の養ふ所となれといふ。

もと子容みにくからず、書をよくし、裁縫刺繍の女業、いづれたくみならぬはなく、和歌を大隈言道翁に學び秀逸多く、折々の心のくもりも、世のたゝずまゐの是非も、ふみくりのふみこぼれたるうれしさも、みなこの言葉の露にむすびとめぬといふ。」

にはの敎のおこそかなる中に人となり、としたけぬる頃は、みにくからぬ容にいよ〳〵みがきそへて、かく何業もくらき方なしと聞き、われこそ得めなど、かの呉竹のよにまれなる昔物語のごとく言葉をいやしうし、手をうちすりて請ふもの大身名士にもあまたありけるを、もと子はいつもとかくいひしらひいなみて過すに、父は心えず、あたらしき春の花盛りを、空しくかくて過ぐるは、いかさまの考やある、後になくひそといひさとすを、心たけく、ひたもどきぬべき性ならねば、いたくはぢらひつゝ、さて御言葉かしこくうけたまはりながら、いまだおのれが是れをとおもひしものはべらぬをいかにせむ、今しばしゆるしおきたまはらずやといふ、日頃心ざまのいさゝかは人とことなれるに、父も心をゆるして、さらば心のまゝにせよとて捨おきつ、かくて二十四年といふ年同藩士野村新三郎貞貫のかれて詩歌の嗜も深く、心さま廉直に正義の士と聞き、先妻の出三男ありといふもいとはず、自らすゝみてこゝに嫁きぬ。

野村家はた世臣にして、由緒正しき家筋なり、祖先佐々木肥後守長貞は大膳太夫滿經の後胤内匠頭滿貞の嫡男にして豊臣氏につかへ戰功あり、近江國野洲郡野村の庄壹萬五千石を領し野村佐々木とよびしも、後にはたゞ野村といへり、勘右衛門といへるは鎗術に妙を得て名を著しつ、其

後世、攝州より福岡に移り、今の貞貫におよび、食祿四百十三石を領す。貞貫、初松平主殿直義の女をめとり長男初右衛門貞則次男鐵太郎後朶(二川氏を嗣ぐ)三男卯之助(隅田氏を嗣ぐ)を生む、松平氏世を早うしつる後に、もと子入りて妻となり、はた母となり、一家和合して春風のふきかよふごとく和熟したりと聞ゆ。

もとより同氣相もとめし夫妻の、月花に情をのべ、史籍を渉りて、今古の人の有樣、時勢のうつりかはりをあげつらひなどするにつけても、德川二百幾十年の安になれて驕に長じ、天つ日嗣は雲にかくれて其光もあらはれず、月卿雲客はたゞ笏を手にして、いたづらに東の空をながめうらみつゝ、日にあらずなる世のさまを、遙かに見きくにつけても、勤王の志おつければやすからずて、同志の士、月形七助、同三太郎、父子、宿老の井手勘七、二川幸之進、長尾正兵衛、梅津幸一、伊丹又兵衛城武平、長野和平、魚住二郎八、など相集り、太平記をよみて、王政のまことなるを論じ、武家專橫の道ならぬをときなどしつゝ、もはらこゝに心をよせ、菊池寂阿の埋首地なる七隈村に一碑を立て、いよ〳〵志のある所をあきらかにし、時の來んを待居たり。

されど貞貫はもと風流の士、自らたちて事をはからん性にもあらず、又いまだ時早しとさとりて、身はとく隱遁の志あり、紛多き世を棄て風流三昧に過さむと、平尾村に別莊を購ひ、これに夫妻うつりすみて家を長子卯右衛門直則に讓り、神代與三太夫の女たれ子(後野村鏡子)をめとる、二子あり長男畚貞和、二男助作貞省といふ。

もと子は我子のなきにつけても、いよ〳〵子の上孫の上をらうたきものにして、手づから織つむぎ衣服などものすにも、長男畚は足のやまひにたれこめて、人並ならぬ身をわぶるを憐みて、己れの帶を解き、ふさはしく具足やうの物、縫ひものして、心をなぐさめやれるなど、母として大方の母にましたる心深さも、病には勝つよしなく、とかく畚のはか〳〵しからぬさまなるより、弟助作家をつぎつ、畚は井手勘之助の妹を娶り一女をもふけ誠子といふ、助作死去せし後、二川氏より養子、こ野村の嗣とし、誠子は今の鶴原氏の妻となれるが、望東尼のさまもおしはからるゝ人さまなまなりとぞしるかぎりはいひつたふ。

さても望東子は世をすてゝ、猶世に捨られぬ平尾山の別莊には、楠公の祠をまつり、勤王の志いよ〳〵あつく同志の人に會合して、時事を論らひなどするほどに、安政四年七月二十七日貞貫は病を得て六十六といふに、常なき風の吹さそひぬるを、いたづらになげくにしもあられども三十年のゆめさめて、添の野末のかたうづら、夜寒をわぶる五十四のとし、身を世に用なきものとして薙髮入道し、餘年しづかにおくらばやと菩提寺博多明光寺の元善和尚に參禪受戒し、松月望東禪尼となへらる。

まことよ、大かたの人の世は、かくしてさだまれるならひなれど、望東尼はこれより浮世の中の變をしり、しらぬ島根にさすらへしなど、女にして、まして老女にして、幾層の辛苦の末にもいよ〳〵志かたくして夫の遺志をつぎぬるは、溫順にして、さしこしたることなきが中にも、貞と誠のこもれるなるべし。

かく月花を友として、亡人のあとをとむらふにつけても猶世にありしかたみの精神は、たゞこしもとにある心地して、うたて聞ゆる世の中のよしなしごとも、朝夕のことばの花に咲かへて匂へ出るのみぞせめての心やりなる、折にふれたる歌に。

たか身にもありとはしらてまとふめり
神のかたみのやまとたましゐ

大空のくものへたてはしられども
まつ春の日はのとけかりけり

春ことにさかりなれとも今年のみ
つくしの花は見る人のなき

二　都の空

やちまたに思ひみだるゝ人心は、右往左往にとかくゆき、梶とりかぶる大舟の、ゆたのたゆたのしづめにと、和宮關東へ入輿あらせたまふべきにさだまりて御儀さかりに擧げさせんとすときゝて、望東尼は一度、百敷の御裝ひも拜さまく、かつは和歌の師、大隈言道翁の、今は大阪に移轉せるもたづねなどせばやと、三人斗の道づれ待えて、文久元年霜に都の空へ旅立ぬ。

京なる筑前の用達、大文字屋の一家に大文字屋馬場德二郎英文といふ人あり、夙に勤王の志あつく、有志の人々にも交りふかくして、義俠あるを、望東尼は此上なきかたりがたきとして、親しみ加へたる程に、この傳手をもて近衛公にも謁見なし奉らまく乞たれども、幕府の嫌疑ふかき折とて、御愼しみにこもりましませば、志は汲みながらも、對面ゆるさせたまはざりしを、本意なき事に思ひなげつゝ、此上は是非もなしせめてはかれて聞及ぶ、彼老女村岡は、公の心をこゝろとして、忠誠の女とほまれたかく、福岡のはてまでもかくれなければ、相見て思ふ事共かたりかはしてがなと、嵯峨大覺寺直指庵に蟄居せしを訪ひ行けど、これも亦、世の見聞を憚りて、片折戸のとざしもかたく、かいまみもゆるさぬもの越しながら、さすがに女同士の眞ほならずとも、けはひだに見え見みずして立わかるゝは心のこりの限りとて、くゞもり聲に

雲井にも君か名たかくきこえけり
したひ來る身をあはれとも見よ　望東尼

はる〲と尋れし君かめくみをも
しつこゝろなくあはてくるしき　炬子

よみかはす歌のこと少なきには、世をおもふ誠心も、同志をしたふおもひをも、いかていひおはせむ、たゞひたすらにまゝならぬ世を恨みて、人のものいひさがにくき、さが野の奥に匂ひのこれるをみなへし、これは老たる身をもちて、名さへふさはぬ姫島に、色をますらむ濵ひさし、久しき世まで女の、かゞみと斗いひつたへらるゝ、香こそは今もしるらめ。

かく思ひの外に、相見がたきもの越して對面も、なきにはましてうれしく、なほさま〴〵の京の空の、めづらしき事々をも、見聞まゝに、日記にものしてかいつゞりなどしいる序に、よき折からなれば、亡夫のよみおきし歌に望東尼のもそへて一卷とし文の林に、にほひかくれなき千種有任卿に、序文こひてましかば、と彼德二郎のしり人なる、瀧口左兵衛尉は、同家の諸太夫なれば、これによりて對面たまはりぬ、望東尼かく上つ人に近付たてまつること、いとうれしとて太宰府都府樓の古瓦をさゝげ奉りぬれば、千種卿よりは菊のきせ綿たまはりぬ、序は後ちにてもおくりたまはらん樣、ねぎ申おきて罷出づる後に、筑紫の名産香推潟波かけの岸の化石など獻じつる折に、短册二葉そへてやことなき御前より給はりし菊のきせ綿を九月　九日に拜し奉り

みめくみの露ふかけれは山里の
秋にも匂ふきくのきせわた

筑紫なるかしひ潟の松石をさゝくくきよしきこえあけし御前に月ころ經てさゝくること

千早振る神代のまつのいはおもて
ちきりくたさぬしるしなりけり

望東尼、京にある此程よりして、又よせかへす仇波の、いやしきくにさまくの事こそおこりたれ、彼平野二郎てふ同志が途に藩主をむかへ出國をとゞめしより、藩主は俄かに病のよしいひ立て歸國あり、望東尼はさりともしらす、藩主上京ありといひ有様も拜さむと馬場德二郎と共に、途に待受けしに、俄に歸國ありけるなど、世のありさまを、こゝろぼそく、思ひわづらふに、福岡よりも京の空の、今にも兆出ぬべき雲行なるをおしはかり、上京しつる翌年の五月、迎の者をのぼせて、とく歸國せよとすゝめたり、さすがなれたる旅衣、たつはをしさの餘なれど、さてもえあられねば、ことにしたしき馬場德次郎の大阪の天龍川までおくりにし袂をわかつとて、

なには潟なこりの波にこきわかれ
　きみのたよりをふるさとにまつ

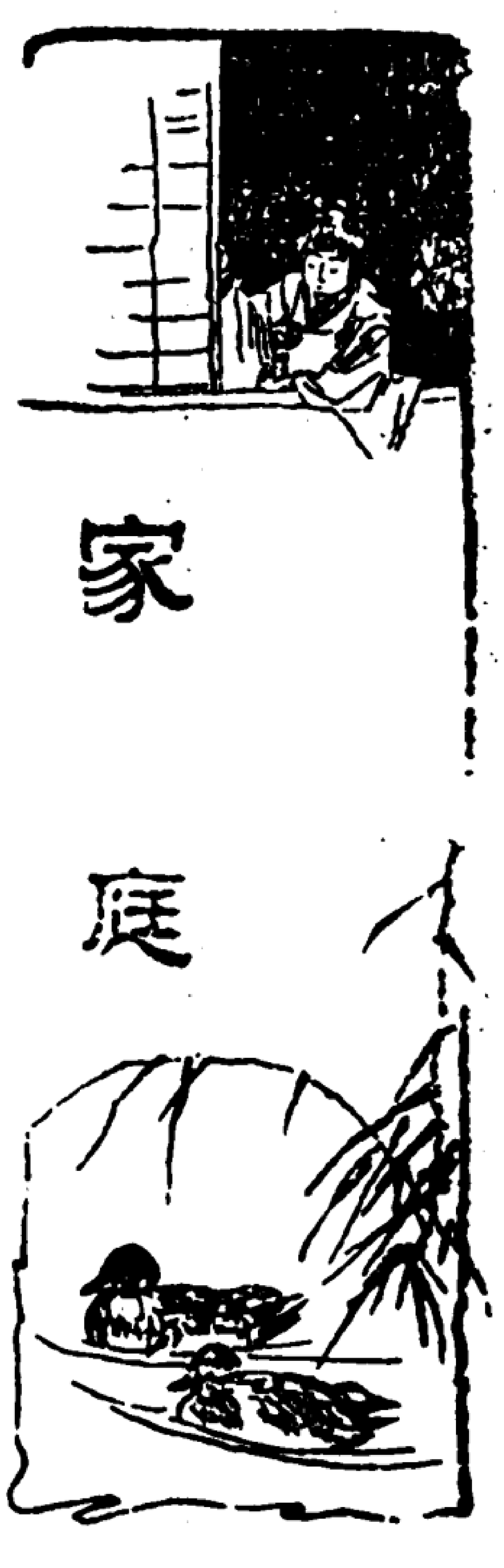
浪花かたなこりの海はへたつとも
　よせくるなみに音つれやせむ　　文茨

あたこやまあらしの山にしろへせし
　君にまされるはなのともなし　　望東

かくて歸國しつる後も、此馬場といや親しうなりまさりて、いく海山はへだつとも、濱千鳥文かよはぬ時もなく、彼より京のさまをかきおくれば、此には九州諸藩の事共かきやるなど、かなしきふしもうれしきふしも、むらきもの心の限りをかきかはしけり。

（つゞく）





▲「はな」と婦人

前田曙山

造化が吾人の目を喜ばせる爲に造つて呉たのだが、夫自身が生殖機能を營む爲に咲くのであるかは知らぬが自然界の産物中花より麗しい者はない。近く人寰熱鬧の間に咲く者、遙かに蠻烟瘴霧の裡に笑ふ者、偖は崇靈縹渺たる高山の絶頂に開く者、其形と色の異る丈、異る感覺を吾人に與へる。人間は別としても、禽獸虫魚の類に至る迄、花を愛さぬはない。泰西諸邦では、ベナスの花の祭から引いて、例の薔薇祭を行ふ、瑞たい事にも、不祥な事にも、皆花の飾や、花の贈物をするから、花の需用の夥だしい事は驚く斗りである、日本では目立つて花を用ゐないやうではあるが、花を愛





歐洲風俗

（佛國最近流行の婦人帽）





する事は、決して外國に劣らぬのみならず、寧ろ一層盛んである。外國では上流社會でこそ、花を愛する者が多いけれども、勞働社會に至つては、殆んど花の何たるやも解さぬ徒がある、然るに日本では裏店住ゐの日傭稼であつても、鮑貝へ虎耳草を釣したり、流し下へ牽牛花を蒔いたりして樂しむで居る。

凡そ人間が花に對した時ほど、心の裡の清淨になる事はない、鬼のやうな心の者でも、佛のやうな心の者でも、花に對した瞬間の感想といふものは、恐らく同一であらうと思ふ、邪慾もなく、妄念もなく、名譽を希ふ心もなければ、金を貯ようといふ氣も起らない、全く無心になるのは、麗しい花に對した瞬間である。

若し試みに海拔數千尺、遙かに雲表に秀る高山の頂きに登つて、所謂高山植物の頰紅濃朱が、今を盛りと咲き亂れて居るに會へば、自分の心が知らず／＼の間に化して、羽化登仙して了つたやうな氣がする。

此麗はしい無心の花を培養するには、荒くれ漢の吾人が適任者であらうか、夫とも天性優しい婦人が相當であらうかといふと、言ふ迄もなく解語の花の婦人が適して居る、近い譬へが、菫のやうな優しい花の、糸の如き花莖をいらふのに、節立つた太い指では、屢々傷つける事がある、これを白魚のやうな纎いやさしい指にかへたら、どれ程花が喜ぶか知れない。

由來婦人といふものは、氣は廻らなくも、注意は深い者であるから、蚜虫をたからしたり、水を切らしたりする事は必らず少ない、夫に草の肥料なども、世間では下肥斗りが肥料のやうに思ふので、婦人達には草いぢりが適さぬやうに言ふけれども決して下肥斗りが肥料ではない、油滓もあれば、乾鰮もあるし、又一層簡便なものになると、完全肥料であるとか、園藝肥料であるとか、チヤンと調合が出來て居るものがある。是等は皆綺麗なものであるから、少しも取扱ひにくいといふ事はない。

是等の肥料は、下肥から比べれば、値は尊いけれども勿論只の慰みに用ゐるので、其用量も少ない事であるから、値といふても知れたものである。

草木に肥料の必要なのは、動物に食物が必須なのと同じ事で、何ぼ非情の草木でも、水斗で生きて居られるものではない、營養分が水に溶解されたのを、鬚根から吸收して生きて行くのであるから、美しい花を咲かせようとするには、此肥料なるものが是非必用である然し此位の理屈は、誰でも知つて居るけれども、偖實

際に當つて、つい肥料を與へるといふ事が疎かになるは、殆ど一般のやうであるが、若し之が人間であつて食物なしで働けと言つたら、誰も動く者はあるまい。一鉢草花なぞを栽培するのは、或意味から言へば一種の道樂で、無くても用は欠かぬけれども、人間といふ者は、何か樂しみが無ければ生きて居られぬ、其又樂しみによつて、性格を尊くもし、賤しくもするが、先植木道樂などは、道樂中の最も高尚で。趣味ある者で慥かに性行を優しくする者であるし、第一に殆んど費用のいらぬものであるから、婦人の樂しみには、最も適して居やうと思ふので、茲に贅言を列ねたのであります。

（なはり）

附記　若し本誌の讀者で花の種子の入用の方があれば、此雜誌社まで御申込あらば、詰らぬ種子でよろしければ、多少貯へたものを進上致しましやう。

▲理想の家庭

池田朝村

理想の家庭など、、頗る生意氣な題を出しましたが、併し私は未だ家庭――自分が主人公としての――は、造るとの出來ない、天竺浪人なのです。併し、人間一生の間には、少なくとも一度は、其主人公となるとも出來るでしようと思ふて、まあ一生そんな目出度い月日には會はれんで終るかも知れませんが、兎に角、自分が主に成て家庭を造つた曉が有たら、こんな風にして見たいと言ふ、理想丈を發表する計りです。であるから、漠然と理想の家庭を言ふより、寧ろ、吾人の理想の家庭と言た方が正當でしよう。併し、こんな事は貴孃さん方の方が御委しいかも知れませんが、私のも亦萬更捨てたものでも有りますまいと思ひますから、御參考迄に申し上げます。

一家庭搆成の要素、

凡て物が成立するには、成立するに要する、要素が無くてはなりません。夫と同じく、家庭を搆成するにも亦要素が必要です、今家庭を搆成するには、如何なる要素か必要かと言ふと、少なくとも、一人の男性と、一人の女性とが必要であります。其他に附隨して來る幾多の物がありますが、併し夫等は餘り重要なものではありません、つまり無くとも差閊のないものです、形容に過ぎないものであります、宛ど文章を搆成するに少なくとも、一個の主辭と一個の賓辭とが必要で其

他は是を潤飾するに過ぎないのと同じことです。世間には善く、男世帯だの、或は女世帯だのと申して女計り或は、男計りの世帯、即ち家庭がありますが、是等は完全なものではありません、こんな家庭は、一時的のもので決して永久に持續することの出來ないものです、是等は皆一時の必要上、二個已上の男性、或は女性の集合したものか、或は、僕の樣に、未だ一家を經營すべき事情に達しない者の成すもので、必要がなく成たり、或は事情宜しきに達したる場合には、分散するか、或は消滅すべきものです。こんな一時的の不安心の家庭は理想とすべき價値がありません。家庭即ち、眞の興味を持てる理想的家庭は、前にも言ふた通り、少なくとも一人の男性と、一人の女性とが有て、此二者が、離すべからざる關係を持て居るものでなければなりません。

二　家庭搆成の目的

凡て、一事一物を搆成するには、必らず何等かの目的がなければなりません。目的なしに事物を搆成するものは馬鹿より他にありません。殊に家庭の如き重大なる、一度造つたら容易に毀つことの出來ないものを造るには、從て重大な目的が無くては叶ひません。然らば其目的は那邊にあるか。此問題は家庭を搆成するに先つて、大に講究せねばならぬ、重大な問題であります然るに世の多數のものは、此重大な問題を解決もせずいや解決どころか、碌々研究もしないで、丸て夢中で結婚する、家庭を造る、唯一種の情慾に驅られて、何の爲にかも、如何にしてかも、何にも解らずに一家を造る。是等の家庭は、兎角圓滿な極を見るに難いものだ。併し、女子文壇を購讀なさる方に、こんな種類の者はある筈はない、結局餘計なことを申し上げるのだ夫は前にも斷つてある。

他人樣の御考へはどうか知らぬが、私は、私の考へ丈を申し上げ樣。

總て生物の共有性として、單獨に住居生活することの出來ないものである、(植物は此限に非ず)總て、同種類のものが相寄り相扶けて、生活すると言ふ、先天的性情を有して居る、高等動物になる程此性質が著しいそこで、單獨なる、即ち寂寞なる生活は、此天賦の性質に相反することになる、如何なる者でも、自分の性質に相反することをするのは非常なる苦痛でありますす併し、單に多數が相寄つても、其中には、性質の解らない、不安心極まる分子が多い、こんなことては如何に

多數が相寄つても、何の役にも立ちません、そこで其中て多少相解つた分子が相寄つて、朋友と言ふ物になる併し是でも未だ安心が出來ないので、今度は最も少數の親友と云ふものを作る。此處迄進む者は、人間より他にない樣です。併し猿猴の類になると餘程是に近い事實を發見するとがあるですが、併し人間の樣な解には參りません。併し人間はまだ是で滿足しません。何故なれば、其親友が同性の塲合で有ては、甚だ都合の惡い事が多い、いくら相許した仲でも、未だ何處か互に遠慮する處がある、言ふに言はれぬ隱微な處に何處か物足りない處がある、是は個人の實驗上、爭ふとの出來ない事實であります。是ではまだ寂寞の域を免れない、苦痛の域を免れない。

人類已下の動物に於ては左程でもないが、人類の如き最も情感の發達した動物に於ては、是では未だ滿足が出來ません、そこで、少しも隔てのない最も親密な交際を得べき友を求めなければならない樣になります、玆迄來ると、迚も同性に求むることは出來なくなる、異性に求むるより外なくなります。玆に於てか、互に相許すに足る異性が相寄て、一種の親友、即ち夫婦の關係を搆成して一家を搆へる、是が即ち眞の家庭と稱すべきものであります。であるから、世に夫婦の關係程親密な物はありません。然るに、犬も食はない亂痴氣騷ぎを遣つたり、又は互に猜疑の心を持て不愉快な生涯を送つて、迭には離別など、言ふ忌はしい事件に遭遇するのは、必竟、夢中結婚の結果に他ならないのであります。是等の者は未だ下等動物の域を免れないて、人類の美妙なる情感に達しないものであります。狗猫の一時情慾に驅られて相寄つたのと同じ事であります。

されば、家庭を造る目的は、相互に寂寞を脫して、慰めある愉快なる生涯を送つて、光輝ある生活の下に、人生の責任を果すと言ふにあるのです。家庭は則ち人生の責任を盡すに要する勢力の培養所とも言ふべきものである、であるから僕に言はせると、子孫の繼續などゝ言ふとは、直接の目的ではなくて、是は人生の務めて、猶是計りでなく、まだ他に澤山ある人生の務を完全に果す爲に家庭を作るのであると思ふ。

實際、人生の務を果す爲には、大に社會公衆又は天然と健闘せねばならない、健闘して勞れた躰を慰める、靜養する所がなくて、どうして奮闘するとが出來樣? 冷かなる社會の激浪の中から歸つて來た時、溫かなる

兩性の愛情の暖むる事が無かつたなら、吾々は遂に社會の弱者と成て了はねばなりません。人生競走の敗北者と成て了はねばなりません。

（未完）

▲鳩翁道話を讀みて
思出のまゝ

矢田鶴之助

鈴屋集に

をり〳〵に遊ぶ暇はある人の
暇無しとて書讀まぬかな

とのことあり、また

論語に

小人間居して不善をなす

とのこともあれば、余は間居の時を利用して讀書をつとめ不德の身もやがては小人の城を脱したしと思ふものから最も好みて道話書類を讀み居る中にも余が常に愛讀するは鳩翁道話にぞある、こゝに余が最も深く感じ居る數節を掲げ來らんか。

「中澤道二先生が、ひととせ攝州池田へ道話に參られて、ある豪家に逗留いたされたところが、その家の主人は、もとより心學熱心ゆゑ、先生をもてなしのあまり、十四五になる娘を呼び出して饗應させられました、この娘は、容儀もすぐれ行儀もよく花をいけ茶をたて琴をひき、又先生を慰めて歌など詠みました。

そこで、先生その親たちへ挨拶に「これほどにお育てなさるのは、並々のことではござるまいと申されたれば、親たちはづにのり「嫁入して先方で恥をかきませぬ樣にと、只今致した外に松明や花むすびも習はせました、又書も少しは習はせました」と段々と娘自慢、そこで先生「それはなか〳〵大抵のことではござりますまい、それならば定めて肩や腰を揉む按摩の稽古も御仕込みなされたであらうといはれました、すると主人はむつとしたる顏つきで、「貧乏は致してゐれども、娘に按摩の稽古は、まだいたさせぬ」といひました。

道二先生は、笑ひながら「それは近頃御心得違ひでござりませう、貧乏、金持によらず女は夫の家に嫁げば、先方の親たちをわが親として事へるが道ぢやその大切な舅姑御が御病氣の時にゐかさ花むすび茶

多數が相寄つても、何の役にも立ちません、そして其中で多少相解つた分子が相寄つて、朋友と言ふ物になる併し是でも未だ安心が出來ないので、今度は最も少數の親友と云ふものを作る。此處迄進む者は、人間より他にない樣です。併し猿猴の類になると餘程是に近い事實を發見するとがあるですが、併し人間の樣な解には參りません。併し人間はまだ是で滿足しません。何故なれば、其親友が同性の塲合で有ては、甚だ都合の惡い事が多い、いくら相許した仲でも、未だ何處か互に遠慮する處がある、言ふに言はれぬ隱微な處に何處か物足りない處がある、是は個人の實驗上、爭ふとの出來ない事實であります。是ではまだ寂寞の域を免れない、苦痛の域を免れない。

人類已下の動物に於ては左程でもないが、人類の如き最も情感の發達した動物に於ては、是では未だ滿足が出來ません、そこで、少しも隔てのない最も親密な交際を得べき友を求めなければならない樣になります、茲迄來ると、迚も同性に求むることは出來なくなる、異性に求むるより外なくなります。茲に於てか、互に相許すに足る異性が相寄て、一種の親友、即ち夫婦の關係を搆成して一家を搆へる、是が即ち眞の家庭と稱すべきものであります。であるから、世に夫婦の關係程親密な物はありません。然るに、犬も食はない亂痴氣騷ぎを遣つたり、又は互に猜疑の心を持て不愉快な生涯を送つて、途には離別などゝ言ふ忌はしい事件に遭遇するのは、必竟、夢中結婚の結果に他ならないのであります。是等の者は未だ下等動物の域を免れないて、人類の美妙なる情感に達しないものであります。狗猫の一時情慾に驅られて相寄つたのと同じ事であります。

されば、家庭を造る目的は、相互に寂寞を脫して、慰めある愉快なる生涯を送つて、光輝ある生活の下に、人生の責任を果すと言ふにあるのです。家庭は則ち人生の責任を盡すに要する勢力の培養所とも言ふべきものである、であるから僕に言はせると、子孫の繼續などゝ言ふとは、直接の目的ではなくて、是は人生の務めて、猶是計りでなく、まだ他に澤山ある人生の務を完全に果す爲に家庭を作るのであると思ふ。

實際、人生の務を果す爲には、大に社會公衆又は天然と健闘せねばならない、健闘して勞れた躰を慰める、靜養する所がなくて、どうして奮闘するとが出來樣？冷かなる社會の激浪の中から歸つて來た時、溫かなる

兩性の愛情の暖むる事が無かつたなら、吾々は遂に社會の弱者と成て了はねばなりません。人生競走の敗北者と成て了はねばなりません。

(未完)

▲鳩翁道話を讀みて
思出のまゝ

矢田鶴之助

鈴屋集に

をり／＼に遊ぶ暇はある人の
暇無しとて書讀まぬかな

とのことあり、また

論語に

小人間居して不善をなす

とのこともあれば、余は間居の時を利用して讀書をつとめ不德の身もやがては小人の域を脱したしと思ふものから最も好みて道話書類を讀み居る中にも余が常に愛讀するは鳩翁道話にぞある、こゝに余が最も深く感じ居る數節を掲げ來らんか。

「中澤道二先生が、ひととせ攝州池田へ道話に參られて、ある豪家に逗留いたされたところが、その家の主人は、もとより心學熱心ゆゑ、先生をもてなしのあまり、十四五になる娘を呼び出して饗應させられました、この娘は、容儀もすぐれ行儀もよく花をいけ茶をたて琴をひき、又先生を慰めて歌など詠みました。

そこで、先生その親たちへ挨拶に「これほどにお育てなさるのは、並々のことではござるまいと申されたれば、親たちはづにのり「嫁入して先方で恥をかきませぬ樣にと、只今致した外に松明や花むすびも習はせました、又書も少しは習はせました」と段々と娘自慢、そこで先生「それはなか／＼大抵のことではござりますまい、それならば定めて肩や腰を揉む按摩の稽古も御仕込みなされたであらうといはれました、すると主人はむつとしたる顏つきで「貧乏は致してゐれども、娘に按摩の稽古は、まだいたさせぬ」といひました。

道二先生は、笑ひながら「それは近頃御心得違ひでござりませう、貧乏、金持によらず女は夫の家に嫁げば、先方の親たちをわが親として事へるが道ぢやその大切な舅姑御が御病氣の時にゑかき花むすび茶

や花では御介抱は出來ませぬ、出入の按摩やをなご衆の手をからず眞實に親達の肩や腰を撫でさすりして御介抱をなさるが嫁御の道でござります、その道の修行に按摩の御稽古は、まだかと申したのでござります、とかく役にたつ御稽古が肝要ぢや」といはれました、これにはさすがの主人も大いに我を折り赤面して御詫を申したと承りました。』

これにつきて思ひ當るは、今の女子教育の大勢なり。余は、昨年岡山縣に旅行して、或る田舍の宿屋に泊ることゝなり、ふと感に打たれたるは、この旅舍にある長女のはや十五六才にもなれると覺しきものにつき旅舍の主人しきりに惑へることにてありき、この娘の平生をきくに、料理は下手、裁縫は嫌ひ、しかも朝寢の習慣ありて何一つの取柄もなし、併し彼女は田舍にて稀にも高等小學を卒業し、更に補習科を終れりとのことに、これを鼻にかけて女教師か、または女醫に、はたまた看護婦にもならんとの決心を示せることにてありき、その志固より惡しといふにはあらねど、彼女は、これまで女子師範の應募にも講習科の受驗にも失敗を重ね據なくも東都の遊學をその父に迫れることとにてありしなり、父なる人はいたく惑へるものと見え

余にこれをはかりしかば余は彼女の平生によりて到底成効の見込なかるべきを以てし、また彼女を諭すに「女子はまづ家庭の職業に心がけてこそよからめ、東途の遊學必ずしも遮るわけにあらねど、そは一通りの料理も覺えて自炊の出來る樣、また裁縫の技もせめては縫目正しく自分の衣服を一己にて縫ひ得るまでに進みたる上にせよかし、しかも晏起の習慣ありては萬事推しはかられて危し」とのことを以てせるに、彼女のおもゝちいとあしく如何にも東都の遊學をこよなき希望の花と眺め居るものゝ如く察せられたり、こゝに於て更にその母なる宿の主婦を戒むるに、よく顧み輕擧悔ゆとも及ばざるが如きことあらしむる勿れとのことを以てせるに、彼女は一きはふくれて見えたりき。

余は、また一昨年の夏に於て、山口縣の或る町に滯在する身となりしが、その地の高等小學校長よりして女子教育に關する嘆息の物語を耳にせることにてありき校長の君のいはるゝには「わが家には田舍より預れる女子ありて、この地の、、學校に通學せしめあることとなるが、近頃より家事科の内に料理法の簡易なるものを習ひありと、當人のいふがまゝ喜びてありつるに圖らざりきその料理法は西洋の直譯にて、やれ牛肉何

斤、乾酪何匁と、さも西洋人のクックにもなるかの如く心得居らんとは、しかも妾こそは西洋料理に通ずるなれとこれを一つの自慢に數へあらんとは、西洋料理強ちに惡しといふにはあらねど、御飯を炊ぐことも大根を漬くることも知らで西洋料理を持込まるゝには閉口の極なり、よろしく我國生活の程度習慣等を顧み我國家庭の實際に適切なる料理法こそさしあたり必要ならめ、かゝる西洋料理を覺ゑたればとてなどて田舍に應用せらるべき、女子敎育の弊また推して知るべきなり」と校長の君は幾度となく繰返し慨きたることにてありき。

余は、また近頃一笑話を洩れ聞けるが、そは殆ど常識もて判じ難きほどに覺ゆるそもそを語り出でんかあまりに口きたなき男なりと罵らるゝもつらし、併し余は女子敎育のために語らまはし、或る良家に中等の女子敎育を經ぬる人をば迎へて家庭の和樂を求めんとしたるに、嫁なる人の姑に對する言行すべて敎育を受けたる人とも思はれざる節多しとかや、或る日のこと嫁なる人は朝飯の仕度に汁鍋の横に傾きて汁の溢れ出でんばかりなりしを姑なる人は見かねてこれを眞直にせよかしと注意したりき、そをば嫁なる人は如何にとりけん、負惜みにも「母君よ憂ふる勿れ水は平準の器に從ふものを、こは妾の女學校にありしとき物理學にて敎へられたるところなり、な憂へそ、な憂へそ」と素知らぬ態に過ごしてまた顧みるを敢てせざりしと聞くも苦々しく思はるゝなりもしこを女子敎育の通弊にあらずといふものあらばそは甚だ仕合なり。

要するに、今日の女子敎育は甚だ幼稚なるものにてこれを忌憚なくいへば、敎を受くるものは余が岡山縣の田舍に遭遇せるが如き女子その人甚だ多かるべく、また敎に任ずるものも余が山口縣の某町にて聞きつるが如き主義これを直譯的といはんか或は西洋主義かはたハイカラ主義かとにかく妙なる主義の下に子女を敎育しあるもの少からざるべし、しかもその敎育を完了せるものゝ入嫁につきては余がさきに述べたるが如き弊の免れ難きものあるにあらずや、よく新聞に婚を求むと廣告されたるものにつき、女學生は眞平御免の條件さへ附隨しあらんとは、女子敎育界のためにまことに痛むべきことならずや。

あゝ敎育されたるものに奢侈を覺ゑ、その性格は不從順となり、その言葉は戾らぬ理窟をいひ、たま〳〵以て非を飾るに過ぎざるが如きに至らんとは、さてもま

た寒心すべきにあらずや、これ畢竟その教育が適切ならざるの致すところか、有名なる獨乙のヴント博士は彼國の女子教育につきていへり「女子はその家庭の職業に關心する教育を施すべし」との語は移して我國に適用すべきにあらざるか、余は都會の教育が直に以て田舍に持込まるゝを喜ばざるものなり、都會は田舍に比して金儲も多きが故に消費も割合に大なるを得べきも、田舍に於ては然らず、都會の如き消費的家庭を田舍に移さんか、田舍は忽に零落してこゝに農村荒廢の悲劇を演ずることゝなるべし、田舍に於ける教育これを田舍的にせずんば、徒に都會の生活を羨望して都會に狂奔するものゝ數を增し、此等の子女はこゝに純然たる都會教育を都會に受け、教育成れる曉に於て善美なる家庭をなすの性格と素養とを有するものや寥々たるを奈何せん、しかも彼の子女の都會に出づるや、たゞ盲目的にその業成らざるものに於ては果して如何にすべきか。

余の東京に出でしや、明治三十二年の春當時最も驚きたるは軍人、書生、車夫の數甚だ多かることにてありき、しかもその書生や多くは男子にして女子は甚だ稀に余は當時に於て海老茶式部は悉く華族女學校の生徒なるべしとの誤認をなしたる程なりき、然るに今日に於ては如何、その數、幾十倍といはんか東京市中行くところとして女學生を見ざるなし、これ一面に於て固より喜ぶべきこととなるべしと雖もその盲目的に一概に東京といへばこの上もなきよき塲所なりと考へ、所謂都會熱にうかされて迷霧の間に一生を誤るが如き惡魔窟の裏面に伏在せんとは、すでにこの惡魔におかさる悔ゆとも及ばざるなり。

あゝ無垢なる淑女、あゝ罪なき淑女徒に都會に狂奔するをやめよ、御身等は都會に出でたるがために惡魔の擒となりもはや無垢なる淑女としてまた罪なき淑女としての影を失ふに至ることを忘るべからず、特別なる事情の人を除きては一般に田舍は御身等の教育所なり、御身等は田舍の研究未だ足らざるぞ、御身等の道は近きにあり却つてこれを遠きに求むるの愚をなす勿れ、御身等の理想は實に神聖なる家庭の和樂に候はずや。

家庭の和樂、家庭の和樂、

これを得ると否とは實に御身等の双肩にかゝれり、御身等はまた中澤道二先生の鳩翁道話に鑑みるところあらば御身等の周圍にある家庭の事情は悉く御身等の教

育に向つて天與の恩物にあらずや、御身等は祖先を重んずること厚く、その選ぶところの宗派に向つて或は祖母或は母姉など、郷里の神社を拜してその祭れる神の功德を慕ひ、或はまた附近寺院に詣で、開基上人の功德を仰ぐも精神の慰安にして家庭の和樂を增す所以のものにあらずや、而してまた御身等はこゝに讀書の趣味を增さんことを心せよ、これに向つて御身等の知德を鍛磨すべき種類のものを選べ、しかもその所感を本誌の如き最も眞面目なる機關に寄せて閒居の時なからしむるは御身等にとりて最も必要のことなるべし。

婦人と宗教

内村鑑三氏談

宗教は最も普偏的のもので、必らずしも婦人にのみ限られたるものでないとは勿論であるが、元來宗教なくして教育せられたる者は、恰ど塗つた器の如く、表面のみ光つて内は暗黑なのである、玉も磨かなければ光は出ない、人は總て宗教によりて其心の玉を磨かなければならぬ、人は貴き生命を有するもので機物とは同一のものでない、故に、外面許り磨かないで心から眞の光が出るやうにするが肝要である、即ち宗教に依つて、自ら覺る所がなければならぬ、總ての婦人は、自分程惡い者はない、自分程嫉妬深い者はない、自分程高慢の者はないと自覺するに至つて、初めて婦人としての眞正の光を放つ者となるのである。(小野みち子筆記)

日本婦人の衣服

長井工學博士夫人談

日本婦人の一般に着て居らる衣服は、甚だ不便のものであると思ひます。然し之を改良して別種のものを造らうとするのは餘程六ッ敷い事業でありませう、今では改良服と名づけられた妙なものがありますが、私は甚だ感服出來ません、斯の樣なものを用ゐるなら、いつそ洋服を着た方が宜敷いかと思ひます、洋服と謂へますれば、從來我國の上流にある婦人は之を用ゐらるゝ方もありますけれども、それを、經濟的に用ゆることは爲さらんで、口惡く申しますと、美くしい花飾の帽子や流行形の服を、一二度用ゐたのみで直ぐと簞笥の中へお收まひなさる、かくては洋服も非常の不經濟でありますのみならず、到底一般に洋服を着る樣にはならないのであります、西洋では縱令一枚の衣服でも、好く流用し且つ意匠を用ゐて流行にも遲れざる樣心掛る故、經濟上非常の便を得るのであります、併し其仕立方は日本服と同じく、多くの稽古をせんければならんでありますから、之を以て直と從來の日本服に代へようとするのは、非常に困難のことでありませうけれども、私は行々日本婦人が現時の和服を廢して洋服に改められんことを望むのであります、洋服裁縫の稽古に就ては、學校で一週間に一時間又は二時間と少しつゝ間を置いて習ふよりも、然るべき師を賴みて、半年若くは一年も專門的に習得した方が、多くの利益であると思ひます。(小野みち子記す)





女流小影

▲三宅花圃女史（肖像前號にあり）

日本の女流詩人及文學者——見來れば寥々晨星も啻ならずである、明治以前に於て、紫式部・清少納言・小野通女・加賀の千代女・其他果して幾人かあらう、明治の文運前古比なきにも拘らず、女流の詩人及び文學者として、名を江湖に馳せたる者、僅かに今は亡き樋口一葉・田澤稻舟・岩本嘉志子・中島湘烟・北田薄氷・生ける三宅花圃・大塚楠緒子・小金井喜美子・與謝野昌子等、兩掌の指を折りおはれば外にない、此僅少の名花の中、明治文學興隆の初期を通じて今に至る迄、一葉・稻舟等と並稱されて、依然文壇に其光を放つ人は、先づ三宅花圃女史である、女史が初めて小說『藪の鶯』を著はしてから、署名若くは匿名で出された書は非常に多く、何れも皆文才富膽善く時人の企て及ばざるものであつた、女史が女流文學者としての功績は、夫君雪嶺先生と共に明治文學史上に特筆せねばならぬ、女史頃日人に語りて曰く、『何か書いて見ようと思ひましても、つい家政の方が忙しいので』と、吾人は此言を聽て甚だ失望する、吾人は日本文學界の爲めに女史の再起を切に〳〵祈る者である。

▲津田梅子女史（肖像入）



明治四年、未だ西洋の事情も明かならざる頃ひ、年少なる女史外四名が、米國に留學するてふことの公表されし時、世人は如何に驚嘆の聲を大にしたりしよ、分けて一行中最も年少なる、取つて漸く九歳の女史の未來を想像して、如何に敬異の念を以て之を送りたりしよ、果然女史は遂に衆望に背くをなさゞりき、女史か業を了へて米國より歸り來れば、忽ち諸々の學校より聘せられ、社會の高き地位に推されて當代女學界の明星となれり、然れども女史は徒らに虛名を售る所謂當世才女に非ず、高き理想と大なる信仰を有し、毅然濁流の外に立ちて、冷靜篤實孜々として育英に從ふ所、正に是れ鷄群の一鶴、嘖々

の徒は其風を見て愧死すべし、女史先頃多くの官職を擲つて野に下り、自ら女史英學塾を開き、熟世と居を同ふして獨立自營の主義を以て教養に勗む、眞個の女學者、此語、女史を措て亦誰にか冠せん。

▲三輪田眞佐子女史（肖像入）



獨立獨行、之れ三輪田眞佐子女史が平生の主義主張である女史が今の三輪田女學校を建てるにも、敢て他人の助力を乞はず、久しき前から諸所の學校の教師として勤められる旁ら、數々有益の著述をなして貯蓄へた二萬餘圓で、其建築費の他一切の費用を支辨された、二萬圓……此巨額の金員を他人の力を籍らず、女の身一つで、貯へられた、其苦心と精力とには誰れか感嘆の辭を發せぬ者があらう、斯く謂ふたとて二萬圓の金員を尊とむのではない、唯だ之を蓄へて其總てを育英の事業に投ぜられた女史の心を尊むのである、而已ならず女史の一家が團結して、三輪田女學校なる一個の堅城を守つて居らるゝを見て、一層女史の德化の大なるものあるを認むると共に、深く畏敬の念を起さずには居られぬのである、蜜蜂は不磨の精力を以て密を造り、子々孫々を補育するのみならず、又た人間の生活に對しても非常の利益を與へて居る、予はいま、三輪田眞佐子女史の人爲りを想出て、小供の時代に學校の教師から聽いた、蜜蜂の教訓を思ひ出さずに居られぬのである、欽ずべき人なるかな。

▲矢島楫子女史（肖像入）



明治十三年始めて基督教の信者として洗禮を受けてより、爾來二十有五年教育事業に身を委ねつゝも、或は萬國婦人矯風會の日本代表者となり、或は鑛毒問題を研究して人道を叫び、又た神の教へを傳へて幾多の子女に新生命を與ふるに熱す而も偶ま人の宗教家を以て呼ぶあれば、否とよ妾は唯一個の基督教信者のみと謙遜して答ふ、何ぞ其心の高潔にして神を畏るゝの眞實なるや、斯の如き人は誰ぞ、女子學院長矢島楫子女史即ち其人にあらずや、



[illegible]井雨石先生選

天

○春風

千葉縣山武郡千代田村岩山内田小三郎方　翠蹊女史

吹くとしもなき春風にさそはれて、そこはかとなくさまよい出づ。うら〳〵と匂へる夕日を背に、里川のほとり、青柳のもと、駒つなぎて打眠れる馬子あり。駒も宛ら眠れるが如く、下もえそめし若草しづかに食みつゝ、時々馬子の袖にうなだれかゝる。如何なるみやび男ぞ、駒の鞍にさしそへたる櫻の一枝、こぼるゝまでに咲きみだれたり。みどりの糸にすがりて、打ち眠れる黄の蝶一羽、美しき香や夢にいりけむ、我に驚きたちて、その枝にまひうつりぬ。何處よりか來りつらむ。白き蝶また一羽、合ひもせず、離れもせず、互にもつれ〳〵て狂ひしが、頓に馬子の眠れる顏にたはむれそめぬ。折りしもあれ、一きは強う春風の、柳の糸をよりかけつゝ、駒の鬣ふくと見れば、花ははら〳〵と夕日にはえて、みだれちりぬ。名殘をしげに二羽の蝶、ちり行く方に逐ひつ逐はれつ、馬子の夢も今さめぬ、あはれ春風情ありしやなきや。おのれまた樂しき夢のさめたらむ如き心地して立ちさりぬ。霞の外に至れるころ、駒のいさむか、聲狂ひてきこゆ。

(雨評) 有聲の畫とは、かゝる文をいふならんか。オット、ちとほめ過ぎたり。

地

○落椿

千葉縣上總國山武郡成東町　吉原靜江女史

妹の心を慰めた枕邊の椿の花、その花が、はかなくも散つたその朝、妹の早苗は死んだ。春まだ寒き山の邊に、いさましくも只獨り咲いてゐた椿の花一枝、方々花を尋ねた末、漸くにして見付けたので、せめてもと折り取つて來たのであつた。これも病める妹をなぐさめんとの心よりして。

望は空しからで、早苗はいたく喜び、枕邊近く眺めてゐた。

お母さんは、その時「椿の花は緣起の惡い花ですよ」と、かう云つて顏をしかめられた。果して、緣起の惡い花であつた。咲きほこつてゐた中はよかつたが、ほろりと散つたその時、早苗も共に散り果てた。あゝ、未だ蕾の花の咲きもあえずして。それよ、散る花、それよ、消ゆる露、それよ、うするゝ星、あゝ、それは早苗と少しも變りないのである。されど、朝に消えた星は、又夕べに美くしい光を放つものを、一度とぢたる早苗の眼は、再び開かるゝ時がないのである、かゞやかないのである。然り、かゞやかないのである。早苗はてゝにあつても、その、愛らしい笑顏、その清い聲は、もう見られないのである。聞くことが出來ぬのである。むせび入る阿母さん、涙をのむ姿、二人は冷たい早苗にだき付いて、泣きに泣いた。されど、何時までも涙はつきず涸れないのである。「これも運命だから仕方がないのね」と阿母さんの聲は、何時しか曇つて、眼にはもう露が結んでゐる。あゝ、運命とはかく迄悲しいものであろうか。死ぬる前、椿の花を眺めて「母ちやん、もう少し過ぎると、梅や櫻が咲



くのね、あのすみれやたんぽゝもね、妾もう好くなると、蝶々を追うて遊ぶんだわ、ね、兄さん」と、早苗はかゝる樂しい望をいだいてゐた。その望は、永久に遂げることが出來ないのであらうか。思へば思ふほど、悲しさは增すばかり。

「妾し死ぬとはいや、何時までも母ちやんと姉さんと兄さんの傍に居るのよ。」これで、泣かずに居られやうか。そんなに愛らしい早苗を、誰れがやつた、誰れもやりはせぬ。やるまい〳〵と思ふものを、早苗は行つた。否、早苗をうばい去つたのだ、恐ろしい惡魔が。

人の死を悲しむのは當然だ。鳥は、花が散つて悲しむ、萬物皆同じである。風てふ惡魔が、花にあるが如く、人には運命てふ惡魔がある。早苗は、その惡魔の犧牲となつたのだ。あゝこのうらみ、このなげき、そも何時までつきぬであらうか。あゝ。

（兩評）言々情あり、句々力あり。

人

○押花帖

岩代須賀川本町　服部けさ子

風は靜かに柳の糸をより、花は新たに匂へり。小川の水はた、調べやさしうも我が文窓におとづるゝ。其音や、春に醉へるわが想ひを、遠く遠く運びゆくらんやうに。

さらばと取りでたるは、匂ひこぼるゝ小さき押花帖、紙の折目もいまだに新らしきよ。之れは、これ皆過ぎつる春秋を、神の愛子と香りて自然に唱されしものゝそれ。

わがけがれしもろ手になまじひに摘まれしをや、本意なくも思ひしならめ。ゆるせ、今ぞ淨き流水に乘せて、世のあと追はしめむに……。紫の色はあせたれど、なつかしくゆかしきは、菫の花よ。長きこの七年を、ようも香りを保ちたりな。とはに〳〵世の塵になそみぞ。

口紅こき撫子は今日も涙の種なりな。共に野べに根をわかちたる一と本は今やいづこに……。別れし友よ、とこしなへに栞となして、めで給ふか。つゝまやかなるは、花かつみのやさ姿なるよ。そと手に取れば、形は薄う紙に殘れり。さぞや安積の沼の戀しかるらんと、いとゞいぢらしき。並びて押されたるは、色さへ同じき藤の花瓣の二三片。こはをとゝしの初夏なりし、光

子君の嫁き給ふ五日前、旭ケ岡の散歩のかへるさに、しばしと宿かりし山陰に、長く垂りし一房よりぞ。あゝかの清水今も猶變らで岩の、苔路にしたゝるか。蝶のなきがらにも似たる、おぼつかなき花びらに、そゞろ想ひは胸にみつ。白と紅との糸萩の花は、まだ見ぬ友の送りこされしもの。やさしき墨のあとかぐはしき紀念の花よ。月見草、野菊の花はしほらしく、蕾のさまも興深し。とある一頁に目とゞまりぬ、枯れがれなる桂やうの、二寸ばかりなるが、物かなしげに。今は昔、兄君が鎌倉に遊び給ひし時、護良親王のさゝやかなる御墓に、はひまつはりたる蔦蔓とや、細々と朱筆に記されて見るから昔のしのばるゝ。あはれ。……ひとり黄金色のつやつやしう絹とも見ゆるは金線花なり。されば、人を嫉妬の花と呼ぶとかや。花は多し、皆とりどりに色あり、香あり。されど、凛として總べてに立ちこゆるは、白き野ばらの花なる哉。其かみ雪ともまがへて――卯の花、梨の花、今は見る影もなきぞうたてきや

見れば、さすがに、なごりの惜しまるゝよ。さらば、さらば、世の限り我破れ籠の内に秘めんか。さりとも、流水に委ねんか……。流れはまたもせゝらぎて、

（雨評）詞にや、匂ひの乏しきは、押花のとがとなして、其のもとの心の花の優美なるをとりて、人とするものなり。

秀逸

○濱邊の夕

伊勢　三谷ため子

今しも日は西の山に沈み行きぬ。

風もやうやう凪ぎたれば、高鳴る浪も、其の譜をゆるめて、恰も眠りゆくが如し。今まで赤かりし空は、次第に薄れはてゝ、遠方に鮮かに浮び立てる、參尾の山山も、瞬時にせまり來る夕べの色に包まれ終んぬ。

曳々とかけ聲かけて、勇ましく漕ぎ來る漁船、舳には高く網を疊み、其の傍に堆く積み上げたる籠は、今日の獲物の多かりしならむ。兩舷に四挺の櫓をつけ、裸躰に鉢卷の儘、元氣よく岬を廻り行きぬ。

　辛い浮世に浮いては居れど
　　恐や地獄は板一重

暗より暗に消えゆく、其聲の終りは、細う聞ゆるに、何となく悲しう胸に響きて、思はずをのゝきぬ。

今まで此處に遊び戯れ居たりし二人の童、彼の歌聲に

覺えありてや、俄かに海近き家に走り行きぬ。軈て、靜々と入り來る親船の、帆を卷く人や、彼の歌の主なるらむ、彼の童の父なるらむ。

（評）餘はなほ未だしけれど、多少の情景は浮びたり。

○秋夜故郷をのぞみて

磐城國　むらさき女

身にしみ渡る寒む風に、端なく夢も破れける。あたり物音しづまりて、流るゝ水音いと高く、吼ゆるは犬の聲ならん。さやけき月は山の端に、見えて、我身を照らすなり。あゝいと淋し、月の夜は、如何に雄々しきますらをも、心こがさぬ事やある。まして、他郷に遊ぶ身の、哀れは深くなりにける。東の方を眺むれば、名殘もをしく山陰に、戀しき郷は見えねども、思ひ回せば、早や三年。今日の今夜の別れには、勇みし心に勵まされ。恩愛深き父母に、手に手をとりし友垣に、したしき袖を分かちしより、文のゆきゝはありつるも、夢路ならでは、あふ事も叶はぬ西のとほつ空。今は故郷のありさまも、嘸やかはりておはすらん。あゝなつかしき父母は、如何にましまし給ふらん。我が契りにし友垣は、首さしのべつ、指をりつ、わらはが錦を故郷に飾りてかへる其日をば、嘸やかぞへて待ちつらん。群をはなれし浦千鳥、友よぶ聲を哀れにや、川の波間に聞ゆめり。嗚呼いたましの世の中よ。村雲月を蔽ひにける。折しも、飛びなく雁が音の、二聲三聲呼びつゝ。雲井の床に入にける。思はずぬらす袖時雨。心さびしき一人たび、談すは園生の小蟲のみ。神もあはれみ給はずや。胸のさかるゝ思ひをば。如何にやるせのすべもかな。

（評）優美には書かれたれど、あまりに句調に流れたり。

○落葩

常陸國　西野春女

華かなりし夕榮えの色さえて、ねり絹のごとき夕ぐれの幕は白う、長閑なる黄昏れの天地をつゝめば、月かげおぼろに匂ひて、野べの夕風またなく床しきに、妾が吟魂やうやく感興の糸にさゝやき、何時しか里の小路をたどりて、新しき奧津城のまへに佇めるなり。問ふなかれ、誰の墓と。

妾はその名を云ふに忍びざるなり。強て問はゞ、こたへむ、美しく哀れなる戀の花の埋むる處と。見渡せば、墓石累々、新なるあり、舊なるあり。墓語らざれば、

知るに由なけれど、堀り起さば、惆悵たる戀の花またすくなかるまじ。

折りしも、さと矢の如く落ち來りし燕、墓の後なる山吹の花をけ散らして行きぬ、花は地に落ちて、不幸を天に愬へ顔なり。にくきかな、遠く飛んで嘻々と笑ふ燕。花に何の恨みありや。晩鐘耳に近く聞えて、讀經の聲遠し。妾れは常の如く悵然として、奥津城を去りゆかむとす。

見あぐれば、何時か忘れ得ざる新月は、ぬれ紙に描けるが如く淡く、綠りふかき寺のかとべの柳の糸に懸れり。

（評）かゝる文には熱情をこむるをよしとす。猥りに氣取るはよからず。

○春の光り

千葉縣　小高せい子女

家を出ると、何んとも言ふに言はれぬ樣な、暖かな心地よい春風が、すーと頰を甜めづる樣に、吹いて來て、すつきり青く澄み渡つた大空には、綿をち切た程の雲もなく、少し遠い山々は、うつすり霞の衣に包まれて居るといふ、この上もない好日和、田甫道のところどころには、若菜摘むのでもあらうか、若い女の折々飜すあかひ袖、振の影も見える。

妾は、左に折れ、右に曲る田畝道を、糸遊に引かるゝ樣に、ふら／＼となどつて行くと、聽てサラ／＼と小さな音を立てゝ流れて行く、淸い／＼底の小石も讀まれる樣ないさゝ小川のほとりへ出た。

岸べの柳が、すーとこの淸い小川の流れに靡いて居て、そこらを、小さな鮒が、ぴか／＼と白腹を見せながら、泳ぎまはつて居る。そして、サーと春風が吹いて來ると、サラ／＼と流れて居つた小川に、小さな波が立つて、柳の枝がサア／＼と動く。嗚呼何んと云ふ愛らしい優しい景色であらう。妾はもう何となく稚兒の樣な赤ん坊の樣な心持になつて來た。

そこにかけ渡たされて居る、如何にも／＼危ぶなさうな、一人步めばぐら／＼と震動して、後から行くものは刎ね飛ばされさうな一枚橋を行くと、そこはもう菫花咲く春の野で、向うの方には、牛が二三匹、ゆる／＼と青草を喰うて居る。左の方には、半分破れかゝつた小さな赤黑いかやぶき屋根が三つ四つ、ちら／＼と見え隱れして居る。又右手の方は、少し坂を上りて行けば、白幡神社の杜まで、七八町と云ふものは、一面に菜の花で、所々に變手古な紫色の簪の樣なのが、頭ぬ

けて高く咲いて居るのも可笑しい。すると、こゝらの百姓の妻でもあらう、大きな籠を脊負うて、をかしな鄙歌を歌ひながら、とぼ〱とかやぶき屋の方へゆくと、また奇麗な蝶が二つ、其の籠の中の菫や菜の花の香を慕うてか、前になつたり後になつたりして、その女についてゆく。

妾は暫しうつとりと、目あてもなく四方を眺めて居る。折から晴空をかすめて行く一片の浮雲は、小さな流れ、さつき渡つて來たその小さな流れの水底に、鏡の上の點の如く影を落して、やがて瞬く間に消えて仕舞ふ。天女が假りに其の身を鳥となして、琴を奏して居るのては無からうかとまで思はるゝ。雲雀は例の美妙な音樂を奏しながら、雲井遥かに舞ひ上て行く。

（評）文才はほの見ゆれど、まだ鍊磨の足らざるところ多し。

○秋　夜

宮城縣　桂島登美子

今宵もいたく更けぬらし、四隣寂として人の氣はひだに無く、破れ窓たゝく秋風は、たゞ寥しさの媒なるのみ。折々「ガサ〱」と音立てるは、木の葉の梢を辭するなるべし。さるに、吾は寢ともせで、獨、机にもたれ居れば、思ひは何時しか昔に走せ、はしなくも、亡き弟の上にと落ちぬ。

あゝ、我最愛の弟は、あゝ、我弟は、今は何地に迷ふらん。愛らしき聲張り上げ「桃から生れた桃太郎は」と語韻の切れぬにうたひつゝ、我登校を追ひ掛けしは、今尚目耳に殘れども、あゝ、早や二年の昔とはなりぬ。

あゝ、あはれ、いとしの弟よ、よみぢに何に、何にの樂ありや。よし、樂のあるにせよ、慈悲に富みたる祖母君の悲み給ふを他所にして、愛に富みたる母君の歎き給ふを他所にして。いとしとすがる姉どちを振り捨るとも、尙厭はざりしか。否々、いはけなき汝が之を知るべきに非ず。たゞ、世の魔神の誘ふがまゝに、と、思へば、いとゞわき返る血汐の涙、潛然として留めがたく、たゞ世の無常を恨むのみ。

あゝ、世は死の神のそれのみか。神は聖と聞きたるを、思へば、思へば、無常の世や。

わすれもやらず、文月二十日の夜、吾は、亡き弟を背負ひ、妹供をあいてに盆火（ダイマツ）をとぼしゝに、「ドン〱」とはぬるを、いたくも心にかなひしと見え、南蠻提燈片手にふりつゝ「アーマッ〱」とよろこびしは、逝きぬる日の八日前なりしとは、神ならぬ人の身の知るよ

しなかりしぞ、口惜しさ。

あゝ、吾は先きの日も、かの提燈の納屋の片隅にあるを見、たまらず「ワッ」と聲を限りに泣きぬ。折しも、響くかなたの時計「ビイン――」と、漸く吾に返れば、後生大事の女子文壇、無慘にも「だら〳〵」と。我は驚き、急ぎ寢につけば、風一入烈しく、隈なく澄める秋の月は、窓の隙よりのぞき顏に、あゝ、あはれ。

（評）まじめには書かれたれど、辭句すべて鍊熟を欠く。

○川邊の思ひ

淡路國　仲井鳳子

黃昏、只一人、市川の塘を徘徊したすゑ、われ知らず停んだ松原の陰。水の流れ逝くのを、つく〳〵と眺めたが、あれやこれやと思ひ合せられて、瘠せこけた胸のあばらが、一本々々抉り出されるやうな思がする。あゝ、妾は今何んな惡魔に襲はれたのであらう。



水は滔々と馳せ去つて、永刧に止まない。鞺鞳の響は、絶えず兩岸の巖が根を叩いて、現世の秘密を囁いて居る。其の聲は、深い〳〵意味のある啓示である。決して悲みに泣けとは言はぬ。落膽せよとは言はぬ。功名にあくがれよとも言はぬ。あゝ、そうだ、自然は欺かない、眞實である。一も二もわれ〳〵に教へて下さるものである。

蟬聲、喧騷の綠陰は、やがて、紅を織る山の錦と輝くであらう。優しう人肌を訪ふた盛夏の嵐は、やがて、梧桐を搖落する悲哀の聲と變るであらう。三冬、林頭に綴る六花は、やがて、芳香薰ずる陽春となるの前兆である。何れか自然でないものはなからう。われ〳〵は、唯此の自然に從ひてだに行けば、良いのである。

されど、あゝされど、妾が命とたのむ美しい妹……花さんを奪ひ去つたのも、自然ではないか。そして、妾をかく悲愁の中に日を送らしむるのも、自然ではないか。愚痴、あゝ、愚痴であらう。されど、妾はいかにしても此の愚痴を忍ぶ事が出來ぬ。女々しとて笑はゞ笑へ、世の人。最早や妾は惡魔の子である。運命の神に見捨てられた煩悶の子である。自然。そはあまり冷酷ではないか。あまり悲慘ではないか。

一陣りさつと嵐が渡つて、容赦もなくわが瘠せた頬を刺して、川原に唸つた。夕の帷帳が、もう大方此の世をつゝみ盡くして、黒い大きな花の神の手が、頭上に落ちかゝつた。その皺痕の間から、折々氣高い光が見える。

あゝ、そうだ、花さんは、あの美しい星の宮居に遊んでゐらつしやるのでしよう。そして、此の便りない姉を、何時までも、何時までも、露かはりなく守つて下さるのでしよう。

（評）あまり氣取りすぎたり。

○水車

周防　堀　龍子

嗚、清き名よ、床しき名よ水車。

憂世に遠き此深山里、そこを流るゝ谷川に、清き聲高し。峯の松風か、水のたぎれる音か、續きつ絕えつ又續きつ、折々ぎーつと、何等かの秘密をさゝやくらむ如き、何とも知られぬ聲の、他の音をつんざきて高う〱我耳に貫く、云ひ知らぬ靈(たま)は、遠くにあくがれて、夢の樣に聲をしるべに辿り來て見れば、谷川に懸る水車、木朽ちて苔滑かなるに、岩にせかるゝ眞清水の、涸びては流れ、流れては又涸びて、古車の青苔に映り合ひ、雪を吐きて落ち行く樣、あはれ美しき此の仙境。傍へを見れば、怪氣なる小屋、中にしらがの翁あり。あはれ、何時の世にか守り初めけむ、今の翁は其主か、子か、孫か。

早暮れかゝる空の色、なのる聲淋しう、こだまに殘して、歸る鳥の一群、翁も早家路をさして歸り行く。木の間がくれに、袖見え、裾見えて、遠く消えにし後は、早や何物も問はず、天地寂ばく、獨り醒めたる水車、松の風、谷の音に合せて「たゆまずうまず」の其歌を神にさゝげつゝ、常夜の暗を守るらむよ、幽靜なる自然を友なる此水車。

時に、落花の芳香くんじて訪ふもあり。紅葉の錦、神

のまに〱おとづるゝもあり。優しきすみれの、苔に生ひて慰むれば、鶯も來て囀り、時鳥もしのび音もらす。或は、それ、冬の氷柱は、日毎の勞を慰する賜物と云はむか。塵ばかりの汚れもなく、淺ましきこびもなく、自然の調べ、いや高々に、廣し此の天地。歌人畫客、よく其景をうつし得るや、いかに。あはれうらやまし、これを守る山人、汝は詩中の仙人ならずや、汝は畫中の翁ならずや。

噫、美しき名よ、慕はしき名よ、水車。

（評）詩題は捉へ得たれど、未だ言ひまはしかれたるをなしむ。

○行く春

德島市　住友登喜子

一

「南窓の紅梅二三輪、美しう匂ひいでゝ、鶯の初音を聞く」と、日記文に綴りしは、昨日の程と思ふに、さても、時の步みの早きことよ。

やがて咲き初めし櫻の花も、昨日の風にはかなく散り、黃金なす菜種の花も、今日の雨に色褪せぬ。

かくて春はゆかんとす。

二

野には、しをれし菫、たんぽゝ、蓮華草などのあはれに、若菜籠さげし少女子も見えず、殘んの色香を尋ねて飛びめぐる蝴蝶の影も、いとあはれに。

薄紅に流れしさゝ川も、みどりとなり、

遠近の山も、霞の衣ぬぎすてゝ、おしなべて靑き姿となりぬ。

たゞ富士の山のみ雲井はるかに白く聳えて。

三

山吹の宿の邊、薄紫の藤の花、
水清き畔の流れの杜若、
賤が垣根に眞白き卯の花、など
行く春の名殘とや見む。

○炭やき

澎湖島　山門わかば

模々と立ち昇る炭竈の烟は、翠なす松林の枝を縫うて、果ては佐保姬の霞の衣に散り纒ひぬ。

日當りよき山の麓に、粗朶もて葺きたる小屋は、此炭竈の主の家か。丁々たる斧の音に連れて聞ゆる樵歌の聲、餘音嫋々として、山又山の谺に冴へたり。

アヽ、豺狼横行する血腥き浮き世を餘所に、八重の山奧に人となり、都人の聞き焦れたる杜鵑も、夜毎の寢覺めに聞き飽きつ、物凄き木兎も、寂しき獨り寢の友となしては、澄み昇る月に懷古を語り、咲き匂ふ花に行く末を樂しむ。さても、松の聲、谷川の水、天女が奏樂の面白さよ。春秋僅か五十の露命、かくも自然の境に起臥して、罪なく過ごす人の羨はしさよ。

○月よ君

麴町區　重田春子

月よ、君。櫻の雲のたなびく招魂社畔、兄上、姉上の溫き御手に引かれて、小さき聲に唱歌しつゝ、ほゝゑみ禁じがたう、うれしさに辿りし我を、知りたまふなるべし。

月よ、君。やり水凉しき庭の凉み台に、うちわ片手にまさぐりつゝ、あまりに、淸き御光りを、拙き筆にうたひしとき、にこやかに、我を、見下しましゝにあらずや。

月よ、君。虫の音しげき窓に、光りを投げて、書にもだえし胸に、限なきさとしの力あたへ給ひしを、心より感謝の聲捧げし我を、こそ、しろしめさん。

月よ、君。氷の如冴えにさえて、友戀しの情やるせなう、君をあふぎし我を、うるはしきシンパシーの光をたゝへて、見下しましゝに非ずや。

あゝ、月よ、君。わが一年の凡てを知れるは、君のみ。長しなへに、我に、詩の材料をあたへたまへ。とことはに、我に、慰籍の光りを投げたまへ。とはに、とはに、希望の影をみとめしめたまへ。あゝ床しき、美しき月よ君。

消息文

塩井雨江先生選

天

○戦死せしと思ひし兄様の御無事と聞て

越後西蒲原郡巻町　綾子

兄様、私はほんとに驚きまして、夢ではないかとうたがひましたが、たしかに夢でなくて、こんな嬉しい事は有りませぬ。末の弟は、わけもなく、兄様は御無事だ、萬歳々々と、日の丸の旗をかざして、さわいで居るのです。昨日に變りて、今日の我家は、只だ萬歳の聲で満たされて居るのです。去る日、御戦死の御報が参りました時は、兼て覺悟は致して居ましたが、何だか悲しくて、思はず御寫眞に向ひ泣いたのです。父上様は、なに、正夫は君の御爲め國の爲め勇ましく戦死をとげて、實に嬉しい。中尉であるから、何れ死に役て有る。決して泣たりなどするな。かへりて正夫にすまないぞとお云ひなされたから、私も氣を取り直して、御寫眞に香花をそなへ、心を慰めて居ましたところが、不思議にも人違にて、兄様御無事との電報が参りました時の嬉しさは、とても私のまわらぬ筆には書れませぬ。兄様御察し下さいね。だが、兄様はいつも眞先に御進みなさるのですから、生きて御歸りとは思ひませぬが、旅順陷落を見ずに御果てなさる兄様の御心を御察し申て泣いたのですから、兄様勘忍して下さい。そして、大君の御心お安め申上げる様、なほ々々御盡し下さい。越路の我里は、毎日雪荒で困るに付ても、實に兄様の事が思ひやられ升。先は取り急ぎ、細き事はまたやがて後より。

（雨評）情もあらはれたり。筆も少しの隙なくたるみなく、よく整ひたり。天とする。

地

○吉備團子にそへて

岡山縣御津郡石井村　松本もと

すべて名物など申すものは、何でもなきものに候へど、岡山の名産吉備團子は、日本一と銘打つてある通り、一寸甘きものに候。私より賞め申すは、失禮に候へど。昔々のその昔、桃太郎が鬼が島征討の時、たつた一個貰ひて、猿犬雉子などの從軍したる程のものに候へば、日本一と申すも、あながち過言にはあるまじく候中にも書いてある通り、下戸は元より、上戸にも持てはやさるる由に候へば、お父さんにもお上げなさるべく候。何とぞ頰の落ちぬやう、くれ〴〵も注意遊ばされて日本一の味ひ、お試めし下されたく候。

（雨評）輕快なる筆愛すべし。地とす。

人

○牧場より

越後長岡觀光院町
野口方
房江女史



なみ子さん、此間のスケッチの繪端書ありがたう。妾し此頃は、弟と二人で、綠こまやかなニレの木や、小山の下の泉の傍で、羊に餌などやつて、樂しく暮らして居りますの。妾の家は、少し小高い處にあつて、うしろにはカンガルーなどの住んで居る森がありまして、前は一面の青野原で、牛や羊が、あちらこちらに群をなして遊んで居るのです兩傍にばらの花が咲いてるだら〳〵坂を下り、赤や白や綠の花が開いてる處を通て。麥笛吹きながら、羊を呼びに出かける事や、風やはらかな春の暖い日に一里とへだゝらない町へ、牛車をがら〳〵いはせながら、牛の乳を賣りに行くのなどは、ほんとうに樂しいのですよ。此間は父と母とそれに弟と妾の家内總出で、寫眞をとりに行きました。それ、この寫眞がそれなのです。近々の中に、種々の珍しい花を押して、貴女にあげる樣に、今

弟と採集中なのですから、待つて丶下さい。あ丶もう入日の影が赤くカーテンを染めだして來ました!!また羊を呼びに行かなくてはなりませぬ。もう弟の口笛も聞えます……あなたスケツチを是非ねー御願ひですよ！

（雨評）想は西詩によりたるものならんか。とにかくに、樂しげにおもしろげにゆかしげによまれて候。人とす。

秀逸

○都なる叔父のもとへ

神奈川縣　小野雪枝女史

春深うて、都大路のきのふけふ、嘸々にぎ〳〵しう入らせられ候御事と、はるかに御喜び申し參らせ候。定めし此頃は上野の花、隅田の櫻、さては、飛鳥山のながめなど、いづれ見あかぬ景色にて、こよなうにぎはひ申すべくと、ひそかに思ひやられ候へども、海山へだてし片田舍とて、大江山ならぬ、いくの丶みちの遠くして、まだふみも見ず、いと〳〵口惜くて、むなしく都のそらのみながめやるのみに御座候。さて、妾方にては、こぞの秋父君の身まかられしより、家居には母上と妾のみにて、花咲きぬとて、おとなひくる丶人とてなければ、花見とあくがれ出でぬべうもなく、日々心細う、春雨ならねど、いとしめりがちにのみくらし居り申し候。家櫻もさきぬるに、父君のおはしまさばいかにうち興ぜらる丶ならんを、今はむなしく墓のたむけの料にこそ。思へば、いと丶涙のたねとぞ相なり申し候。都の御すまゐには、御不自由もこれなく、ことには花の三月、御なぐさみのことも多かるべしとは思ひ侍り候へども、人あししげくて塵ふかき所にも御座候へば、御老母樣または御子ども衆などには、いかゞあるべき。かへつて、のどやかなる田舍の野山にゆる〳〵この長き春の日を遊びくらされ候はゞ、いかばかり御養生のはしにも相なり申すべき。まして、すみれ、たんぽ丶さきかふ田畑に根ぜりつみ、かすみたなびく松原土手にかけのぼりては、つばなぬくも、いと興あるべく、長き日あしのくれをしまれ申すべくと存じ候へば、御老母樣始めみな〳〵さま、御ひきつれぜひ〳〵御越し下されたく、待ち上げまうし候。ことに汽車のたよりもこれあることゝて、さまでおひまもか丶るまじく候へば、このよし御老母さまに御申しあ

げ下され、かならず御越し下され候やう、御とり計らひ下され度、ねんじ上げ參らせ候。まづはあら／＼筆とめかしく。

（評）まじめにおとなしくは書かれたれど、おもしろきところなし。

○師の君に參らす文

周防　堀　龍子

昨日今日いとゞ吹きすさぶ木枯に、脊戸の小川も凍るとまで覺え候に、師の君にはいかに此空を凌ぎますらん、お風等召さぬかと案じ參せ候。お嬢様にも日々御愛嬌付き、御成人遊ばされ候にや、御出生ありてより、未だお目もじも致さねば母君の優しきみ顔に似給ふらむか、父君の氣高きみ心に似通給ふらむか等、ゆかしうてのみお噂さ致し居り候。扨も、月日の過ぎ安さには、今更驚かれ候。懷き學舍の門を夢心地の内に別れしは、昨日



の心地致し候に、思ひ見れは、早三年の昔と成りて候よ。花咲きぬとては、野山の春にあくがれ、月出でぬとては、藤波よする池の汀に集ひて、溫き君が膝下に敎へ賜りし樣など、思出ては、いと懷く、妹の、君の手まねなど見せてお噂致すを見るにつけ、妾の敎へ受けし時のお手まね、今もくり返し給ふか等思ひては、など落第せざりしぞとかひなきくり事にも亂れ候。斯く申せば、さぞ敎へ甲斐なき子よとお怒りあらむと存じ候へども誠、是妾が情なれば、察し給ひてよ。昨日もつれ／＼の儘に、古答案等繰りひろげ候へば、歴史の評に、赤き鉛筆もて「よく出來た嬉しいぞい」の一語見出だし候。噫嬉しき此文字、紀念にと手箱深く納め候よ、扨在學頃植ゑし芽生の梅、今年嬉しくも咲き初め候まゝ、一枝水仙に添へて、差し上げ候。是唯お目を慰め奉らむ爲のみならず、お嬢様の行末に譬る心な

るを、笑ひ給はでよ。師の君、東風吹かば、又ひらひらと御門を驚し奉らむに、其時は、日頃よりの積りし御物語惠ませ給へや。かしこ。

(評) 情はきこえたれど、なほ今一入とおぼゆるふしぐ多し。

○都の友に送る文

小倉市　上野瀧子

涙の袖にあまるてふ、別れだに知らせ給はず、都に物學びにと人傳に聞きしばかり、そよとの御便りだに給はらぬみ心強さ、彼樣に固く誓ひしものをと、今更打ちかこたるゝ事も侍りし。さるを、はしなく音づるゝ雁の一聲、何れ御徒然の御戲れとは知れど、其當時を思へば……忘れられし身ながら……。都の園にもてはやさるゝ菊花には比ぶべくもあらぬ霜枯れの野菊の一輪、道に迷ふ旅人の目にすらかゝらず、やがてまぐさと共に刈りとられむ身を、よくこそ訪ひ給ひけるみ情は、決して忘るまじく、思出多きに過古を忍ぶ燈の下また物思ふ事のいや增し候、友なく兄弟なきを哀れに思す由、いと嬉しくなむ。されど、汚れたる罪の子と交らむより、自然の風月こそ、我ためには最も親しき友なれ。月も花も我を慰め、君と合奏せし玉琴は今も我憂を忘れしむ。昔ては君と共に都に學び、ならば海の外までもとはやりしが、今はさる望みは露程もなく、只此儘に安く永久に……否、今一入の願ひは人なきみ山か雲水を友の離れ島人になど、かく人もうく世もいとはしけれど、昔も今も慕るゝは、まだ白糸の昔の友にて、毎夜開かるゝは、寫眞ブックに候。おさげに同じリボン、二人手を組みて、櫻樹の下に笑みたゝへたる寫繪、其のまゝ今も……。其時は我も人も淸き美はしき神のみ子なりしを。あゝ……余はいはじな、語らじな。

(評) いやみある筆、もとより作者のあらはさんとしたるところならんが、ちといやみにおぼえ候。

○旅順より

下野　山本蓮江

露の看護婦にかはりて

忙はしき中の盗み書故、前文は例のごとく略し御容し被下候や、否や。さても、孤軍重圍に陷りて、はや既に半歳。二ケ月の中には、必ず援けに趣かんと仰せられしクロパトキン將軍には、來るに非ずして、却て一戰毎に退かるゝのみ。又多くの望みを屬し居た

りしバルチック艦隊も、來る〳〵とのみにて、今に見えず。それにても早、故國の纜をときしにや。我旅順の運命も、恐らくは一ヶ月を出でずと存ぜられ候。素より門外漢の妾の事なれば、よくは分らず候へ共、大凡は察せられ候。昨日は某の高地を奪はれ、今日はまた、何くれの砲臺危しと聞き申候。さながら、朝に足を切られ、夕べに手を斷たるゝの思ひ、妾等の心細さ、宵にほのめく明星のそれの如くに候。

妾の從事する赤十旗の下には、日に〳〵人を增すのみ。昨日の某高地を奪はれし折には、一時に百餘人の入院を見候。されば、其忙しさ一方ならず、血だらけの手も洗ふに暇なく、食事などの際には、其儘にてパンを握むのにて候。詰り、黑パンに非ずして、血のパンを食するに候。オヽ、又も傷者の入院との叫び聞え申候。お名殘り惜うは候へ共、さらば、これにて筆を擱き候。

（評）意匠は一工夫せられたれど、情熱が足り申さず候。

○寒國の友の許に

岡山縣　小山松枝

軒端の梅もほゝゑみそめて、鶯の初音もけふか明日かと待たるゝ折りから、御地に雪深くして、目を慰むるものもおはせず、日々書を友として御心を研き給ふとか。ちりのけがれもなく、一面白かねにつゝまれ、高尙なる思想を修養せらるゝ御許樣は、雪の色よりもきよく、やがて春待ち得てにほひ出でらるゝたのもしさそをおもひ候へば、御寒さはさることながら、御羨しく存上候。いかに氣候あたゝかき國なりとも、人の心のつめたきは、何より苦しくあはれに候。かの出征軍人をおもひやり候へば、寒さにもなやまされず、しかもいたづらに日を送り候が、國民として誠に耻しく御座候。外面はふゞきはげしくとも、家庭の御團欒には美しき花の一家にさきみち候ふらむ、其のかをりもなつかしくて。こなたよりは、日々ながむる梅の二三輪封じこめ置き候、花もしものいふならば、御手にふれて何とさゝやき候やらん。

（評）多少の文才は見えたり

○都の友の許へ

岩代　服部けさ子

卷き込められたる白梅の幾片只今机の上にゑみこぼれ候、こゝもとはまづ冬景色なるに、此香りいとなつかしく、御地の忍ばれて候よ。其後菊地注射液の効いか

がに候や。都にのぼられてより、早くも五年と相成り候を、伯母樣は未だ墨田の花も淺草のにぎはひも、御存じなしとや。程近く住はせ給ふなるにと、皆樣の御心中お察しまゐらせ〳〵。おいとほしきは文子樣、御自分からは遊びに出でたまはで、母君の御枕べにはべらるゝ由誠に感じ入り申候。愚妹にもあやからせ度う候よ。されど、姉がひなき私は、折々のいさかひに、年數へ見よといはれては苦笑ひする事も、日に一度二度ならず候。昨日用事ありての歸るさ、御宅のほとりを通りし時、目に付きしは、四季ばらの蕾にて、そゞろなつかしくて、摘みて、水入れにさし候ひしが、今朝程一つ開きて、今は、白梅と香りを競ひをり候。やがてまい昇るべき此冬はそがしたゝりよりぞ。よきにしのばせ給ひかし。禿山には凧上げの最中にて末の弟さまの凧の尾に小犬のざれまつはりて候ひしよ。お前掛けの形よきは、君が御手際とこそ思ひ侍れ。いかで私も御數を戴きて妹にもと存じ候。余寒猶さり果てず候まゝ御身をいとはせらるゝやう、呉々も。鳩の鳴く音をきゝつゝ。　かしく

（評）冒頭もよし、末段もよし、文才は見えたれど、伯母さま、文子、母の事をいふあたり、少しく言ひまはしかれたる心地す。

○友の初産を祝ふ文

近江國　村　撫　子

かねてふくよかにおはすやうは、先達の御文にて推し侍り、日待ちに過しつるに、さいつ日の朝日の光りと共に、黄金白金にもかへがたき、玉の男兒の君擧げさせられ候よし、天晴の御手柄かな、滿洲の野にいます背の君の御滿足の御顔、御老母樣の御笑顔など、まのあたり見まゐらすやう覺えて、人事ならず御壽き申上候、其後の御經過もよろしき由、されど御初産の事にもあれば、餘り輕々しく御身もてあつかひ給ふな。さても不思議なるは人の運命に候よ、寄宿舍の窓によりて、月を眺め歌をよみ、寢られぬ夜々、共に母戀しがりしは、昨日今日の樣覺え侍れど、君は早母君と呼ばるゝやうなり給ひしとは、此事傳えきゝなば、友垣の感や如何ならんなど獨りほゝ笑み居り候。高尚なる理想のまゝにつくられし君の家庭の樂しく美はしからん、さらに此母側に生ひ立ち給ふ和子の如何にさかしからんと、御行末頼母しく御羨しさの限にこそ、櫻咲く頃にもならば、和子の御姿、寫眞して一葉惠ませ給へや。小包にて御送申しゝ、縮緬、巖上の松に雛鶴の

模様は、和子の千歳を壽き参らする心ばかり。御召料の一にもなし給はゞ、うれしき限にてこそ。

（許）いふところは整ひたれど、平凡なり。

○梅を手折りて友の許へ

紀伊　白蘭女史

いつぞや、枝ぶりおかしとめで給はりし庭の白梅、雪をかたへに、笑み初めたれば、色をも香をも、知る人にてこそと、いそぎ一枝もたせあげ候。うぐひすの初音にもいやまして、ゆかしき君が、御口ずさみもがな。いかで。筆足らはねば、何事も、此花にてこそ。あなかして。

（許）文に梅花の如きかをりあり

○友へのかへし

大阪市　池田静子



ちとほこりがにほのめかし給へる、御文賜はりうれしうもはた、うらやましう承り申し候。實に春旅の御樂しさ、さこそと察し上げまゐらせ候へ共、この籠中なる鳥の身にあまりうらやませがらせては、罪深うも思召し給らずや。

ちか〱の中に京都巡りも終へさせ給ふよし。さてはいよ〱めざし給へる奈良の都へ、御出立遊ばさるべき事と存じ候。昨日吉野の花を、たづね來し人のはなしに今年は去年よりも早く咲き出で、、今は眞盛りの見どころと云ひ侍るに、君よ早くおとなひ給へ。心あてなる花散りては、例の御歌も悲しかるべきに、いざ早く行きませよ。あなかして。

（許）多少の才氣は見えたり

○遊學せる友に送る文

能登國　杉下ふみ子

永々御消息きこえんとは存しながら、家の事何にくれとなくいそがはしきにまぎれつゝ、櫻花さく此頃まで打ちすぐし候怠りは、例の寛きみ心にて、御ゆるし玉はり度候。さてもこの地におはせし頃は、はらからも及ばぬめぐみをたれ玉ひ、まことの姉もかくまでにはなからんと、先頃一人の姉にも別れし身は、一入御慕しさ増りて尚末永くみ敎へ仰がんと思ひ居り候。御許様の、物學びの爲め、遠き東の都に行き玉ふとて、過つる九月の末つ方、惜しき袂を分ち候てよりは、只片腕の落ちし心地して、いと心細く暮らし居り、今日此頃は文机の塵も拂はず、硯の海もかわきがちにて、たゞ〳〵御もとの空のみなつかしく、今日はいかになど袖に置く露のみいとしげく候。

去年の春、共に眺めてたのしみし庭の櫻、今年もうるはしく咲きいでつるを見るにつけ、坐ろに過ぎし春の事の忍ばるゝに、一花とりて文の中に封じこめて、御目わづらわし申し候、よしや色あせ露おびずとも、かくまで思ふ心をあはれとおぼし、朝な夕なに眺めさせ玉ひなば、妾一人の喜びのみか、花の心も思やられ侍り候。いとゞおなつかしさのまされるまゝ、つたなき筆まで、御安否伺ひまつるになん、あなかしこ。

（評）文は先づ整ひたれど、別に取り立つべきふしもなし。

○病める友のもとに　新潟縣　土田哲子

日ごと音ずるゝものは、只霰吹の音のみ、じつにきも心もくちはてゝ、いとゞ淋しき折からに、まいて病み床にふし給ふ君の、いか許りにか、心淋しくおぼしめし給ふらんと、心ならず侍れども、此五六日手ばなしがたき、用事の侍りて、つひ〳〵御うかゞひも申し上げず、失禮のだんゆるさせ給へや。此頃は御いたつきいかゞに渡らせられ候にか。病は氣よりと申し候へば、精々御心ひろやかに持たせ給へ。少しにても、御宜敷折りには、家にのみこもらせ給はで、ちと私共へも音づれ給うては如何にや。やう〳〵昨日今日より、月かげもかすみそめ、どこやらに春めき申候へば、やがては梅笑ひ、鶯歌ふ頃にも成り候に、いたづらに病の床にのみこもり給はて、ちとみ心ひろやかに持せ給へ。あたり春めく頃には彼のひろやかなる野邊に、共に手を取りて、若菜つみかはしたまはずや。必ず〳〵病癒え給うて、樂しき遊びを相待ち候よ。此寒梅は、日頃君の好ませ給ふ紅梅にて、君の御いたつきを、なぐさめんとてや、今年は花も多く開き候へば、御めにかけ候よ。御室の内に置かせ給うて御つれ〳〵をなぐさむるよすがとも、なし給はゞ、花のめいぼくもさこそ私の喜び此上もなくてなむ。

○出征の兄に送る文　千葉縣　服部恒子

月日の小車は休みなく、鏡ヶ浦にて萬歳聲裡に勇ましき御別れ致し、棚引黑烟を名殘として御出征の途につかせ給ひしも、一と年の昔。本年も早や梅咲く如月と相成り、御手植の梅花香るにつけ、今昔の感に堪へず一筆參らせ候。

兄上御在宅中は、共に包み抱へて門出致し、歸れば、庭木手入れの御手傳、夜は一つ燈火に學び、何一つ心にさはる事なく候ひしが、今は只夢の樣覺え申し候。をなごは心の根弱く候へば、力なき事も幾度か。然れど、軍國女子の務正に然るべからずと、心の綾を取り直し、一層まめや

かに御兩親を慰め、兄上の無事を祈り、精々勉强罷在候間、御安心下されň度く候。時々の御書面に、死傷は覺悟との御言葉に候が、いとど心元なく、毎日の新聞待たれ、戰況に胸をどらせ申し候。次郎は、無邪氣にも「僕も今に兄さんの處へいつて、露助の首引き拔てやる」などと力み、色紙を挾き胸一面に張り付け、長き棒振り廻し、鷄相手に喜び居り候。御兩親は益々御健かに、日夜献納品製作に御忙しく入らせられ候。さ候へば、何卒家事に御心配なく、奉公の誠御盡しなされ度く、尙戰地は寒さ一と通りならぬとの由、重々御攝養なされ度く願ひ上げ候、かしこ。

○他郷の友に

神戸市　中村きく

夜のふけゆくまゝに、寒さはいよゝ身にしみて、ねざめの床のわびしさは、一しほに覺えられ候。扨ても、君には其後如何に渡らせ給ふらん。君と惜しき袂を停車場に別ちまゐらせしも、はや去年と相成り申し候。鶯なかん頃には必ず病癒えて同じ窓にと仰せ給はりしかば、今日か明日かと日々樂しみ待ち侍りしを、何の音信だになく、誠に心を苦め居り候。君よ、去年まで最も愛で給ひし庭の梅は、追々ほころび初めて、主待ち顏に鶯の妙なる初音をさへ添へ居り候。そは梅のみに候や、……、ふと筆を置き候へば、何處よりかゆかしき香り致し候まゝ、窓を開き候へば、朧月の光を浴びつゝ、軒の梅の物言ひたげに咲きほころび居候まゝ、そと花もぎとりて、色香を其儘封入致し候。兼て共にちかひしごと、此花の如く淸らかにならましと、一意專心こゝろの花を養ひ居り候。尙々申上たく候なれど、唯々一日も早く癒え給ひて、御歸院遊ばされ、共に學にいそしみて、此花を眺めんことを鶴首待ち侍り候。

○故郷より姉へ

備中國　葛原しげ子

今日は日曜、天氣誠にのどけく、姉樣御在宅ならばと一人御懷しく、せめてはと文參らせ候。東京も溫く相成候由、當方には築山の紅梅ちりて庭の隅なる白梅の實稍太り、ちご櫻も蕾多くて、母上樣も御喜びに候。なみと申す今度の下女は、私が每日枝の下に行きては、蕾の太るを待遠かるをみて、笑ひ申し候。此下女は、母上樣が「不如歸」の話おきかせなされ處候、病むのは嫌ひ故、名を改めくれと申しいて、終にはなと呼ぶ事になり、悅び居り候。氣のよくつく者にて、母上樣御贔負に候。金魚は昨年冬何してか一尾死し候を、裏庭の燈籠の下に埋め、小き南天を藪よりとり來りて、うゑ置き候。此前の日曜の午後、はなと二人にて、泉水に水たゝへ候に、鯉も金魚も嬉々として泳ぎ廻る樣、いかにも嬉しげに候。カナリヤの餌の世話は、每朝の日課と致し居り候。只今カナリヤは日當よき小椽の軒に、高音はりをり候。私が琴のお復習する折は、本氣に囀りてやめず、競爭の積りにや。雌鳥は折々ちゝとなきて、卵を咏み居候。はなの申すに、カナリヤはよく兒を育て候とか。若し可愛きカナリヤが生れば、休暇に御歸省の時、カナリヤの分家してやりたくてたまらず候。今日はこれだけにて、次の日曜に又。東の離舍にて。

○花漬けを贈られしを謝す

彭湖島　山門わかば

前略、さて〳〵、先日は珍らしき吉野の花漬け御贈りくだされ、まことに〳〵忝なく御禮申し上げ參らせ候。御存じの如く、當澎湖島は全くの禿山にて、木一本もこれなく、花として見るべきものは、僅蘆の一いろあるのみに候。和風暖く春を告げ候も、霞匂ふ若葉の間に、白雲とまがふ櫻花の繚亂たる美景は、夢にも見ること出來申さず候。されど、當島にても、月は不斷に眺め居候ものゝ、花とては前以て申候通り、久敷あくがれ居り候處へ、美くしき御水莖迄添へられ珍らかなる花漬け御惠みなされ、早速一輪を白湯に落し候處、くる〳〵と廻りて、時ならぬ座に花を咲かし候ひしは、無上の趣に有之、一座擧つて賞味致候。妾は夢の心地せられて、先年吉野へ遊びし事共思ひ出され候。其晩はそも〳〵君と手を携へて櫻花爛熳たる花下を逍遙するの夢を結び候。妾のちび筆にては、とても御芳志の萬分一をも謝するの辭これなく候。先はとりあへず御禮迄、あら〳〵かしこ。





塩井雨江先生選

地

○ひとりごと

埼玉縣北埼玉郡太田村　田島伊代子

あゝ何といふ好い日和だらう、風はなし暖かで浪は靜に音をたてゝ、萬代不易の作用をくりかへしてゐる。晴れ晴れしてゐるから、灘が一目に見える。人がよく云ふ、丁度藍をとき流したやうだ。空も同じやうで界がわからない。此美麗な水の中に、幾多の生靈が葬られたかと思ふと、美麗だけに凄いやうにも思ふ。向うの方に釣舟が澤山見える、何を釣るかしら。あゝ暖かい、羽織でもぬがうか。あれ、小坪の方から、小舟をこぎ出した。早い事、早い事、空に海に平和な氣のみちてゐる中をとぶ鳥は何だらう。自分にもあの鳥のやうに翼があつたら、どんなに嬉しからう

先第一に故郷へ行つて、兩親に逢れるけれど、おや鳥を見てゐる間に、舟が増たこと、池に盥が浮ているやうだ。盥で思ひ出したが、まだ學校へ行く頃、今日のやうにうらゝかな日だつた。親しい友と二人でぼちやり。ぼちやり浪はよせてはかへしてゐる幾千年前からだか知れないが、きれいに洗はれてゐる清い砂に足跡をつけながら、各自に理想やら希望やら語りあつてゐるうち、ふと友は沖の方を見て、盥が浮いてゐるやうだと云つた、あの頃は樂しかつた、けれど、それも其夜のゆめよりもはかなく過てしまつたが、佛法で云ふ會者定離の掟通り、或事情の爲やむなく、袖を分つたが、月花に訪れを忘れまいと約束して、其當時は實行したが、さるもの日々にうとしで、今は住所さへ知れない。何所で此長閑な日を送てゐるだらう。自分が白砂の上に腰をおろして、果しない海面を眺めながら昔を偲んでゐるとはよも知るまい、神でない以上は知るはづがない。漁師だらうが、いゝ聲で、何を唄ふのだらう。美しい自然の景色に、目が樂しんでゐる中に、耳までが樂しい思ひをするとは、何といふ嬉しい事だらう。何か音がすると思たら、風が出て松をならすのだよ。夜、人が寢しづまつた時、松風の音をきくと、

悲しいやうな心細いやうな、口では云ひあらはせない感じが起る、それが大すきだからおかしい、けれど今日は春になりたてゞ冷い。折角一人で樂しんでゐるとこんなさはりが出來てくる、とかく世の中はかうしたものだらう。どれ風でもひかぬうちに、歸りませう。

（雨評）接續詞を用ひずして、筆の一段〳〵よく接續せしめたるなどすべて、文の進行譋に自然にして妙を得、一篇よく整ひたり。地とす。

人

○かるた會

沖縄縣那覇　靜　花

花の色は。はい〳〵ありましたよ。瀬をはやみ。われてもてせう。早いね。瀧の音はたえて久しくなりぬれど。あら名こそですよ。しまつた、なほあまりあるか、それお手つけ二枚だ。誰れをかも。僕のとこだよ。浪花かたみじかきあしの。おい〳〵。天の原。三笠だいと八疊は合戰のまさかりなのである。

いがぐり、われがみ、おさげ、花月、ハイカラーの首のまはりかねるもあれば、五つ紋いかめしい方もあるオリーブの半襟につかはしきもあれば、改良服に、たすきかけんばかりのもある。みんなが一生けんめいでわきめもふらず。互ひに縱横隙間なき作戰計畫せむるもの、ふせぐもの、守るもの、大わらはになつての大合戰。

あらずるいわ、人のをとつちやつて。何だい、とられたんかい、しつかりしないか。だつて。だつてどころかいと、一しきりは舌戰。

古の。はい。風そよぐならの、みそぎぞ、うかりけるはい、こゝです。花さそふあらしの庭の。どつこいこつちだ。唯有明はこつちよとさわぐ聲、益々亂軍だ。

（雨評）筆また縱横に飛ぶものありて、情景おもしろく躍動したり。才筆愛すべし。人とす。

秀逸

○冬の花

紀伊　森　繁　尾

水仙。霜いと白う置きわたせるあした、烟立ちのぼる遣水のほとりに、三つ四つ二つおぼろに咲き出でたることなうゆかし。わきて小瓶などに挿みて、文机近う

文よむかたへに置きぬれば、花のけはひのいとけだかく、香さへいといみじうて、氣も心もすが〳〵しう覺ゆるぞ嬉しき。誠にこれや冬の日の文讀む窓の又なき友どちとやいふべき。なべてこの花は、艶なる色もなく、ゆかしき姿もなけれど、花の風情の、何となう凛として、けだかきは、げにその名に背かざりけり。うべも古へ人も、花中の君子、水中の仙とぞ口ずさみぬる。

冬椿。何の趣もなけれど、さすがに捨てがたし。たゞ白きがあまりに見榮なく、赤きは色のいたうこちたきぞいやしき。冬の日のつれ〳〵なるまゝに、ひとり机に向ひて、文ども讀みゐける折りしも、庭の面近う、さと吹きわたる木枯に、ぼつ〳〵と音のするに、そと窓うち開けば、砌に立てる冬椿の大木より、紅の玉と見まがふ花の、今すぎ去りし凩に吹き落されたるなりあまりのあたらしきに、一つ一つ糸に通して、花輪に作りぬるを、をさなき妹の見て、束髮の花月卷にも、せまほしといひ出でたる、こよなうをかしかりしよ。

寒梅。いづれはめれど、めでたきは、梅の花にこそ。花てふ花は多かあれど、わきて色香のゆかしきは、梅の花にこそ。あはれ、この花の雪にもなびかず、霜にも染まず、節に高くふりのけだかきは、春秋の花もいかで及ぶべきかは。實にこの花こそ、操高く節貴きわが大和をみなのこよなき鑑といふべけれ。凩の夜一夜吹き荒び、雪さへ降出でぬる曉方近う、鶯の初音の夢心地に聞えぬるに、まだ春さへ立たぬにあれこそ、梢の雪を花とや見らむと、やり戸おしひらけば、さと吹き來る朝風に、花の香のあやしうかをりて、うれしや一ひら二ひら雪ながらに綻びそめ、こゝの枝かしこの枝を鶯のをかしう木傳ひつゝ、まだしぶりがちなるしらべ、しづ心なくさへづるも、いはん方なくゆかしうてなむ。

（評）筆熟し、筆整ひたり。修辭のほどゆかしく認められたり。されど、さして取りたつべき新しきふしなきを惜しむ。

○散る花

澎湖島　山門若葉

淡烟、落日の光りを帶びて、碧霧の如く、夕雲、水に移りて、紅ゐの潮を漲らす、こゝ澎湖の片邊り、危礁亂立せる夕暮れの濱邊、北風の波を誘ふが儘に、白き絹糸の縺れの如く、寄りては碎くる浪の花。

われは、過ぎつる日亡せにし、友の奧都城訪はんと、

北門外なる海の邊りを、獨り心ほそく辿りしなり。來て見れば、墓とは名のみ、小高く盛りし、土饅頭の上に、一片の卒都婆を立てしのみ。由縁の人の手向けしにや、半ば枯れし、臺灣松の一枝、仆れかゝりしも、哀れげなり。

『今にもバルチック艦隊が來ましたら何れ内地へ引越すことになりませうが、私は舟に弱いから、四日の舟路が、氣遣ひてなりませぬ。』とは先週の夜會の歸り、清子の君の言葉なりし。



かく語らひし花の如き、艶なる乙女も、一旦無常の風に誘はれては、いづれ遁れぬ、哀れ一墓の主かや。喃れ、良妻賢母となりて、墮落せる婦女子の鑑とならん等と、君が年頃口にせられし、大なる抱負も、信仰も、今となりては、只一炊の夢ぞかし。かゝる美しき我友の、是所が最後の、棲家かと思へば、淚に、もろき我兩の袂は、時ならぬ露に、乾くを知らぬなり。

抑々、春の老い易き、花の色の褪め易きは、世の常とは云ひながら、餘り果敢なき命ならずや。菫に集ふ胡蝶すら、たつ霞に消え行く姿を見ては、惜も名殘の惜しまるゝものを、我領土とは云へ手向くる草花さへなき、異鄕の空に、可惜盛りの花を、散らししとは、歎くとも猶ほ餘りあり。

さりとても、瞑せられよ、君。御骸はよしや冷土の下に埋るとも、魂は定かに金華咲きにほふ、樂土の域に遊び召されむ。たゞ此上は、夜毎不斷の濱風に御魂を

澄ませられて、朝夕無限の浪の音を、友とせられよ。われは、於伽汲み、香手向けて、南無阿彌陀佛と墓前に跪けば、香烟横に卒塔婆を繞りて、風の爲めか搖ぐ供花の一枝。

日は全く西山に沈んで、漁村の孤燈微かに、野犬の遠吠愈々物凄し。

（評）筆に花はあれど、詞熱血のこもらざる心地するををしむ。

○星

東京麹町 重田春子

美しい月の光りが、こぬか雨のやうに、細くほそく注いで、深くかゝつたもやは、ひとつ、ひとつ、銀の砂の如くに、かがやきつゝ、夢のやうに、靜かに、下界に立ち迷ふ。あまりにうるはしい夜の樣に、私は、思はずもまたゝきをやめて、暫し恍惚として、下界の有樣を見つめて居た。汚れも、罪も、悉くうす暗の、『夜』といふ幕に包れて、人は皆、名譽利益に汲々たる心をやすめて、華胥の國の者となつて居る、私は、月の前に、恥かしい程の弱い光りではあるが、十分、人の子に、慰籍をあたへるべき心を以て、自らの境遇に甘んじて、かゞやいて居るのである、花の上に、やさしい白露が、結ばれるとき、私は、それに宿つて、露の美をそへやうとつとめ、夕暮、松の梢に、かすかなほゝゑみをもらして、人の心に、『美』なる觀念を養はうと、心掛け、碎ける波にうつッて、さゝやかな黄金を散らして、浪の光を、まさしめんとしてゐるので、云はゞ私は世界のもの、人、花、水、岩、凡てを、美化せしめやうと、導くものである。

凡てを、美化せしめんその外に、私は、詩人の才あふるゝ胸に、詩の材料を、戀に泣くはかなき人の子に、慰籍を、憂にやつるゝもだえの子に、啓示の力を、あたへて、さて、快樂多い、罪なき子供のために、希望の光を、みとめしめんとする、天職を持つて居るのである。それで、今、私は思ひかへして、月の光の強いのもかへりみず、もやふかい、美しの下界の樣にも心をやらず、いつもの通り、天の一方、藍色しき空に、烈しくまたゝいて居るのである。（完）

（評）やさしき星の心、うれしきまゝ申し候。

○雨奇錄

高知市 吉良夕暮子

◎春雨微々として降り出づれば、堤上の櫻花は多く散

り行きて、花下十里人影なく、いと寂寥たり。時しも通り掛る、芳紀將に二九のたをやめ、雪のかほばせ見えつ隱れつ、纎手にかざす蛇目傘の上に、花片の二ひら三ひら。…………。

◎赫々たる輝陽中天に高うさし掛れば、路上の土砂、悉毒氣を吐くの時に、一天俄に掻き曇りて、雷霆霹靂大雨篠を衝くが如くに降り頻れば、人走り、人叫びて路上の人々は雨宿りをもとむ。やがて、雨晴れ行けば一道の虹彩東天に高く印して、下界の塵埃は、一時に洗ひ去られし心地ぞする。

◎浮世の塵を他に、一と日、親しき學びの友と只二人雲の上なる高根の上に宿りし夜半、忽、脚下に近く、電閃き、雷鳴りて、折り折り山を捲く朔風と共に、雨片の吾等を襲へば、下界は雨とおぼゆれど、深空は清く晴れ渡りて、頭上に近く兎月は輝き、許多の星はあやしき光りを放ちて、天の秘密を語くに似たり、此の月や星を、下界の人は知らじ。たゞ月や星は、友と吾を照し、友と吾と只二人、月や星を看る。やがて、雷止み、雨晴れ、風は死せども、雲はなほ下界を蓋へり哀れや、此の浮雲の下には、憂あり、なやみあり、くるしみあり、けがれあり、戀あり、僞りありて、あらゆる罪惡はひそめど、雲の上には、希望あり、光明あり、樂あり、月あり、星あり、又、友と吾れとあるなり。不敢高聲語、恐驚天上人と李白の歌ひしも、かゝるをりにやあらんか？。

◎夜もいたく更け行きて、孤燈は豆の如く、四隣寂寞として、萬籟皆眠りに入りし時、破窓の下に、既往を追想すれば、十七の春秋は唯一條の夢の如く、文の海に漂ひて、彼岸の燈明臺、影なほ幽なり。學びの山を攀ぢて、高根の松、路なほ遠し。嗚呼、思ひを千々に廻ぐらせば、嘆一嘆、感又感、一尺の胸襟に浮び出づる萬緒の情、亂麻の如く、そゞろに涙をぞもよをす。時に微々として降り出でし細雨は、いと烈しくなりぬ窓の戸おせば、庭の芭蕉葉は、雨に破れて、哀れにぞ見ゆる。（終）

（評）今一層錬磨せられよ、金玉の文必ず後に待ち得べきなり。

◎何ののろひか

岩代　服部けさ子

十二月下旬のある寒い日の夕方、吹雪の中を、十一才を頭に三人の男の子が、泣いて門に立つた。誰もこの樣を見て、あはれと想はないものはなかつたのである

其顏色、一人として生きてゐるやうでない。あ丶可哀さうに。

生れからの乞食ではないさうだ。近村の水呑百姓の子で、細々世を過ぐして居た者とか、其母親は、之三人を孤兒として、秋の末に死んだとか。世には隨分ない事ではあるまいが、其父親は三人を養ひ兼ねて、どこかに身を隱してしまつたさうな。ア丶、此親の心には一點の涙も無いのであろうか。そして、どこに何をしてる事やら、……六つばかりで一番年下なのが、一番人の同情をひくと見えて、之が貰つたのは、よく中よく別けてゐたやうだ。まだ無邪氣な處が殘つて丶、武骨な在鄕言葉で「まんまくんちやー」、と人をぢするやうだつた。て、要事の手を留めてさへ、人は恵を垂れてゐた。其をどうだろう、一ト月後の今は、人おくしもせずに、人の目色をうかゞひながら、口調も大分上手になつて、もうすつかり乞食となつてしまつた!!或る時は女の乞食に手を引かれてる事もある、これは大方お堂の下に、三人してかたまつてゐた處でも見つけて、中間にしたのでがなあろう。是程小供の心は傳染し安いもので、あろうか。もしもよく養育したならばと殘念でならぬ。然も、男の子三人、見れば齒の色さへ炭色してるけれども、あの目付きは馬鹿ではないらしい。嗚呼、あれも帝國に籍をおく身であろう。この儘に野ばなしとすれば、其結果は知れきつてる。神樣はすくつて下さらないのであろうが。ア丶、彼の父親のにくき事よ。さても、三孤兒の末が恐しい。霜て又もあのふるへてる肩に……。

(評) 多少の涙は見えたり

○玉と瓦とにつきて思をのぶ

磐城國　むらさき女

玉には光あり、瓦には光なし。光ある玉は人にめて貴ばれ、光なき瓦は人にかへりみられず。されど、瓦は瓦として、またふさはしき用あるべきを、光なしとてむげにいやしむべきにあらずかし。人の、才あり德高くして、世に尊ばる丶ものは、これ人の中の玉をやいはまし。また、させる名も聞えず、才も少かれど、おのが業にいそしむ方の人は、瓦の光なけれども、其の用あるにたぐひつべし。おのれは、彼のうはべのみを玉にして、其中は瓦にも劣るえせものをにくむ。瓦なりとて、いやしむべきかは。

(評) 短けれど、文は整ひたり。說くところもきこえたり。

○花無常

周防 田村遊喜枝

一月十五日、季は是れ春と云へど、未だ冬の名殘のつきず、北の風一しほ身にしみ入りて、郊外荒凉に、唯小さき童等の、紙鳶あげに、嵐のあまり寒さをかこち歸るのみ。あはれ。世の友垣よ人はげに友ありてこそ、すべての樂しみも共に分たれ憂きも共に慰められ、遊ぶも勉むるも、こよなう力あるものなれさるを游浮の人生、元より頼み難く、何日死の冷やかなる御手に誘はれて、白玉樓上の人と化すべきか、はかりがたき世なれども、未だから若き我が友は、行く先きに樂しき理想を畫きつゝ、朝な夕な兄弟も及ぶまじき、親しくしたるわが友は、ゆくりなくも、運命の神に見捨てられ、遂に歸り來ませぬぞ、うたてき。



友を立花房子の君となん呼べり。妾とは同年同級世の人の所謂友にはあらで、眞に心よりの友なりき。霜寒き朝、風の氣味とて學校を休み給ひしが妾は唯かりそめのことならんと、心にも止めざりしが、病はいや増しに募りければ、一先つ郷に歸りて療養せんとて、みうちの人達に助けられ、極月の中旬、遂に舍をぞ歸り玉へる。

燒野の雉子、夜の鶴、いかでか親として子を思はざるべき、子として親を思はざるべき。此の報を聞き玉ひし故鄉の母君、如何計り驚き悲しみ玉ふらん、と

我が身の上のことの如くに忍ばれて、其の夜よりは、一人淋しく彼れ此れと思ひ煩ひ、一日も早く癒えて、來む新玉には共に打ちつどひて、かるたに夜をば更かさんと祈らむ日とてはあらざりしが、隙行く駒の足早く、遂に年は暮れつ。たのしき新春となりぬ。憂さなき人々は、互に打ちたはむれど、妾は學びやの式につらなりて歸るさも、何んとなう物たらぬ心地せられて、母上や妹、弟等と取るかるたのひまも、芳子の君のことをぞ話しける。賀狀も出さむと一應は思へど、夜となく晝となく心痛めて、みとり玉ふべければ、賀狀など出しては、常ならぬ彼の君の心をぞ痛ましめてはと控へたりしが、二日と云ふ朝、はしなくも一葉の端書。うるはしき文字にて書かれたれば、訝かしくも打見れば、これなん立花の君にぞありける。妾は夢かと計り驚き且怪しみ、再三再四手に取りて見しが、まがふかたなき君が筆なり。あゝ嬉しや、かく計り手づから筆取り給ふ程なれば、病の癒ゆるも既に近かしと、先きんぜられて失禮のこと、さては快方の喜びなど、細々と書きしるして送りぬ。

それよりは沈みし心も、いと浮き立ちて、快氣の日をぞ明日や何日と待ちわぶる程に、一月の十三日（病み着き玉ひし日）となりぬ。其が夕方、一葉の玉章には君が筆にはあらで、父君の手にて數行のふるへ書きに記されたり…………あゝそは如何なることとなりしか？…………萬事休す。

（評）情はきこえたれど、筆はなほ整はぬふし多し。

○紅梅

熊本市　大島菊子

旅順陷落‼

新年の剪頭に於て、我帝國五千萬の生靈が耳朶に觸れた快絕の聲である。顧れば、早や十年の昔、我同胞が奈何に熱血を流し、刄に血を染めたてあらうか。此鬱憤は、新年の初舞臺に於て、晴れたのである。日の御旗飜る、我日の本のみ光は、希望に將た光榮に乾坤を彩つて、其美しい色彩の間を、歡喜の聲が、何處ともなく聞えて、雲行き靜に日麗かに、鳥語樂しく庭前の紅梅綻び初めて、身は宛然神と融化するのではあるまいかと、恍惚として靈界に………。

すると、色々な感情が、胸裏を往徠して、不圖兄の姿が眼に浮んで、思はず戰慄したのである。

丁度去年の今頃であつた、紅梅の花咲く庭園に、十六

夜の月影を浴び、自然が齎らす美妙なる光景に、感じてゐたが、兄は突然。

「菊さん！僕は再び菊さんと這麽にして樂しくお話をする事は出來ないだらうから、今夜は思ふ存分、お話しやうぢやないか。」

と云つた時は、左程に深い考へもなかつたが、今思へば、兄の言つた言の葉は、現實となつて、旅順港口閉塞の重任に當つて、肉を砲火に飾り、骨を千尋の海底に沈めて、冥府の人となつた、あゝ、兄は既に死を期してゐたのであらう。これを思へば、歡喜の呼聲も、自分にとつては、何だか、幽冥の境に入りよばるる樣に響いて、骨まで寒からしむる感を描くのであるが、然し兄の靈は必ず、草葉の蔭に滿足の笑みを漏らしてゐるに相違ない。あゝ最う這麽女々しい事は止めて、神ざりし靈に、此思ひ出の紅梅の花一枝手折りて手向けやう。

（評）後半の錐はよけれど、前半の錐は失敗なり。これ、氣取りたるが故なり。文章は決して氣取るべからず。

○去年の思ひ出

周防　堀　龍子

夜は靜かなり、幾多の秘密をこめたるが如き、何となく怪しの氣の、室内に蟠るにも似て、いと淋しう、月唯白し。折しもあれ、鈴聲高く、夜の大氣をふるはしぬ。すはこそと門に飛び出づる間もあらせず、息急きつゝ號外と、一聲高く叫びし人の姿や、いづこ。鈴の音の餘韻長く殘して。早や遠く彼方に……隣の人、前の家、俄に云ひ罵る聲騷がし。扨はと心ときめきて、見る目遲しと、朧げながら月の光にすかし見れば、あな……あはれ……文字の限り大きくして「遼陽占領陸軍萬歲」とぞ記されたる。げに其時よ、此時よ、嬉しさ餘り、よろこび極まりて、とみには云ふ言の葉も知らざりしよ。……奥のお居間のどよめき、次で妹の萬歲の聲、騷々しさ中々筆に盡し難し。神酒さゝげ等して、扨改め見れば、噫哀れ、我忠勇なる武夫の夥くも戰死しましゝ事よ、傷きましゝ事よ。噫、死傷せし人如何なる方にやおはしけむ。何地の人にやおはしけむ哀れ悼し、哀れ悲し。光は同じき月よ／＼、汝ぞ見しならむ、汝ぞ照らしゝならむ。火砲の響叫喚の聲も止み果てゝ、砲煙低う懸り、巖さけ家燒けて、荒し跡凄じき夜の廣野の枯草に草より靑き色して倒れたる人、唐紅の血潮に染められて吟る人を、汝はそも如何なる

光もて照らしけむ。噫、其時の光景よ、いかに物凄かりしか、思ひやるだにも、身の毛のよだつ物を。訴ふれども、月は心無きか、涙なきか、只清う照らすのみ。哀れ祝はむか、幾多の人の死したるをいかにせむ、哀れ悼まむか、難攻不落と誇り居し敵の要塞を占領せし皇國の譽れ武夫の功をいかにせむ。噫々。思ひ益々亂れ、胸愈々狂ほしうなりぬ。恰ら彼の氷の如く靈の如き明月に化せられて、血は凍りけむと覺ゆる迄に。噫、此月！露繁き野營の枕に、數多の武夫は、そもいかに眺めますらむ「霜軍營滿淸秋氣」とや吟じますらむ、「草むす屍」とや歌ひますらむ、同じ野營の露を口に注ぎ、同じ月下に歌ひては、夜毎の別れのしるしとやし給ふらむに！。哀れ死の神の其冷き手もて、明日は誰が命をや誘ひ行くらん。弔ひし人の弔はれ、見舞ひし人の見舞はるゝ、げにはかなくも凄じき修羅のちまた譬ふるに物なく述ぶるに言葉なし。病める母を殘し、若き妻を捨て、饑に泣く幼子をもふり捨てゝ、皇國の爲に盡す武夫ぞ、哀れなる。天地も爲に哭し、鬼神も爲に泣く。是を見る人、是を聞く人、誰か涙を注がざるものやはある。哀れ、今日のほこるべき戰捷祝はむか、悼まんか、噫。

「忘れむとても忘れ得ぬ、遼陽占領を思ひ出てゝ日記の一端を今こゝに」

（評）言ふところはきこえたれども言ひまはしなほ熟せぬふし多し。

○父母の御恩

神奈川縣　小野雪枝子

行住坐臥、心を罩め思を凝らして、一とかたならぬ苦勞をもいとひ給はず、御身の不自由をも顧み給はず、今に至るまで生したて給ひ、笑ふやうになれば物云はせまほしく、たてば歩行せまほしく、一歩にてもよろめきあるけば、はやう靴を穿せて遊ばせん、など人にも語りてよろこび給ひ、腹だゝしき折も、己が笑顔を見てはうち解け給ひ、悲しき時も、おのが片言に思ひをやりたまひ、或は脊負ひつゝ米を炊き給ひし朝もあるべく、或は抱きつゝ衣を縫ひ給ひし夕もあるべし。やゝ物の心を知り初むる頃となりては、或は團扇手ならしつゝ、桃太郎の昔話に日を暮らし、或は火鉢圍みつゝかち〳〵山の物語に夜をふかして、何呉と語り諭され、春の花秋の紅葉、其をり〳〵につけて野山に伴ひなどしたまひ、やう〳〵學びやにかよひそめ、假名文字習ふ頃には、今日は如何ばかり覺えにしぞ、讀みて聞かせよ、書きて見せよ、とのたまひ、いつも〳〵ほめ給ひき。進て女學校に入學せんとしけるに、里人にふさはしからずとあざけられ、螢雪の友にも笑まれもしたるを、人は何とも云はゞ云へさる事をば齒牙にもかけずいさめよと仰せられ、あと追ひしたふ愛猫を家に殘して出立ちし時、門まで送り出てられて、身を大切にせよ、怠る事もなく勉めよ、又時々は文をかよはせよ、など仰せられしも、父母の御情のありがたさよ。

花の色の艶なるにも、眼を注ぎ給はず、鳥の聲の妙なるにも、耳を傾けたまはず、あらがねの土も溶けつべきに、大方の世の人はみ山にわけ登りて、暑を避くらむ夏の眞盛にも、朔風肌をさかんばかりなるに、暖き窓のもとに籠りて、寒さをよぐらむ冬の中にも、傳へ來し耕耘の業をつとめ給ひて、己が學費を贈り來さるゝ、父母君の御恩よ、あはれ、いつかいかにして。

○蜆つり

下總　中村　由

こゝ花つゆの集まりし谷川、ほど行けばやゝひろくして、小舟をうかぶべく、小春の日に樂しむによし。若草もえ出てゝ、風なく、水清きある日、われは友打ちつれて、このいさゝ川に舟をうかべぬ、かくて波のまに〳〵流れゆく……

あまりの心地よげに、われらは柳の下に舟をとゞめて、暫しをちこちを眺めつる中、水の底を見てけるに、わかき蜆、あちこちにひろく口を開きて空に向へり。われらは如何にしてかそをとらんものをと、裾まくりて入らんとせしに、入るにはやゝふかし。さて、如何はせんと思ひつる中、柳の小枝枯れてゐければ、そを手折りて、蜆が口に入れてつり上げつ、かくて百ばかり舟につみぬ。かくて、友のいふやう、すべて生きつるものに、害を與ふれば、いつか人の妻となりたる時、子生るゝことなしと。されば われらは心づき、とりにし蜆をのこらず水にはなちやりぬ。げに、蜆が、腹を出して日あたりよきところに、平和の夢を見つるときその中に枝などさし入るゝは、あまりにあさましきわざなり。友の云へる如く、子の生るゝことなからんには、この憂ひ多き時、いかてよからんやは。（完）



○聞くまゝ

岡山縣　松本もと

昔々、武士數人打ちよりて、酒宴を開きぬ。盃の廻るにつれて、飲めよ謡への大騒ぎとなり、濁聲に謡曲をうなるもあり、立ちて舞ふもあり。はては、孤飛び、銚子走り、坐も漸く崩れ立つぬ。一人は醉眼キッと据ゑて、『方々、今日は吾々の命の洗濯日、無禮講でムる。なんと面々膝を崩して、御自由になされては如何。先づ袴をとる事に致さう、さア拙者からご免を蒙る』と、袴をとれば、『それは至極同意でムる』と、皆々袴をとりたるに、中の一人は、袴をとらず。『拙者はこれで充分でムる、さア皆樣汲みませう』と辭退するのみ。皆々は承知せず、『無禮講でムる遠慮なしにご自由になされ。』『どうあつてもとらなければ、拙者が承知致さぬ』と、てんでに酒臭き息吹きかけて騒げど、尙も辭退のみす。益々躍起となりて、『どうあつても脱がせる』と、はては數人にて、無理無體に袴をとらせけるに、こはそも如何に、着物と思ひしは、羽織を着たるにて、足は半現れたり。一坐どつと笑ひて、『貴殿は餘程成人なされた』とどよめきぬとぞ。かゝる貧乏武士もありしにや。

○梅見の記

神戸市　中村きく

夜一夜、ふきすさびし風もなぎぬ。降りしきりし雨もやみぬ。いつしかと待ち渡りしまがきの梅も、やう／＼南の枝に四つ五つほころび初めぬいざ思ふどち尋れし去年の梅園を音信れて、日頃のうさを晴さばやと、衣かへす。折しも、郵便の一聲、嬉しく開き見れば、

今日見ずば、甲斐やなからん、我園の
梅の林は今さかりなり　　　うめ子

とあり。うれしさかぎりなく、直ちにいでたつ。

空いとうらゝかに、路邊の若草は、めも春風にもえ出て、あな／＼として愛らしく、人の軒の梅の花さへ、時しり顔に匂ひいでたる、餘りのなつかしさに、打ち過ぎかねつ。梅園の景色さこそと思ひやられてなん。やがていたれば、梅子の君のいちはやく迎へ給ひて、共に庭の面に出づ數人の客人ありて賑はゝし。

かくて見わたせば、實に思ひしにもしるく、幾十本の梅の花、雪か雲かと計り咲きいでゝ、えならぬ香のそこはかとなくみち／＼つゝ霞にきほひ、御木傳ふ鶯の聲の長閑けきなどいとめでたし。

折しも、いづこよりか、鐘の音二つ三つ。さと吹きくる風に、梅の花三ひら四ひら。散りて袖にとまりぬ。うれしともうれし。

さても、古へより花としいへばいづれもめでたからぬはなきに、萬の花の魁をしてよく雪霜にたへ匂ひいでたる雄々しさよ。松の操もをさ／＼をとるべしやは。こはそも北野の大神の殊にめでたまひしと、さればこそ四君子の一とめでたゝふるも、理りなれや。など語りあひつゝ、時のすぐるも覺えず。ふと見れば、日はいつしかくれはてぬ。なほ木の間の月のゆかしかれども、さまてとてなん辭しかへりける。

○秋

德島　住友登喜子

一、朝

明け初めし東雲の空、薄白より淡紅にと、刹那々々にうつり行く麗しさよ。

やがて、眞紅に染まりきらひやかなる旭、いつも出づる山の端に、ゆら／＼とさし登れば、玉敷の都大路も、天さかる鄙が伏屋も、あたゝかき日の神の恩澤に浴す。

彼方の山邊、白き霜に染めしちしほの紅葉、横さまに棚引ける霧の間より、ほの／＼と匂へる、實に美しの極みなり。

十返りの松緑ふかく、紅と照り映えて枝交へたるほとり、そを渡りて囀づる鵯の聲も勇ましげなる。

都大路こき紫の袴まとへる美しの乙女、打むれて學び屋に急ぐなるかたへの門邊、色香ゆかしく咲きみとる黄菊紅菊、たゞ其人の袖の香とぞ思はる。

汀に秋草咲ける小流沿ひの畔道豐りたる稲の穂と脊を競ひつゝ、籠を手に菌狩に急ぐなる可愛の男の子、君が代の戰捷歌を節面白くうたひつゝ。げに美しき秋の朝!!!　げに面白き秋の朝!!!

君が代の華やかなるさまも見ゆるものかな。

二、夕

遠山寺に撞き出す入相の鐘、余韻を長くひきて、遙か尾花の野末へとうすれ行くほとり、鴉の影二つ三つ常盤木の枝に消え、吹き來る夕風此方の木枝を渡りては、一葉二葉あやしげにうつらになど、かゝる淋しき自然のおもかげに對しては、何ともしれず悲哀の情の胸に湧きいづるなどけに哀れなる秋の夕!!!

灰白き月の光をあびつゝ、妻戀ふ鹿の聲すなる山邊にさ迷ひ入れば、人の世の果敢なきを知れとや、色あやしげにさける小萩のこずゑに、おぼつかなげに宿れる白露、無常の風一たび音づれては、つらぬきとめぬ玉數しれず散りしほとり、千草にすだく虫の音、一しきり聞くなどたゞあはれなる。

夢なりがたき客舍の夜半、窓の外なる芭蕉の葉の友ずれに、結びかれてしはかなき夢破られて耳そばだつれば、軒端に落つる雨の音わびしき折、空叫びつゝ我が故郷の方へ急ぐ孤雁の聲をきゝたるなど、そゞろ胸のくしくこそ亂るれ。

哀れ　哀れ　秋の夕!!!

三、華と哀

華やかなるは、秋の朝の自然のおもかげ。
あはれなるは、秋の夕の自然のおもかげ。

げに其朝は我が大和島根の如く、其夕は哀れ露國の樣ならずや。
日露戰ひ今や酣にして、滿洲の野、渤海の浪、皆兵ならざるなく、砲煙彈雨ならざるなし。

鳳凰、遼陽、旅順、大海の大戰、何時として旭旗飜々露を拂はざるなく萬世一系の君が稜威いよ〳〵高く、彼國の名將命を失するもの幾萬。戰士勇猛なりと雖も亦人の子なり、家鄉父母妻子親姻故舊知己あらざるなし。敵國數萬の同胞、今日の如く徒に異鄉に葬むる鬼たらしめば、家鄉肉親の人の心情如何ならむ、思ふに悲憤禁ぜざるべし。

これ眞に人生の一大慘事にして、實に哀々の極みなり、さるにその慘事を、自ら求めて涙なく、國一大禍を我から招きて顧みざる露帝の心こそ又なくあはれなれ。

平和を名とし侵略主義を國是とせしが、何とて邪は正に勝たんや、遂に國威を落す基とはなりぬ。

あゝ!!!　哀れなる露國の樣かな。（十月十四日記す）

○滿州の野言

山口縣　山下孤舟女史

肉は瘦せ、色は靑さめて、愁ひ顏なる滿州の野は、明けて目出度元旦の夕つ方、隣家なる蒙古朝鮮に向ひて云ひけらく、試に君の身の羨ましきよ、耳に銃砲の響、閧の聲をも聞き玉はず目にすさまじき血潮屍も見玉はず、新玉の年立かへる其樣を祝うて、屠蘇や雜煮の効も著く、顏は赤らみ腹はふくれて、月夜狸の腹皷、門松立てゝ、和氣靄々の其姿、嗚呼何んと美ましきよ。其上は語られど、我は四歲の昔より、文明の仇と呼ばれ、道義の敵と稱せられたる、名も忌々しき露西亞てふ惡漢の、我れの弱きに附け入りて、穢はしき靴や蹄に、顏は汚され體は蹂躙せられて其苦しみも忍び難き其上に、命に關はる要所をば、穿ちて壘や濠々なし或は築きて壘壘となし、健脚なりと天下に誇りし旅順口も、擅に横奪して、自在に姿を苦役せんとす。不肖の我より起りしとは云へ、他に對しても恥づべきに、何んと彼の面の厚きよ。思うて茲に到れば、眠も閉づる能はず、食も喉に下る能はず、明暮れもだえ悲しみしが、天人を殺さずとの言に違はず、茲に往にし年詔を東扶桑に國をなす、日の本てふ神國に下し給ひ、其敏腕を藉りて、彼の暴戾を責め給ふ。其天使は早來り座して、見よ、我胸を蔽ひし遼陽の妖雲も、曇りなき日の光に恥ぢて跡を止めず、脚の旅順の逆浪も、既に碎けて、漣の光を帶びてうらゝかに喉をやくせし奉天府の、奇しき霞も、豐榮登る旭の爲めに、漸々追はれて、北に去り、頭のハルビンを包みし怪雲も、近く日の本の光を浴びて將に自ら解け失せんとす。願はくば、片時も早く醜敵を、四外に驅逐せられ、我も諸君の今日のこと、恙なく立かへる新玉の年と共に、情ある日の本の光を、高く長く仰ぎ敬ひて、靜かなる昔によみがへり、目出度き世を送らんを祈るものなりと。

○春　風

筑後　横山うめ子

先つ日より打ち曇りし空、名殘りなう晴わたりて、何となう心地よくなりぬ。日は早や、西山に傾き落ちむとする夕つ方、昨日のうさをはらさんとて、柴の戶開き見れば嵐に吹き散らされたるさくら花は、時ならぬ雪の積れるから、見まがふばかりなるそが中に、山吹の黃金色なるが、所々に、打ち交れる樣、最ゆかし、我家の庭さへかゝればまして野山のけしきは如何ならんと思ひつゝ、いづこともなくそゞろあるきしけるにとある里川の流れに出でぬ。村里やはなれし故にか、何となく物さびしく、只だ遠近にかごとがましき蛙の聲のふしおもしろく聞ゆるのみ。うら〳〵と霞みこめたる川岸に、若葉もえ出る靑柳の水の面になりみだれ、風にもまるゝさまは、水のそらにも風は吹くらんとうたがはる。今を盛りと笑みそめたる野山のけしきも、いつしか打ちすぎて、おぼろなる空に、おぼはれたるもをかし。あまりのゆかしきけしきに、思はずみとれ佇みけるが、犬の遠吠えに驚かされ空うち見やれば、あな雲間の淋しきに、一しはましてうす暗き雲間よりいでてたる、おぼろなる月は、すでにあなたの山にかたぶきあたゝかき、春風も、肌に寒くぞ、覺えぬる。



地

廣津柳浪先生選

女詩人

信濃長野市狐池 安孫子美子

「あら、小枝さん久濶ぬへ……よくまあ如斯僻村へ、」

温暖い初春の日光を全身に浴びて前栽の若菜を培て居た優美しい婦人は其汚染た泥土の手を一寸側の水溜で滌つて立ちあがつたが如何にも驚愕いたと云ふやうに此方を見て莞爾と笑ひながら、

「眞平に久濶ねへ――然而何卒」

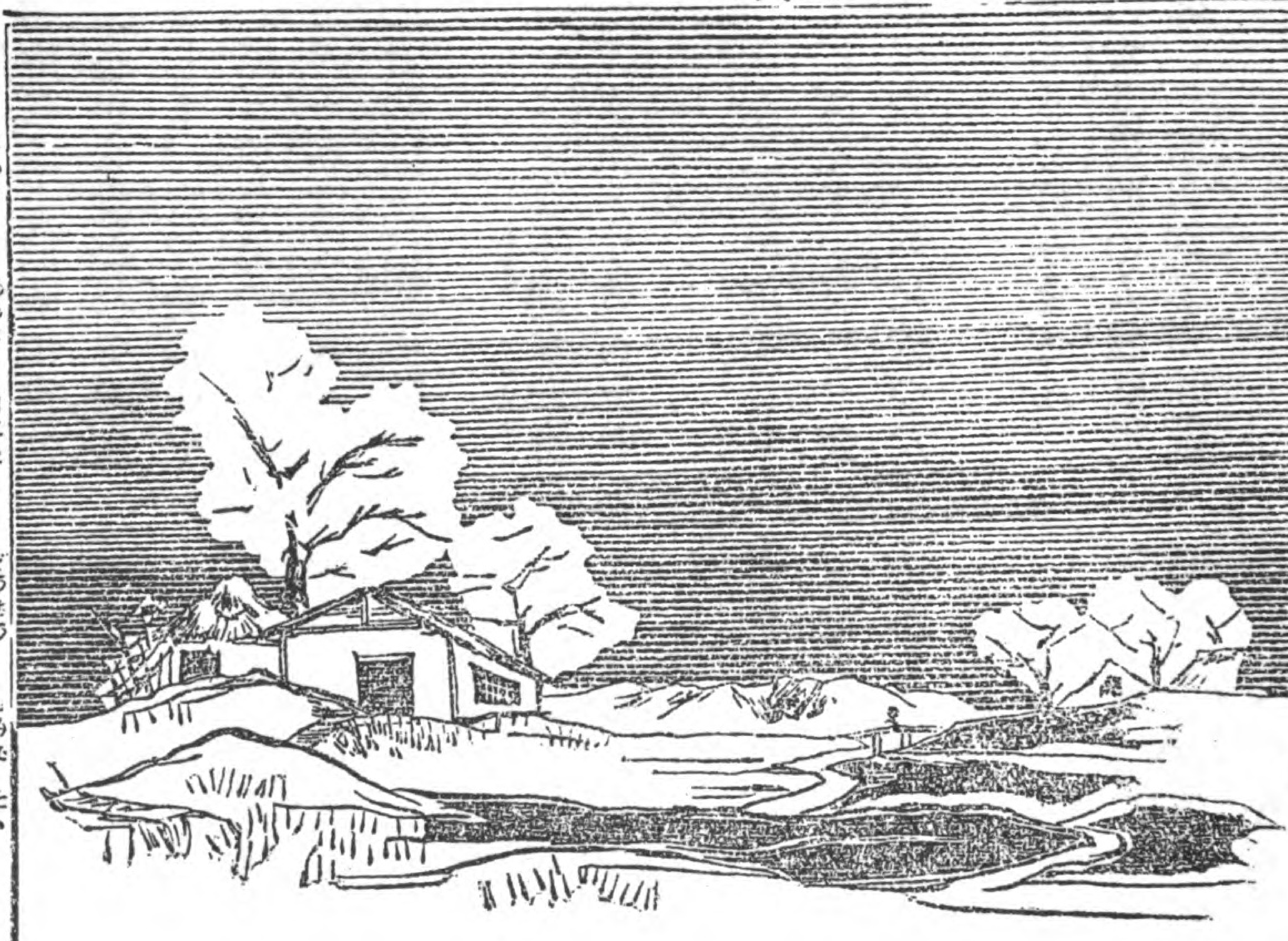
輕少許り摘みとつた青菜を籠のまゝ小脇に抱へて悠然に一間の方へ立ち去つた油氣の無い黒い毛髪を小さな伊太利卷にして身は一見質素な微塵縞の扮裝不麗な女の後影!!!吁々是が十年既往虚飾しい友禪姿に小さな胸を聳やかして「世是榮華」を主唱へた我友山川春枝子の現在の境遇であらうかと不可言感慨に打たれて熟々と目送たが「全然神樣のやうな」と不知胸宇の底から起つた微妙な絶叫は幽かに自分の唇口から、洩れた閑村の白晝は靜寂に午鷄が鳴いて籬端の白梅が三輪ばかりこぼれた!

眞然既過十年になりましたのねへ、左様丁度學校時代でござんしたか、妾は實に甘い甘い蜜のやうな戀の魔力に醉はされた事がござんした、花と飾りたつた全身の嬌態には校舍の往來に迄も異性の人間の有情一瞥を求めて、既う何事も社會は戀情じやなくちやならぬ、愛情でなくちや無意味と言詞、行爲全然戀愛で持ちきつたやう、起思彼期でござんしたわ、諸孃が、小町娘!小町孃て、痛罵て下すつたのは。

楚歌裡に教育された、妾の精神は日一日と戀愛の一道に而已傾注けて終つて、罵倒の反動は尚も妾の情火を煽つて、實淺猿しい邪界に沈淪んで行のでござんした、間もなく妾は學校を卒業たのを好機會がつて燃へるやうな青春想を迭に未來は必ずとまで契り合つた竹川と云ふ法學生に如何てござんせう――妾の手から結婚狀

を送つたのでござんすの！すると、程なく濃紫の菫花をちらした美しい其人の名の封筒が届いて内面には「自分が今迄も戀愛は絶體であるなどゝ呼唱た事は少なからぬ謬見であつた」と、懺悔らしいやうな返書‥‥。

けれども貴女其頃の妾のこゝろ?! 如何して斯樣事に執着い自分の戀の實體まで竹川の爲に犧牲に供する事が出來ませう舊の戀人は現の路上の人既う何等の關係もあるまいと溶かすやうな妾の嬌姿の技倆は竹川の友人の石山と云ふ學生に尋常ならぬ秋波の悉皆を送つたのでござんした、戀に飢餓た青年の心の裡は不思獲物でも打とつたやうな動靜、朋友の前社會の前優しい女友を得たのを悦んで表面は誠に美しい交際を結んで居りましたが、乙女の丁度二十一の春でござんした、栞々優しかつた、石山は流行の女優花治と云ふ者と遠く奥洲路へ共謀に逃亡たと云ふ噂：丁度空氣の波動のやうに口から耳へと漸次擴がつて、私の胸にまで響いた時!!! 妾は兩の袖をかんだまゝ身も世もわすれて悲泣んだのでござんした、美しいと思つた戀の實際に觸接れて慘憺男子の玩弄物となつた妾の今此樣な改悛はもうもう遲いので少しも悔ゆるの効顯がございませぬ、斯のやうな中にも保護と賴んだ御兩親の淺間しい妾の墮落に千萬精神を煩悶した、結果でもござんしたか、七日相違に死亡られて、終つてからは誰一人憫然な孤子に暖い同情の泪を注いでくれる者もないくらい寧ろ同音に浮氣娘の因果の程は如彼したものよとまで擯斥されたの


春郊〔天賞〕 廣島 三村春溪

でござんした！噫妾は當時でござんす眞個男性の戀の觀念は只夢中の幻影の樣なもので決して捕ふべく追ふ可きものでないと云ふ事を全精神感じると同時に自分の生涯は全乎華やかな塵世の虚榮心から脱がれて幽玄な詩想の索求に全心身を捧げつくして、寂た妾の後半生を彩らふと感入てからは何だか斯う墳墓地のほとほと嫌厭はしいやう!! 矢の如な決心の一筋は只一人舊友の住居へるを賴つて心細い女の身の遠々信濃の旅途に上つたのでござんすの、

短亭長驛――心無き汽車の進行はいよいよ不遇な此身を目的の土地に運びまして妾は早速依賴とする其友の住所を訪問ましたところ浮世は眞無常轉變……

親友はもう此土には居りません、遠く芭蕉の葉繁る臺灣へと良人と共に轉任れたさうでござんす、嗟呼!! 妾は湧き返る泪の萬斛を甚麽に破果てた征衣に絞つたでござんせう、

後事を？ 妾はこれを誇的に御聞達するを好みません、吁々！世の中に不孝の子！失戀の女!! 失敗の人間は!!!

やがては大悟の妾身でござんした……

……………一個月許り以前――諸女も味はふ高い理想の蹉跌に苦悶んで信濃なる叔母の閑居に寄留た自分の春日散歩の序に舊友の庵を叩いて耳にした悲慘の物語!!!

果敢ない運命の定律にふれて樂み多い花やかな半生を紅泪の深淵に落入た薄倖の人間は一人此世に此女友ばかりではない、女と云ふ女?! 自分は如斯云つて憚らぬ現に此身が其懊悶を味はつて居るのだが友が高潔い改悛の言に燦然！胸裡の底には訓誡の光明がほのめくのである、

汚れた萬の感想の中から永久に復活た罪人は徐かに宇宙の萬象を微笑んで遂には此峻嚴な詩境の土に花のやうな其形骸を横たへる事であらう!

あゝ我友山川春枝孃は無名の女詩人である、

黄昏自分は再會を期して門を去た月は朧に！淡く人影を地上に印象んで浸み入るやうな白梅の暗香が斷續後方から追つてくる。

評　無暗に高襟がりし所に疵はあれど、また捨てがたきふしもあれば暫く之を地に推す

※※※※※※※※※※※※※※

人

○うたかた

越後國古志郡長岡坂ノ上 高橋むら子

み空に冴え渡りたる十六夜の月は、一種異樣なる壯嚴の光りを霜氷る野にも山にも投げかけて、爰暫し塵の世をエデムの御園と美化せしめてをると、見るから淋しげに住み荒れし孤家から人の肺腑を刳るやうの、悲しいヴアイオリンの音が、此の寂寞の天地を破て切れ切れに聞えてきた。此の音を聞くと、妾はもうたまらなくなつてひたと歩を止めて、足駄の歯の踏む度にからからと音のする程固く氷た霜柱の上に前後の考へもなく泣き伏してしまいました、嗚呼、あの悲しい今でも絶え入りそうな細く長く情の籠た音を聞て、どうして泣かずにゐられませう。

妾は、松浦玉といふすぐ此の隣村に住てゐる女教員で



車井戸【地賞】 山口 堀龍子

すが、物心覺え初めし時よりあの義理ある恐ろしい父に事へて、小さき胸の中に人知れぬ氣苦勞に涙の泉も枯れはつるやうでした、其中に心の底から慰藉して現在の悲境を忘れさせてくださいましたのは、今弾てゐらつしやる音の主人の三村京一と云ふ幼少なじみの方でした。三村さんの御家は、元村中二番の素封家でしたが御父上が或事業に失敗なされた爲に、住みなれた一本榎の長者邸と云れし、御住居をも捨て、此の孤家に御移りなすつたのは、今より四年前京一さんは十九妾は十七の秋でした。お互に心の煩悶に堪へかねて、花はあした月の夕も、人の世のはかなく、つらきことども語りあひ、慰めあふてゐますうちに、いつかもゆるが如き愛の固りとなつて二人の間に精神的戀が成立致しまして、或る樂しき希望の爲に他念なく修學して

遂に目出度く師範校を卒業して、京一さんは〇〇村小學、妾は此の柏崎小學に、奉職致しましたのは、つひ、此の春で御座ました。然るに妾等二人はどこまで不幸の運命のもとに生れて來たのでせう、京一さんはふとした風の心地より、聞くもいまはしい肺病に御罹りなされて空しく、青雲の志を抱きながら、死の神の御手を待つべく此の孤家に、靜に一日一日と送て御出になる、御心のうちはマアどんなでせう……、せめてもの心やりに、あの悲しい離別の曲を彈ては堪へぬ恨みを月に孔てゐらつしやるのですもの……。

更け行くまゝ一層寒さは骨身にしみ通るやう、冴ゑに冴ゑてゐた月も、いつか、濃き村雲に掩はれて、長く影を地上に印してゐた、枯木の如き楢の若林も、颯と一刷毛薄墨で塗抹たやうに、ぼつとして夢の如くはつきりしなくなつたと思ふと、一しきり強い強いヴァイオリンの響がしてバッタリやみました。さぞ妾の行きやうの遲いのを怨で御出なさるでせうと、急ぎ御家に入らふとして、今更ながら、男子らしくキット一文字に引き結びし口元愛の光りを溢るゝ程湛へしやさしの眼、快活な一種人を引き付くるやうなりし御樣子に引き變へいたいたしきまで、瘦せさらばいし御面影のはや、目の前に見ゑて胸も張り裂くるやう覺ゑ、暫したぬらへてをりますと、又もや雲間を洩れ出し一片の寒月が、みすぼらしき袴姿のまゝ石像の如く佇み立てる妾の半面を照して行末の運命を哀むやうに見ゑました。

評　すら〳〵とせし筆つき、なか〳〵あなどりがたし、

○つきせぬ思　栃木縣　矢島松枝

（一）

笛の音、妾はそれとなく近よりぬ。

鮮に描かれたる影法師、月は今しも薄雲をはなれしなり。白露を踏み散らさじと、蟲すだく中を、秋の小鹿ならねど、笛の音あてに進み行く、妾が足は、あやしうふるひつ。

奇しき音立てゝ低う近よる影法師、はつと思ひて木蔭に息こらせば、そは人ならで、犬の走り行くなりけり。さはぐ胸を、おし沈めつゝ歩一歩と忍び足を運びぬ。梢を渡る風颯と吹て、笛の音はそがために、ふと、絕えんとしつ。されど依然幽なる音は續けり。

妾はひたと傍に身をよせ、生垣疎なるひまより、そと、

垣間見つ。

（二）

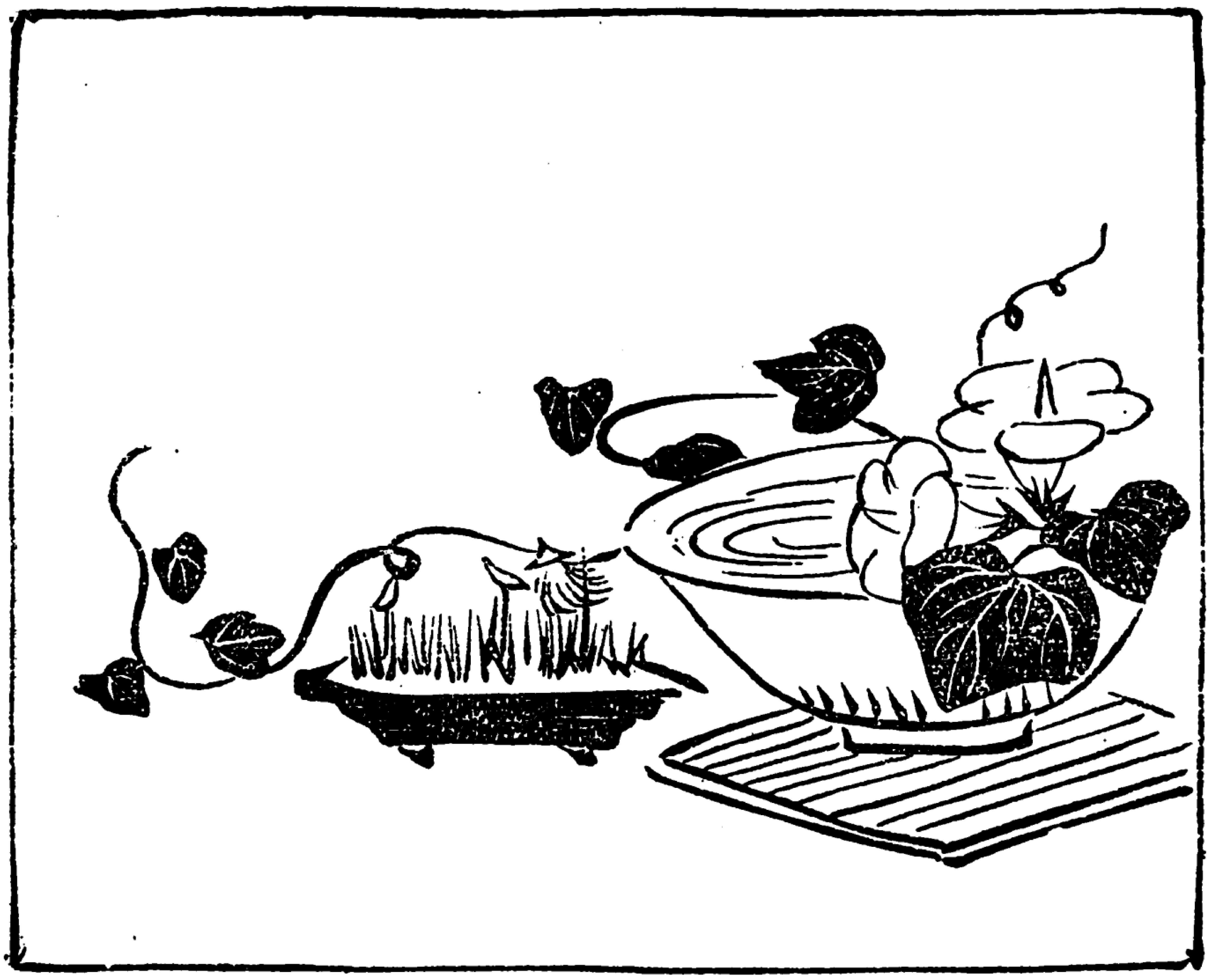
打ち見やる庭、廣くして木立ものふりたり。一輪の銀月樹間を洩るゝ光冴え、芝生に置く露白く輝き、今、暫時、鳴きやみたる蟲の聲、折からの夜風にゆられて、遠く近く聞ゆるもさみしく、未だ宵ながら、天地も眠れると計りに靜寂たる此の庭の、萩茂れる側に、黒く動かぬ影は笛の主なり。

如何なる殿ぞと、月の光に覺束なくも瞳を定むればうたてや、あなたに向ひておはすなり。あゝ如何なる殿御ぞ、などてこなたを向きて給はぬぞと、一人かこてどせんなし。

（三）

月はます〳〵さやけくなりぬ。妾はものたらぬ背姿を見つめつ。

夏の朝〔人賞〕　神奈川　小野雪枝子



奏づる調や何？そが幽なる冴えたる笛聲、虚空より虚空にひゞき渡り又絶え〳〵に、緩く、早く、一節高く、低く、優しく自ら又哀に悲しく、或は笹の葉くゞる眞清水の如く或は巖にむせぶ谷川の如く、心清く、神澄みて、われを忘るゝまでに其の節々の微に妾が耳にひゞき、柔に妾が肺肝に染み度り、何とも言へぬ感にうたれて、夢とも現とも思ひ分く方もなき迄、彼の、美しく、慕はしき、妙なる調奏づる人の心や如何に。只管、耳と心とを澄したる妾の胸の、あやしう躍るを、知るや、知らずや……。

（四）

笛の音は忽然やみぬ。

いよ〳〵夢の様に覺えて、妾の心の迷かあらぬかと、覺束なくも垣間見透せば、人の影あり、定かならねど人のけはひす。

あな憎くやの人、如何なる人か。

飛石傳に動く影は、撫背のやさしき姿。驚きみれば、齡は二九計りならん、微笑を浮べし面の、月光を受けたる美はしさ。女の妾さへほれ〴〵する美人。

「兄さん」

「おゝ、玉枝さん」

「あちらで月見ながら、琴と合奏いたしませんか」

二人は立ちあがりぬ。而も手に手を取り合ひて、一歩又一歩、さゝやきつゝ又笑ひつゝ。

五歩十歩影はかくれぬ。伸びあがれども生憎や、垣は高く、月は照せど植込は暗きに。

あゝ美人と笛の主、二人は兄妹か、それともまた…………。妾が胸はあやしう亂れて、歩まん力もなく傍の立樹に身を持たせ、細く長く吐息洩しぬ。

月はさやけく松の梢に宿りて、かなたには玉を轉がすが如き琴のひゞき、續て起る妙なる笛聲。

……あゝ妾の胸のこの思の程は、てり渡る天邊の月と妾が獨り語聞かんとにや、聲ひくめてすだく草間の蟲の外には何者もえ知るまじ、……あはれ彼の君……つきせぬ思を。

(終り)

○血啼鳥

埼玉師範　關　桂薫子

『ウラルの彼方風あれて、東に翔る鷲一羽、渺々遠きシベリヤも、はや時のまに飛びすぎて、』

細く高い聲をはり上げて、梅が香滿てる細道を、彼方へと行くのは、陸軍歩兵大尉として、沙河の大激戰で名譽の戰死をなされた、平田政幸氏の愛兒の、美代ちやんであります、

妾は、美代ちやんの爲めに、幾度泣くのでせう、

『美代ちやん、お父さんは、激しいお戰でお逝去なさつたのね、』

と、申しますと、美代ちやんは、白く美しい前垂を、絞る程泣くのです、それから美代ちやんは、思ひなほした様に、

『あたいのお父ちやん、戰死つたの、だけど母ちやんが、泣くのではないつて云ひましたわ、あたい、泣かないんだけど、悲しいんだもの……』

この大人しい言葉を聞いては、如何な人ても、なかな

いものはないてせう、妾は堪へられないのであります
あゝ神樣はなんて、此の可愛い美代ちやんのお父さんを、おしげもなく、小夜吹く嵐の前の櫻の、それの樣に、散らしたのでしよ、からき浮世の風は、もう、この美代ちやんまでを襲ふたのでありませうか、今年七才の神のよーな美代ちやん、あゝもう、浮世を味ふたのであります。

『美代ちやんは鶯がお好ね、妾の家へおいでな、よく鳴くのが居るわ、梅も咲いたのよ、美代ちやんに上げよーわね、』

『あたい、今日はいやよ、お父ちやんのお墓へ參詣の』

『そう?、それでは妾もお一緒に行かう、美代ちやんはひとり?』

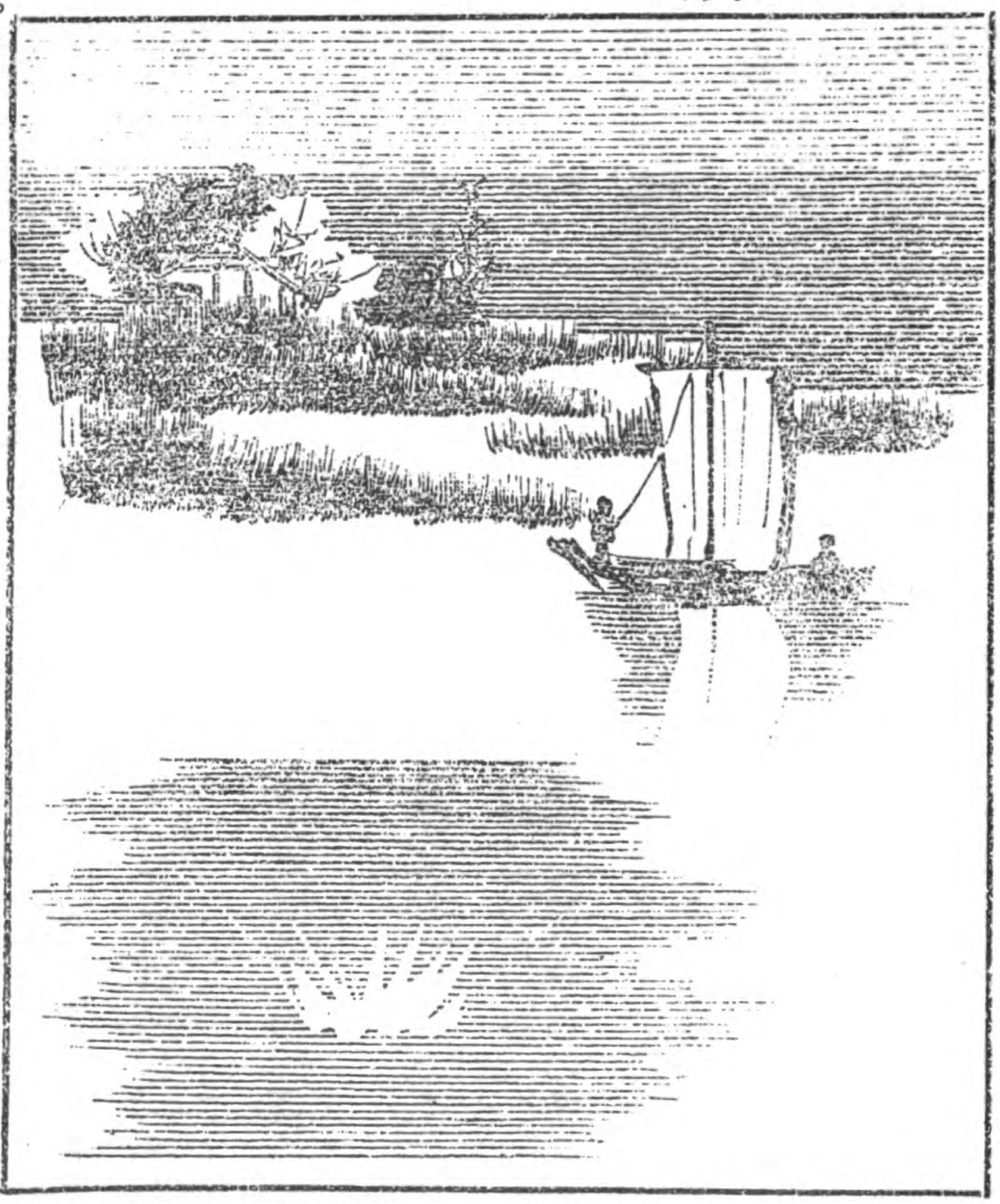
『母ちやん後から來るのだけど、あたい、お父ちやん所へ、早く行きたいから、さきに來たの、』

紅葉の樣な綺麗な、小さな、美代ちやんの手には、雪を冒して綻びかけた寒梅一枝、小羊の胸の亂れの一ぱいを、この梅の一枝によせて、お父樣に手向けるのであります、これをお受けなさるお父樣が、若しお言葉があるならば、いかにお言ひなさるでありませう妾は思ひ出しては堪へられません、ひしとばかり、美代ちやんを、抱き上げるのでありました。

折からの風は、美代ちやんの、眞白リボンを飜へして、鶯の初聲はホホ……とばかり、樂しき春を歌ふのであります、けれども、悲しい身には、何が面白いでありませう、

『オヤ、もうお父樣のお墓ね、美代ちやんは、毎日お

春〔賞外〕　廣島　三村春溪



參詣に來て？……まア、お墓が奇麗な事ね、美代ちやんのお父さんは、此處に永くお眠りなさつてるのね………」

勇ましい武夫も、變れば、はかなき墓標の一つのみ、ああ大尉の魂は、たへず美代ちやんの身を、護つて居らるゝでせう、

何を告げてか、小さき兩手を合せては、ぬかづく美代ちやんの、いぢらしさ。

「あッ、美代ちやん、お母ちやんが來るわ」

立ち上つて、母樣を迎へる美代ちやんの目には、黃金の玉が宿つて居るのであります。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

「ネ、薫さん、思ふ存分に、浮き世の風は、吹きあらしますね、」

美代ちやんの母ちやんの此の言葉には、答へる言葉を知りませんかつた、血に泣くのは、杜鵑のみではありません、美代ちやんも、美代ちやんの母樣も、いかに悲しいことでありませう。

黃昏の空を、塒へ歸る鴉が、三つ四二つ、

「美代ちやん、母ちやんと、お遊びにいらつしやい、ね」

別れて西と東、もう早い星は、瞬きはじめました、（終り）

○亂れ緒

麴町　あけぼの

（一）

「淋しきまゝを、はやうおとづれませな、ひとへに待ちまゐらす、」なる御文に、やをら立ち上りて、ふすまをひらき、文よむに餘念なき兄上に、

「美代子さんのところへ行つてもよくつて？」

と伺ひまつれば、

「あゝ、日の暮れないうちに歸つてお出で」と御許うれしうてさて、新調の御召縮緬の重ねに、友禪縮緬の羽織丈長う、金入繻珍の帶胸高に、松やの結びくれしまゝを、うぐひす茶の羽織のひものうつりよしとて、兄樣手をうちての御賞詞、……松やの心づくしに、かざし肉色のりぼん、前髮大きうて、よく似合ふとか、……玄關に送り出でう松やに、輕く會釋して、その後に立ちませる兄樣に、

「行つてまゐります」

と云ひて、さて、車に乘りつ。

「ほんとにお美しいことね、山岡樣が御らんになりましたら、まあどんなに、……」

と松やのいへば、
「ほんとだよ、山岡に見せたいね……」
と、兄様からかひ氣味の……、
「あらいやよ」と紅の、さと面によせくるを覺えつ。
笑顔に熊は揖棒あげぬ。

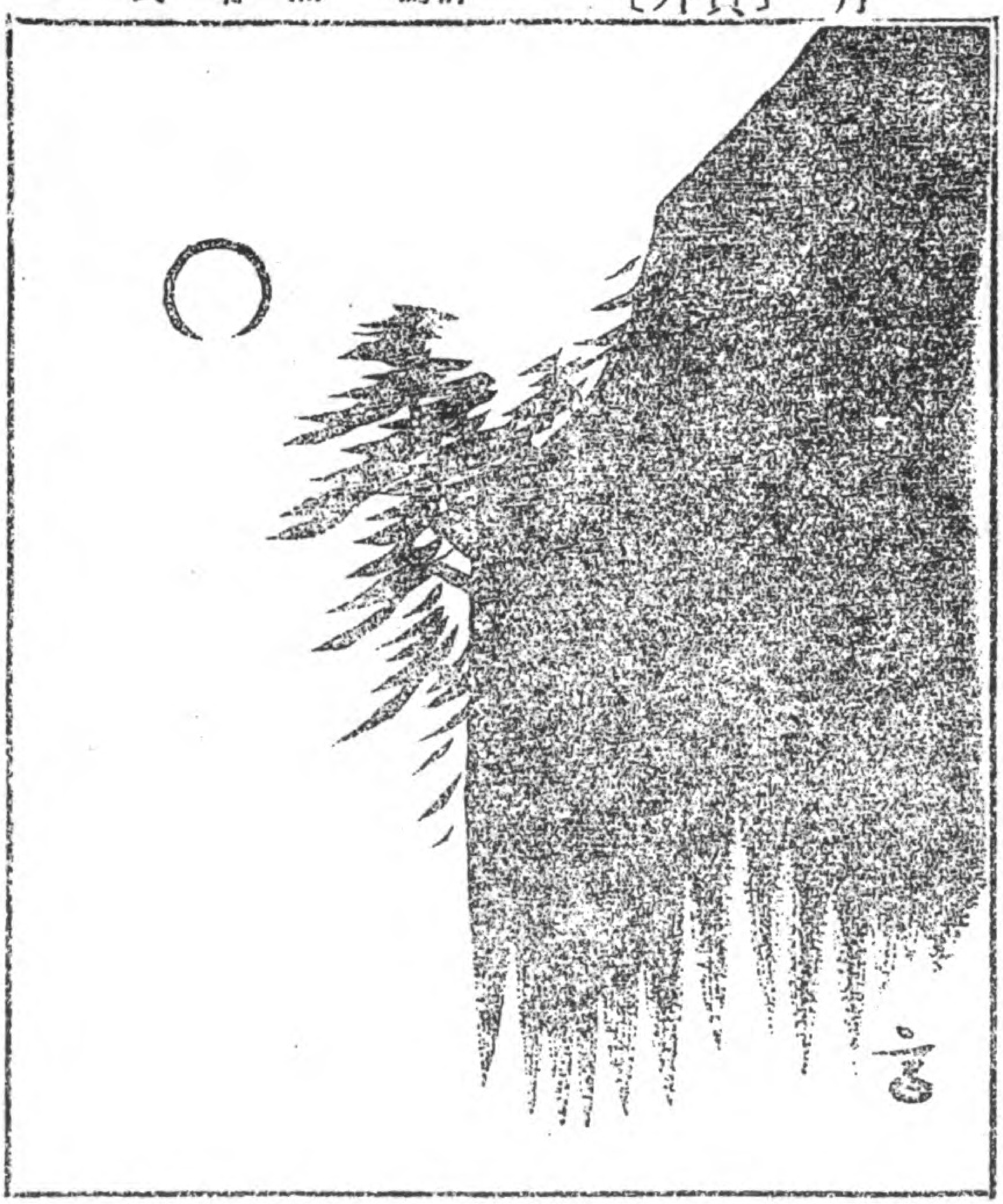
（二）

車の上、今、やがてまゐらんの美代さまの事思ひつゝ此度美代さまと、エンゲージの約とゝのひしその君とは、いかなる君か、わが兄樣と同じく、大學の方とか美代樣云ひたまひしと覺えしが……、委しくは、御目にかゝりて、とのみの御文美代樣、必らず、いやに大人ぶらせ給へるなるべし。オヽ可笑し、逢つて、ひやかしてさしあげん。

（三）

生垣青うめぐらせる、美しの御家の外に、もれくる笑ごゑ、それ誰やら、誰やらの御聲……、
熊は揖棒下しつ。
「御免下さいまし」
の我聲に、案内されし客間、美代樣、例のやさしき御聲に、くさ〴〵の御話あり。
やがて、そのエンゲージの君、
「やあいらッしやい」
の御こゑと共に、御あいさつ、無言に頭下げて、さて、見れば、……あゝ、その君……まことや、夜も晝も、忘るゝことなきその人の俤……、かなたの驚きは、著しく變りたる、御顔色にも知られつ。
直ちに、座を外して行きましぬ。

月〔賞外〕　群馬　無名氏



（四）

あゝ夢か、……夢ならば疾くさめよ、まぼろしか、……幻ならばとく消えよ、……さはれ、うつゝ。これ

凡て、悲しの現なるをばいかにせん、今が今、家を出づるまで、山岡に見せたしと、兄上のたまひし我姿、……お丶、そは何の御言なりしぞ……。こ丶一月、山岡の君の御姿、見えず、兄樣、大學にも見えずとか、のたまひぬ……、今ぞ知りぬ、……今ぞ知りぬ、知りぬ……。あ丶、春や昔、かたみの戀はあたたかく、兄上も、よき夫婦よとのたまへば、松やもほんによく、御似合の御夫婦てと云ひしが……、互に夫と呼び、妻とよばれん、その日のみ祈りつ、兄樣の御室の埋火のもと、溫き御手に、この手の握られしもあ丶幾度か！あ丶、暫しを通ひつる、うつ丶なの夢の俤……。美代樣、わがお友達のみよ樣……。山岡さま、わが戀人、兄樣の御友達の山岡さま、……お二人はエンゲージ……。あ丶知りぬ、知りぬ、男心と秋の空……。

（五）

お庭の松に、あやしき鳥なく夕暮を、やうやうに辭し去りて、熊の車にのりつ、黒き御門を出でし我……靜かなる心にかへりみて、永久に、永遠に、よき御夫婦ならんことを、まご丶ろより、祈りて、かすかに、我は笑みぬ、あ丶……。

（完）

○おや心

大阪市 池田きんこ

美くしかつた夕榮の雲は、いつのまにか薄すりと立こめた靄にわかつて鬱蒼と茂つた鎭守の森も、もう見えなくなつた。有馬山の麓から、ずつとつゞいた、松林を縫ふて、淋しい暮の鐘が、悲しそうに響いてゐる。春とはいへ、まだ寒中の肌寒い夕風が、つい一町ほどむかふの梅林からえもいはれぬ香を、おくつてくる。小夜子は、夕食をしらす、母の言葉も夢のやうに聞いて、暮れゆく四方の景色に、あこがれてゐるのであつた。

「小夜さん、早くご飯をお上り……、小夜さん、何をしてるんですよ」と又もや母の呼聲に、我知らず、小夜子は裏口から、走り入つた。母のお里はそれと見て、

「何をしてたのよ、先刻から、あんなに呼んでるのに、聞えなかつたかえ」半分は怒つてるやうな、母の言葉に、遽座に答も出ないらしい、暫時して「私れ、お母樣あんまり夕景色が好かつたから、知らず知らず、恍然としてたのよ、それて、お母樣がお呼びなすつたのも、聞えなかつたんだわ」とあどけなく、拗れてゐるのを母は、いと可愛ゆうて、

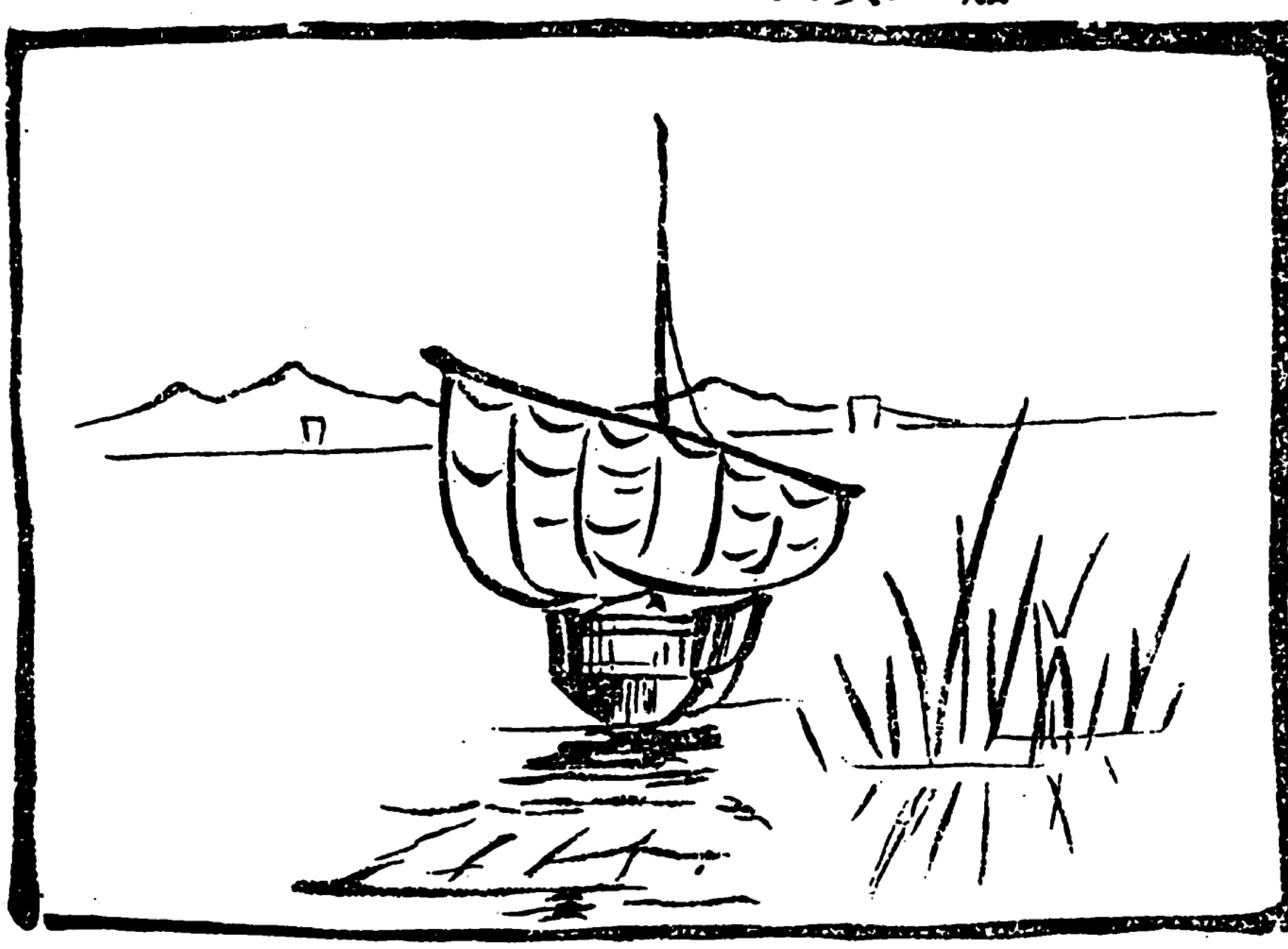
「それならい丶んだけれどもれ、又何處かへ、遊にいつたのかと、思つて心配してたのですよ、さアご飯をすましませう」後は、母娘只二人の淋しい膳に向ふのてあつた。

日はどんぷりと、暮れて了つて、風もないに、裏の籔に、さわ〱と音するのは、暖かな塒に、小鳥の夢破る、ふくろうの惡戲てあろう、母娘は、長火鉢を差向ひに、坐つたが、お里は何となく改つて、いとしい娘の顏を少時凝乎と見ておつたが、ほつと太息をついて、「小夜さん」と呼び掛けた。

「最近何處へいつてたの、れ、小夜さん、村長樣とこへいつたのだろう私が、いつか一度話して置き度と、思つてる事があるんだが、今日は恰度い丶時、……ようく私の云ふ事をお聞きなさいよ、お前も知つてる通り、先達村長樣から、銀二樣のお嫁にといつて、强つてお前をお所望なさつた時、お前の心を充分汲みとつて居ながら、私は心强くも毅然お斷りをして、其上に不釣合の緣てあるから、到底末まで、永うつゞかない、と與々お前に訓戒てはないか、それに未だ密々と何かの用にかこ

附けて、銀二様にお目に掛りにゆくとは、何といふ心だろうね、私しや眞實に口惜しく思ひますよ、銀二様は法學士といふ立派な肩書付、その上お家は金満家で、被在るから、人には奥様々々と立てられて、どんな榮華も出來ませう、又あれ程ど熱心であれば末の末まで可愛がつて下さるだろうと、お思ひでせうけれど、男の心といふ者は、中々お前らが一圖に考やうな正直な虚偽ない心とは思ひますよ、萬一そうでなくつても、地位により、場合に依り、變るのが男心、ねえ小夜さん、斯う言へば、世間の男は悉皆薄情な、思やりのない不親切な方計りかといふと、左様ぢや有りませんよ、中には疑問が起る位可愛がつて下さる男もありますが、先づ十中八九は意志の弱い、薄情な不親切な男だと、思つてなけりやなりませんよ、世の中には、子故に、夫婦の縁を切り離うて、嫌々ながら、情ない一生を送る女や、夫の立身を見捨てられずに愛も情もない、冷酷な家庭を、作つてる人や、又こんな事情が原因となつて、破鏡の歎に死ぬまで恨めしい情ない身と、なつて失ふ女が、幾人と數へきれない位、澤山あるのですよ、夫も誰だつて、初めから求めて、こんな身になろうとは、思ひません、お互に此女ならば、あの男ならばと、好き合ふて、夫婦になつた方計り、勿論中には親の言葉に嫌々ながら、奥様となつた方もあるたろう、又義理人情にかられて、一生棄ばちの身と、可愛想にあきらめをつけて、身を託した女もあるだろう、雖然大低は、前にもいつた通り地位や場合に依つて、心の變つた結果は、皆、涙の種となるんだよ、ねえ、小夜さん、分りましたか、お母様のいつた事、分りましたか」と何故か、話半から涙ぐんで、凝乎と下を向ひてる小夜子の顔を覗き込んだ母は又もや語りつゞけた。

船〔賞外〕　福岡　桐山圭枝



「お母様も、涙て一生を送る一人に、這入つたんだよ、斯う言へば、定めし夫と、お分りになるだろうが、京都に被在るお父様と私とは、幼少い時からの約婚、互に戀ひ慕ふて、兩方の兩親が喜悦の下に、嬉しい契りを結んだのであつたが、翌年の秋にお前を分娩でから、恰度十年程經過時、運動の結果、代議士となつたのが、今から思へば、私に對する愛が、減つて來る動機だつたのだろうその內十年の長い月日、一晩も、外泊ことのなかつた夫が、二日三日、はては半月、一月と夜となく、晝となく、家をあけ、はては無理に私を納得させて、小糸といふのを、妾として家に入れたが、すぐに玉のやうな男の子を、分娩だので、夫の喜びは譬へるものもなく、小糸が家中を切つて廻しての、奥様振り、憎いやら、口惜しいやらが一時に込み上げて、私は氣も心も狂ひそう、結果思ひ切つて子まで生した戀人を捨てました……一生心も身も、捧げた夫を、捨てました、……小夜さん、其時のお母さんの心中お前にもお分りになるだろう、ほんに、切ない、情ない想をしましたよ、それからといふものは、世間に男程恐ろしい者はないと、つくづく想つたが、此村へ來てから、最早六年、お前も十八といふ娘盛り、諸々から降るやうな縁談も、兎や角と思煩ふてる、お母様の心を汲みとつて、ようく考へてお與れ、小夜さん、お母様のいつたこと、分

りましたか、えゝ、分つたかえ、」と噛んで哺めるやうな母の訓戒に小夜子は、嬉しいやら、有難いやら、果なき涙に咽ぶのであつた。初めて知つた、父の無情、母の悲逆背春の戀の後には、恐ろしき結果となつて、女一人の身の惜しや埋木と朽ち果てゝ失ふのか、さりとは、男心の賴みなさよ、銀二樣でも、お父樣のやうに、ご出世をなさると、そんなお心にお成りなさるだろう、おゝ恐ろしや、お母樣のお談が、今少し遲かつたら、定めし自分は銀二樣の妻となつて、假令五年拾年は満身の愛を捧げ合つて、睦まじう暮さうとも、末は如何情ない目に遇はされるかも、知れなかつたものを、おゝ恐ろしや。小夜子が少さき胸は、千々にかき亂れて、只管母の情ある教訓を嬉しく思ふのであつた。

「お母さん、私れ、最早銀二樣の許へは、必然行きませんよ、私はもう嫌になりました」と涙ながらに答ふる小夜子を、凝視めた母の眼には、喜悦と滿足と、あふるゝ如き愛の輝さへ加ふて、今迄かき口說いた夫の無情も、何の物かは。

（はおり）

○黒髪

名古屋　紫雨女史

（上）

秋の日は弱々と暮れ初めて、力ない殘光を天神山の項へ浴せて、村端れの松並木には、靄が立て籠て居る。

『もう、歸るべいか、』

餘韻の酷く沈んだ調子て、入日の影を淋しそうに霑んだ眼許て、凝乎と視守て、斯う言つたのは、畔の櫨の木の下に突立つた六十近い百姓爺てある。

『お土岐や、もう仕舞にしべい、』

切々と、刈つた稻を束ねて居た十六七の娘。顏面は日燒の勢か、淺黒いが、頰の肉がむつちりと――富士額の丸顏、それて二皮眼の瞳め涼しい鼻筋のずつと透ツた、總躰が愛くるしい美の神が宿つて居るかと思はれて、黒百合の香るやう。

『お祖父さん、もう歸るの、』

『おう、大分お日樣も、そら毎日のこんだが、あの天神山の後へ行かつしやるだ。』

『まあ、お祖父さんは毎日同じ事を言つて居るのよ、天神山へお日樣が……なんて、然うぢやなくツてよ、太陽が地球の半面づゝ照らすので地球が廻るのよ、』

『いんや然うてれえ、何んても彼天神山の後て、お日樣はお休みなさるだ、俺ア太陽か地球かは知んれえが、お日樣は、俺が此村て生れた時から、アノ東の五郎旦那の持山から、ヒヨツクラ出さつしやつて又、あの天神山へ隱れなさるだ、俺は今年六十に手がとゞくまて僞は言はれえだそれて皆村の人達が正直六佐だと言うてれえか、俺の言ふことに僞はれえだよ。』

『まあ……』とお土岐と云ふ娘は、日頃の事てはあるが、餘りに不解ぬ理屈て、それに昔からの一徹な言葉に、言說く言葉もうち消されて又妙に可笑く思はれて、此邪、忘な祖父の言葉に一步讓つて、口を緘んて了うのがいつも、おちとなるので、兩人の間には此太陽の問題が唯一の慰籍となつて居て、是が又村中の大評判なのである。

恐らく今程敎育の不平均な時代はあるまい。親は眼に一丁字もないのに普通一般の子女は文章は愚か、幽玄な哲理、機微な化學作用の事さへ堂々と論ずると言う有樣て、丁度お土岐も其數に洩れない、今日此頃こう田圃に出て稻刈、草刈こそすれ、以前は村の女子補習科へ通つて居つたのである。其時分はお土岐の家も村ては隨分指折の財産家てあつて、無論お土岐などは、深窓に養てられた身て秋と云へば、夕の風の游ら寒いのにも注意される位てあつたのだが、世の中は妙なものてある。

そら、鳴海の町から松並木の八丁繩手、それをずつと通りぬけると、もう有松の町て、其町へ這入として、ツト右の方を見ると、山の中復の處に、惚然と際立て、白壁の家が見えるてあろう、其家こそお土岐の家てあつたのてある。それが、何故今のやうに零落たかと謂へば、お土岐が十才の時てある、母親が果敢なく亡つたので、父の文藏も當座の裡こそ落膽して唯々お土岐の成人するのを樂しみにして、まことに無事てあつたが、什麼した魔が射して、毒矢を射たのか、名古屋の泥水女と深く言交して、終には其女を後妻として歷然と家へ置たのてある。

之が抑々て、此女をお藤と呼んて、此お藤には或る壯士揚りの潜代言の惡足があつて、其の入智惠から然かも七年前の九月の末の、事お藤が文

藏の印形を盗み出して五千圓と云ふ大金を借出して、其男と影を隱くして了つたのであるが、そんな事とは夢にも知らなかつた文造も闇に碟と置いても、根が自分の不心得から出來た事なり、實印が押してあるので遂々家を始め代々傳つて來た田畑、家資まで人手に渡つて、了つて、漸つと少しばかりの田と畑が殘つた丈けであつたのである。

夫れが原因で、其年の冬のこと、お土岐を殘して死んで了つたので、木から落ちた猿同樣なお土岐は一時途方に暮れたのであつたが、茲に正直六佐は見るに見兼れて此可憐な少女を助けて、結句獨者の氣樂に、お土岐を自分の娘とも思つて可愛がつて居るのである。それが又妙な事には此お土岐には緣者と云ふ者が絕えて了つて、天にも地にも今では此六佐を杖とも柱とも思つて、お祖爺さん〳〵と縋つて居るので此處に和氣靄々として、幸福な家庭が出來上つて、六佐親父はお土岐の爲めに好い婿を得たいとまで思ふのであつた。

（下）

お土岐は每夜の夜寄の裡で、自分の孤子の世の中に便ない事や、跳つては祖父と呼んで居る六佐の親切が身に浸みて悅しう思はれて、遂には發露々と淚を醲しては嬉し泣きに泣くのであつた。

此に又、お土岐の身の上に悲慘な上悲慘な事實を被らす事となつた。それは稻の苅り込みも終んで、その冬の或夕べ、流石に老人のことゝて、祇園寺の裏の池では枯蓮の上を、寒い風が、無常の曲を唱うた時、葉末の露が散るやうに、……脆い者である。

此六佐の死に就いては村中の噂は、あたら、村の名物の正直者を殺したと非常に入釜敷かつたが、お土岐は絕え入る程に嘆の淵に沈んで、常のお土岐とは思はれない位であつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

六佐の葬式が濟んで、初七日の日、お土岐は狂氣でもしたのか、其滴るやうな綠の黑髮を根元からフッッと切つて六佐の佛前に供へた。何故であらうか？或者はお土岐の胸の裡に、六佐にある戀の發作されつゝあつたのではないかと謂ふもがあつた。然し夫れは信ぜられないもので……。が、お土岐は遂ひに一生を獨身で暮したてあらうか？……。

（完）

○涙の種

丹波　波多野敏子

思へば、去年の秋でありました、永の病ひの床に、ありし、姉君の、近頃は何となふ、變つたので、兩親は申すに及ばず、夜晝の差別なく、一家は擧げて介抱に、餘念なく、醫師よ藥よと、急がしかつたの。

妾は務めある身の、心ならずも、隣村の、某家に下宿して、日々學校に通つて居りました。

そぼふる雨の夕べ、孤燈陰闇き文机に、向ひては、いつもいつも、姉上の事思ひ出され、片時も忘れた隙はありませなんだ、殊に臥床に、就ひた時などは、昨日にかわる姉君の病狀に、痛くも心配し、圓かに夢を結ばなかつた夜の、度度ありました。

今日は、何日になふ、心勝ぐれず、打ち沈みつゝ、學校へ行きましたが常に變る、妾の面を見られた、他の教師は、今日は貴孃なぜ、そんなに沈ずんで、いらつしやいますの。と。問はるゝも理り、自分ながらも、悲しい樣な、淋みしい樣な、氣がして、何日も喜しい生徒達が、先生先生と袖に纏つてくれるのも、いやな感じがしました。なぜこんなだろうと、思ひつつ教授をしていました、最中、小使が、一封の書面を持つて來ました、受け取つて見ると、父からでありました、はつと思つて、開封しまして、思はずあつと叫びました、そのはず「姉危篤急ぎ、歸へられよ」との、文面でありました、其の時、足が振るへて、なりませなんだ、直ぐ校長の、許可を得て、取る物も、取り敢へず、其まゝ、あの嶮しい、狹い、石の出た、山路を、飛ぶようにして、我が家へ着いた時は親類の誰れや彼れ、隣の伯父樣、醫師樣などが來ていられました。

二年に近ひ病て、痩せに痩せて、肉は落ち、骨は露はれ、見る影もない姉君の枕邊に、靜かに、座しました、其の時、妾は、あまりの悲しさに泣いてゐました、父は靜かな、濁つた、聲で、

「お前が歸つたことを、知らして……」

妾は、はふり落る淚を、拭ひ、骨ばかりの、冷めたい手を、犇と握り

「ねゝねーさん……」

後は、淚に咽んで、申されませなんだの、

姉君は、力なき目を、開かれたが、言葉も出ず、長い吐息は、森として

水の樣な、寂な室内に、響いていました、やがて、口を閉じ、眼を閉じ刻、一刻と死の影に掩はれよふとしられた姉君は、幽な息を細く長く。
「歌子、何も云ひ殘すことはないか、氣を、確かに持て」
と、父の言葉に、纔かに開かれた眼は、母上の方に、注がれました、母上は姉君が兩手を、取つて
「歌子や、光枝は、必ず、立派に育て上げる……心殘さず子……」
懐かしい、母上の言葉に、呼びもどされて、幽かな、微笑は、唇に上つたが、見るみる、瞼は閉じ、眠むるが如く、息は絶えました、淋みしい戸の隙間から、挿し入る十五夜の月は、蒼白き、面を照して、まだ花の盛笑は、猶ほ、消えないが、姉君は永き眠りに就かれました。
りの二十三を、一期として姉上は！殘りし子の、此頃、片言交り、歩き廻る姿を、一目姉君に見せたやと、母上の泣き給ふも、哀れ
青葉繁げれる狹間の塋域に
「桐菴知秋大姉」
の脳名……あゝこれぞげに永長に涙の種じ

○月の雫

京都　松永うばら子

（樣と二人で田植をすれば――）
春の日は今とつぷりと暮れ果てゝ、野には一面の夕靄がたなびいて居るので、すぐ前の鎭守の森が丁度墨絵の樣に、根の方は濃く、上半の方は淡く、ぼかした樣に見える。
今しも彼方の畔道から清い、朗らかな、いゝ聲で唄ふのが聞えて、それが漸々此方に來る氣配。
鎭守の杜から一町ばかり北の方、裏には青い杉の生垣を繞らして、前は長や門の大きな構は、昔し此村で庄屋を勤めて居た太衞門と云つて、今でもここら界隈ではなかく〳〵幅の利く人なので。
今杉垣の中側で茫然と彼方を眺めて立つて居るのはその獨り娘のお元とて、此年十七、色の白い丸顔の、髮の生え際から目、鼻、口どこと云つて批難のない小女である。
あの鈴の樣な可愛らしい眼で一寸睨まれたら、胸の中が躍ると云ふ村の若衆の噂が今日はその眼はうるんで居るのである。
ふと唄聲を聞いて驚いた樣か、きつと彼方を見つめて。
「おゝ文さんが。」と獨言。
四邊は薄暗らくて唄の主はしかと見えぬ。
少時すると仄白う手拭が見えた。お元はきつと之れを待つ樣にして居たが、それはずつと行き過ぎてしまつた。
「違ふて。」とやゝ失望した樣。今度は突然杉垣のすぐ外の細道で唄ふ聲は以前のであつた。
「あら文さん。」
お元は嬉しそうに垣の間からのぞいてこう云つた。若者は少し驚いたと云ふ氣色、急に唄をやめて、透かし見て、
「おゝお元さんか。」
年は二十歳同じ村の新吾と云ふ人の息子でお元とは從兄弟同志の、この田舍にはまれな美男子、その上よく働らいて親孝行と云ふので界隈での評判者の文藏と云ふのだ、大方田圃かへりであろう。
「今お歸りなの　妾も同伴に行くわ、」
お元は小足に走つてやゝ東にあつた柴折戸をそつと拔け出た、二人は狹い畔道を並んで手を攜がんばかりに歩みながら、
「お父さんは。」
「まだかへらないの。」
とお元は文さんの面を見上げた、目には涙が宿つてゐた。
「こないに日が暮れて出て來でもお母さんに叱かられやせんのか。」
「なに妾や構はんわ。」とおろ〳〵聲。
文さんは小聲で、
「お元さんは嫁くのだろう、」語尾が慄へて文さんの面は俄かに沈んだ
「…………」
「えゝ本統だろう。」
畦路が二つに岐れて上へ行くとそこは小さな池の堤で、若草が褥を布いた樣に生えて居る。
今はたゞ眞暗闇だ。池の面はどそ黑く、その底には幾多の星のかげが物凄う。
「まアこゝへ座ろう。」

文さんは腰を下ろした、お元も共に。
「えゝ、お元さん。」
「あゝ。」と勢なさそうにお元はうなづいた。
「嫁くのかい。」
「妾やいや。」
そつと涙が一雫。
しばし二人は無言であつた、がふと下駄の音に驚いて下を見ると、西へ行く人があつた。
文さんとお元はハツと思つて互に面を見合したが彼方にはこゝに人が居るには氣がつかぬのであろう。ずつと通り過ぎてしまつたので始めて安心した樣にほつと吐息をした。
「あれが由さんぢやないか。」
「あゝ妾やどうしても彼の人に嫁くのはいやだわ。」
とそつと襦袢の袖で涙を拭つて。
「これだつて矢張り繼母さんのためだわ。」
「そうだろう。」
文さんの頬にも熱い涙が傳つて居る。
十七日の月は今し東の山の端に靜かに上つた。今迄闇の帳に閉されて居た野や、山や、川やが一時に表れた。
細い布を晒らした樣な流れに沿ふた畦道つたひに行く、小さい人影はさきの人であろう。」
「おゝ月が。」
お元は鬢のほつれ毛をかき上げ乍ら、空を仰いだ）二人は今更の樣に顔を見合せたのである。
思ひ餘つて文さんは小さい石塊を水の中へ投げ込んだ。靜かに寫つて居た月影は千々に碎けて、やがてそれが鎭まるまで二人は無言のまゝ見つめて居た。
「妾や死にたいわ。」
お元はずつと寄り沿つて文さんの膝に跪伏した。
「馬鹿な、」
文さんはもう堪らなくなつてお元の手を確かと握りしめたのである。

かくて情に焔ゆる男女は無言であつた。
側の草には露か、涙か清いきら／＼と光る水晶のやうな月の雫、」（完）

○特志看護婦

上毛　茂木敏子

（上）

東海道線の或驛のプラツトホームは人の波を打つて立錐の餘地もなく三等列車の窓からは數十人の兵士皆別を惜んで見送人を眺て居る、又群衆は老幼男女の別なくこれら兵士の壯行を送らん爲で其混雜は又非常である。此の中に一段目立て中等待合室の中央に椅子に寄りつゝ何事か語りつゝある若き男女がある。
男は此附近での財産家武田家の次男で名は武と呼び東京の某學校を卒業し一年志願兵として入隊し一昨年の暮豫備騎兵少尉と成つて歸たのである、又女は名を清子と云ひ之も昨春高等女學校を卒へた許りで武と清子の戀は日はまた淺いが情は頗る濃かで希望の光は互の胸中に描れて居るのだ。
武は軍服軍帽嚴めしく腰には三尺の秋水をさげ常に氣高き風彩は一層威嚴を備へた。清子は洗た許りの艷々しい垂髮を白のリボンにて結び白き顔は少しく紅をおび黑目勝のパツチりした眼はいつになく輝いて居る。
かゝる中にも時は刻一刻迫つて來るので武は急に清子に向ひ
『それでは是か當分の別です、僕も充分働く覺悟ですから貴孃も無事に待つて居て下さいその餞り土産には胸の勳章だ!!』
言葉は勇しいが聲は力なく聞へた清子は聲を曇らせて
『ハイお名殘惜うございますが國家の爲ですあとは御心配なく充分お働きなすつて下さいまし。』
『さらば清子さん!!!』
『武さん御健全で!!!』
言ひつゝ共に仰向く途端一度に落つる血涙二滴‥‥‥!!!刹那!!汽笛一聲!!!天地も割るゝ計りの萬歲の聲と共に列車は徐々に動き出し遂に惜しき袂は別れたのである。
列車の兵士は帽を振りて別を惜み群衆は之に對して不絕萬歲を連呼して居る。

吁!!此の光景を目擊した清子の心中は……!?!

清子は稍暫時呆然として次第に進み行く列車を見送り居りしが忽ち胸中に湧き出づる感想は膓を斷つ如く見る〳〵熱涙は頰を沾したのてある。

吁!!!

〔下〕

『貴官はどーして御負傷をなすつたんてす?』

我軍が○○を占領した數日後松山病院の一室に緊肩露肌の看護婦が露の一士官と語るのがあつた。

やがて士官は口を開き巧みなる日本語にて負傷當時の實況を語り出しぬ

『私が部下と斥候に出た時日本兵四人と逢ひ互に戰ひました、私は其中の一人の馬を突きましたすると其人は落ち乍ら私を切りました其傷てあります』

看護婦は傷を眺め乍ら尙も熱心に聞いて居る、士官は一息して語り續けた、

『私は又其の人を突きました、すると三人の兵は皆驅けて來まして「武田少尉殿!!!〳〵」と呼びました』

『アッ!!!』刹那!看護婦は倒れた。

『貴孃!!〳〵』士官は驚きつゝ叫んたのてある、

『そ……それては、武田少尉は……武さんは……アー』

『看護婦は堪へ得ずして聲を上げて泣き伏した、

『貴孃武田少尉知つてる人ありますか?』

士官は不思議に思ひつゝ問ふたのてある言はれて看護婦は起き直り、

『ハイ知つてる所では無んてすそれからどうしたか聞かして下さい御願ひてすどーぞ早く!!』

言ふも涙聲士官は又も語り出しぬ、

『少尉は起き直つて『殘念だ!!!』と言ひながら懷中から寫眞を出して『清子さん!!!』と唯一言寫眞を握つた儘死にました……』と士官も流石涙一滴……

之を聞いたる看護婦は實に氣も狂せん斗り……直ちに懷中より取り出す一葉の寫眞!!

『噫!!武さん!!!』の唯一言、眼中溢るゝもの雨!?!涙!?!萬感交々至り思ひ迫り又もドット倒れた。

吁!!此の看護婦とは誰ぞ……實にや武田少尉が未來の妻!清子孃てある。

清子は武と袂を別ちてより間もなく特志看護婦を志願し今は此の松山病院に在りて敵の負傷將士の爲いと親切に盡しつゝあるのだ、然るに悲慘なる哉!!!朝な夕な忘れんとして忘られぬ武は遂に異國の花と散り、幸!?!不幸!?!己が日夜看護しつゝある士官の其の仇敵ならんとは……!!!

吁!!噫!!清子の心中は……!!!

（完）

◎靜ごゝろ

磐城湯本　露　子　女　史

一

小雪混りに雨しと〳〵と板戶を敲きて、惡魔の姿仄見ゆる夕闇の空を、人影二ッ扉に怪しく、寄り添ひつ呟く聲の濕めれるは、空模樣の故にはあらじ。

『もう些と辛棒をし、ね、厭かい!』

云ふことの節々大人びたれど、語尾は大く亂れておろおろ聲なり。

『お前お阿母さんに何とお曰ひだつた。え、屹度出世します程に、御身體を大事に待て居て下されと立派に申たてはありませんか。それに三年も修業をして、此上のお勤めが出來ぬとは、まあ、お前の意氣地なしにも呆れよした。それてお前の役目が立ちますか?』

末は涙に曇りて、姉は心の限りとかき口說けば。

『姉さん、そりあ俺だつて……』としやくり上げつ、

「そりあ俺だつて、早く住職になつておつ母さんや姉さんを樂にして上げたいからこそ、一生懸命に勉强もしましたが、今日といふ今日は……

……』とむせぶ涙に語を切らしぬ。

二

姉弟は早う父に別れて、母の手一ッに生育ちしが、それさへ其の日の活計に追はれて、扨てこそ姉をば水仕には出したるなれ。そは冠木門厳めしき長者の家なりしが他人の飯の味は知らぬ身の、伏屋戀しの念に驅られて、涙の乾く暇とてなければ、さすがに主夫婦もいじらしとや思ひけん、氣立優しく忠實なるに、暇與るゝもいと惜しう思ひて、せめて弟に

ても近くに在りなばとて、幸、正德寺の和尚の小僧欲しと洩らしけんを思浮べつ。今の世は學問てなくては渡れぬこと、心掛一ツにて名僧智識にもなれることなど、細々に說き聞せて律義者の母なれば、是非なう背めしは、三年の昔、花も笑ひ、鳥も謠ひて、小春の日和暖かなりし日なりしとかや。

三

『此の間も二人共丈夫て勤めて居ります故、御安心下さりませと馬子の吉さんに言傳けて貰た許りぢやないか、それに……』と嫂をしば叩きて詞を途切りぬ。

『だけれども、俺らは到底も坊さんになれないのだから……』と伏目勝に悄氣踠れば。

『そうお強てない。れ、そら、お前いつか言つたぢやないか、和尚樣に仕へるのでない、彌陀樣に仕へるのだ、如來樣に仕へるのだつて、お前まさか忘れやしまいね、エ』と念を推しつ、

『さあ、早く歸寺つて彌陀樣、如來に御詫をおし。』となだめつ、すかせば

『ハイ、』と俯きて言ひ淀みつ、後は默して肯く姿の可愛さ。

母は入里距たれる根岸といへる山里にありて、草鞋、飴菓子の三文商賣人目寂びたる山家の住居に、愛とし子姉弟に花を咲かせて、亡夫へせめての土産と、しほらしき寡婦暮し、姉娘の名はお藤、二九からぬ年の身ふけて見ゆるは、身裝のあまり質素なればにや、六歲劣りの弟今年十二の春を迎へて、其の名も智童と僧めきたるも床しや。

四

現時の僧に肉食妻帶など說くは、如何にも時代物めきたる感はあれど、さりとて破戒の墮落とは心得られぬことぞかし。爰の住寺の森鬃芳といへるは、高輪中學林以來の秀才なりしが、少しの蹉躓より自棄になりて御朱印附の田地悉反、今は粉若湯の代に變りて、伽藍の金鏢、佛器佛具はいふも更なり、金に換いては酒を仰りて、祇園島原の里に狂ひつ、日に募る亂行飽ましくも、法の道辿りて衆生濟度などとは思もよらず。小僧門前に習はぬ經の讀める筈なく、質屋の使、酒屋への御用、子擅持つ手に貧乏德利とは、さても淺ましき限ならずや。

『酒だ、酒だ!!!』

さりとて一文の錢だになきにと、おづ〳〵しつゝ顏を窺へば、一喝『借りて來い。』との嚴命なり。

地藏の顏も三度とやら、返す的なきに積る借金、貸て吳ぬは承知なれど行かねば憂目の恐しく、小さき胸を惱ましつゝ、辿る畔路も酒屋の門、見事はね付られては遣瀨なく、空手で歸ることの叶はねば、扨こそ長者に姉を訪れたるなり。

『又そこに吠いてやがるな!』矢庭に叫ぶ闇の聲、霹靂と耳轟かすも理姉弟の前には大入道の佇めるなり。

愕然と肝をつぶして抱合ふ刹那、鏡の大眼ハッタと睨みて身動かば吞まんの氣配恐しく、

『歸り返事を如何したんだ?』獵者逃せし獵夫の如く罵り立つれば、

『あの……爰に用事がありまして……』硬張る舌を無理に操り只管に辨じ詫ぶれど、聲の出てねば思の通ふ筈もなく、振いし聲の涙に濁りつ

『ヘン用事?餓鬼の癖に』と面憎げに鼻での挨拶、

『勘辨して下さい、此から、屹度……』と打詫ぶるを耳にも掛けて、慈悲用捨も荒くれ男の、肩上摑て引立れば、

『アレ……姉さん……』悲鳴恰ら消え入る如く、繰り返木魂のいと凄う。お藤はヨゝと地に泣き伏す。

五

『最う一度行て來い、いゝか酒五合の形には正德寺の敷地建物悉皆だつて。』威丈高に呼はりつゝ、米嚙に時ならぬ波を打せて、眼血走り、舌甞づり、仙人は鬼とや見て腰や拔かさく。

厨裡の隅に跼まれる智童、今は力なく立上れば

『道草するな……』と嚙み付く樣なり。

『ハイ』と微に應する語の、何時になく力込もれるは、常に智童に相應しからず。

・　・　・　・　・　・

翌朝和尚は智童出せとお藤に迫りぬ。朝日映ろう障子に雀の影二ッ描きて、垣の紅椛靜心な散りぬ。

（完）

○若き尼

能登國　比古田君子

「旦那樣。先の奧樣が光來しやいまして、御目に懸りたいと申して居られます。」と下女お松が閾の外に手を仕へて返事を待つて居る。

「何用あつて來たのであらうか。逢ふ理由はないと云へ。」「ハイ。」とお松は立ち去つた。

八疊間の東向一面硝子戸の前に、大きい欅を以て莊ひたる机二個並び其上に白梅の小鉢が飾てある。

右が床にて後の方に大きい棚が幾つもあつて、其の中には金文字入りの書籍が詰まつて居るので、大概身分が分りませう。近年成功した小說家若林柳露と其妻秋子。夫の作を清書するのが役なので、亦中々の歌人である。今年の勅題新年の山を作つて勅撰に入つた位の名人である。

「あの旦那樣是非御目に懸りたいと、呉れ〴〵も賴んでいらつしやいます。」

「ウンそうか、そんなら此處へ通して呉れ。」

下女は去つた妻君の起つたは便所であらう。

「御免なさいまし。」暫時ためらつて居たが、誰も居らぬ乃で安心した風で入いた。

旦那樣。堪忍して下さいまし、私しが惡う御座いました。」と無禮にも縮緬のお高祖頭巾をかぶつたまゝハンカチに顏を覆ふて泣き伏した。

柳露君は無言に見つめて居る。

黃八丈の綿入に琉球飛白を着流し、顏色蒼白く瘠く窶れて往事の面影は跡もなく、伏したる身躰は打顫ふて居る。漸く、擧た眼の視線は秋子が机の上の女子文壇に注いだ、時に秋子が入いつて來て机の前に座つた。

秋子ぱしとやかに

「貴女御出てなさいまし。」

「ハイ今日は飛んだ御邪魔に出まして。」

彼女は濕へる眼を拭ひて

「旦那樣の許を去りまして島崎家へ行きました時は世の中は金次第。失禮で御座いますが當家より島崎は遙に金滿家で、それに此方の旦那樣は朝夕本計りに念を入れて、是れと定まる營業もなく財産は日々に減る斗り。と父や母の申しますのに迷ひ。申込みあるのを幸に事に寄せて旦那樣の許を去り島崎家へ婚嫁きましたが嘸只今目が覺めました。」

「金滿家は只金のあるのみて妻を恰も玩弄物か何かの樣に取扱ひ、何かと云へば直ぐ出て行け私しに少しも自由を與へて呉れませず、もとより夫婦の間に愛情なんぞのあらう道理もなく、先逹て御座いました戰爭の始まつた以來國債の募集に幾度御出てになりても少しも應じませず私しは見るに見兼て少し口を出しました處が女の口入には及ばん、持とうと持つまいとオレの勝手だと人樣の前で踏んだり蹴つたり、あまりの事に裏口より脫け出でゝ家に歸りました」

彼女は斯く話して亦もや嗚咽ぶのである

「して貴女の用と云はれるは夫れてすか。」と邪慳のものいひ。

「何卒最う少し……、」

彼女は溢るゝ涙を漸く呑み込み。

「夫れより朝夕思はれるのは旦那樣の情、今更父母を恨みましたとて後の祭り、每夜見ますのは旦那樣の面影優さしき言の葉給ふを聞きて喜べは忽ち醒めて只うたかたの消ゆるが如き果敢無き夢。

私しが罪をお詫罪するは是れと縮緬の帽子脫げば圓滑なる坊子頭。

流るゝ涙は瀧津瀨と零れ、泣き聲の逬るに氣附きハンケチを嚙み締めて忍び音に泣くのである。

柳露君の眼は潤んだ。秋子は顏を反むけて泣いて居る硝子戸の外には先刻より降り出したる春雨のしと〳〵と欄に注ぐのである。

「嗚呼貴女の心は明りました、是れからは亦ちよい〳〵遊びに來て下さい妻も淋しがつて居りますから。」

彼女の淚は益々落る斗り淚の泉の涸れぬのは不思議てある。

戸外は益々春雨の降りしきり、一陣の風颯と吹いて橫さまに硝子戸に懸つた。

・　・　・　・　・

人と氣が合はんとて交際を求めざる、若林柳露君が妻秋子は頃日來某寺の若き美しき尼と親しく姉妹も及ばぬ程である。

（をわり）

○爪あげ

岡山縣　松本最登

（一）

學校から歸ると、すぐ本を投げ出して聞いて

『さア凧上げだ、いゝ風が吹いてらア』
と太郎は年玉に貰つた二枚半を擔ぎ出さうとすると、
『まア太郎ッ如斯な寒い日には、お廢よ、又風邪をひきますぞ』
と母さんの聲。それをば耳にも懸けず
『子供は風の子だ』田圃を目がけて一散走り……
『マア仕様のない兒だ』母はつぶやいて勝手に入つた。

（二）

『正ちやんのは二枚かえ、此繪は加藤清正だれ』
『僕のは龍だよ、去年のお正月に買つて貰つたの』
『僕のは新しいよコラ露助を斬つてる處だ、いゝだろう』西風がヒューヒュー吹くのも厭はす、顔を金時にした腕白が五六人。藁を積んだ陰て、各自に凧の自慢ばなし。思ひ出したように大將の太郎が
『喜ちやんは何故凧を持つてこないの？』
喜ちやんと呼ばれたのは、色の白い温順そうな、そして年の一番小さいの。
『僕ア……凧がないの、買つて貰はないんだもの』
『えッ、買つて貰はないの可笑しいな、何故なの？』
『凧は嫌いなのかえ』
『アヽ、喜ちやんは飯ごとが好きよ、何時も花ちやんと遊んでるの』
鼻汁を垂らしたのがいふ。
『今、さき、呼びに行つた時だつてれ』
喜ちやんは顔を眞赤にして首垂れてしまつた。
風はますます强う吹く。

（三）

『さア揚げよう、いゝ風だれ』太郎が眞先に。
凧々上れ――ふけふけ風よ……
と各自に歌つて揚げ始めたが風はよし、見る間に雲井遙に四個の凧、丁度粥程に見える。ブゥーンウナリの音が心地よげに聞える。
『よい音だれ』正ちやんが一寸糸に耳をあてゝ
『僕のが一番高い』
『それから僕のだれ』

凧の蔭に小くなつて、
　　世界に名高き日本國――
　　　旭にかゞやく日の御旗――

（四）

『喜ちやん一寸持つて居ておくれ』太郎がいふので、喜ちやんは太郎の凧の糸を握つた
『いゝか、はなしては不可ないぜ』
『あゝ、はなしやしない』
『强く引くネー』
『二枚半だもの』とさも得意顔。
喜ちやんは面白がつて、ウナリの音を聞いたり、手繰つたり延ばしたりして居たが、どうしたはづみか凧は喜ちやんの手をはなれてプーイと飛んてしまつた。
太郎は眞赤になつて、
『喜ちやん何故凧を飛ばしたんだ。あれ程いつておいたのに。早うとりに行かなくちやア。他人の凧を飛ばして置いて見て居るもないもんだ。他の子供に拾はれてしまわア早う行かなくちやア』怒鳴り出した。
『太郎さん堪忍して頂戴よ、つい飛ばしたんだから』
喜ちやんは凧をとりに行く、長い影法師を地にひいて……後に太郎は
『オイ皆、歸らんかい、喜ちやんを困らしやてやろう』
夕日は村の大松にかゝつた。

翌くる日喜ちんが泣く泣く學校から歸つて來た。

（おわり）





尾上柴舟先生選

天

○内裏雛

千葉縣上總國山武郡成東町　吉原靜江女史

男雛たゞしき居ずまひに
女雛若うて白き面
琴をり傳ひて璨を
御衣の端を歯に咬へ
女雛のみ手に尾の觸れて
鼠さわがず菱の餅を
事ありけりと男雛
後うかゞふ老鼠

おほとのごもりおくるゝや
闇に怖ぢます桃のかげ
走する小鼠さかしげに
壇より下したてまつる
あなやと強く振らすれば
さらへてこそは歸りけれ
悠々として出でたまふ
矢庭に抱き奉つる

物の怪まろを捕へぬと
とものみ奴御階をよぢ
さくら橘山吹の
樂を停めて靜かなる
居眠りさめて怠りの
鼓の音は鼕々たり
夢破られて雛の主
かしこき眼いとはやも
逃ぐる鼠に男雛の
夜のおとゞの雪洞に

玉のみこゑの朗らなるに
鎌髯あげて心得貌
殿上今や花吹雪
五人囃子はいとまあれや
調や召すと打ち出す
鼕々たりや鼓の音
童女七つ燭を取り
女雛に力添へまつる
御手を取りて据ゑまつる
灯して置く春の宵

輕々叙し去り叙し來つて、興趣横逸、眞に大家の風あり。

地

○放鳥

京橋區銀座二丁目十五　河村紫香

うづむべき柩の前の。
大なるひとつ鳥籠。

慈悲の手に今ひらかれぬ。
喜びにみちたる風を。 力ある翼にうけて。
百の鳩いづちとびゆく。
里中のやしろの屋根か。 岡のべの林のおくか。
山かげのくち木のうろか。
　むさぼれる鳥屋の主人。
　恐ろしきゑみをうかべて。
　踊りくる小鳥をまてり。
故き巣を忘れぬ鳩の。
愛らしくあつき心を。 餌となして利を釣る人よ。
　あはれなる鳥を欺き。
　悪るもの丶腹をこやして。
　慈悲なりぬあゝ慈悲なりぬ。

深酷、最後の一節世の僞善者を罵りて、いたれり、盡せり。

人

○我が歌

筑前宗像郡河東村野口花田吉六方　花田翠子

清水となりて岩蔭に

さはれ流れて末終に 樂しき戀を語らはや
月の宮居に忍び來て 海に入らんをいかにせん
さはれ思ひを語るには 君と相見んすべもかな
いつも情につらき世は あまりさやかに照すなり
星とならはや紫の そよ夕暮ぞなつかしき
とこしは戀を契るべく 光まばゆくきらめきて

清麗、清は星の如く、麗は清水の如し。

秀逸

○哀れ將軍マカロフ

下總國　小高清子女

あはれマカロフ、 まことや汝れは、
花なりき、 花なりき、
醜草がくれ、 強き香の。

春深うして、　浪さかまきて、
汝れ花ちりぬ　海にかくれぬ。
さいへ猛き死、　香こそ薫ぜめ。
汝が最後ぞ、　雄々しき淸き、
汝が身汝が船、　裂けぬ沈みぬ、
さもあれ汝が榮光、　碎けじ朽ちじ。
耳かたむけよ、　旅順のほとり、
風永遠の哀歌を奏で
浪千歳の愁ひを語る。

○別るゝきはに　　東京　重田春子

心をこめて描きつる、　忘れな草の藍色に
とはのちぎりをひめつゝも、　君にさゝぐるこのカード
忘れますなの願ひある、　弱き子今ぞ別れなん
さらばよ我は宵々に、　かゞやく星を君と見て
夕雲遠き西の空、　すゞろうたはん君が歌。

○逸　題　　神戸　尾崎みとり

罪にしづみし　人の子よ
野によぶ人の　聲をきゝ
ナザレの聖人の　下にゆけ

ノアの洪水　おそひなば
箱舟に入る　物はたゞ

○たのしきその　　京橋區　岩田傳子

もゆる園生の若草に、　書すて置きて逍遙へば
雲雀は空に聲高く、　四邊に花はさきみちぬ
かゝる樂しき園の中に、　詩をうたはむも興ありと
とらむとすれば書の上に、　二つの蝶ぞ眠りたる
まどかに夢や結ぶらん、　蝶よ眠りね、いつ迄も
菫の床にわれもまた、　暫しまろびて眠らむに、

○曙　光　　茨城縣　石塚孤芳

巖に東天を仰げば　黃雲彩雲紫の雲
白鶴聲ありとばり開けぬ　神かへります彩衣美々し。
漁士が妻子は額つきいのり　胸に十字の都女もあり
人様々の默禱しばし　太古にかへる新潮の韻。
初日の光七浦に渡り　平和の色天地にみちぬ
世に辛き子も甘き子も皆　さゞめき若しこのパラダイス。

○星の世界　　高知縣　吉良夕暮子

み空に高く輝ける、　數多の星の彼の世には、

白雲靡く山の奥、
清き泉の聲やある。
はた其の泉末遠く、
流れ流れて打ちそゝぐ、
潮うづまく青海原やある。
ぬばたまの夜は更け行きて、
ひとりみ空に輝きて、
よすがら泣かす月やある。
夜毎夜毎の星影よ、
長世變らず輝きて、
如何にか思ふ人のこの世を。

綠の木間もれ出づる、
山を平野を過ぎ行きて、
空と水とのけぢめなき、
萬籟眠りに入りし時、
多情多涙の詩人を、
きらめく光り空高く、
なれが靈しき心より、

○姬のみ聲

千葉縣　岩西たけ子

霞の中を傳ひ來て、
姬は長閑にいへるやふ、
ふる巣の眠りさませかし、
春立つ今日をやよ告げよ、
姬は靜にかたりけり、
里の少女やわらはどち、
菫たんぽゝとく咲けよ、
姬は幽におとづれぬ、

谷の冬戸を打ちたゝき、
やよ鶯よ鶯よ、
梅の梢に明日はきて、
雪解の野べにおりたちて、
やよ若草よ萠え出でよ、
或は胡蝶も來るべし、
やまのふもとを越る時、
やよ櫻花粧へよ、

大和島根のかざりなり、
床しき色香はなとかし、
あらゆる物をさましゆく、

花のあるじは汝のみ、
かく姬神は隈もなく、

○雛祭り

鳥取　上山千重子

今日しも三日の　雛まつり
あさげのけぶり　やゝうせて
玻璃に紅さす　窓ちかく
音もせはしや　下駄の鈴。
我が家の門に　音やみて
やがてすゞしき　聲のいろ
美代ちゃんいてと　訪づるゝ
これやこの日の　はつの客。
ゆふべひと夜を　小まくらに
ゆるさぬ髷や　そとなづる
小さき手をば　かいとつて
ひゝな見ませと　みちびけば。
五人ばやしに　武者人形
さて美くしき　内裏雛
柳にまりや　桃つばき
美代子も今日は　主人ぶり。

御さゝひとつと
小さき客を
彼方のひなも
此方のちごも
猪口持て
もてなする
美くしく
愛らしき。

○聖壇

信濃　安孫子美子

燃え立つ紅の幕ゆれて
めぐれる百合の香も高う
白衣の袖に額あてゝ
神ゆ降らすバプテスマ
うちにはほのめく十字架に
靈彩仰ぐ神の堂
たゞ眼を閉ぢてひれ伏せば
「悔いよ」の聲の胸に沁む

○朝

秋田縣　石澤千香子

闇のとばりの雲うすれ
清く靜けきあさは來ぬ
我身しばしはこのときを
平和と希望にみたされて
きよく短かきこの朝よ
きよくけがれずとこしへに
紫雲たなびく朝の色
皆人業につかむとす、
聖書ひもときいのりして
神に讃美のうたうたふ、
なれこそ日々にわがたまを
行くべき道に誘ふなれ、

○春曉の祈願

上總　十六夜女史

うす紫の雲の戸を、
白馬金鞍轡高く
大御光にてりはえて、
露は大野にみちにけり。
この曉を聲清く、
黃金の鍵にひらきつゝ、
ねり出で給ふ朝神の、
彩る光り七色の、
春の想をあふらせて、

若葉綠のたわゝなる、
葉と葉の蔭に身を置きて、
綠の羽翼に打のせて、
我が夜の眠さすしゝか。
迷のさ霧慾の雲、
晴れての後の悔の空、
よし塵の世にうもるとも、
かの神の代に我魂の、
永久の綠の葉かくれの
枝と枝とをわたりつゝ、
天つ光を香も高き、
花にさゝやく駒鳥よ、
清く吹きくる朝風に、
我身はもとの儘ならず、
深き崇めを捧げてし、
この駒鳥の羽ねにのり、
神のもすそに隱れ果べき。

○雲

神奈川縣　中村美津枝子

きのふは東けふは西
雲のゆくへを眺むれば
高嶺はなれし朝戸出の
けふはあかたの村時雨
あすは深山の朝吹雪
はかなき物にたとへたる
朝には出でゝ夕には
きのふの錦けふの麻
富貴はげにも浮雲の
風にまかする大空の
げに世の樣に似たりけり
雲は嵐になびくなり
いくその袖や濡すらん
誰が菴にかつもるらん
此大空の雲すらも
かへる斗りの定めあり
かはるに早き世の中の
定めなきより定めなし

○微吟

大阪市　田中萩雨

若草小徑わけ來れば、
我かりつらき柴笛に、
運命かなしき人の子の、
裾つめたき夕露や
もだえは深き春の野邊。
若き愁は絕えざるに、

胡蝶よ何の桀に舞ひ、
湧きし血汐はとく涸れて、
昔の戀の詩秘めん、
嵯峨路にのこる夕月夜、
そゞろ徴吟の旅の身を、
菫よ何の香に誇る。
創痩のみ殘る柔胸に、
泪、それさへむなしくて。
想ひ冷たき胸抱きつ
傷むか小星あなや流れぬ。

○藤

上毛　木暮とよ子

さけのいろは濃むらさき
うらみやあらぬ行く春を
ほとゝき思をたどりては
池の汀にたゝずみて
白きは清しふぢのはな、
たゞうつぶいてうなづきぬ。
少女の君よ夕暮の、
やさしきをしへ藤に得よ。

○出征の夫を思ふ

栃木縣　秀子

白雪いたく降りつみて
海のかなたに銃とりて
みぞれ交りに降りしきる
鷲の住むてふもろこしに
閨もる風もみしにしみて
霜ふみちらし雪けたて
衣かさねてもかくばかり
かの遼東の荒野邊に
あすのいくさを思ひつゝ
夢の中さへたゞならぬ
吹く風寒きこのあした
在す我がせやいかならん
雨の音さむきこのゆふべ
戰ふ我がせやいかならん
手枕こほる冬の夜を
いくさやすらし我がせごは
寒き今宵のこのよはも
草をしとねのうたゝねも
ねむるとすれどいねがての
あゝ我がせごやいかならん。

○虹

石狩國　吉田みか子

里の小川に影なげし
五色の虹は夕ぐれの
鐘のひゞきに消え初めぬ。
あはれ見る／＼うすれ行く
さびしき空をかざらすや。
神の惠みの幸うけて
葉末に露も宿れるに。
夕の虹よ今しばし
汝が姿をうつすべく

○里搗衣

上總國　鵜澤花月

夜もすがら、
ふしみの里に久方の、
賤の少女が衣うつ、
ちらぬ露置く袖の上かな。
誰をまちてか呉竹の、
月の桂もちるはかり
音ふき送る夜嵐に、

○若菜摘

岩代國　佐瀬ふぢ子

ゆきもまだらの春の野に、
そよ吹く東風になぶらせて、
赤襷かゝげて妹が、
ねいさん早くこゝにとて、
あいと應いて姉行けば、
たがひにかほを見合せて、
にほひこぼるゝお下げ髪、
籠を軟手の姉妹。
馳せ行くかなたの岡の上、
こなどり招ぐ愛らしさ。
ましろき片手に初若菜、
ほゝと笑むなり樂しげに。

○里の小川

岡山縣　松本元

朝な／＼に顔あらふ
小鮒三つ四つ漪のひまに
朝水かさ打ちまして
夕天雲紅に
月をも宿し星をも宿し
土橋石橋の下くゞり
里の小川の水清み
見えてかくれて面白や。
岸の柳の糸あらひ
水に映りて美しや。
神の秘言さゝやきて
村より村と流れゆく。

○大和心

茨城　舟橋栗子

みくにの爲とつ國に
軒端かたぶく草の屋に
高き低きのわかちなく
敵をきたむるますら男も
唐ころもうつ賤の女も
都もひなもおしなべて

大和にしきの花もみぢ
赤き心のいろふかし。
或は逐ひつ又はきり
旅順の壘も乘取りて
海には血潮をおし流し
陸には屍やまをなす
あな男ましや男ましや
我日の本の大將軍
豐さか昇る旭の御旗
とく押したてよ奉天城。

○春の小川　茨城縣　船橋栗子

菫花さくはるの野の
小川のほとり逍遙へば
吹くとしもなき春風の
袖にえならぬかをりあり。
蝶は戀する花のかげ
花は戀ゆゑてふまてど
昔のきみはあらずして
我戀さすがやせてけり。
いさゝ小川の淸けさに
たゝうつゝなう眺むれば
菫花束流れきぬ
誰れの戀路の語草。

○若菜　鳥取市　上山千重子

あさ日の光り朗らかに
そよ吹く風もあたゝかみ
軒の青柳うちけぶり
霞につゝむ向ふやま
まこと春と世はなりぬ
昨日も今日も雨なきに
前の小川の水ますは
たにまの雪やとけぬらん
咋まつ野辺の若菜はも
この春の日に萠えいでぬ

○秋の夕　赤坂區　河村董秋子

萩の花獨りこぼれて、
虫の聲細うみだるゝ
破れ垣に夕風さむう、
庭の面落葉みだるゝ
夕べ森にかへる小鳥の、
群れ一つ二つ又三つ
さびしうも暗き騒ぎつゝ、
うす暗き木陰に入りぬ

○皇國軍人　長野市　飯塚ぎん子

姿けだかきしきしまの、
やまと島根をしめて、
來る春每に咲きいづる、
色うるはしきさくら花、
あさひに匂ふ其れよりも、
我日の本のものゝふの、
あかき心ぞかんばしき。
くちぬいさをゝ外國に、
たてし雄々しき武夫の、
はえある譽をみにおひて、
大和心のひとすぢに、
げにけなげなる其わざは、
君がみいづともろともに
うせてのこらん永久に。

○春の歌　上野國　三木たま子

十坪にたらぬ庭園も、
菫たんぽゝ蓮華草、
春にはもれて花ぞ咲く、
黄なる蝶や白蝶の、
實に樂しげに昨日今日、
舞ひ遊ぶなり花の上。

○女官の歎　埼玉縣　田島いよ子

折から泣き琴の音の、
爪音ゆかし想夫戀、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
笛もあはせて何となく、
聽きわたる春の夜や。
東の對の小簾あげて、
しのび出てたる若女房。
月はうすみにとざゝれて、
あはくも匂ふ軒の梅。
身を欄干にうちよせて
しばしはゆらく黑髪や。
錦の袖につゝみても、
あまりてもらす忍音や。
義理の柵かけられて、
せかれてかなし妹背川。
淸き流の底深く、
沈みもはてし思ひかな。
思ひある身は糸竹の、
音も泣けよとのしらべかも。
せめては月よ朧にも、
人のすがたをうつせかし。

○折にふれて　磐城　絹引白子

咋夜の夢の跡とめて
今朝文箱をひらく時
母の給ひし一片の
その玉章はいでにけり
あつき情の跡見えて
そゞろ昔の偲ばるゝ
されどわが母今あらず
墓には草の生茂り
香花手向くる人もなく
あはれ蟲のみ咽ぶらん。
老いたる叔母は只一人
荒れたる庵に瞳うみて
妾の歸りを待まさん
夜半の嵐よ心あらば
强くな吹きそ老の身を
春風たちて野も山も
錦の衣着なすまで
そのとき妾も業を卒へ
目出度叔母に見えなん
歸りて花を手向なん。

○偶感　澎湖島馬公　若葉女史

椰榔樹林風絕えて、
新高山頭月高し
星を臨みて戀を泣き、
月を仰ぎて身を恨む

露の命の人の子よ、
人の世はたゞ五十年、
いかに熱涙溢るとも、
口に僞善を唱ふるも
心は惡魔の王なるぞ、
最後の希望天にあり、
石より冷たき此世界
何所に汲むべき人やある
此世の望み早絶ちれ
最後の希望天にあり

德島市　住友登喜子

○元旦の歌

黄金、紫、くれなゐに、
清くかゞやく初日影。
囀をいづる百鳥も、
千代に八千代と囀りつ。
國旗ならべる八巷は、
いや麗はしき注連飾り。
やがて見初むる門禮者、
紅匂ふかんばせや。
君が稜威もいと高く、
雄々しく歌ふ戰捷の歌。
彩なす霞をかきわけて、
聟あたらしく君が代を、
色も常盤の門松に、
羽子つく少女の袖ともに、
紙たこあぐる稚子の、

廣島縣　池田仙渓子

○誰かある

更けゆくまゝにいや冴えて、
月のひかりの麗はしや、
塵なき夜半に澄みわたる、
それにも似たる我が心。
くらき浮世の野にやまに、
雪のすがたの清きかな、
しきて汚を覆ふなる、
それにも似たるわがおもひ。
神のたふときはる風に、
あゝ美はしき色と香の、
ほころび初めしさくら花、
それにも似たる我が涙。
月雪花に似たるなる、
清き我が身のぬれ衣、
干すべき人は世の中に、
君をのぞきて誰かある。

常陸國　西野春女

○春を送る辭

あてをほこりし庭の花、
野べをいろどる華くさ、
見渡すかぎり青葉して、
武陵の昔忍ばせし、
萬の花は地に委して、
うす紅の色もなし。
老いて暮れゆく此春を、
暫し止めむ術もかな、
風に落るゝはなびらよ、
高くも積みて山をなせ、
別れはつらき春の日の、
流るゝ路をとめなむに。

廣島縣　堀田はる子

○小女子

今ぞこの日のわかれとて、
あしたの星や降りけむ、
庭にひらきし白うめを、
みつめて立てる小女子や。
盡きせぬ愛に醉ひつるか、
そゞろに花に近づきて、
ま白にきよき装ほひを、
くろき瞳にながめけり。
かすかにもるゝ微笑に、
ひらける唇は神や入る、
賑やぐ如きそのさまは、
譬へばそれもわか星か。

備前　松本最登

○明星

琴の音たえて高樓の
欄干に凭る姫君が
み空に輝く明星を
仰いて淸醉露宿す。
契り濃かき戀人は
運命はかなく黄泉の人
姫がみ胸の血は沸きて
星の光は幽かなり。

熊本市　大島菊子

○佛王ルイ帝

昨日金殿玉樓に
榮華の夢の果敢しや
斷頭臺に置く露の
たゞかりそめの人の界や
見よや妖雲翳りて
一ツきらめく新星は
人の命にさも似たり
人の命のもろければ
三丈の空眼を閉ぢて
冥府の人とはなりにけり
瞑想天を仰ぎ見て
吾今佇む稻葉川
流るゝ水に情ありて
星の光は地に落ちぬ
あゝこれ何の啓示ぞや

大和　中島菊枝

○若き尼

戀に黄金に肉を賣る
人僞りの罪の世に
何はかなみて春の日を
御經に暮らす若き尼
その淸らけき顔容
その美しき京訛り
世に榮ゆべき幸はあれど
武士が要ぞと雄心に
立つる操のいやたかく
磬うち鳴らす山寺の窓

周防　堀龍子

○未亡人

みぞれふりくる冬の夜の、
柴戸を洩るゝ風寒み、

靈燈淡くまたゝきて、
甍の金色輝りはえて、
ひまより見ゆるうつしゑは、
あこが瘦顔をすかし見て、
心ともなく床間見れば、

○あゝ遼東

あゝ遼東の松の色
波る秋風寂滅の
北斗の光影消えて
暗に搖ぐは魂か火か
見よ長白の嶺高ゆ
妖雲褰族これる
今皇軍の旗進み
馬上に輕く聲揚げて
猛驚茲にひれ伏して
旭光照々赫々と

○淡　流

いとも淸けき神韵を
行きてはもどり復も行き
深き思ひの溢るれば
遥き望と流れては
標白百合紅葉も
うつし〳〵て流れ行く
神の御酒のあふれしか
神の御聲のこもれるを
さはさりながら惑情は
何も浮世とさとりなば

○水　の　韻

浮き世の塵に堪へかねて
ひとり深山に分け入れば
山又山のおくながら

奇しき煙の香に匂ふ、
亂れさしたる水仙の。
ありしまゝなる姿かな、
又もせきくる聲のみつ、
名殘をこめし筆の跡。

淡路國　仲　井　颯　子

永劫に絲は戀られど、
調傷なき此の夕、
枯蘆戰ぐ原頭の、
そこに鳴咽と呪詛あり、
猛驚風にはゞたきて、
北マンチユリヤ西黄海。
十萬貔貅飢の詩、
賦破る遼東八百里、
稜威に靡くマンチユリヤ
萬民謳歌す平和の徳。

越後國　武　と　い　子

靜けき空に殘しつゝ
こゞしき巖に咽びつゝ。
早瀬と碎け瀧と落つ
花野に迷ひ森に呼ふ。
さては美し少女子も
其處に盡きせぬ憂あり。
靜かに聞けば永劫の
何をか憂しと誰か言ふ。
聞く其人によるものを
何をかうらみん水の聲。

京　橋　田　中　秋　子

暫し憖を忘れんと、
折しも響く琴の音。
思ひ入りにし人やありて、

長閑に月日送るなる
かすかに響く其韻は
寂しく通ふ其聲は
胡蝶の花に狂ふ如と
峯の松風下す如と
音をなつかしみとめ來れば、
人もなければ琴もなし
不審みつゝ見廻せば
靜けき空にひゞかせつ
床しときゝし其韻は
をかしときゝし其調は
靜かにきけば永劫の
とはに盡せぬ天地の
き苔むす岩角に
こゝに歌はん日もすがら

○草つむ少女

流れに沿へる道のべに、
小さき籠を手に提げて、
語り合ひつゝ笑ひつゝ、
いかに可愛き小女等よ、
みちし草かご擔つゝ、
働き待てる汝れか母、

○心　つ　く　し

心つくしの花の色
あゝ眞盛の短くて
甘きは人の戀にして
夕も知らぬの憔悴の
碑三千の影淡く
何の歎思ぞ若僧の

○う　ば　た　ま

徒然の折りのすさびにや。
春風草を吹くが如と、
秋雨芭蕉に灑ぐ如と。
ゆるくやさしき節もあり、
細くすみゆく調もあり。
家居も見えす人もなし、
されど妙なる音は近し。
細き調を谷あひの、
岩まを傳ふ小川あり。
あゝ此の川の響なり、
あゝこの川の水の音。
神の御聲も宿るなり、
自然の詩とも響くなり。
小笹を鋪きて腰かけて、
塵の浮世を餘處にして。

千葉縣　美　佐　男　女　子

里の少女の三四人、
草摘さまのあどけなさ、
細き指先動しつ。
疾くつみ滿てよ其籠に、
なれらが家に歸りなば、
いかに嬉しく思らん。

茨城縣　石　塚　雲　孫

綠琴にひゞく其匂ひ
木の間をはらふ夕嵐。
蜜に醉ひたる白蝶や
夢は敢果なき運命かや。
朧の宵を鐘樓に
杵とる雙手ふるひたる。

伊　勢　三　谷　た　め

今欄干に我が立ちて
暗に消えゆく身を思ひ
世が世なりせばたらちねの
情にこもるみ言葉に
こゝは艶なき色の廓
瀨戸のさくらも吹く風に
窶れ果てにし面影を
遂にうつろふ己が身の
靜思に耽る此の宵を
夕べの風も身に泌むに

○鶯　賦

塵の子入らぬ深山の奥に
迷ふて來しか鶯よ
うたふは戀の歌かそも
梅の小枝の花床に

○暮　鐘

夫が遺髮の框をば
名殘る夕日力なく
高くも呼ぶ暮の鐘。
手向の梅の花立てし
鐵丸にゆがめるさま見つゝ
さびしくひゞく暮の鐘。
運命を泣きし目を上げて
黑の衣に掩はれて
夕べかなしき暮の鐘。

○塵　の　身

憐れ此世に生れ來て、
波のまに／＼にたゞよひて、
花輪に殘る一しづく、
殘るといへど朝日に消えぬ、

沈みゆく日を眺めては
自づからちる涙かな。
溫きみ膝にさふらひて
甲斐／＼しくもつかへむを。
名にはふさはぬ櫻町
今はら／＼と地に布きぬ。
見るに鏡の曇らむに
たゞ行末を觀ずらく。
天には星の影もなく
聞くにはつらき三昧の音。

備後國　伊藤重人

吹く梅が香に誘はれて
おぼつかなげの口ぶりに
一日を歌にくらしては
淸き夢路をたどるかよ。

石狩國　佐々木まさ子

しづけき墓に送る時
しづまり返る大空に
夫が形見の水筒の
袖を涙にしぼる時
仰ぐみ空は寃の神が
萬象こゝにさびまさる

愛知縣　戸田きち女

寄邊渚の捨小舟、
行くは何處か白露の、
あるは花落ち露殘る、
あるは露落ち花殘る、

殘るといへど夕べを待たで、
誰れか情けの濕ひを
あゝ情けなの人々よ、
折りしも告ぐる入相の、
心なに散る紅葉も、
淋しさ、悲しさ、果敢なさの、
人の無情をかこちつゝ、
胸に湛へて一しほに、

○小鳥の聲

まとの若竹つゆちりて、
ふく朝風もこゝちよし、

○淸き泉

白雲靡く奥山の、
長世變らず湧き出てゝ、
霞める春の朝には、
淸水が上に散る花を、
霧たつ秋の夕には、
淸水が上の紅葉を、
はへある神にかしづかれ、
淸く麗しく神さびし、

○少女の四季

袖ふりはへておもふとち、
鳥のさへづる野べごとに、
青葉しげれる木の影の、
さやけき月の影させば、
ともゑと降れる白雪を、
たのしみあそぶ少女子の、

潤む果敢なの姿とて、
贈らんものぞあゝ人よ。
吁心なの人々よ。
鐘の音遠く身にしみて、
我身の上と憐れなり。
秋の夕べのそれのみか、
恨み怨みの餘をば、
消えも入りなん塵の身や。

府下北多摩郡　小寺花子

出る日影もうら／＼と、
軒の小すゞめ聲すなり。

高知縣　吉良夕暮子

綠木深き谷間より、
玉より淸き泉あり。
春の姫神おり立ちて、
御袖に受けて遊ぶなり。
秋の姫神おり立ちて、
舟とも浮べ遊ぶらん。
塵の浮世を遠ざかり、
岩間の淸水尊しや、

富山縣　都田よし子

あなたこなたにつどひつゝ、
すみれつみつゝ日をくらし。
淸き流れに小石とり、
庭におりたち蟲をおひ。
もみぢの手にてうけとめつ、
心やがて神ならん

はがき文

地

○櫻花

高知市永國寺町 吉良市子方　吉良夕崇子

夕日の影を踏みながら、歸へり來る里の乙女子、たれに見せむとの心づくしぞ、馬の脊に薪と共に折り添へし櫻花一枝、時しも一陣の微風、無慚や、乙女が情をこめし櫻花、散り亂れて枝に殘るは蕋のみ。

馬曳く乙女花の散りしを知るや知らずや。

人

○春

近江彦根土橋渡辺内　みね子

春の空、うららかに晴れ渡りて一片の雲なく、裏林に囀る鶯の聲いとも長閑に聞え、底の小石も數へらるゝまで清き芹川の堤に、今を盛りと萠えいでし楊柳の糸長く垂れて流れ行く水に何をか描けり。

柳の水に描けるは「戀」てふ字か

秀逸

○勝栗

越後國　清水登志

「何にもならうて」と霜ふり頭の茶屋の婆が盆に乗せて出したのは、この村名物の勝栗！顔見合して笑ゑむだ客は何れも年若な將校。時は何時？秋の末つ方滿韓の山野暗澹として物騷がしい頃。

最も年少の將校叫んで曰く、ツムうひ女！

○深山路

巣鴨　田中ぶげつ子

深山路の歩みにつかれて老杉の下に憩へば、枯枝をのせて曳かれ行く牝馬の姿、坂にかくれ、木の葉軟風に二つ三つ落ち散りて、いづことも分かず鵯啼き、後は寂寥の領となりにき。

御身此寂寞の領に入り必ずや大なる或物を得しならん。

○山より都の友へ

東都　ゆかり女

秋闌けて候　月清き夕戀に鳴くか松虫いと〻秋譜の調も細う落葉冴えて世は寂寥の聲に更けて候　宵ては卿と共に愛でにし梅鉢草日増に色移り行くがうれたくて

切て朝は露に夢結ぶべう夕は月に戀語るべう捨置いて候

友に代りて只一言、山中の春亦閑かまほしく候

○破燈籠　羽前　ゆかり女史

おやまや甕子幇助に遊ばして貰ふ客衆が、此わたりをぞは〱連立あるき、此石燈籠は危いものじや、滅多に側へ寄るなと言ふて通る故、わしよりこなたの身の上が危いと言たけれど、聞かぬ顔して行過ぎぬ。

今の世この種の人多きぞうたてけれ

○附木舟　岩代國　門多さなへ

榮ちやんはこの寒いのに椽側でコツ〱と何をして居るのだろう？やがてはいつて來た顔も手も眞赤にして……………何をして居たのときけば軍艦をこしらへて居たと言ひながらとり出したものを見れば附木舟。

小兒の爲る事と言ふ事には毎も非常の趣味が含まれて居ます

○蝶のゆくへ　陸前　大槻丈子

パラ〱と散た花びらは下の小川に落ちて浮いた何處からか美しい蝶が一つ飛んでその上に羽をたゝみ樂しげに流れて行く〱、今しその數尺向ふに大きい魚が、つと頭を見はして、渦を卷いて沈んだ。妾は直ぐそこを去つた。

あゝす善尺蠖此文の眞意を覺る者は幸なり

○朧夜の記　石見　千代延俊子

一日乳母許訪ふ、湯に入らんとして見れば風呂は古木の梅の下、月は朧ろに薄絹もて包みたらんか如く、風なきに梅花一片三片零れて桶の中に落つ、乳母はいふえゝ面倒くさいと、我は夢見る心地せるを。

乳母の詩味を解せざる所却て趣あり

○玉ちやん　福島縣　柏木哲子

至急との電報に驚き妾の歸つた頃にはもう玉ちやんは虫の息。とう〱三日目に黄泉の客となられた。嗚呼海棠の花片の樣な脣を開ひて姉ちやんと呼ぶのが今でも眼前に髣髴。御土産に買つて來た人形を誰にやろ—

哀恨綿々親人の心も思ひ遣られて

○花咲く朝　韓國　野口辰子

「坊よ父は出征くるからな、大人しくしての。」
「はい、お父ちやんもう出征の、ばんじやい。」
と孝ちやんは兩手に日の丸の旗を振揚げて、高く。……高く。……吁、愛兒の小さい胚より出でた此の聲は、いかに父の胸には響きたてあろか。

○鶯　新潟縣　星野紅華子

姉さん！鶯が庭の梅に！出て御覽愛らしいこと！急ぎ黒木の窓を開けば庭の若草青みを抽く纔に五分柳は稍唆き烟に黄み、その傍なる紅き梅の梅の枝に、今やホヽ法華經の一聲……姉さん山々は眞白だのにね

○漁村の夕暮　大阪　板橋素子

夕日の光を浴びた漁村の森は、今しも美はしい榮ある色に彩られ、磯の

濱打際には優しい白い花が咲きつ消えつあゝ此夕の美觀!……無情?天はだん／＼潑墨のような幕を擴げて此世を包んでしまつた、沖遙か青白い漁火一つ。

○薔はがきにそへて友へ　東京麴町區　重田春子

清子樣下手でも心がこもつてるこの薔……エンジェルの今、露をすはうとしてる花はお好きな詩を意味してるけしの花よ、この手にしてる弓矢……ほらキュピットの……あなたバイオレットの薔薬がきかけたら送つて頂戴待つて居てよ。

○靜ちやん　下谷　加藤瀧月子

おゝ微笑むだ顏付は奥樣に目鼻付は旦那樣にそつくりです事、靜ちやんが夢路て祖母の難枯れた乳房を含んでおる姿をみて隣の老媼がゆふた靜子の父は五ヶ月前は陸軍少佐て今は軍神、母は先月靜子を生んて逝れた

○かなしみの聲　小石川　みゆき

涙の乾くは何時、醒むれば納豆賣、世を吹く木枯しの寒きを告げて小雨ふる朝など堪えがたき想す。寐むとすれば、鍋やきうどんと呼ぶ聲のうちふるびて、浮世の波の高きに泣く。あゝ世は悲愁の聲にみちて、

○曖の風　遠江　大石よし子

「坊のお父ちやんは何處!。

ふところに乳を吸つてゐた稚子は玉の樣な瞳を開いて紫の雲に輝く白星を指した。

「おー行きたい父つちやんの側!。

星は忽ち雲にかくれて、冷かに吹く曖の風。

○かたみの血潮　埼玉縣　新井琴子

忘れもせぬ十月〇日出征勇士送迎の折汽車の窓より投げ込みし絹手巾!歌をものして。今日はからずも妾が手元に送り返されぬ。見れば血潮の日のみ旗と化してしかも彈痕あり／＼と三つ四つ五つ、あゝその君は?

○お淸書　埼玉　新井こと子

弟の幾夫は今年七歲て尋常一年生てあります、今日學校から歸るや否や妾にこのお淸書を戰地の父上に送つて下さいといふのてす、甲の上なものだから、けれどあゝ何といふたらよいてせう!!父は今は……吁。

○深夜の思　三重縣　山崎初子

夜はいと靜かに更け渡りて大空は黑き幕もて掩はれ庭には木の葉を誘ふ風だもなく沈みきつて居る、此寂寞の深夜我は寢も得て思ひは故鄉の友の上に通ふのである、噫春子の君今いかなる夢路を辿り居給ふか。

○春の野　駿河　紫桂女史

若草もゆる春の野に、スミレ、タンポヽ、ツクシなど摘むべく乙女は、籠さげて、母のみひざをはなれたり、春の女神に愛の子の、これぞ恰も好畵圖よ。

○月の聲　山口縣　山下孤舟女史

妾は天界に生れて茲に幾萬歲、時に暗鬼の夜神を破り或は盈虧の好例を示して、常に下界に務むるに、彼は怡然として顧みず、且時に從ひて妾を善に引き惡に諷し、剩へ種々の異名を附す、嗚呼何と彼の無情なるや

○いさゝ小川の夕ぐれ　越後　五十嵐富美

田の畔道をたとりつゝ家路にいそぐ賤が男の笠は今しかなたの森にかくれて影見えずなりぬ。天に音なく地に聲なく、只かすかなる小川のせゝらぎのみ平和の樂を奏てゝ、やがて來ます夜の女神を迎ふなりき。

○月　日本橋　佐久間靜子

月になりたる山茶花の垣に今し羽もてる少さき神の子となりたらんようなる我は、いひしらず心淸らかにさわやかに……月はそも我に何をか敎ふる……。

○冬の夜　廣島　寺一研子

北風强し、小窓に障子のばら／＼と音するは霙なるべし、夜益々更けて電信線のうなりいよ／＼高し、今夕我門に物乞ひし少女子や今夜何所に如何なる夢をや結ぶらん。

○軍國の娘　福島縣　齋藤美都子

兄の出征後殘るは老衰せる親と彼女と唯二人彼女は兄に替つて親を養ふべく學校も退ひた。而して〇〇工場の女工となつた。近頃發行の女子講學會講義錄の新入會者報告欄に彼女の名が見へた。

○梅　福井市　保子

ホーホケヽヨと鶯のやさしい初音に、そつと窓を開けますと昨日迄蕾てあつた梅が妾の顏を見て笑て居る樣…あゝ主なしとて春を忘れずに咲いた此の梅の此の香が今兄樣の征衣の御袖に通つて居るてしようか



佐々木信綱先生選

天

駒鳥　上野國太田町在寺井木暮長七宅　木暮とよ

黄金の鈴しろかねの鈴ふるがごと
はるの譜もらすこまどりのこゑ

（評）歌もまた黄金のひゞきありといひつべし

地

吉野の櫻　埼玉縣入間郡所澤町　山下芳葉

大御軍かちどきあげてかへるまで
よしのゝ櫻さかずもあらなむ

（評）原作軍國の花にしあれば吉野なる櫻よ咲くな兵歸る迄とある意をとりて詞をかへたり、着想新らしきをもて地とす

人

櫻花　上總山武郡千代田村岩やま五十こく　小川芳竹子

夕ぐれを若き舍人の蹴鞠それて
櫻散るなり三片二片

（評）原作初句今日もまた結句二片三片とあり加筆味ひ給へ

秀逸

○友のなさけを　伊勢　加藤倭文子

なげかじよ君がなさけをよすがにて
たのしき春を待ちわたらまし

（評）心やさしき人の歌なるべし

○　牛込　渡邊まき子

ひさまつきて袖にうけばや母君の
みはかの上に散る櫻花

上句原作ひさをりて袖にうけはや母上の

○月　神戸　小西ふさ子

たづねきてあるじをとへばひろき野の
かすみかくれに羊おふといふ

結句原作羊かふなり

○しら桃　近江　柴原茂子
水車のどかにめぐる音すなり
白桃さける河ぞひの里

○　秋田縣　英れん子
美しき雲流れ行く春の水に
繪筆洗へば花ちりかゝる

○　陸前　大槻加津子
花瓶の紅梅香る小座敷に
繪の具とく夜を春の雨降る

○　北多摩　小寺とめ子
春川のふちの松かげ柳かげ
いづれのかげに舟とゞむべき

○　新潟　内藤ゆり子
影ふみて遊びし友よ今はいづこ
其花園の春の夜の月

○　備前　松本もと女
梅ちりで春雨細う降る夕寺に讀經の聲ひくきかな　武州　新井琴子

○
二人行く影うらうらと霞むなり若草もゆる川沿ひのみち　新潟　内藤すいむ

○
しづやかに彩羽ひろげて歩みいてし孔雀に春の光みちたる　新潟縣　小林仲子

○
月もなほ昔をかたる心地してともに見しよの影しのばるゝ

折にふれて　秋田縣　石澤千香子
おもひ出の我むれいたしそのよひもこよひも月夜川添のみち

○　筑前　花田います
益良夫が駒に水かふ柳蔭柳におこる春の夕風

水仙花　埼玉縣　田島伊代子
びんの毛のほつれも見えず若き子の誰に文書く水仙の窓

夢さめて　本郷區　室井きさ
二百里の東友をゆめにみて果なの戀を枕に語りぬ

雪　横濱　さち子
あゆつりにくる人たえて玉川の衣うつさとにゆきのふりしく

○　青森縣　石岡光江子
をち方にわら打つ音もたえ行きて靜かに暮るゝ春の山里

墓畔　山城國　松田雪子
彼の地にはかゝる草花なきものを眠れる夫に此れぞ手向けん

偶感　福島縣　佐藤榮子
給はりし君が玉章焚き捨てゝ儘ならぬ世の戀に泣くかな

新年　筑後　横山うめ子
日の御旗軒にかゝげて門ごとにくもりなき世を祝ふ今日かな

春風　豐前　筵波つゆ子
薄す月にさぎりたゞよふ野の朝を梅の香低ふ春の風吹く

○　紀伊　岩橋直子
初春に學びの窓を明け見れば梅の木の間に鶯ぞなく

○　長門　梅田染子
うれしくも梅の園に迷ひけり月靜かなる朧夜にして

○　千葉縣　翠蹊女史
ふる里の川の水音變られど我れ姿はおいにける哉

立春　和歌山　山東香
旅衣はろ立けふの山里はふり積ゆきを花とこそ見れ

○　千葉縣　吳いち子
花雲のかゝるを見ればなかなかに戀しかりけり故里の山

冬の山里　福島縣　杉原孝子

見せばやな花のとぼその人に今朝枯木に匂ふしろかれの花
○　下總國　小高清子女
手箱提げし少女子二人麥の畦に入りつと見れば麥笛の聲
磯千鳥　磐城　横山八重
松三里濱の中に浪の聲絶え間絶え間に千鳥なくなり
春風　下谷區　太田樂子
打ちむれて野邊に若菜を摘める子の袂を輕く春風のふく
○　丹波　波多野繁子
心地よや恨み重なる仇の艦沈づめし海に朝日上るなり
○　上總國　美枝
うすかすむ麥畑遠くつくるところ牛飼ふ藁屋桃の花さく
春雨　岩代　八巻なつ
若菜うろうなゐの聲にゆめさめて朝戸あくれは春雨の降る
○　上總國　紬野濱子
小松原駒引きとめて斥候の敵勢窺ふ月のさやけき、
新年山　備後國　桑原八重子
山といふ山の上なる富士の峯初日輝くみよそめてたき
○　伊勢國　堀　富子
鐘の音に有明月のかけきえて置霜白き里の板橋
○　群馬縣　荒江菊枝子
待ちわびし軍のつまは歸りまさてことしまた散る白梅の花
○　熊本市　大島菊子
血に染みし劒を洗ふ益荒雄が息吹眞白き北支那の原
出征軍人を思ひて　駿河　小澤紫桂
内地だにかばかり寒き冬の夜を露營の夢の忍ばるゝ哉
新年の山　熊本市　長野菊代
紫のとばりかゝげて笑みませる富士の神山詩に明け行く
○　韓國　野口辰子
わかくさの戰死ときゝし新妻は國の爲とて笑顔もらせり
皇孫殿下の御降生を奉祝りて　神戸　尾崎みとり上
九重の竹の御園にかすそひてたかな茂れる御代そめてたき

○　加賀　みどり
能登のうみ波はしづかに日はくれぬ越の山々いま眠るらし
○　筑前　花田うらの
ますらをが駒乘りならす夕暮の馬場のあたり花ちりみだる
○　上野國　三木たま子
黄昏れて小鳥の聲も打絶し梅の花園月になりゆく
落葉深　和歌山　かつら子
吹くかぜに木葉ちりして山里のみちはいづこと見えわかぬまて
○　山口縣　山下孤舟女史
山寒み月は凍りて冴ゆる夜に先思はるゝ滿洲の空
北行の雁　磐城國　關本たく子
夕まぐれ空に文字かく雁かねはたか玉章の使なるらむ
故人の植えし梅を見て　千葉縣　大川せゐ子
なき人の手植ゑの梅はさきそめて思出多きみんなみの窓
三句以下原作榮ゆなり經讀鳥の今日は何にして
○　遠江　大石よし子
水小屋に子等のきれ歌きゝながら車にゆるき春の水見る
○　下野　山本蓮江
風寒く波たゞ白き闇の夜を船宿起すおとろ髮の人
○　千葉縣　羽山くら
敵騎二騎三騎四騎過く雪の夜に影ほの白き星のきらめく
○　越後國　内藤ゆき
天の野の金色薔薇くづしては夕日快樂かみだれあや雲
折にふれて　紀伊　白鷗女史
物は皆なさてはならしならすとてなさてやまめやわれも人の子
旅順の開城を聞き　鳥取　上山千重子
あだなせるえみしもいまはちから盡き大御軍の前にぬかづく
霜　伊勢　三輪あさの
この霜のふらすは吾の手入れせしさゝん花の花もさかへかりしに
新年雪　三重縣　伊藤しず子
ことしこそ幸多からぬ門松に雪の白ゆふかけて祝へは

旅順陥落　千葉縣　山田安子
細戈千足の國は祝ふなり十年の恨み今はらしえて
○　下毛　阿部かつ子
夕暮をつぐる鐘の音遠く消えて月かげ寒く木枯の吹く
○　越後　杉本たい子
冬かれし野辺の淺茅に霜おきて夕くれ寒く狐なくなり
○　廣島縣　堀田はる子
今宵君とわかれの袖のしほたれし朧ににほふ花のしたかげ
落葉　越後　杉本しん子
もの淒きよせ手の聲にとれば栃の槻の木落草みだるる
○　青森縣　石岡光江子
もの凄ごき砲の音やみて明けし夜に無名山上旭旗輝く
○　能登國　杉下ふみ子
彈くゞり鐵網こえて進み入る此の繪この時見はいづくに
○　常陸國　西野春女
戰ひのありし昔のあといづこ麥畑青く石ところ〲
花　越後　渡邊かれ
春めきて春たつらしも立ちそむる世は春なれや花も春なれ
○　兵庫縣　山本菊子
戀わぶる若き我身を情あらばしばしの宵を夢にみちびけ
折にふれて　周防　堀龍子
只ひとり此の山奥に朽ちなまし老先きたのむ親を如何にせん
汽車のうちにて　東京　後藤米子
朝風に身をば吹かせて若き女何思ふらんそともながめて
○　越後　房江女史
御苑生に鞠つきゐますひめ宮のあけのはかまに花吹雪する
若葉　越後　島子
たちこむる霞をわけて雪わけて野ざはの根ぜりひくは誰が子ぞ
冬夜　磐城國　紫露女
風寒く吹きつる夜半にひえ鳥の鳴く音ひびきて月落ちんとす
霜の野の梅に囀づるを聞きてよめる　常陸國　石崎霞水

⁂⁂⁂⁂⁂⁂⁂⁂⁂⁂⁂⁂⁂⁂⁂

夜をこめて野中の梅に聞ゆなりふし面白きうぐひすの聲
○　上毛　村岡美江子
前の田の一すぢ小川月冴えてなくなるくひな何をか忍ぶ
○　信濃　安孫子美子
逝きし子をすゞろに偲ぶ夕暮を壁に見いでし樂書の跡
○　京橋區　河村紫香
見渡せば茅停の浦波のどかにて霞にまがふ淡路しま山
折にふれて　山口縣　渡邊靜子
ちご眠る苫屋に桃の花咲きて磯部うら〲春の日たけぬ
○　岡山　秀芳女史
望たてかしまだちする君なれば我は惜しまじ惜しき別れも
こひしき友に別れし時　埼玉縣　保泉とく子
雲のみれかなたこなた別れても時しも待ちて逢んとぞ思ふ
○　岩代　永戸初子
白百合をたむけて君のみなよべとこたへもせぬぞおくつきの下
○　青森　石岡光江子
なき友が御魂か哀れ新星の輝き出でぬ亡せし夜べより
○　上總國　中村紫菫子
賤が家も春の女神は見捨てずよ軒端に匂ふ梅のはつはな
月前の梅　麹町　鵜澤花月
月影は梢床しくかすみつゝ泚てぞ匂ふ庭の梅が香
○　千葉　鳳陽惠史
わが夫の今手負へりと夢さめて眺むる空に星一つ飛ぶ
結句原作「たましひの飛ぶ」
思ひ出て　兵庫縣　河内ゆづり葉
十年の恨みもやがてハルピンのみ空に高く日の丸のはた
○　日州　秋永女史
いつこ迄仇は逃けんみ軍の旗なびくなり野にも山にも
○　大和　中島菊枝
高殿に若き女の姿見えて紅梅かをる淡月夜かな
秋の夕鐘聲　栃木縣　金澤保子

入相の鐘のひゝきに一入のさひしさまさる秋の夕くれ

○　周防 田村遊喜枝

ふるさとの母上の身ぞしのばるゝ夕暮つぐる鐘のまに〳〵

春雨　千葉縣 小川武子

まゝ母のゆるしをうけて少女子が若菜摘む野に春雨けぶる

○　岩代 門多さなへ

みいくさのしらせばかりを待ち〳〵て春の立ちしも知らぬ年かな

○　伊豫 高橋かめよ

尼寺の古井のあたり花ちりて手向の水かくむ人あはれ

○　淡路國 仲井鳳子

美しう紅葉散り敷く初冬の席庭に白う水仙花咲く

出征の夫を思ふ　栃木縣 秀子

遠征の我がせをしのぶる夕ぐれをあめふりいてゝ梅の花ちる

雨後の月　熊本 宮本乙女

雨すぎし庭の若葉に露おきてすゞしくてらす夕月夜かな

春野　伊勢 伊藤縫衣子

霞み立つ春の野十里見渡せば菜の花叢り雲雀さへづる

○　埼玉縣 渡辺留子

美しきカアテン掛けし紅梅の窓によりたる姫影わかき

○　埼玉縣 久里林晃子

淡月に眞白き頬をそむけたる少女の袖に紅梅の散る

○　岩代 服部けさ子

一村はゆめよりさめず朝月にかをりは淨き白うめの花

○　富山 幽香子

亡き人のあけくれめてし山ざくら花さきにけり花散りにけり

春雨　武蔵 宮内純子

なかゝきのしたれ柳にかすみつゝおとしつかなる春の雨哉

春の夕　下總 岩瀬不二野

花をりをり嵐にゆらぐる影見えてひとり子の行くたそがれの丘

故郷を思ひて　東京 加藤わか子

もゝしきの都の空に學ぶ身は雁のたよりぞ待ちわびれける

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

乳兒抱きて逝きし昔忍ぶおばしまに眞紅の牡丹一つくづれぬ

○　大阪市 池田靜子

梅村間笛　紀伊 森棠尾

梅村の思出多き夕月夜かすみをもるゝ笛竹のこえ

○　磐城國 綿引しろ

月冴えて里の板橋霜しろく森の稲荷に野狐のなく

水ぬるむ　遠州 大村みゆき

牛曳て渡る野川の朝まだき身にしまぬまで水ぬろうなる

冬の夜　滋賀縣 藤居しず子

寒き夜に里の小道を雪ふみてかれの音細う念佛の人

○　磐城國 むらさき女史

胸にみつ恨みはらさん武夫の劍に光あり銃に響あり

○　磐城國 鈴木玉子

風に笑む桃よ櫻よ海棠よせまき小庭の春うつくしき

○　越後國 武 とい子

蝶となりて神の秘め歌そと聞きぬあゝ去りがたし花の下蔭

雪　靜岡市 毛利賀陽子

天つ神のみ惠みなれや冬がれし千草をおほふ雪のわた衣

山家雪　越後 高橋むら子

尼君の昔し語りに夜は更けて踊る秋に積る白雪

○　群馬縣 吉田きみ子

船唄はかすみに消えて江の南風あたゝかに桃の花ちる

○　群馬縣 須藤うめ子

彼の地へと征てし兄君今いづこ愛てにし白梅ははや散りにけり

○　上野國 吉村はな子

ものいへばうち笑はんばかりなりにけり母の顔だにまだしらずして

○　群馬縣 上原なか子

滿洲の黑雲はれて夜はあけてこゝに平和の旭日照添ふ

戰死者の妻に代りて　陸奥 芳枝女史

散る花ときそひし君をしのぶ身はそほふる雨も涙なりぬる

夜嵐　青森縣 靜園女史

吹きすさぶ宵の嵐に夢さめて思は又も滿洲のはら
名古屋　鈴木との子

春朝

西に行く夫を送りて立つ門に朝霧晴れて梅か香高き
名古屋　鈴木しげ子

社頭冬月

斬髪の老婦ぬかづく影寂せて社頭に寒き冬の夜の月
東京　重田春子

○

はかな／＼夢の名殘かほの白う有明月の影もさびたり
大阪市　板橋薫子

○

鶯の羽風に散りし梅の花谷の小川に二つ三つ流る
石川縣　比古田君子

○

曉の雲間の星のまれにしも開くぞうれしき山郭公
相州　内野鈴子

○

立春の四方清けらきあしたにはまこど神代の心地こそすれ
上毛　木暮とよ子

○

偽のある世としらてたのみてしわがまことこそくやしかりけれ
秋田縣　奕れん子

○

潮近く眞菰靜かに家見えず桃さく邊り唯鷄の聲
磐城國　佐藤榮子

夜半夢さまし

逢みてし夢は跡なくさめぬれどなに目にのこる母のおもかげ
長門國　杉山きくの子

○

うすぐらきなみまをわたる鐘の音のひとつ／＼に夜はあけにけり
廣島　鐵村壽芽

水邊柳

風そよ／＼小川の岸にいくたびかみどりをさらす青柳の糸
岩代國　大中小枝子

折にふれて

なつかしき君か玉章よむ窓に春つげにけり里の鶯
神戸　上田輝子

五月雨

五月雨に訪ひくる人も跡たえて獨りかなづるつくし琴哉
廣島縣　渡邊喜子

○

山寺の鐘のひゞきの身にしみて雨戸に當る初雪の音
長崎市　林田滋枝

○

春雨の更けき窓を花鳥のぬれても濡ぬこゑぞ嬉しき
横　川口ふみ

上村中將の再發を思ひて

吹雪さへおかして咲けり梅の花やがては結ぶ美とはなるらん
群馬縣　須藤芳枝

○

上野山櫻か岡に杖ひきて花の下路遊ぶ樂しさ
京都　奥村はな

○

いくさ人思ふ心やいかならんたけしとは云へ寒き此日を
岡山縣　小山松枝

○

しら雪のおなし色にはつゝめともかをりぞしろき庭の梅か枝
尾張　橘錦谷

○

朧夜に經よむ聲のきこゆなり梅まばらなる小さき尼寺
常陸　舟橋桂子

梅

賤かやのばゞかいとひく日あたりに東風なまぬるく梅か香深し
彦根　田島藤子

○

なき友の愛てし紅梅咲きたれと送らん道のなきそかなしき
愛知縣　戸田きち女

○

吹く笛は梅散る風にさそはれて聲音もかをる春の夕暮
牛込區　小林冬子

○

つれ／＼に妹のかなづる琴の上にさくら花ちる朧夜の月
大阪　角田はま子

○

みふみ得てしばしは泣きぬほゝゑみぬなかしと今をくらべ／＼て
廣島市　寺一研子

○

えんむすぶ神の御前にひざおりて祈るか男女の若人ふたり
近江國　林梅子

春曙

明石かた霞むらさきに明そめておぼろにかすむ淡路島山
東京　森ふさ子

春夢

亡き母と花を眺めてかたりたる春の一夜ぞたのしかりける
豐後　矢野靜香

○

うらわかき賤女詣する新卒塔婆夕暮寒う松風の音
大分縣　井上美枝子

○

兄戰死すの夢に煩悶へし春の宵よきたより得て鶯を聞く
富山縣　小山かの子

風

山の宿に畫のたのみいなみかれて風に筆とる京の畫工
古寺の月　青森縣　汀蘭女史
蝙蝠の小旗にとびかふかげ見えて月ものすごき峯の古寺
○　伊豆　内田三千枝
墨染の衣寒けき堂の宵緋桃に通ふ夢なつかしき
○　京橋　岡崎千枝子
荒れはてし寺の夕暮來て見れは昔しの一と匂ふ梅が枝
梅村聞笛　熊本　羽田すみれ子
笛竹のふしもかなりてきこゆなり梅園村の月の夕ぐれ
○　熊本市　金津なてしこ
砲音はいや遠ざかり雲の中に旭旗ひめくしべりあの原
○　京橋　田中女史
牧場あたり夕霧深き此夕べ牛追ふ稚兒の聲あはれなり
寄梅花散　美濃國　臼井茂子
心あらば香をだに殘せ梅の花散りにし後の思ひ出にせむ
あけぼの　大阪府　はろ子
有明の月はかすみにきえそめてちる花ゆかし春のあけぼの
○　山梨　林春子
奥殿の燈とほくほの見えて御苑のあたり荻の花ちる
○　京橋　田中秋子
野の末の酒うる店に夕日さして野蜂さゝやくあぢさいの花
○　石川縣　山上小夜子
うららけき若草萌ゆる春の野に駒馬ゆたかなる若殿の君
○　上毛　今井矢面子
露しげき草を衾のかりまくら夢こそめぐれ故郷の空
○　北海道　北原濟子
我友よ千代の鑑となるものはたかれの松の操なりけり
雪　和歌山　保田みどり
ふる雪に竹の村立末ふしておくなる寺もあらはれにけり
凱旋の夢　千葉縣　英子
凱旋の夫の袂よくこそと寄らんとすれば夢は覺めけり

梅　和歌山　木本喜代子
夕月夜梅の花散るおはしまに唐歌歌ふ公達やたれ
兵士の妻　信濃　近藤しづ子
縫ふ針をしばし止めて遠征の夫思ふ身のつまのこゝろは
社頭杉　和歌山　木本加代子
みつかきの神代のまゝのふる事をかたるににたる杉の下風
○　淡路　貞子女史
磯千鳥啼く音に夜半の夢覺めて障子にうつる有明の月
○　前橋市　佐藤すみれ
とも〳〵に心あふ君つとひ來て歌留多とる夜のうれしかりけり
負傷兵　岩代國　根本松江
うめく聲かすかになりし丈夫はシベリヤ原頭夢に見るらん
旅　下總　中村由
美しき旭の光り身にうけて旅路を辿る春のあけぼの
○　伊勢　三谷ため子
昨宵見し君が笑まひを解きかれて星なき野邊を獨りさまよふ
○　新潟　内藤胡蝶
ふる雪を見るにつけても思ふかなとしふる里の父やいかにと
○　茨城　石塚雲孫
戀やなに愛やそもなにうらぶれの吾に榮なし二十歳のゆめ
○　茨城縣　石孤孤芳
呉竹の窓にさすかげ初日影獨り默思の繪師若き哉
○　備中國　葛原しげ子
祝ひ日も同じつゞれのみなし兒が物賣るあはれ神知りますか
○　備中國　川合房枝
春の雨やみし鎭守の池の面に小龜浮びて靈しづかなり
○　名古屋　伊藤花外女史
打ちつかれしばしまどろむとりてにも明日の軍の夢や結ぶらん
○　宮城縣　大槻丈子
春の川乘り合ひ人のさゞめこと西國なまり奥州なまり
折にふれて　石見國　千代延儉子

はがき文

地

○櫻花

高知市永國寺町吉良市子方　吉良夕燊子

夕日の影を踏みながら、歸へり來る里の乙女子、たれに見せむとの心づくしぞ、馬の脊に薪と共に折り添へし櫻花一枝、時しも一陣の微風、無慚や、乙女が情をこめし櫻花、散り亂れて枝に殘るは莛のみ。

馬曳く乙女花の散りしを知るや知らずや。

人

○春

近江彦根土橋渡邊内　みね子

春の空、うららかに晴れ渡りて一片の雲なく、裏林に囀る鶯の聲いとも長閑に聞え、底の小石も數へらるゝまで清き芹川の堤に、今を盛りと萠えいでし楊柳の糸長く垂れて流れ行く水に何をか描けり。

柳の水に描けるは「戀」てふ字か

秀逸

○勝栗

越後國　清水登志

「何にもなうて」と霜ふり頭の茶屋の婆が盆に乗せて出したのは、この村名物の勝栗！顔見合して笑えむだ客は何れも年若な將校。時は何時？秋の末つ方滿韓の山野暗澹として物騷がしい頃。

婆も年少の將校呼んで曰く、ツムうひ女！

○深山路

聚鴨　田中ぶげつ子

深山路の歩みにつかれて老杉の下に憩へば、枯枝をのせて曳かれ行く牝馬の姿、坂にかくれ、木の葉軟風に二つ三つ落ち散りて、いづことも分かず鵯啼き、後は寂寥の領となりにき。

御身此寂寞の領に入り必ずや大なる或物を得しならん。

○山より都の友へ

東都　ゆかり女

秋闌けて候　月清き夕戀に鳴くか松虫いとゝ秋譜の調も細う落葉冴えて世は寂寥の聲に更けて候　背ては卿と共に愛でにし梅鉢草日増に色移り行くがうれたくて

切て朝は露に夢結ぶべう夕は月に戀語るべう捨置いて候

友に代りて只一言、山中の宰亦頭かまほしく候

○破燈籠　羽前　ゆかり女史

おやまや藝子幇助に遊ばして貰ふ客衆が、此わたりをぞは／＼連立あるき、此石燈籠は危いものじや、滅多に側へ寄るなと言ふて通る故、わしよりこなたの身の上が危いと言たけれど、聞かぬ顔して行過ぎぬ。

今の世この種の人多きぞうたてけれ

○附木舟　岩代國　門多さなへ

榮ちやんはこの寒いのに椽側でコツ／＼と何をして居るのだろう？やがてはいつて來た顔も手も眞赤にして……何をして居たのときけば軍艦をこしらへて居たと言ひながらとり出したものを見れば附木舟。

小兒の爲る事と言ふ事には毎も非常の趣味が含まれて居ます

○蝶のゆくへ　陸前　大槻丈子

ハラ／＼と散た花びらは下の小川に落ちて浮いた何處からか美しい蝶が一つ飛んでその上に羽をたゝみ樂しげに流れて行く、今しその數尺向ふに大きい魚が、つと頭を見はして、渦を卷いて沈んだ。妾は直ぐそこを去つた。

おゝす善尺覧此文の眞意を覺る者は幸なり

○朧夜の記　石見　千代延俊子

一日乳母許訪ふ、湯に入らんとして見れば風呂は古木の梅の下、月は朧ろに薄絹もて包みたらんか如く、風なきに梅花一片三片零れて桶の中に落つ、乳母はいふえゝ面倒くさいと、我は夢見る心地せるを。

乳母の詩味を解せざる所却て趣あり

○玉ちやん　福島縣　柏木哲子

至急との電報に驚き妾の歸つた頃にはもう玉ちやんは虫の息。とう／＼三日目に黄泉の客となられた。嗚呼海棠の花片の樣な唇を開ひて姉ちやんと呼ぶのが今でも眼前に髣髴。御土産に買つて來た人形を誰にやろ―

哀恨綿々親人の心も思ひ遣られて

○花咲く朝　韓國　野口辰子

「坊よ父は出征くろからな、大人しくしての。」「はい、お父ちやんもう出征の、ばんじやい。」と孝ちやんは兩手に日の丸の旗を振揚げて、高く。……高く。……吁、愛兒の小さい脣より出でた此の聲は、いかに父の胸には響きたてあろうか。

○鶯　新潟縣　星野紅華子

姉さん！鶯が庭の梅に！出て御覽愛らしいこと！急ぎ黑木の窓を開けば庭の若草青みを抽く纔に五分柳は稍啖き烟に黃み、その傍なる紅き梅の梅の枝に、今やホヽ法華經の一聲……姉さん山々は眞白だのにね

○漁村の夕暮　大阪　板橋潚子

夕日の光を浴びた漁村の森は、今しも美はしい榮ある色に彩られ、磯の

頂打際には優しい白い花が咲きつ消えつあゝ此夕の美觀！…無情？天はだん〳〵漆黒のような幕を擴げて此世を包んでしまつた、沖遙か青白い漁火一つ。

○畫はがきにそへて友へ　東京麴町區　重田春子

清子樣下手でも心がこもつてるこの畫…エンジェルの今、露をすはうとしてる花はお好きな詩を意味してるけしの花よ、この手にしてる弓矢…ほらキユピットの…あなたバイオレットの畫葉がきかけたら送つて頂戴待つて居てよ。

○靜ちやん　下谷　加藤瀧月子

おゝ微笑むだ顔付は奥樣に目鼻付は旦那樣にそつくりです事、靜ちやんが夢路で祖母の離枯れた乳房を含んでおる姿をみて隣の老媼がゆふた靜子の父は五ヶ月前は陸軍少佐で今は軍神、母は先月靜子を生んで逝れた

○かなしみの聲　小石川　みゆき

涙の乾くは何時、醒むれば納豆賣、世を吹く木枯しの寒きを告げて小雨ふる朝など堪えがたき想す。寐むとすれば、鍋やきうどんと呼ぶ聲のうちふるびて、浮世の波の高きに泣く。あゝ世は悲愁の聲にみちて、

○曉の風　遠江　大石よし子

「坊のお父ちやんは何處！。」ふところに乳を吸つてゐた稚子は玉の樣な瞳を開いて紫の雲に輝く白星を指した。

「おー行きたい父つちやんの側！。」星は忽ち雲にかくれて、冷かに吹く曉の風。

○かたみの血潮　埼玉縣　新井琴子

忘れもせぬ十月〇日出征勇士送迎の折汽車の窓より投げ込みし絹手巾！歌をものして。今日はからずも妾が手元に送り返されぬ。見れば血潮の日のみ旗と化してしかも彈痕あり〳〵と三つ四つ五つ、あゝその君は？

○お清書　埼玉　新井こと子

弟の稔夫は今年七歳で尋常一年生であります、今日學校から歸るや否や妾にこのお清書を戰地の父上に送つて下さいといふのです、甲の上なものだから、けれどあゝ何といふたらよいでせう！！父は今は…吁。

○深夜の思　三重縣　山崎初子

夜はいと靜かに更け渡りて大空は黑き幕もて掩はれ庭には木の葉を誘ふ風だもなく沈みきつて居る、此寂寞の深夜我は寢も得で思ひは故郷の友の上に通ふのである、噫春子の君今いかなる夢路を辿り居給ふか。

○春の野　駿河　紫桂女史

若草もゆる春の野に、スミレ、タンポヽ、ツクシなど摘むべく乙女は、籠さげて、母のみひざをはなれたり、春の女神に愛の子の、これぞ恰も好畫圖よ。

○月の聲　山口縣　山下孤舟女史

妾は天界に生れて茲に幾萬歳、時に暗鬼の夜神を破り或は盈虧の好例を示して、常に下界に務むるに、彼は怡然として顧みず、且時に從ひて妾を善に引き惡に諷し、剩へ種々の異名を附す、嗚呼何と彼の無情なるや

○いさゝ小川の夕ぐれ　越後　五十嵐富美

田の畔道をたどりつゝ家路にいそぐ賤が男の笠は今しかなたの森にかくれて影見えずなりぬ。天に音なく地に聲なく、只かすかなる小川のせゝらぎのみ平和の樂を奏でゝ、やがて來ます夜の女神を迎ふなりき。

○月　日本橋　佐久間靜子

月になりたる山茶花の垣に今し羽もてる少さき神の子となりたらんよう なる我は、いひしらず心淸らかにさわやかに…月はそも我に何をか敎ふる…。

○冬の夜　廣島　寺一研子

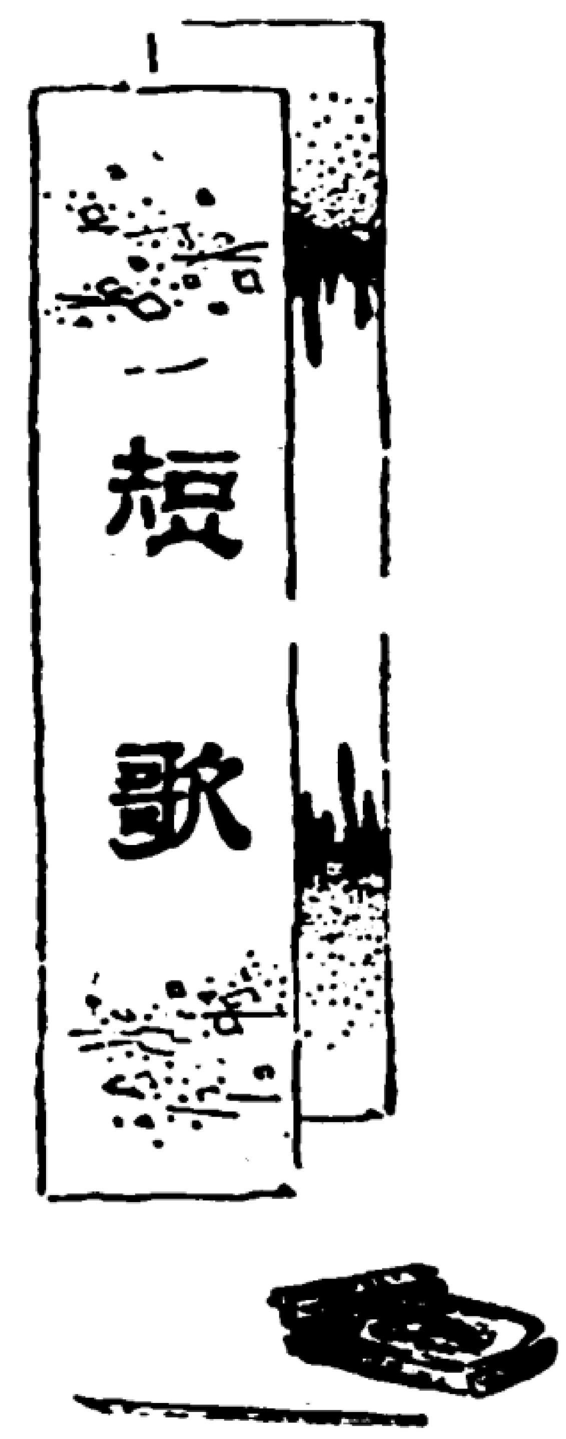
北風强し、小窓に障子のばら〳〵と音するは霰なるべし、夜益々更けて電信線のうなりいよ〳〵高し、今夕我門に物乞ひし少女子や今夜何所に如何なる夢をや結ぶらん。

○軍國の娘　福島縣　齋藤美都子

兄の出征後殘るは老衰せる親と彼女と唯二人彼女は兄に替つて親を養ふべく學校も退ひた。而して〇〇工場の女工となつた。近頃發行の女子講學會講義錄の新入會者報告欄に彼女の名が見へた。

○梅　福井市　保子

ホーホケヽヨと鶯のやさしい初音に、そつと窓を開けますと昨日迄蕾であつた梅が妾の顏を見て笑て居る樣…あゝ主なしとて春を忘れずに咲いた此の梅の此の香が今兄樣の征衣の御袖に通つて居るてしようか



佐々木信綱先生選

天

駒鳥

上野國太田町在寺井木暮瓦七宅　木暮とよ

黄金の鈴しろかねの鈴ふるがごと
はるの譜もらすこまどりのこゑ

（評）歌もまた黄金のひゞきありといひつべし

地

吉野の櫻

埼玉縣入間郡所澤町　山下芳葉

大御軍かちどきあげてかへるまで
よしのゝ櫻さかずもあらなむ

（評）原作軍國の花にしあれば吉野なる櫻よ咲くな兵歸る迄とある意をとりて詞をかへたり、着想新らしきをもて地とす

人

櫻花

上總山武郡千代田村岩やま五十こく　小川芳竹子

夕ぐれを若き舍人の蹴鞠それて
櫻散るなり三片二片

（評）原作初句今日もまた結句二片三片とあり加筆味ひ給へ

秀逸

○友のなさけを　伊勢　加藤倭文子

なげかじよ君がなさけをよすがにて
たのしき春を待ちわたらまし

（評）心やさしき人の歌なるべし

○　牛込　渡邊まき子

ひさまつきて袖にうけばや母君の
みはかの上に散る櫻花

上句原作ひさをりて袖にうけばや母上の

○月　神戸　小西ふさ子

たづねきてあるじをとへばひろき野の
かすみかくれに羊おふといふ

結句原作羊かふなり

御さゝひとつと　猪口持て
小さき客を　もてなする
彼方のひなも　美くしく
此方のちごも　愛らしき。

○聖　壇

信濃　安孫子美子

燃え立つ紅の幕ゆれて　うちにはほのめく十字架に
めぐれる百合の香も高う　靈彩仰ぐ神の堂
白衣の袖に額あてゝ　たゞ眼を閉ぢてひれ伏せば
神ゆ降らすバプテスマ　「悔いよ」の聲の胸に沁む

○朝

秋田縣　石澤千香子

闇のとばりの雲うすれ　紫雲たなびく朝の色
清く靜けきあさは來ぬ　皆人業につかむとす
我身しばしはこのときを　聖書ひもときいのりして
平和と希望にみたされて　神に讃美のうたうたふ
きよく短かきこの朝よ　なれこそ日々にわがたまを
きよくけがれずとこしへに　行くべき道に誘ふなれ

○春曉の祈願

上總　十六夜女史

うす紫の雲の戶を、　黄金の鍵にひらきつゝ、
白馬金鞍鞭高く　ねり出で給ふ朝神の、
大御光にてりはえて、　彩る光り七色の、
露は大野にみちにけり。
この曉を聲清く、　春の想をあふらせて、

若葉綠のたわゝなる、　枝と枝とをわたりつゝ、
葉と葉の蔭に身を置きて、　天つ光を香も高き、
綠の羽翼に打のせて、　花にさゝやく駒鳥よ、
我が夜の眠さましゝか。
迷のさ霧慾の雲、　清く吹きくる朝風に、
晴れての後の悔の空、　我身はもとの儘ならず、
よし塵の世にうもるとも、　深き崇めを捧げてし、
かの神の代に我魂の、　この駒鳥の羽ねにのり、
永久の綠の葉かくれの　神のもすそに隱れ果べき。

神奈川縣　中村美津枝子

○雲

きのふは東けふは西　風にまかする大空の
雲のゆくへを眺むれば　げに世の樣に似たりけり
高嶺はなれし朝戶出の　雲は嵐になびくなり
けふはあかたの村時雨　いくその袖や濡すらん
あすは深山の朝吹雪　誰が菴にかつもるらん
はかなき物にたとへたる　此大空の雲すらも
朝には出でゝ夕には　かへる斗りの定めあり
きのふの錦けふの麻　かはるに早き世の中の
富貴はげにも浮雲の　定めなきより定めなし

大阪市　田中萩雨

○微　吟

若草小徑わけ來れば、　裾つめたき夕露や
我かりつらき柴笛に、　もだえは深き春の野邊。
運命かなしき人の子の、　若き愁は絕えざるに、

胡蝶よ何の紫に舞ひ、　菫よ何の香に誇る。
湧きし血汐はとく涸れて、　創痩のみ殘る柔胸に、
昔の戀の詩秘めん、　泪、それさへむなしくて。
嵯峨路にのこる夕月夜、　想ひ冷たき胸抱きつ
そゞろ微吟の旅の身を、　傷むか小星あなや流れぬ。

○藤　　上毛　木暮とよ子

さけのいろは濃むらさき　白きは淸しふぢのはな、
うらみやあらぬ行く春を　たゞうつぶいてうなづきぬ。
ほとき思をたどりては　少女の君よ夕暮の、
池の汀にたゝずみて　やさしきをしへ藤に得よ。

○出征の夫を思ふ　　栃木縣　秀子

白雪いたく降りつみて　吹く風寒きこのあした
海のかなたに銃とりて　在す我がせやいかならん
みぞれ交りに降りしきる　雨の背さむきこのゆふべ
鷲の住むてふもろこしに　戰ふ我がせやいかならん
閨もる風もみしにしみて　手枕こほる冬の夜を
霜ふみちらし雪けたて　いくさやすらし我がせごは
衣かさねてもかくばかり　寒き今宵のこのよはも
かの遼東の荒野邊に　草をしとねのうたゝねも
あすのいくさを思ひつゝ　ねむるとすれどいねがての
夢の中さへたゞならぬ　あゝ我がせごやいかならん。

○虹　　石狩國　吉田みか子

里の小川に影なげし　五色の虹は夕ぐれの
鐘のひゞきに消え初めぬ。
あはれ見る〳〵うすれ行く　夕の虹よ今しばし
さびしき空をかざらすや。
神の惠みの幸うけて　汝が姿をうつすべく
葉末に露も宿れるに。

○里擣衣　　上總國　鵜澤花月

夜もすがら、誰をまちてか吳竹の、
ふしみの里に久方の、月の桂もちるはかり
賤の少女が衣うつ、音ふき送る夜嵐に、
ちらぬ露溢く袖の上かな。

○若菜摘　　岩代國　佐瀬ふぢ子

ゆきもまだらの春の野に、にほひこぼるゝお下げ髮、
そよ吹く東風になぶらせて、籠を軟手の姉妹。
赤襷かゝげて妹が、馳せ行くかなたの岡の上、
れいさん早くこゝにとて、こなどり招ぐ愛らしさ。
あいと應いて姉行けば、ましろき片手に初若菜、
たがひにかほを見合せて、ほゝと笑むなり樂しげに。

○里の小川　　岡山縣　松本元

朝な〳〵に顏あらふ　里の小川の水淸み
小鮒三つ四つ藻のひまに　見えてかくれて面白や。
朝水かさ打ちまして　岸の柳の糸あらひ
夕天雲紅に　水に映りて美しや。
月をも宿し星をも宿し　神の秘音さゝやきて
土橋石橋の下くゞり　村より村と流れゆく。

○大和心　　茨城　舟橋栗子

みくにの爲とつ國に　敵をきたむるますら男も
軒端かたぶく草の屋に　唐ころもうつ賤の女も
高き低きのわかちなく　都もひなもおしなべて

御さゝひとつと

猪口持て

[illegible]る

[illegible]

若葉綠のたわゝなる、
葉と葉の蔭に身を置きて、
綠の羽翼に打のせて、
我が夜の眠さすましゝか。

枝と枝とをわたりつゝ、
天つ光を香も高き、
花にさゝやく駒鳥よ、

[illegible]慾の雲、
[illegible]の梅の空、
[illegible]るとも、

清く吹きくる朝風に、
我身はもとの儘ならず、
深き崇めを捧げてし、
この駒鳥の羽ねにのり、
神のもすそに隱れ果べき。

[illegible]奈川縣　中村美津枝子

[illegible]する大空の
[illegible]似たりけり
[illegible]り

[illegible]

[illegible]の[illegible]に
[illegible]に[illegible]
[illegible]に[illegible]
[illegible]もいくさ[illegible]
[illegible]

○偶　感

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]
目出度[illegible]に見えなん

旌旗[illegible]林風絶えて、
星を臨みて戀を泣き、

[illegible]
[illegible]
そのとき[illegible]を[illegible]へ
[illegible]りて花を手向なん。

澎湖島馬公　若葉女史

新高山頭月高し
月を仰ぎて身を恨む

[illegible]
空[illegible]
[illegible]に[illegible]
あさひに匂ふ其れよりも、
あかき心ぞかんばしき。
くちぬいさをゝ外國に、
はえある寒をみにおびて、

[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]
たてし雄々しき武夫の、
大和心のひとすぢに、

靈の命の人の子よ、
人の世はたゞ五十年、
いかに熱涙溢るとも、
口に僞善を唱ふるも
心は悪覺の王なるぞ、
最後の希望天にあり、

○元 旦 の 歌

黄金、紫、くれなゐに、
清くかゞやく初日影。
婦をいづる百鳥も、
千代に八千代と歌りつ。
國旗ならべる入巷は、
いや麗はしき注連飾り。
やがて見初むる門禮者、
紅匂ふかんばせや。
君が稜威もいと高く、
雄々しく歌ふ戰捷の歌。

○誰 か あ る

更けゆくまゝにいや冴えて、
月のひかりの麗はしや、
くらき浮世の野にやまに、
雪のすがたの清きかな、
神のたふときはる風に、
あゝ笑はしき色と香の、
月雪花に似たるなる、
干すべき人は世の中に、

○春を送る辞

あてをほこりし庭の花、
見渡すかぎり荷葉して、
菫の花は地に委して、
老いて暮れゆく此春を、
石より冷たき此世界
何所に汲むべき人やある
此世の望み早絶ちれ
最後の希望天にあり

德島市　住 友 登 喜 子

彩なす雲をかきわけて、
新あたらしく君が代を、
色も常盤の門松に、
羽子つく少女の袖ともに、
紙たこあぐる稚子の、

廣島縣　池 田 仙 溪 子

塵なき夜半に澄みわたる、
それにも似たる我が心。
しきて汚を殺ふなる、
それにも似たるわがおもひ。
ほころび初めしさくら花、
それにも似たる我が涙。
清き我が身のぬれ衣、
君をのぞきて誰かある。

常陸國　西 野 春 女

野べをいろとる菫くさ、
武陵の昔忍ばせし、
うす紅の色もなし。
響し止めむ術もかな、

風に漾るゝはなびらよ、
別れはつらき春の日の、

○小　女　子

今ぞこの日のわかれとて、
庭にひらきし白うめを、
盡きせぬ愛に醉ひつるか、
ま白にきよき裝ほひを、
かすかにもるゝ微笑に、
輝やぐ如きそのさまは、

○明　　星

琴の音たえて高樓の
み空に輝く明星を
契り淺かき戀人は
姫がみ胸の血は沸きて

○佛王ルイ帝

昨日金殿玉樓に
斷頭臺に置く露の
見よや妖雲塞りて
人の命にさも似たり
三丈の空眼を閉ぢて
瞑想天を仰ぎ見て
流るゝ水に情ありて
あゝこれ何の啓示ぞや

○若　き　尼

戀に黄金に肉を賣る
何はかなみて春の日を
その清らけき顔容
世に榮ゆべき幸はあれど
立つる操のいやたかく

○未　亡　人

みぞれふりくる冬の夜の、

流
あしたの
みつめて立
そゞろに花に
くろき瞳に
ひらけ
響へ

欄干
仰い
運命
星の

流

榮華の夢の果敢しや
たゞかりそめの人の界や
一ツきらめく新星は
人の命のもろければ
冥府の人とはなりにけり
吾今佇む稻楽川
星の光は地に落ちぬ

大 和　中 島 菊 枝

人僞りの罪の世に
御經に暮らす若き尼
その美しき京訛り
武士が要ぞと雄心に
磬うち鳴らす山寺の窓

周 防　堀 　龍 子

柴戸を洩るゝ風寒み、

大和にしきの花もみぢ
或は逐ひつ又はきり
海には血潮をおし流し
あな男ましや男ましや
豐さか昇る旭の御旗

○春の小川

菫花さくはるの野の
吹くとしもなき春風の
蝶は戀する花のかげ
昔のきみはあらずして
いさゝ小川の淸けさに
菫花束流れきぬ

○若菜

あさ日の光り朗らかに
軒の青柳うちけぶり
まことと春と世はなりぬ
昨日も今日も雨なきに
たにまの雪やとけぬらん
この春の日に萌えいてぬ

○秋の夕

萩の花獨りこぼれて、
破れ垣に夕風さむう、
夕べ森にかへる小鳥の、
さびしうも啼き騒ぎつゝ、

○皇國軍人

姿けだかきしきしまの、
來る春毎に咲きいづる、
あさひに匂ふ其れよりも、
あかき心ぞかんばしき。
くちぬいさをゝ外國に、
はえある譽をみにおひて、
赤き心のいろふかし。
旅順の壘も乘取りて
陸には屍やまをなす
我日の本の大將軍
とく押したてよ奉天城。

茨城縣　船橋栗子

小川のほとり逍遙へば
袖にえならぬかをりあり。
花は戀ゆゑてふまでど
我戀さすがやせてけり。
たゝうつゝなう眺むれば
誰れの戀路の語草。

鳥取市　上山千重子

そよ吹く風もあたゝかみ
霞につゝむ向ふやま
前の小川の水ますは
時まつ野辺の若菜はも

赤坂區　河村菫秋子

虫の聲細うみだるゝ
庭の面落葉みだるゝ
群れ一つ二つ又三つ
うす暗き木陰に入りぬ

長野市　飯塚ぎを子

やまと島根をしめて、
色うるはしきさくら花、
我日の本のものゝふの、
たてし雄々しき武夫の、
大和心のひとすぢに、
げにげなげなる其わざは、
うせてのこらん永久に。

○春の歌

十坪にたらぬ庭園も、
春にはもれて花ぞ咲く、
實に樂しげに昨日今日、
君がみいずともろともに

上野國　三木たま子

○女官の歎

折から遠き箏の音の、
いゝいゝいゝいゝ、
笛もあはせて何となく、
東の對の小簾あげて、
月はうすみにとざゝれて、
身を欄干にうちよせて
錦の袖につゝみても、
義理の柵かけられて、
淸き流の底深く、
思ひある身は糸竹の、
せめては月よ朧にも、
菫たんぽゝ蓮華草、
黄なる蝶や白蝶の、
舞ひ遊ぶなり花の上。

埼玉縣　田島いよ子

爪音ゆかし想夫戀、
いゝいゝいゝ、
聞きわたる春の夜や。
しのび出てたる若女房。
あはくも匂ふ軒の梅。
しばしはゆらく黒髮や。
あまりてもらす忍音や。
せかれてかなし妹背川。
沈みもはてし思ひかな。
音も泣けよとのしらべかも。
人のすがたをうつせかし。

磐城　絲引白子

○折にふれて

昨夜の夢の跡とめて
母の給ひし一片の
あつき情の跡見えて
されどわが母今あらず
香花手向くる人もなく
老いたる叔母は只一人
妾の歸りを待まさん
强くな吹きそ老の身を
錦の衣着なすまで
目出度叔母に見えなん
今朝文箱をひらく時
その玉章はいてにけり
そゞろ昔の偲ばるる
墓には草の生茂り
あはれ蟲のみ咽ぶらん。
荒れたる庵に麻うみて
夜半の嵐よ心あらば
春風たちて野も山も
そのとき妾も葉を卒へ
歸りて花を手向なん。

澎湖島馬公　若葉女史

○偶感

檳榔樹林風絕えて、
星を臨みて戀を泣き、
新高山頭月高し
月を仰ぎて身を恨む

靈の命の人の子よ、
人の世はたゞ五十年、
いかに熱涙溢るとも、
口に僞善を唱ふるも
心は惡魔の王なるぞ、
最後の希望天にあり、

石より冷たき此世界
何所に汲むべき人やある
此世の望み早絶ちれ
最後の希望天にあり

徳島市　住友登喜子

○元旦の歌

黄金、紫、くれなゐに、
清くかゞやく初日影。
鳴をいづる百鳥も、
千代に八千代と囀りつ。
國旗ならべる八巷は、
いや麗はしき注連飾り。
やがて見初むる門禮者、
紅匂ふかんばせや。
君が稜威もいと高く、
雄々しく歌ふ戰捷の歌。

彩なす雲をかきわけて、
翠あたらしく君が代を、
色も常盤の門松に、
羽子つく少女の袖ともに、
紙たこあぐる稚子の、

○誰かある

廣島縣　池田仙溪子

更けゆくまゝにいや冴えて、
月のひかりの麗はしや、
くらき浮世の野にやまに、
雪のすがたの清きかな、
神のたふときはる風に、
あゝ美はしき色と香の、
月雪花に似たるなる、
干すべき人は世の中に、

塵なき夜半に澄みわたる、
それにも似たる我が心。
しきて汚を覆ふなる、
それにも似たるわがおもひ。
ほころび初めしさくら花、
それにも似たる我が涙。
清き我が身のぬれ衣、
君をのぞきて誰かある。

○春を送る辭

常陸國　西野春女

あてをほこりし庭の花、
見渡すかぎり青葉して、
萬の花は地に委して、
老いて暮れゆく此春を、

野べをいろとる葉くさ、
武陵の昔忍ばせし、
うす紅の色もなし。
留め止めむ術もかな、

風に送るゝはなびらよ、
別れはつらき春の日の、

高くも積みて山をなせ、
流るゝ路をとめなむに。

○小女子

廣島縣　堀田はる子

今ぞこの日のわかれとて、
庭にひらきし白うめを、
盡きせぬ愛に醉ひつるか、
ま白にきよき裝ほひを、
かすかにもるゝ微笑に、
賑やぐ如きそのさまは、

あしたの星や降りけむ、
みつめて立てる小女子や。
そゞろに花に近づきて、
くろき瞳にながめけり。
ひらける唇は神や入る、
譬へばそれもわか星か。

○明星

備前　松本最登

琴の音たえて高樓の
み空に輝く明星を
契り濃かき戀人は
姫がみ胸の血は沸きて

欄干に凭る姫君が
仰いて清眸露宿す。
運命はかなく黄泉の人
星の光は幽かなり。

○佛王ルイ帝

熊本市　大島菊子

昨日金殿玉樓に
斷頭臺に置く露の
見よや妖雲塞りて
人の命にさも似たり
三丈の空眼を閉ぢて
瞑想天を仰ぎ見て
流るゝ水に情ありて
あゝこれ何の啓示ぞや

榮華の夢の果敢しや
たゞかりそめの人の界や
一ツきらめく新星は
人の命のもろければ
冥府の人とはなりにけり
吾今佇む稻葉川
星の光は地に落ちぬ

○若き尼

大和　中島菊枝

戀に黄金に肉を賣る
何はかなみて春の日を
その清らけき顔容
世に榮ゆべき幸はあれど
立つる操のいやたかく

人偽りの罪の世に
御經に暮らす若き尼
その美しき京訛り
武士が妻ぞと雄心に
磬うち鳴らす山寺の窓

○未亡人

周防　堀龍子

みぞれふりくる冬の夜の、

柴戸を洩るゝ風寒み、

春深うして、　浪さかまきて、
汝れ花ちりぬ　海にかくれぬ。
さいへ猛き死、　香こそ薫ぜめ。
汝が最後ぞ、　雄々しき清き、
汝が身汝が船、　裂けぬ沈みぬ、
さもあれ汝が榮光、　碎けじ朽ちじ。
耳かたむけよ、　旅順のほとり、
風永遠の哀歌を奏で
浪千歳の愁ひを語る。

○別るゝきはに　東京　重田　春子

心をこめて描きつる、　忘れな草の藍色に
とはのちぎりをひめつゝも、　君にさゝぐるこのカード
忘れますなの願ひある、　弱き子今ぞ別れなん
さらばよ我は宵々に、　かゞやく星を君と見て
夕雲遠き西の空、　すゞろうたはん君が歌。

○逸題　神戸　尾崎　みどり

罪にしづみし　人の子よ
野によぶ人の　聲をきゝ
ナザレの聖人の　下にゆけ

ノアの洪水　おそひなば
箱舟に入る　物はたゞ

○たのしきその　京橋區　岩田　傳子

もゆる園生の若草に、　書すて置きて逍遥へば
雲雀は空に聲高く、　四邊に花はさきみちぬ
かゝる樂しき園の中に、　詩をうたはむも興ありと
とらむとすれば書の上に、　二つの蝶ぞ眠りたる
まどかに夢や結ぶらん、　蝶よ眠りね、いつ迄も
菫の床にわれもまた、　暫しまろびて眠らむに、

○曙光　茨城縣　石塚　孤芳

巖に東天を仰げば　黄雲彩雲紫の雲
白鶴聲ありとばり開けぬ　神かへります彩衣美々し。
漁士が妻子は額つきいのり　胸に十字の都女もあり
人様々の默禱しばし　太古にかへる新潮の韻。
初日の光七浦に渡り　平和の色天地にみちぬ
世に辛き子も甘き子も皆　さゞめき若しこのパラダイス。

○星の世界　高知縣　吉良　夕暮子

み空に高く輝ける、　數多の星の彼の世には、

白雲靡く山の奥、
淸き泉の聲やある。
はた其の泉末遠く、
流れ流れて打ちそゝぐ、
潮うづまく靑海原やある。
ぬばたまの夜は更け行きて、
ひとりみ空に輝きて、
よすがら泣かす月やある。
夜每夜每の星影よ、
長世變らず輝きて、
如何にか思ふ人のこの世を。

綠の木間もれ出づる、
山を平野を過ぎ行きて、
空と水とのけぢめなき、
萬籟眠りに入りし時、
多情多涙の詩人を、
きらめく光り空高く、
なれが靈しき心より、

○姫のみ聲

霞の中を傳ひ來て、
姫は長閑にいへるやふ、
ふる巣の眠りさませかし、
春立つ今日をやよ告げよ、
姫は靜にかたりけり、
里の少女やわらはどち、
菫たんぽゝとく咲けよ、
姫は幽におとづれぬ、

千葉縣　岩西たけ子

谷の冬戸を打ちたゝき、
やよ鶯よ鶯よ、
梅の梢に明日はきて、
雪解の野べにおりたちて、
やよ若草よ萠え出でよ、
或は胡蝶も來るべし、
やまのふもとを越る時、
やよ櫻花粧へよ、

大和島根のかざりなり、
床しき色香はなとかし、
あらゆる物をさましゆく、
花のあるじは汝のみ、
かく姫神は限もなく、

○雛祭り

鳥取　上山千重子

今日しも三日の　雛まつり
あさげのけぶり　やゝうせて
玻璃に紅さす　窓ちかく
音もせはしや　下駄の鈴。
我が家の門に　音やみて
やがてすゞしき　聲のいろ
美代ちゃんいてと　訪づるゝ
これやこの日の　はつの客。
ゆふべひと夜を　小まくらに
ゆるさぬ髫や　そとなづる
小さき手をば　かいとつて
ひゝな見ませと　みちびけば。
五人ばやしに　武者人形
さて美くしき　内裏雛
柳にまりや　桃つばき
美代子も今日は　主人ぶり。

御さゝひとつと　猪口持て
小さき客を　もてなする
彼方のひなも　美くしく
此方のちごも　愛らしき。

○聖壇

信濃　安孫子美子

燃え立つ紅の幕ゆれて　うちにはほのめく十字架に
めぐれる百合の香も高う　靈彩仰ぐ神の堂
白衣の袖に額あてゝ　たゞ眼を閉ぢてひれ伏せば
神ゆ降らすバプテスマ　「悔いよ」の聲の胸に沁む

○朝

秋田縣　石澤千香子

闇のとばりの雲うすれ　紫雲たなびく朝の色
清く靜けきあさは來ぬ　皆人業につかむとす、
我身しばしはこのときを　聖書ひもときいのりして
平和と希望にみたされて　神に讃美のうたうたふ、
きよく短かきこの朝よ　なれこそ日々にわがたまを
きよくけがれずとこしへに　行くべき道に誘ふなれ、

○春曉の祈願

上總　十六夜女史

うす紫の雲の戸を、　黄金の鍵にひらきつゝ、
白馬金鞍鞭高く　ねり出で給ふ朝神の、
大御光にてりはえて、　彩る光り七色の、
露は大野にみちにけり。　春の想をあふらせて、

若葉綠のたわゝなる、　枝と枝とをわたりつゝ、
葉と葉の蔭に身を置きて、　天つ光を香も高き、
綠の羽翼に打のせて、　花にさゝやく駒鳥よ、
我が夜の眠さましゝか。
迷のさ霧慾の雲、　清く吹きくる朝風に、
晴れての後の悔の空、　我身はもとの儘ならず、
よし塵の世にうもるとも、　深き崇めを捧げてし、
かの神の代に我魂の、　この駒鳥の羽ねにのり、
永久の綠の葉かくれの　神のもすそに隱れ果べき。

神奈川縣　中村美津枝子

○雲

きのふは東けふは西　風にまかする大空の
雲のゆくへを眺むれば　げに世の樣に似たりけり
高嶺はなれし朝戸出の　雲は嵐になびくなり
けふはあかたの村時雨　いくその袖や濡すらん
あすは深山の朝吹雪　誰が菴にかつもるらん
はかなき物にたとへたる　此大空の雲すらも
朝には出てゝ夕には　かへる斗りの定めあり
きのふの錦けふの麻　かはるに早き世の中の
富貴はげにも浮雲の　定めなきより定めなし

大阪市　田中萩雨

○微吟

若草小徑わけ來れば、　裾つめたき夕露や
我かりつらき柴笛に、　もだえは深き春の野邊。
運命かなしき人の子の、　若き愁は絕えざるに、

胡蝶よ何の榮に舞ひ、
湧きし血汐はとく涸れて、
昔の戀の詩秘めん、
嵯峨路にのこる夕月夜、
そゞろ微吟の旅の身を、
菫よ何の香に誇る。
創痩のみ殘る柔胸に、
泪、それさへむなしくて。
想ひ冷たき胸抱きつ
傷むか小星あなや流れぬ。

○藤

さけのいろは濃むらさき
うらみやあらぬ行く春を
ほとゝき思をたどりては
池の汀にたゝずみて

上毛　木暮とよ子

白きは清しふぢのはな、
たゞうつぶいてうなづきぬ。
少女の君よ夕昏の、
やさしきをしへ藤に得よ。

○出征の夫を思ふ

白雪いたく降りつみて
海のかなたに銃とりて
みぞれ交りに降りしきる
鷲の住むてふもろこしに
閨もる風もみしにしみて
霜ふみちらし雪けたて
衣かさねてもかくばかり
かの遼東の荒野邊に
あすのいくさを思ひつゝ
夢の中さへたゞならぬ

栃木縣　秀　子

吹く風寒きこのあした
在す我がせやいかならん
雨の脊さむきこのゆふべ
戰ふ我がせやいかならん
手枕てほる冬の夜を
いくさやすらし我がせごは
寒き今宵のこのよはも
草をしとねのうたゝねも
ねむるとすれどいねがての
あゝ我がせごやいかならん。

○虹

里の小川に影なげし

石狩國　吉田みか子

五色の虹は夕ぐれの
鐘のひゞきに消え初めぬ。
あはれ見る〳〵うすれ行く
さびしき空をかざらすや。
神の惠みの幸うけて
葉末に露も宿れるに。
夕の虹よ今しばし
汝が姿をうつすべく

○里擣衣

夜もすがら、
ふしみの里に久方の、
賤の少女が衣うつ、
ちらぬ霰敷く袖の上かな。

上總國　鵜澤花月

誰をまちてか矢竹の、
月の桂もちるはかり
音ふき送る夜嵐に、

○若菜摘

ゆきもまだらの春の野に、
そよ吹く東風になぶらせて、
赤襷かゝげて妹が、
れいさん早くこゝにとて、
あいと應いて姉行けば、
たがひにかほを見合せて、

岩代國　佐瀬ふぢ子

にほひこぼるゝお下げ髮、
籠を軟手の姉妹。
馳せ行くかなたの岡の上、
こなどり招ぐ愛らしさ。
ましろき片手に初若菜、
ほゝと笑むなり樂しげに。

○里の小川

朝な〳〵に顏あらふ
小鮒三つ四つ藻のひまに
朝水かさ打ちまして
夕天雲紅に
月をも宿し星をも宿し
土橋石橋の下くゞり

岡山縣　松本元

里の小川の水清み
見えてかくれて面白や。
岸の柳の糸あらひ
水に映りて美しや。
神の秘言さゝやきて
村より村と流れゆく。

○大和心

みくにの爲ととつ國に
軒端かたぶく草の屋に
高き低きのわかちなく

茨城　舟橋栗子

敵をきたむるますら男も
麿ころもうつ賤の女も
都もひなもおしなべて

御さゝひとつと　猪口持て
小さき客を　もてなする
彼方のひなも　美くしく
此方のちごも　愛らしき。

○聖　壇

信濃　安孫子美子

燃え立つ紅の幕ゆれて　うちにはほのめく十字架に
めぐれる百合の香も高う　靈彩仰ぐ神の堂
白衣の袖に額あてゝ　たゞ眼を閉ぢてひれ伏せば
神ゆ降らすバプテスマ　「悔いよ」の聲の胸に沁む

○朝

秋田縣　石澤千香子

闇のとばりの雲うすれ　紫雲たなびく朝の色
清く靜けきあさは來ぬ　皆人業につかむとす、
我身しばしはこのときを　聖書ひもときいのりして
平和と希望にみたされて　神に讃美のうたうたふ、
きよく短かきこの朝よ　なれこそ日々にわがたまを
きよくけがれずとこしへに　行くべき道に誘ふなれ、

○春曉の祈願

上總　十六夜女史

うす紫の雲の戸を、　黃金の鍵にひらきつゝ、
白馬金鞍鞭高く　ねり出て給ふ朝神の、
大御光にてりはえて、　彩る光り七色の、
露は大野にみちにけり。
この曉を聲淸く、　春の想をあふらせて、

若葉綠のたわゝなる、　枝と枝とをわたりつゝ、
葉と葉の蔭に身を置きて、　天つ光を香も高き、
綠の羽翼に打のせて、　花にさゝやく駒鳥よ、
我が夜の眠さすしゝか。
迷のさ霧慾の雲、　淸く吹きくる朝風に、
晴れての後の悔の空、　我身はもとの儘ならず、
よし塵の世にうもるとも、　深き崇めを捧げてし、
かの神の代に我魂の、　この駒鳥の羽ねにのり、
永久の綠の葉かくれの　神のもすそに隱れ果べき。

神奈川縣　中村美津枝子

○雲

きのふは東けふは西　風にまかする大空の
雲のゆくへを眺むれば　げに世の樣に似たりけり
高嶺はなれし朝戸出の　雲は嵐になびくなり
けふはあかたの村時雨　いくその袖や濡すらん
あすは深山の朝吹雪　誰が菴にかつもるらん
はかなき物にたとへたる　此大空の雲すらも
朝には出てゝ夕には　かへる斗りの定めあり
きのふの錦けふの麻　かはるに早き世の中の
富貴はげにも浮雲の　定めなきより定めなし

○微　吟

大阪市　田中萩雨

若草小徑わけ來れば、　裾つめたき夕露や
我かりつらき柴笛に、　もだえは深き春の野邊。
運命かなしき人の子の、　若き愁は絶えざるに、

胡蝶よ何の榮に舞ひ、
湧きし血汐はとく涸れて、
昔の戀の詩秘めん、
嵯峨路にのこる夕月夜、
そゞろ微吟の旅の身を、
菫よ何の香に誇る。
創痩のみ殘る柔胸に、
泪、それさへむなしくて。
想ひ冷たき胸抱きつ
傷むか小星あなや流れぬ。

上毛 木暮とよ子

○藤

さけのいろは濃むらさき
うらみやあらぬ行く春を
ほとき思をたどりては
池の汀にたゞずみて
白きは清しふぢのはな、
たゞうつぶいてうなづきぬ。
少女の君よ夕暮の、
やさしきをしへ藤に得よ。

栃木縣 秀子

○出征の夫を思ふ

白雪いたく降りつみて
海のかなたに銃とりて
みぞれ交りに降りしきる
鷲の住むてふもろこしに
閨もる風もみにしみて
霜ふみちらし雪けたて
衣かさねてもかくばかり
かの遼東の荒野邊に
あすのいくさを思ひつゝ
夢の中さへたゞならぬ
吹く風寒きこのあした
在す我がせやいかならん
雨の音さむきこのゆふべ
戰ふ我がせやいかならん
手枕てほる冬の夜を
いくさやすらし我がせごは
寒き今宵のこのよはも
草をしとねのうたゝねも
ねむるとすれどいねがての
あゝ我がせごやいかならん。

石狩國 吉田みか子

○虹

里の小川に影なげし
五色の虹は夕ぐれの
鐘のひゞきに消え初めぬ。
あはれ見る／＼うすれ行く
さびしき空をかざらすや。
神の惠みの幸うけて
葉末に露も宿れるに。
夕の虹よ今しばし
汝が姿をうつすべく

上總國 鵜澤花月

○里擣衣

夜もすがら、
ふしみの里に久方の、
賤の少女が衣うつ、
ちらぬ露置く袖の上かな。
誰をまちてか吳竹の、
月の桂もちるはかり
音ふき送る夜嵐に、

岩代國 佐瀬ふぢ子

○若菜摘

ゆきもまだらの春の野に、
そよ吹く東風になぶらせて、
赤襷かゝげて妹が、
れいさん早くこゝにとて、
あいと應いて姉行けば、
たがひにかほを見合せて、
にほひこぼるゝお下げ髮、
籠を軟手の姉妹。
馳せ行くかなたの岡の上、
こなどり招ぐ愛らしさ。
ましろき片手に初若菜、
ほゝと笑むなり樂しげに。

岡山縣 松本元

○里の小川

朝な／＼に顔あらふ
小鮒三つ四つ瀬のひまに
朝水かさ打ちまして
夕天雲紅に
月をも宿し星をも宿し
土橋石橋の下くゞり
里の小川の水清み
見えてかくれて面白や。
岸の柳の糸あらひ
水に映りて美しや。
神の秘言さゝやきて
村より村と流れゆく。

茨城 舟橋栗子

○大和心

みくにの爲とつ國に
軒端かたぶく草の屋に
高き低きのわかちなく
敵をきたむるますら男も
唐ころもうつ賤の女も
都もひなもおしなべて

大和にしきの花もみぢ
或は逐ひつ又はきり
海には血潮をおし流し
あな男ましや男ましや
豐さか昇る旭の御旗

○春の小川

蓮花さくはるの野の
吹くとしもなき春風の
蝶は戀する花のかげ
昔のきみはあらずして
いさゝ小川の淸けさに
蓮花束流れきぬ

○若菜

あさ日の光り朗らかに
軒の青柳うちけぶり
まこと春と世はなりぬ
昨日も今日も雨なきに
たにまの雪やとけぬらん
この春の日に萠えいてぬ

○秋の夕

森の花獨りこぼれて、
破れ垣に夕風さむう、
夕べ森にかへる小鳥の、
さびしうも啼き騒ぎつゝ、

○皇國軍人

姿けだかきしきしまの、
來る春毎に咲きいづる、
あさひに匂ふ其れよりも、
あかき心ぞかんばしき。
くちぬいさをゝ外國に、
はえある譽をみにおひて、
赤き心のいろふかし。
旅順の壘も乘取りて
陸には屍やまをなす
我日の本の大戰軍
とく押したてよ奉天城。

茨城縣　船橋栗子

小川のほとり逍遙へば
袖にえならぬかをりあり。
花は戀ゆゑてふまてど
我戀さすがやせてけり。
たゝうつゝなう眺むれば
誰れの戀路の語草。

鳥取市　上山千重子

そよ吹く風もあたゝかみ
霞につゝむ向ふやま
前の小川の水ますは
時まつ野邊の若菜はも

赤坂區　河村董秋子

虫の聲細うみだるゝ
庭の面落葉みだるゝ
群れ一つ二つ又三つ
うす暗き木陰に入りぬ

長野市　飯塚ぎを子

やまと島根れをしめて、
色うるはしきさくら花、
我日の本のものゝふの、
たてし雄々しき武夫の、
大和心のひとすぢに、
げにけなげなる其わざは、
うせてのこらん永久に。

○春の歌

十坪にたらぬ庭園も、
春にはもれて花ぞ咲く、
實に樂しげに昨日今日、
君がみいづともろともに

上野國　三木たま子

蓮たんぽゝ蓮華草、
黃なる蝶や白蝶の、
舞ひ遊ぶなり花の上。

○女官の歎

折から遠き箏の音の、
いゝいゝいゝ、
笛もあはせて何となく、
東の對の小簾あげて、
月はうすみにとざゝれて、
身を欄干にうちよせて
錦の袖につゝみても、
義理の柵かけられて、
淸き流の底深く、
思ひある身は糸竹の、
せめては月よ朧にも、

埼玉縣　田島いよ子

爪音ゆかし想夫戀、
いゝいゝいゝ、
聽きわたる春の夜や。
しのび出てたる若女房。
あはくも匂ふ軒の梅。
しばしはゆらく黑髮や。
あまりてもらす忍音や。
せかれてかなし妹背川。
沈みもはてし思ひかな。
音も泣けよとのしらべかも。
人のすかたをうつせかし。

○折にふれて

昨夜の夢の跡とめて
母の給ひし一片の
あつき情の跡見えて
されどわが母今あらず
香花手向くる人もなく
老いたる叔母は只一人
妾の歸りを待ちまさん
強くな吹きそ老の身を
錦の衣着なすまで
目出度叔母に見えなん

磐城　絹引白子

今朝文箱をひらく時
その玉章はいてにけり
そゞろ昔の偲ばるる
墓には草の生茂り
あはれ蟲のみ咽ぶらん。
荒れたる庵に瞬うみて
夜半の嵐よ心あらば
春風たちて野も山も
そのとき妾も業を卒へ
歸りて花を手向なん。

○偶感

檳榔樹林風絶えて、
星を臨みて戀を泣き、

澎湖島馬公　若葉女史

新高山頭月高し
月を仰ぎて身を恨む

靈の命の人の子に、
人の世はたゞ五十年、
いかに熱涙盈るとも、
口に福音を唱ふるも、
[illegible]悪魔の三[illegible]、
最後の希望[illegible]、

○元旦の歌

萬宝、甍、[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

○誰[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
干すべき人は世の中に、

○春を送る辭

あてを[illegible]し庭の花、
見渡すかぎり青葉して、
涯の花は地に委して、
老いて暮れゆく此春を、

石よりも冷たき此世界
何所に汲むべき人やある
此世の望み早絶られ
最後の希望天にあり

徳島市　生文登喜子

[illegible]雲をかきわけて、
[illegible]君が代を、
[illegible]常盤の[illegible]に、
[illegible]少女の[illegible]に、
誠たここなゝる稚子の、

徳島縣　[illegible]田仙溪子

塵なき夜半に澄みわたる、
それにも似たる我が心。
しきて汚を覆ふなる、
それにも似たるわがおもひ。
こころ[illegible]しさくら花、
それにも似たる我が涙。
清き我が身のぬれ衣、
君をのぞきて誰かある。

常陸國　西野春女

野べをいろとる華くさ、
武陵の昔忍ばせし、
うす紅の色もなし。
暫し止めむ術もかな、

風に疲るゝはなびらよ、
別れはつらき春の日の、

○小女子

今ぞこの日のわかれとて、
窓にひらきし白うめを、
盡きせぬ愛に醉ひつるか、
ま白にきよき裝ほひを、
かすかにもるゝ微笑に、
囁やぐ如きそのさまは、

○明星

琴の音たえて高殿の
み空に輝く明星を
契り濃かき戀人は
聖がみ胸の血は沸きて

○佛王ルイ帝

昨日金殿玉樓に
斷頭臺に置く露の
見よや妖雲裂りて
人の命にさも似たり
三丈の[illegible]を閉ぢて
瞑想天を仰ぎ見て
流るゝ水に情ありて
あゝこれ何の啓示ぞや

○若き尼

戀に黄金に肉を賣る
何はかなみて春の日を
その清らけき顔容
世に榮ゆべき幸はあれど
立つる操のいやたかく

○未亡人

みぞれふりくる冬の夜の、

高くも積みて山をなせ、
流るゝ路をとめなむに。

廣島縣　堀田はる子

あしたの星や降りけむ、
みつめて立てる小女子や。
そゞろに花に近づきて、
くろき瞳にながめけり。
ひらける唇は神や入る、
譬へばそれもわか星か。

備前　松本最登

欄干に凭る姫君が
仰いで清醉露宿す。
運命はかなく黄泉の人
星の光は幽かなり。

熊本市　大島菊子

榮華の夢の果敢しや
たゞかりそめの人の界や
一ッきらめく新星は
人の命のもろければ
冥府の人とはなりにけり
[illegible]
星の光は地に落ちぬ

大和　中島[illegible]枝

人僞りの罪の世に
御経に暮らす若き尼
その美しき京訛り
武士が妻ぞと雄心に
磬うち鳴らす山寺の[illegible]

周防　堀

柴戸を洩るゝ風寒み、

霊鐘洩くまたゝきて、奇しき煙の香に匂ふ、
墓の金色輝りはえて、亂れさしたる水仙の。
ひまより見ゆるうつしゑは、ありしまゝなる姿かな、
あこが痩顔をすかし見て、又もせきくる聲のみつ、
心ともなく床間見れば、名殘をこめし筆の跡。

淡路國　仲井諷子

○あゝ遼東

あゝ遼東の松の色　永劫に絲は懸られど、
渡る秋風寂滅の　調傍なき此の夕、
北斗の光影消えて　枯蘆戰ぐ原頭の、
暗に揺ぐは魂か火か　そこに嗚咽と呪詛あり、
見よ長白の嶺高ゆ　猛鷲風にはゞたきて、
妖雲緊旋これる　北マンチユリヤ西黄海。
今皇軍の旗進み　十萬貔貅凱の詩、
馬上に輕く聲揚げて　蹴破る遼東八百里、
猛鷲翅にひれ伏して　稜威に靡くマンチユリヤ
旭光照々赫々と　萬民謳歌す平和の徳。

越後國　武　とい子

○淡　流

いとも清けき神韵を　靜けき空に殘しつゝ
行きてはもどり復も行き　こゞしき巖に咽びつゝ。
深き思ひの溢るれば　早瀬と砕け瀧と落つ
遥き望と流れては　花野に迷ひ森に呼ぶ。
櫨白百合紅葉も　さては美し少女子も
うつし〳〵て流れ行く　其處に盡きせぬ憂あり。
神の御酒のあふれしか　靜かに聞けば永劫の
神の御聲のこもれるを　何をか憂しと誰か言ふ。
さはさりながら感情は　聞く其人によるものを
何も浮世とさとりなば　何をかうらみん水の聲。

京橋　田中秋子

○水　の　韻

浮き世の塵に堪へかねて　暫し愁を忘れんと、
ひとり深山に分け入れば　折しも響く琴の音。
山又山のおくながら　思ひ入りにし人やありて、
長閑に月日送るなる　徒然の折りのすさびにや。
かすかに響く其韻は　春風草を吹くが如と、
寂しく通ふ其聲は　秋雨芭蕉に濺ぐ如と。
胡蝶の花に狂ふ如と　ゆるくやさしき節もあり、
峯の松風下す如と　細くすみゆく調もあり。
音をなつかしみとめ來れば、　家居も見えず人もなし、
人もなければ琴もなし　されど妙なる音は近し。
不審みつゝ見廻せば　細き調を谷あひの、
靜けき空にひゞかせつ　岩まを傳ふ小川あり。
床しときゝし其韻は　あゝ此の川の響なり、
をかしときゝし其調は　あゝこの川の水の音。
靜かにきけば永劫の　神の御聲も宿るなり、
とはに盡せぬ天地の　自然の詩とも響くなり。
き苔むす岩角に　小笹を舗きて腰かけて、
こゝに歌はん日もすがら　塵の浮世を餘處にして。

○草つむ少女

千葉縣　美佐男女子

流れに沿へる道のべに、　里の少女の三四人、
小さき籠を手に提げて、　草摘さまのあどけなさ、
語り合ひつゝ笑ひつゝ、　細き指先動しつ。
いかに可愛き小女等よ、　咲くつみ滿てよ其籠に、
みちし草かご擔つゝ、　なれらが家に踊りなば、
働き待てる汝れか母、　いかに嬉しく思らん。

○心つくし

茨城縣　石塚雲珠

心つくしの花の色　紡琴にひゞく其匂ひ
あゝ眞盛の短くて　木の間をはらふ夕嵐。
甘きは人の戀にして　蜜に醉ひたる白蝶や
夕も知らぬの憧憬の　夢は敢果なき運命かや。
碑三千の影淡く　朧の宵を鐘樓に
何の獸思ぞ若僧の　杵とる雙手ふるひたる。

○うばたま

伊勢　三谷ため

今欄干に我が立ちて
暗に消えゆく身を思ひ
世が世なりせばたらちれの
情にこもろみ言葉に
こゝは艷なき色の廓
瀨戸のさくらも吹く風に
萎れ果てにし面影を
遂にうつろふ己が身の
靜思に耽る此の宵を
夕べの風も身に泌むに

○鶯　賦

壓の子入らぬ深山の奥に
迷ふて來しか鶯よ
うたふは戀の歌かそも
梅の小枝の花床に

○暮　鐘

夫が遺髮の框をば
名殘る夕日力なく
高くも叫ぶ暮の鐘。
手向の梅の花立てし
鐵丸にゆがめるさま見つゝ
さびしくひゞく暮の鐘。
運命を泣きし目を上げて
黒の衣に掩はれて
夕べかなしき暮の鐘。

○塵　の　身

憐れ此世に生れ來て、
波のまに〳〵にたゞよひて、
花輪に殘る一しづく、
殘るといへど朝日に消えぬ、

沈みゆく日を眺めては
自づからちる涙かな。
溫きみ膝にさふらひて
甲斐〳〵しくもつかへむを。
名にはふさはぬ櫻町
今はら〳〵と地に布きぬ。
見るに鏡の曇らむに
たゞ行末を觀ずらく。
天には星の影もなく
聞くにはつらき三味の音。

備後國　伊藤重人

吹く梅が香に誘はれて
おぼつかなげの口ぶりに
一日を歌にくらしては
淸き夢路をたどるかよ。

石狩國　佐々木まさ子

しづけき慕に送る時
しづまり返る大空に

夫が形見の水筒の
袖を涙にしぼる時

仰ぐみ空は寬の神が
萬象こゝにさびまさる

愛知縣　戸田きち女

寄邊渚の捨小舟、
行くは何處か白露の、
あるは花落ち露殘る、
あるは露落ち花殘る、

殘るといへど夕べを待たで、
誰れか情けの濕ひを
あゝ情けなの人々よ、
折りしも告ぐる入相の、
心なに散る紅葉も、
淋しさ、悲しさ、果敢なさの、
人の無情をかこちつゝ、
胸に湛へて一しほに、

○小鳥の聲

まとの若竹つゆちりて、
ふく朝風もこゝちよし、

○淸き泉

白雲靡く奥山の、
長世絕らず湧き出てゝ、
霞める春の朝には、
淸水が上に散る花を、
霧たつ秋の夕には、
淸水が上の紅葉を、
はへある神にかしづかれ、
淸く靈しく神さびし、

○少女の四季

袖ふりはへておもふどち、
鳥のさへづる野べごとに、
青葉しげれる木の影の、
さやけき月の影させば、
ともゑと降れる白雪を、
たのしみあそぶ少女子の、

凋む果敢なの姿とて、
賠らんものぞあゝ人よ。
吁心なの人々よ。
鐘の音遠く身にしみて、
我身の上と憐れなり。
秋の夕べのそれのみか、
恨み怨みの餘をば、
消えも入りなん塵の身や。

府下北多摩郡　小寺花子

出る日影もうら〳〵と、
軒の小すゞめ聲すなり。

高知縣　吉良夕暮子

綠木深き谷間より、
流より淸き泉あり。
春の姬神おり立ちて、
御袖に受けて遊ぶなり。
秋の姬神おり立ちて、
舟とも浮べ遊ぶらん。
塵の浮世を遠ざかり、
岩間の淸水尊しや、

富山縣　都田よし子

あなたこなたにつどひつつ、
すみれつみつゝ日をくらし。
淸き流れに小石とり、
庭におりたち蟲をおひ。
もみぢの手にてうけとめつ、
心やがて神ならん

霊鐘湊くまたゝきて、　奇しき煙の香に匂ふ、
基の金色輝りはえて、　亂れさしたる水仙の。
ひまより見ゆるうつしゑは、　ありしまゝなる姿かな、
あこが麗顔をすかし見て、　又もせきくる聲のみつ、
心ともなく床間見れば、　名殘をこめし笛の跡。

淡路國　仲井鳳子

○あゝ遼東

あゝ遼東の松の色　永刧に絲は懸られど、
渡る秋風寂滅の　調停なき此の夕、
北斗の光影消えて　枯蘆戰ぐ原頭の、
暗に揺ぐは魂か火か　そこに鳴咽と呪咀あり、
見よ長白の嶺高ゆ　猛鷲風にはゞたきて、
妖雲翠旋これる　北マンチユリヤ西黃海。
今皇軍の旗進み　十萬貔貅舒の詩、
馬上に輕く聲揚げて　蹴破る遼東八百里、
猛鷲拉にひれ伏して　稜威に靡くマンチユリヤ
旭光照々赫々と　萬民謳歌す平和の襟。

越後國　武という子

○淡流

いとも清けき神韵を　靜けき空に殘しつゝ
行きてはもどり復も行き　こゞしき巖に咽びつゝ。
深き思ひの溢るれば　早瀬と砕け瀧と落つ
遠き望と流れては　花野に迷ひ森に呼ふ。
櫻白百合紅葉も　さては美し少女子も
うつし〳〵て流れ行く　其處に盡きせぬ憂あり。
神の御酒のあふれしか　靜かに聞けば永刧の
神の御聲のこもれるを　何をか憂しと誰か言ふ。
さはさりながら惑情は　聞く其人によるものを
何も浮世とさとりなば　何をかうらみん水の聲。

京橋　田中秋子

○水の韻

浮き世の塵に塩へかれて　暫し慾を忘れんと、
ひとり深山に分け入れば　折しも響く琴の音。
山又山のおくながら　思ひ入りにし人やありて、
長閑に月日送るなる　徒然の折りのすさびにや。
かすかに響く其韻は　春風草を吹くが如と、
寂しく通ふ其聲は　秋雨芭蕉に灑ぐ如と。
胡蝶の花に狂ふ如と　ゆるくやさしき節もあり、
峯の松風下す如と　細くすみゆく調もあり。
音をなつかしみとめ來れば、　家居も見えす人もなし、
人もなければ琴もなし　されど妙なる音は近し。
不審みつゝ見廻せば　細き調を谷あひの、
靜けき空にひゞかせつ　岩まを傳ふ小川あり。
床しときゝし其韻は　あゝ此の川の響なり、
なかしときゝし其調は　あゝこの川の水の音。
靜かにきけば永刧の　神の御聲も宿るなり、
とはに盡せぬ天地の　自然の詩とも響くなり。
き苔むす岩角に　小笹を舗きて腰かけて、
こゝに歌はん日もすがら　塵の浮世を餘處にして。

千葉縣　美佐男女子

○草つむ少女

流れに沿へる道のべに、　里の少女の三四人、
小さき籠を手に提げて、　草摘さまのあどけなさ、
語り合ひつゝ笑ひつゝ、　細き指先動しつ。
いかに可愛き小女等よ、　疾くつみ滿てよ其籠に、
みちし草かご擔つゝ、　なれらが家に歸りなば、
働き待てる汝れか母、　いかに嬉しく思らん。

茨城縣　石塚雲琛

○心つくし

心つくしの花の色　絲琴にひゞく其匂ひ
あゝ眞盛の短くて　木の間をはらふ夕嵐。
甘きは人の戀にして　盃に醉ひたる白蝶や
夕も知らぬの憔悴の　夢は敢果なき運命かや。
碑三千の影淡く　朧の宵を鐘樓に
何の獣思ぞ若僧の　杵とる雙手ふるひたる。

伊勢　三谷ため

○うばたま

今欄干に我が立ちて　沈みゆく日を眺めては
暗に消えゆく身を思ひ　自づからちる涙かな。
世が世なりせばたらちねの　溫きみ膝にさふらひて
情にこもるみ言葉に　甲斐々々しくもつかへむを。
こゝは艶なき色の廓　名にはふさはぬ櫻町
瀨戸のさくらも吹く風に　今はら／＼と地に布きぬ。
萎れ果てにし面影を　見るに鏡の曇らむに
遂にうつろふ己が身の　たゞ行末を觀ずらく。
靜思に耽る此の宵を　天には星の影もなく
夕べの風も身に泌むに　聞くにはつらき三昧の音。

○鶯　賦　　備後國　伊藤重人

塵の子入らぬ深山の奥に　吹く梅が香に誘はれて
迷ふて來しか鶯よ　おぼつかなげの口ぶりに
うたふは戀の歌かそも　一日を歌にくらしては
梅の小枝の花床に　清き夢路をたどるかよ。

○暮　鐘　　石狩國　佐々木まさ子

夫が遺髮の櫃をば　しづけき墓に送る時
名殘る夕日力なく　しづまり返る大空に
高くも叫ぶ暮の鐘。

手向の梅の花立てし　夫が形見の水筒の
鐵丸にゆがめるさま見つゝ　袖を淚にしぼる時
さびしくひゞく暮の鐘。

運命を泣きし目を上げて　仰ぐみ空は寃の神が
黑の衣に掩はれて　萬象こゝにさびまさる
夕べかなしき暮の鐘。

○塵　の　身　　愛知縣　戸田きち女

憐れ此世に生れ來て、　寄邊渚の捨小舟、
波のまに／＼にたゞよひて、　行くは何處か白露の、
花輪に殘る一しづく、　あるは花落ち露殘る、
殘るといへど朝日に消えぬ、　あるは露落ち花殘る、
殘るといへど夕べを待たで、　濁む果敢なの姿とて、
誰れか情けの淚ひを　賠らんものぞあゝ人よ。
あゝ情けなの人々よ、　吁心なの人々よ。
折りしも告ぐる入相の、　鐘の音遠く身にしみて、
心なに散る紅葉も、　我身の上と憐れなり。
淋しさ、悲しさ、果敢なさの、　秋の夕べのそれのみか、
人の無情をかこちつゝ、　恨み怨みの狀をば、
胸に溢へて一しほに、　消えも入りなん塵の身や。

○小鳥の聲　　府下北多摩郡　小寺花子

まとの若竹つゆちりて、　出る日影もうら／＼と、
ふく朝風もこゝちよし、　軒の小すゞめ聲すなり。

○清き泉　　高知縣　吉良夕暮子

白雲靡く奥山の、　綠木深き谷間より、
長世變らず湧き出てゝ、　玉より清き泉あり。
霞める春の朝には、　春の姬神おり立ちて、
清水が上に散る花を、　御袖に受けて遊ぶなり。
霧たつ秋の夕には、　秋の姬神おり立ちて、
清水が上の紅葉を、　舟とも浮べ遊ぶらん。
はへある神にかしづかれ、　塵の浮世を遠ざかり、
清く靈しく神さびし、　岩間の清水尊しや、

○少女の四季　　富山縣　都田よし子

袖ふりはへておもふとち、　あなたこなたにつどひつゝ、
鳥のさへづる野べごとに、　すみれつみつゝ日をくらし。
青葉しげれる木の影の、　清き流れに小石とり、
さやけき月の影させば、　庭におりたち蟲をおひ。
ともゑと降れる白雪を、　もみぢの手にてうけとめつ、
たのしみあそぶ少女子の、　心やがて神ならん

はがき文

地

○櫻花

高知市永國寺町
吉良市子方　吉良夕蓉子

夕日の影を踏みながら、歸へり來る里の乙女子、たれに見せむとの心づくしぞ、馬の脊に薪と共に折り添へし櫻花一枝、時しも一陣の微風、無慚や、乙女が情をこめし櫻花、散り亂れて枝に殘るは蕋のみ。

馬曳く乙女花の散りしを知るや知らずや。

人

○春

近江彦根土橋渡邊内　みね子

春の空、うららかに晴れ渡りて一片の雲なく、裏林に囀る鶯の聲いとも長閑に聞え、底の小石も數へらるゝまで清き芹川の堤に、今を盛りと萠えいでし楊柳の糸長く垂れて流れ行く水に何をか描けり。

柳の水に描けるは「戀」てふ字か

秀逸

○勝栗

越後國　清水登志

「何にもならて」と霜ふり頭の茶屋の婆が盆に乗せて出したのは、この村名物の勝栗！顔見合して笑えむだ客は何れも年若な將校。時は何時？秋の末つ方滿韓の山野暗憺として物騒がしい頃。

殺も年少の將校呼んで曰く、ツムうひ女！

○深山路

巣鴨　田中ぶげつ子

深山路の歩みにつかれて老杉の下に憩へば、枯枝をのせて曳かれ行く牝馬の姿、坂にかくれ、木の葉軟風に二つ三つ落ち散りて、いづことも分かず鵯啼き、後は寂寥の領となりにき。

御身此寂寞の領に入り必ずや大なる或物を得しならん。

○山より都の友へ

東都　ゆかり女

秋闌けて候　月清き夕戀に鳴くか松虫いとゝ秋譜の調も細う落葉冴えて世は寂寥の聲に更けて候　嘗ては卿と共に愛でにし梅鉢草日増に色移り行くがうれたくて

切て朝は露に夢結ぶべう夕は月に戀語るべう捨置いて候

友に代りて只一言、山中の春亦閑かまほしく候

○破燈籠　羽前　ゆかり女史

おやまや藝子幇助に遊ばして貰ふ客衆が、此わたりをぞは〳〵連立あるき、此石燈籠は危いものじや、滅多に側へ寄るなと言ふて通る故、わしよりこなたの身の上が危いと言たけれど、聞かぬ顔して行過ぎぬ。

今の世この種の人多きぞうたてけれ

○附木舟　岩代國　門多さなへ

榮ちやんはこの寒いのに椽側でコツ〳〵と何をして居るのだろう？やがてはいつて來た顔も手も眞赤にして……………何をして居たのときけば軍艦をこしらへて居たと言ひながらとり出したものを見れば附木舟。

小兒の爲る事と言ふ事には毎も非常の趣味が含まれて居ます

○蝶のゆくへ　陸前　大槻丈子

ハラ〳〵と散た花びらは下の小川に落ちて浮いた何處からか美しい蝶が一つ飛んでその上に羽をたゝみ樂しげに流れて行く、今しその數尺向ふに大きい魚が、つと頭を見はして、渦を卷いて沈んだ。妾は直ぐそこを去つた。

あゝす善尺魔此文の眞意を覺る者は幸なり

○朧夜の記　石見　千代延俊子

一日乳母許訪ふ、湯に入らんとして見れば風呂は古木の梅の下、月は朧ろに薄絹もて包みたらんか如く、風なきに梅花一片三片零れて桶の中に落つ、乳母ばいふえゝ面倒くさいと、我は夢見る心地せるを。

乳母の詩味を解せざる所却て趣あり

○玉ちやん　福島縣　柏木哲子

至急との電報に驚き妾の歸つた頃にはもう玉ちやんは虫の息。とう〳〵三日目に黄泉の客となられた。嗚呼海棠の花片の樣な脣を開ひて姉ちやんと呼ぶのが今でも眼前に髣髴。御土産に買つて來た人形を誰にやろ―

哀恨綿々親人の心も思ひ遣られて

○花咲く朝　韓國　野口辰子

「坊よ父は出征くるからな、大人しくしての。」
「はい、お父ちやんもう出征の、ばんじやい。」
と孝ちやんは兩手に日の丸の旗を振揚げて、高く。……高く。……吁、愛兒の小さい胚より出でた此の聲は、いかに父の胸には響きたてあろ-か。

○鶯　新潟縣　星野紅華子

姉さん！鶯が庭の梅に！出て御覽愛らしいこと！急ぎ黒木の窓を開けば庭の若草青みを抽く纔に五分柳は稍嘆き烟に黄み、その傍なる紅き椿の梅の枝に、今やホヽ法華經の一聲…姉さん山々は眞白だのにね

○漁村の夕暮　大阪　板橋素子

夕日の光を浴びた漁村の森は、今しも美はしい榮ある色に彩られ、磯の

濱打際には優しい白い花が咲きつ消えつあゝ此夕の美觀!…無情?天はだん〳〵濃墨のような幕を擴げて此世を包んでしまつた、冲遙か靑白い漁火一つ。

○繪はがきにそへて友へ　東京麴町區　重田春子

淸子樣下手でも心がこもつてゐるこの繪…エンジェルの今、露をすはうとしてる花はお好きな詩を意味してるけしの花よ、この手にしてる弓矢…ほらキユピツトの…あなたバイオレツトの繪葉がきかけたら送つて頂戴待つて居てよ。

○靜ちやん　下谷　加藤瀧月子

おゝ微笑むだ顏付は奥樣に目鼻付は旦那樣にそつくりです事、靜ちやんが夢路で祖母の離枯れた乳房を含んでおる姿をみて隣の老媼がゆふた靜子の父は五ヶ月前は陸軍少佐で今は軍神、母は先月靜子を生んで逝れた

○かなしみの聲　小石川　みゆき

涙の乾くは何時、醒むれば納豆賣、世を吹く木枯しの寒きを告げて小雨ふる朝など堪えがたき想す。寐むとすれば、鍋やきうどんと呼ぶ聲のうちふるびて、浮世の波の高きに泣く。あゝ世は悲愁の聲にみちて、

○曉の風　遠江　大石よし子

「坊のお父ちやんは何處!」

ふところに乳を吸つてゐた稚子は玉の樣な瞳を開いて紫の雲に輝く白星を指した。

「おゝ行きたい父つちやんの側!」

星は忽ち雲にかくれて、冷かに吹く曉の風。

○かたみの血潮　埼玉縣　新井琴子

忘れもせぬ十月〇日出征勇士送迎の折汽車の窓より投げ込みし絹手巾!歌をものして。今日はからずも妾が手元に送り返されぬ。見れば血潮の日のみ旗と化してしかも彈痕あり〳〵と三つ四つ五つ、あゝその君は?

○お淸書　埼玉　新井こと子

弟の駿夫は今年七歳で尋常一年生であります、今日學校から歸るや否や妾にこのお淸書を戰地の父上に送つて下さいといふのです、甲の上なものだから、けれどあゝ何といふたらよいでせう!!父は今は…吁。

○深夜の思　三重縣　山崎初子

夜はいと靜かに更け渡りて大空は黑き幕もて掩はれ庭には木の葉を誘ふ風だもなく沈みきつて居る、此寂寞の深夜我は寢も得で思ひは故鄕の友の上に通ふのである、噫春子の君今いかなる夢路を辿り居給ふか。

○春の野　駿河　紫桂女史

若草もゆる春の野に、スミレ、タンポヽ、ツクシなど摘むべく乙女は、籠さげて、母のみひざをはなれたり、春の女神に愛の子の、これぞ恰も好畫圖よ。

○月の聲　山口縣　山下孤舟女史

妾は天界に生れて茲に幾萬歲、時に暗鬼の夜神を破り或は盈虧の好例を示して、常に下界に務むるに、彼は怡然として顧みず、且時に從ひて妾を善に引き惡に諷し、剩へ種々の異名を附す、嗚呼何と彼の無情なるや

○いさゝ小川の夕ぐれ　越後　五十嵐富美

田の畔道をたとりつゝ家路にいそぐ賤が男の笠は今しかなたの森にかくれて影見えずなりぬ。天に音なく地に聲なく、只かすかなる小川のせゝらぎのみ平和の樂を奏でゝ、やがて來ます夜の女神を迎ふなりき。

○月　日本橋　佐久間靜子

月になりたる山茶花の垣に今し羽もてる少さき神の子となりたらんようなる我は、いひしらず心淸らかにさわやかに…月はそも我に何をか教ふる…。

○冬の夜　廣島　寺一研子

北風强し、小窓に障子のばら〳〵と音するは霰なるべし、夜益々更けて電信線のうなりいよ〳〵高し、今夕我門に物乞ひし少女子や今夜何所に如何なる夢をや結ぶらん。

○軍國の娘　福島縣　齋藤美都子

兄の出征後殘るは老衰せる親と彼女と唯二人彼女は兄に替つて親を養ふべく學校も退ひた。而して〇〇工場の女工となつた。近頃發行の女子講學會講義錄の新入會者報告欄に彼女の名が見へた。

○梅　福井市　保子

ホーホケヽヨと鶯のやさしい初音に、そつと窓を開けますと昨日迄蕾であつた梅が妾の顏を見て笑て居る樣…あゝ主なしとて春を忘れずに咲いた此の梅の此の香が今兄樣の征衣の御袖に通つて居るてしようか



佐々木信綱先生選

天

駒鳥

上野國太田町在寺井木暮長七宅　木暮とよ

黄金の鈴しろかねの鈴ふるがごと
はるの譜もらすこまどりのこゑ

（評）歌もまた黄金のひゞきありといひつべし

地

吉野の櫻

埼玉縣入間郡所澤町　山下芳葉

大御軍かちどきあげてかへるまで
よしのゝ櫻さかずもあらなむ

（評）原作軍國の花にしあれば吉野なる櫻よ咲くな兵歸る迄とある意をとりて詞をかへたり、着想新らしきをもて地とす

人

櫻花

上總山武郡千代田村岩やま五十こく　小川芳竹子

夕ぐれを若き舍人の蹴鞠それて
櫻散るなり三片二片

（評）原作初句今日もまた結句二片三片とあり加筆味ひ給へ

秀逸

○友のなさけを　伊勢　加藤倭文子

なげかじよ君がなさけをよすがにて
たのしき春を待ちわたらまし

（評）心やさしき人の歌なるべし

○　牛込　渡邊まき子

ひさまつきて袖にうけばや母君の
みはかの上に散る櫻花

上句原作ひさをりて袖にうけはや母上の

○月　神戸　小西ふさ子

たづねきてあるじをとへばひろき野の
かすみかくれに羊おふといふ

結句原作羊かふなり

○しら桃　近江　柴原茂子

水車のどかにめぐる音すなり
白桃さける河ぞひの里

○　秋田縣　英れん子

美しき雲流れ行く春の水に
繪筆洗へば花ちりかゝる

○　陸前　大槻加津子

花瓶の紅梅香る小座敷に
繪の具とく夜を春の雨降る

○　北多摩　小寺とめ子

春川のふちの松かげ柳かげ
いづれのかげに舟とゞむべき

○　新潟　内藤ゆり子

影ふみて遊びし友よ今はいづこ
其花園の春の夜の月

○　備前　松本もと女

梅ちりて春雨細う降る夕寺に讀經の聲ひくきかな

○　武州　新井琴子

二人行く影うら／＼と霞むなり若草もゆる川沿ひのみち

○　新潟　内藤すいむ

しづやかに彩羽ひろげて歩みいてし孔雀に春の光みちたる

○　新潟縣　小林仲子

月もなほ昔をかたる心地してともに見しよの影しのばるゝ

折にふれて　秋田縣　石澤千香子

おもひ出の我むれいたしそのよひもこよひも月夜川添のみち

○　筑前　花田います

益良夫が駒に水かふ柳蔭柳におこる春の夕風

水仙花　埼玉縣　田島伊代子

びんの毛のほつれも見えず若き子の誰に文書く水仙の窓

夢さめて　本郷區　室井きさ

二百里の東友をゆめにみて果なの戀を枕に語りぬ

雪　横濱　さち子

あゆつりにくる人たえて玉川の衣うつさとにゆきのふりしく

○　青森縣　石岡光江子

をち方にわら打つ音もたえ行きて靜かに暮るゝ春の山里

墓畔　山城國　松田雪子

彼の地にはかゝる草花なきものを眠れる夫に此れぞ手向けん

偶感　福島縣　佐藤榮子

給はりし君が玉章焚き捨てゝ儘ならぬ世の戀に泣くかな

新年　筑後　横山うめ子

日の御旗軒にかゝげて門ごとにくもりなき世を祝ふ今日かな

春風　豐前　笹波つゆ子

薄す月にさぎりたゞよふ野の朝を梅の香低ふ春の風吹く

○　紀伊　岩橋直子

初春に學びの窓を明け見れば梅の木の間に鶯ぞなく

○　長門　梅田染子

うれしくも梅の園に迷ひけり月靜かなる朧夜にして

○　千葉縣　翠蹊女史

ふる里の川の水音變られど我れ姿はおいにける哉

立春　和歌山　山東香

旅衣はる立けふの山里はふり積ゆきを花とこそ見れ

○　千葉縣　呉いち子

花雲のかゝるを見ればなか／＼に戀しかりけり故里の山

冬の山里　福島縣　杉原季子

見せばやな花のとぼその人に今朝枯木に匂ふしろかれの花
○　下總國　小高済子女
手箙提げし少女子二人麥の畦に入りつと見れば麥笛の聲
磯千鳥　磐城　横山八重
松三里簀の中に浪の聲絶え間絶え間に千鳥なくなり
春風　下谷區　太田榮子
打ちむれて野邊に若菜を摘める子の袂を輕く春風のふく
○　丹波　波多野紫子
心地よや恨み重なる仇の艦沈づめし海に朝日上るなり
○　上總國　美枝
うすかすむ麥畑遠くつくるところ牛飼ふ藁屋桃の花さく
春雨　岩代　八巻なつ
若菜うるうなゐの聲にゆめさめて朝戸あくれは春雨の降る
○　上總國　袖野浪子
小松原駒引きとめて斥候の敵勢窺ふ月のさやけき、
新年山　備後國　桑原八重子
山といふ山の上なる富士の峯初日輝くみよそめてたき
○　伊勢國　堀　富子
鐘の音に有明月のかけきえて翌霜白き里の板橋
○　群馬縣　荒江菊枝子
待ちわびし軍のつまは歸りまさてことしまた散る白梅の花
○　熊本市　大島菊子
血に染みし劍を洗ふ益荒雄が息吹眞白き北支那の原
出征軍人を思ひて　駿河　小澤紫桂
内地だにかばかり寒き冬の夜を露營の夢の忍ばるゝ哉
新年の山　熊本市　長野菊代
紫のとばりかゝげて笑みませる富士の神山詩に明け行く
○　韓國　野口辰子
わかくさの戰死ときゝし新妻は國の爲とて笑顔もらせり
皇孫殿下の御降生を奉祝りて　神戸　尾崎みとり上
九重の竹の御園にかすそひてたかな茂れる御代そめてたき

❋❋❋❋❋❋❋❋❋❋❋❋❋❋

能登のうみ波はしづかに日はくれぬ越の山々いま眠るらし
○　加賀　みどり
ますらをが駒乘りならす夕暮の馬場のあたり花ちりみだる
○　筑前　花田うらの
黄昏れて小鳥の聲も打絶し梅の花園月になりゆく
落葉深　上野國　三木たま子
吹くかぜに木葉ちりりして山里のみちはいづこと見えわかぬまて
○　和歌山　かつら子
山寒み月は凍りて冴ゆる夜に先思はるゝ滿洲の空
北行の雁　山口縣　山下孤舟女史
夕まぐれ空に文字かく雁かれはたか玉章の使なるらむ
故人の植えし梅を見て　磐城國　關本たく子
なき人の手植ゑの梅はさきそめて思出多きみんなみの窓
三句以下原作榮ゆなり經讀鳥の今日は何にして　千葉縣　大川せゐ子
○　遠江　大石よし子
水小屋に子等のきれ歌きゝながら車にゆるき春の水見る
○　下野　山本蓮江
風寒く波たゞ白き闇の夜を船宿起すおとろ髮の人
○　千葉縣　羽山くら
敵騎二騎三騎四騎過く雪の夜に影ほの白き星のきらめく
○　越後國　内藤ゆき
天の野の金色薔薇くづしては夕日快樂かみだれあや雲
折にふれて　紀伊　白蘭女史
物は皆なさてはならしならすとてなさてやまめやわれも人の子
旅順の開城を聞き　鳥取　上山千重子
あだなせるえみしもいまはちから盡き大御軍の前にぬかづく
霜　伊勢　三輪あさの
この霜のふらすは吾の手入れせしさゝん花の花もさかへかりしに
新年雪　三重縣　伊藤しず子
ことしこそ幸多からぬ門松に雪の白ゆふかけて祝へは

○しら桃　　近江　柴原茂子

水車のどかにめぐる音すなり
白桃さける河ぞひの里

○　　秋田縣　英れん子

美しき雲流れ行く春の水に
繪筆洗へば花ちりかゝる

○　　陸前　大槻加津子

花瓶の紅梅香る小座敷に
繪の具とく夜を春の雨降る

○　　北多摩　小寺とめ子

春川のふちの松かげ柳かげ
いづれのかげに舟とゞむべき

○　　新潟　内藤ゆり子

影ふみて遊びし友よ今はいづこ
其花園の春の夜の月

○　　備前　松本もと女

梅ちりて春雨細う降る夕寺に讀經の聲ひくきかな

○　　武州　新井琴子

二人行く影うら／＼と讀むなり若草もゆる川沿ひのみち

○　　新潟　内藤すいむ

しづやかに彩羽ひろげて歩みいてし孔雀に春の光みちたる

○　　新潟縣　小林仲子

月もなほ昔をかたる心地してともに見しよの影しのばるゝ

折にふれて　　秋田縣　石澤千香子

おもひ出の我むれいたしそのよひもこよひも月夜川添のみち

○　　筑前　花田います

益良夫が駒に水かふ柳蔭柳におこる春の夕風

水仙花　　埼玉縣　田島伊代子

びんの毛のほつれも見えず若き子の誰に文書く水仙の窓

夢さめて　　本郷區　室井きさ

二百里の東友をゆめにみて果なの戀を枕に語りぬ

雪　　横濱　さち子

あゆつりにくる人たえて玉川の衣うつさとにゆきのふりしく

○　　青森縣　石岡光江子

をち方にわら打つ音もたえ行きて靜かに暮るゝ春の山里

墓畔　　山城國　松田雪子

彼の地にはかゝる草花なきものを眠れる夫に此れぞ手向けん

偶感　　福島縣　佐藤榮子

給はりし君が玉章焚き捨てゝ儘ならぬ世の戀に泣くかな

新年　　筑後　横山うめ子

日の御旗軒にかゝげて門ごとにくもりなき世を祝ふ今日かな

春風　　豐前　笹波つゆ子

薄す月にさぎりたゞよふ野の朝を梅の香低ふ春の風吹く

○　　紀伊　岩橋直子

初春に學びの窓を明け見れば梅の木の間に鶯ぞなく

○　　長門　梅田染子

うれしくも梅の園に迷ひけり月靜かなる朧夜にして

○　　千葉縣　翠蹊女史

ふる里の川の水音變られど我れ姿はおいにける哉

立春　　和歌山　山東香

旅衣はる立けふの山里はふり積ゆきを花とこそ見れ

○　　千葉縣　吳いち子

花雲のかゝるを見ればなか／＼に戀しかりけり故里の山

冬の山里　　福島縣　杉原孝子

見せばやな花のとぼその人に今朝枯木に匂ふしろかれの花
下總國 小高清子女
○
手籠提げし少女子二人麥の畦に入りつと見れば麥笛の聲
磐城 横山入重
磯千鳥
松三里濱の中に浪の聲絶え間絶え間に千鳥なくなり
下谷區 太田樂子
春風
打ちむれて野過に若菜を摘める子の袂を輕く春風のふく
丹波 波多野繁子
○
心地よや恨み重なる仇の艦沈づめし海に朝日上るなり
上總國 美枝
○
うすかすむ麥畑遠くつくるところ牛飼ふ藁屋桃の花さく
岩代 八巻なつ
春雨
若菜うるうなゐの聲にゆめさめて朝戸あくれは春雨の降る
上總國 袖野濱子
○
小松原駒引きとめて斥候の敵勢窺ふ月のさやけき、
備後國 桑原八重子
新年山
山といふ山の上なる富士の峯初日輝くみよそめてたき
伊勢國 堀富子
○
鐘の音に有明月のかけきえて置霜白き里の板橋
群馬縣 荒江菊枝子
○
待ちわびし軍のつまは歸りまさてことしまた散る白梅の花
熊本市 大島菊子
○
血に染みし劍を洗ふ益荒雄が息吹眞白き北支那の原
駿河 小澤紫桂
出征軍人を思ひて
内地だにかばかり寒き冬の夜を露營の夢の忍ばるゝ哉
熊本市 長野菊代
新年の山
紫のとばりかゝげて笑みませる富士の神山詩に明け行く
韓國 野口辰子
○
わかくさの戰死ときゝし新妻は國の爲とて笑顔もらせり
神戸 尾崎みとり上
皇孫殿下の御降生を奉祝りて
九重の竹の御園にかすそひてたかな茂れる御代そめてたき

○
加賀 みどり
能登のうみ波はしづかに日はくれぬ越の山々いま眠るらし
○
筑前 花田うらの
ますらをが駒乘りならす夕暮の馬場のあたり花ちりみだる
○
上野國 三木たま子
黄昏れて小鳥の聲も打絶し梅の花園月になりゆく
落葉深
和歌山 かつら子
吹くかぜに木葉ちりして山里のみちはいづこと見えわかぬまで
○
山口縣 山下孤舟女史
山寒み月は凍りて冴ゆる夜に先思はるゝ滿洲の空
北行の雁
磐城國 關本たく子
夕まぐれ空に文字かく雁かれはたか玉章の使なるらむ
故人の植えし梅を見て
千葉縣 大川せゐ子
なき人の手植ゑの梅はさきそめて思出多きみんなみの窓
三句以下原作榮ゆなり經讀鳥の今日は何にして
○
遠江 大石よし子
水小屋に子等のきれ歌きゝながら車にゆるき春の水見る
○
下野 山本蓮江
風寒く波たゞ白き闇の夜を船宿起すおとろ髮の人
○
千葉縣 羽山くら
敵騎二騎三騎四騎過く雪の夜に影ほの白き星のきらめく
○
越後國 内藤ゆき
天の野の金色薔薇くづしては夕日快樂かみだれあや雲
折にふれて
紀伊 白蘭女史
物は皆なさてはならしならすとてなさてやまめやわれも人の子
旅順の開城を聞き
鳥取 上山千重子
あだなせるえみしもいまはちから盡き大御軍の前にぬかづく
霜
伊勢 三輪あさの
この霜のふらすは吾の手入れせしさゝん花の花もさかへかりしに
新年雪
三重縣 伊藤しず子
ことしこそ幸多からぬ門松に雪の白ゆふかけて祝へは

旅順陷落　千葉縣　山田安子

細戈千足の國は祝ふなり十年の恨み今はらしえて

○　下毛　阿部かつ子

夕暮をつぐる鐘の音遠く消えて月かげ寒く木枯の吹く

○　越後　杉本たい子

冬かれし野邊の淺芽に霜おきて夕くれ寒く狐なくなり

○　廣島縣　堀田はる子

今宵君とわかれの袖のしほたれし朧ににほふ花のしたかげ

落葉　越後　杉本しん子

もの凄きよせ手の聲にとれば栃の槻の木落草みだるる

○　青森縣　石岡光江子

もの凄ごき砲の音やみて明けし夜に無名山上旭旗輝く

○　能登國　杉下ふみ子

彈くゞり鐵網こえて進み入る此の繪この時兄はいづくに

○　常陸國　四野春女

戰ひのありし昔のあといづこ麥畑育く石ところ〴〵

花　越後　渡邊かれ

春めきて春たつらしも立ちそむる世は春なれや花も春なれ

○　兵庫縣　山本菊子

戀わぶる若き我身を情あらばしばしの宵を夢にみちびけ

折にふれて　周防　堀龍子

只ひとり此の山奥に朽ちなまし老先きたのむ親を如何にせん

汽車のうちにて　東京　後藤米子

朝風に身をば吹かせて若き女何思ふらんそともながめて

○　越後　房江女史

御苑生に鞠つきゐますひめ宮のあけのはかまに花吹雪する

若葉　越後　島子

たちこむる霞をわけて霄わけて野ざはの根ぜりひくは誰が子ぞ

冬夜　磐城國　紫露女

風寒く吹きつる夜半にひえ鳥の鳴く音ひびきて月落ちんとす

鶯の野の梅に囀づるを聞きてよめる　常陸國　石崎霞水

夜をこめて野中の梅に聞ゆなりふし面白きうぐひすの聲

○　上毛　村岡美江子

前の田の一すぢ小川月冴えてなくなるくひな何をか忍ぶ

○　信濃　安孫子美子

逝きし子をすゞろに偲ぶ夕暮を壁に見いでし樂書の跡

○　京橋區　河村紫香

見渡せば茅停の浦波のどかにて霞にまがふ淡路しま山

折にふれて　山口縣　渡邊靜子

ちご眠る苫屋に桃の花咲きて磯部うら〳〵春の日たけぬ

○　岡山　秀芳女史

望たてかしまだちする君なれば我は惜しまじ惜しき別れも

こひしき友に別れし時　埼玉縣　保泉とく子

雲のみれかなたこなた別れても時しも待ちて逢んとぞ思ふ

○　岩代　永戸初子

白百合をたむけて君のみなよべとこたへもせぬぞおくつきの下

○　青森　石岡光江子

なき友が御魂か哀れ新星の輝き出でぬ亡せし夜べより

○　上總國　中村紫菫子

賤が家も春の女神は見捨てずよ軒端に匂ふ梅のはつはな

月前の梅　麴町　鵜澤花月

月影は稍床しくかすみつゝ洩てぞ匂ふ庭の梅が香

○　千葉　凰陽惠史

わが夫の今手負へりと夢さめて眺むる空に星一つ飛ぶ

結句原作「たましひの飛ぶ」

思ひ出て　兵庫縣　河内ゆづり葉

十年の恨みもやがてハルビンのみ空に高く日の丸のはた

○　日州　秋永女史

いつこ迄仇は逃けんみ軍の旗なびくなり野にも山にも

○　大和　中島菊枝

高殿に若き女の姿見えて紅梅かをる淡月夜かな

秋の夕鐘聲　栃木縣　金澤保子

入相の鐘のひゝきに一入のさひしさまさる秋の夕くれ　周防　田村遊喜枝

○

ふるさとの母上の身ぞしのばるゝ夕暮つぐる鐘のまに／＼　千葉縣　小川武子

春雨

まゝ母のゆるしをうけて少女子が若菜摘む野に春雨けぶる　岩代　門多さなへ

○

みいくさのしらせばかりを待ち／＼て春の立ちしも知らぬ年かな　伊豫　高橋かめよ

○

尼寺の古井のあたり花ちりて手向の水かくむ人あはれ　淡路國　仲井鳳子

○

美しう紅葉散り敷く初冬の廣庭に白う水仙花咲く　栃木縣　秀子

出征の夫を思ふ

遠征の我がせをしのぶる夕ぐれをあめふりいでゝ梅の花ちる　熊本　宮本乙女

雨後の月

雨すぎし庭の若葉に露おきてすゞしくてらす夕月夜かな　伊勢　伊藤雛衣子

春野

霞み立つ春の野十里見渡せば菜の花薫り雲雀さへづる　埼玉縣　波逸留子

○

美しきカアテン掛けし紅梅の窓によりたる姫影わかき　埼玉縣　久里林晃子

○

淡月に眞白き頬をそむけたる少女の袖に紅梅の散る　岩代　服部けさ子

○

一村はゆめよりさめず朝月にかをりは浮き白うめの花　富山　幽香子

○

亡き人のあけくれめでし山ざくら花さきにけり花散りにけり　武藏　宮内純子

春雨

なかゝきのしだれ柳にかすみつゝおとしつかなる春の雨哉　下總　岩瀬不二野

春の夕

花なりなり墓にゆらぐる影見えてひとり子の行くたそがれの丘　東京　加藤わか子

故郷を思ひて

もゝしきの都の空に學ぶ身は雁のたよりぞ待ちわびれける　大阪市　池田靜子

○

乳兒抱きて逝きし背忍ぶおばしまに眞紅の牡丹一つくづれぬ　紀伊　森葉尾

梅村聞笛

梅村の思出多き夕月夜かすみをもるゝ笛竹のこゑ　磐城國　綿引しろ

○

月冴えて里の板橋霜しろく森の稲荷に野狐のなく　遠州　大村みゆき

水ぬるむ

牛曳て渡る野川の朝まだき身にしまぬまで水ぬるうなる　滋賀縣　藤居しず子

冬の夜

寒き夜に里の小道を雪ふみてかれの音細う念佛の人　磐城國　むらさき女史

○

胸にみつ恨みはらさん武夫の劍に光あり銃に響あり　磐城國　鈴木玉子

○

風に笑む桃よ櫻よ海棠よせまき小庭の春うつくしき　越後國　武　とい子

○

蝶となりて神の秘め歌そと聞きぬあゝ去りがたし花の下陰　靜岡市　毛利賀陽子

雪

天つ神のみ惠みなれや冬がれし千草をおほふ雪のわた衣　越後　高橋むら子

山家雪

尼君の昔し語りに夜は更けて歸る砌に積る白雪　群馬縣　吉田きみ子

○

船唄はかすみに消えて江の南風あたゝかに桃の花ちる　群馬縣　須藤うめ子

○

彼の地へと征てし兄君今いづこ愛でにし白梅ははや散りにけり　上野國　吉村はな子

○

ものいへばうち笑はんばかりなりにけり母の顔だにまだしらずして　群馬縣　上原なか子

○

滿洲の黒雲はれて夜はあけてこゝに平和の旭日照添ふ　陸奥　芳枝女史

戰死者の妻に代りて

散る花ときそひし君をしのぶ身はそほふる雨も涙なりぬる　青森縣　靜園女史

夜嵐

吹きすさぶ宵の嵐に夢さめて思は又も滿洲のはら　名古屋　鈴木との子

春朝

西に行く夫を送りて立つ門に朝霧晴れて梅か香高き　名古屋　鈴木しげ子

社頭冬月

断髪の老婦ぬかづく影痩せて社頭に寒き冬の夜の月　東京　重田春子

○

はかなく〳〵夢の名殘かほの白う有明月の影もさびたり　大阪市　板橋薫子

○

鶯の羽風に散りし梅の花谷の小川に二つ三つ流る　石川縣　比古田君子

○

曉の雲間の星のまれにしも聞くぞうれしき山郭公　相州　内野鈴子

○

立春の四方淸けらきあしたにはまこと神代の心地こそすれ　上毛　木暮とよ子

○

僞のある世としらてたのみてしわがまことこそくやしかりけれ　秋田縣　狹れん子

○

鄰近く眞晝靜かに家見えず桃さく邊り唯鷄の聲　磐城國　佐藤榮子

夜半夢さまし

逝みてし夢は跡なくさめぬれどなに目にのこる母のおもかげ　長門國　杉山きくの子

○

うすぐらきなみまをわたる鐘の音のひとつ〳〵に夜はあけにけり　廣島　織村蒼芽

水邊柳

風そよ〳〵小川の岸にいくたびかみどりをさらす靑柳の糸　岩代國　大中小枝子

折にふれて

なつかしき君か玉章よむ窓に春つげにけり里の鶯　神戸　上田輝子

五月雨

五月雨に訪ひくる人も跡たえて獨りかなづるつくし琴哉　廣島縣　渡邊喜子

○

山寺の鐘のひゞきの身にしみて雨戸に當る初霰の音　長崎市　林田滋枝

○

春雨の露けき窓を花鳥のぬれても濡ぬこゑぞ嬉しき　横　川口ふみ

上村中將の再發を思ひて

吹雪さへおかして咲けり梅の花やがては結ぶ實とはなるらん　群馬縣　須藤芳枝

○

上野山櫻か岡に杖ひきて花の下路遊ぶ樂しさ　京都　奥村はな

○

いくさ人思ふ心やいかならんたけしとは云へ寒き此日を　岡山縣　小山松枝

○

しら雪のおなし色にはつゝめともかをりぞしるき庭の梅か枝　尾張　橋　錦谷

○

朧夜に經よむ聲のきこゆなり梅まばらなる小さき尼寺　常陸　舟橋桂子

梅

賤かやのばゞかいとひく日あたりに東風なまぬるく梅か香深し　彦根　田島藤子

○

なき友の愛てし紅梅咲きたれと送らん道のなきそかなしき　愛知縣　戸田きち女

○

吹く笛は梅散る風にさそはれて聲音もかをる春の夕暮　牛込區　小林冬子

○

つれ〳〵に妹のかなづる琴の上にさくら花ちる朧夜の月　大阪　角田はま子

○

みふみ得てしばしは泣きぬほゝゑみぬなかしと今をくらべ〳〵て　廣島市　寺一研子

春霽

えんむすぶ神の御前にひざおりて祈るか男女の若人ふたり　近江國　林棣子

春夢

明石かた濵むらさきに明そめておぼろにかすむ淡路島山　東京　森ふさ子

○

亡き母と花を眺めてかたりたる春の一夜ぞたのしかりける　豐後　矢野靜香

○

うらわかき賤女詣する新卒塔婆夕暮寒う松風の音　大分縣　井上美枝子

○

兄戰死すの夢に煩悶へし春の宵よきたより得て鶯を聞く　富山縣　小山かの子

風

山の宿に童のたのみいなみかれて風に筆とる京の蒔工
青森縣　汀蘭女史

古寺の月
蝙蝠の小旗にとびかふかげ見えて月ものすごき峯の古寺
伊豆　内田三千枝

○
墨染の衣寒けき堂の背緋桃に通ふ夢なつかしき
京橋　岡崎千枝子

○
荒れはてし寺の夕暮來て見れは昔しの一と匂ふ梅が枝
熊本　羽田すみれ子

梅村聞笛
笛竹のふしもかをりてきこゆなり梅園村の月の夕ぐれ
熊本市　金津なでしこ

○
砲音はいや遠ざかり霧の中に旭旗ひめくしべりあの原
京橋　田中女史

○
牧場あたり夕霧深き此夕べ牛追ふ稚兒の聲あはれなり
美濃國　臼井茂子

寄梅花散
心あらば香をだに殘せ梅の花散りにし後の思ひ出にせむ
大阪府　はろ子

あけぼの
有明の月はかすみにきえそめてちる花ゆかし春のあけぼの
山梨　林春子

○
奥殿の燈とほくほの見えて御苑のあたり荻の花ちる
京橋　田中秋子

○
野の末の酒うる店に夕日さして野蜂さゝやくあぢさいの花
石川縣　山上小夜子

○
うららけき若草萠ゆる春の野に騎馬ゆたかなる若殿の君
上毛　今井矢面子

○
露しげき草を衾のかりまくら夢こそめぐれ故郷の空
北海道　北原清子

○
我友よ千代の鑑となるものはたかれの松の操なりけり
和歌山　保田みどり

雪
ふる雪に竹の村立末ふしておくなる寺もあらはれにけり
千葉縣　英子

凱旋の夢
凱旋の夫の袂よくこそと寄らんとすれば夢は覺めけり

＊＊＊

和歌山　水本喜代子

梅
夕月夜梅の花散るおはしまに唐歌歌ふ公達やたれ
信濃　近藤しづ子

兵士の妻
縫ふ針をしばし止めて遠征の夫思ふ身のつまのこゝろは
和歌山　水本加代子

社頭杉
みつかきの神代のまゝのふる事をかたるににたる杉の下風
淡路　貞子女史

○
磯千鳥啼く音に夜半の夢覺めて障子にうつる有明の月
前橋市　佐藤すみれ

○
ともぐ＼に心あふ君つとひ來て歌留多とる夜のうれしかりけり
岩代國　根本松江

負傷兵
うめく聲かすかになりし丈夫はシベリヤ原頭夢に見るらん
下總　中村由

旅
美しき旭の光り身にうけて旅路を辿る春のあけほの
伊勢　三谷ため子

○
昨宵見し君が笑まひを解きかれて星なき野邊を獨りさまよふ
新潟　内藤胡蝶

○
ふる雪を見るにつけても思ふかなとしふる里の父やいかにと
茨城　石塚雲琢

○
戀やなに愛やそもなにうらぶれの吾に榮なし二十歳のゆめ
茨城縣　石孤孤芳

○
呉竹の窓にさすかげ初日影獨り默思の繪師若き哉
備中國　葛原しげ子

○
覗ひ日も同じつゞれのみなし兒が物賣るあはれ神知りますか
備中國　川合房枝

○
春の雨やみし鎭守の池の面に小龜浮びて靈しづかなり
名古屋　伊藤花外女史

○
打ちつかれしばしまどろむとりてにも明日の軍の夢結ぶらん
宮城縣　大槻丈子

○
春の川乘り合ひ人のさゞめこと西國なまり奥州なまり
石見國　千代延俊子

折にふれて

入相の鐘は嵐となり行きて梢響るゝ山寺の庭　大阪　福田嘉子

○

うす霞とほくたなびく湖の上を白帆消え行く春の夕ぐれ　高崎市　長坂英子

○

怠たらず編みて送らんなつかしき君にまたるゝ之れと思へば　伊豆國　古見彩子

○

夕雲の行方眺むる薄闇を笛におくれし鹿のなき行く　岩代國　日向露子

○

鶯

春立つと都の友のことつてし夕の窓に鶯たはしる　岩代國　加藤光子

櫻花

世の春におくれし物とうくひすは雪のふるすをいてゝなくらん　富山縣　福岡やい子

春夜

日うら〳〵櫻の花は散るなり武夫祭るみやしろの庭　越中　島文子

冬の月

行里の母親忍ふ夕ぐれに春雨くらく梨の花散る　佐賀　武島ひて

○

凩のすさむ今宵を窓越しの月面白き夜半かな　群馬　今井房子

○

美くしくかざり立てたる雛だんに心も赤きものゝ一枝　香川縣　藤井靜子

○

戀ふ人は海山幾つへたつれど月かはるまし此處も彼處も　三重縣　山崎初子

○

立ちつゞく磯の小松の青葉ごし沖こぐ舟の帆かげ見ゆるかな　名古屋　渡野秋子

○

つはものに召し出だされし身の幸ちはなどて枯野の露ときゆべき　石狩國　吉田みか子

○

晁やく烟なゝめに立つ見えて春雨寒し滿洲の原

秋衰

さあらだに寂しき秋の夕ぐれを人なき里にひぐらしぞなく　群馬縣　茂木きわ子

○

雨はれしばらの一枝にぬる蝶の夢靜なり園の夕暮　北多摩　小寺花子

結局原作「春の里川」

冬月

風寒み置く霜白き冬の夜にあはれ淋しく出つる月影　上毛　茂木敏子

鶯

今朝も來て朝寐の床に音づるゝ節面白し園の鶯　千葉縣　原田清子

鶯

さら〳〵と障子開きて椽にいづる尻うらわかし鶯の聲　埼玉縣　山下芳葉

軍馬徴發

野かひせし駒の立去る姿みては孺もさみし若草のうゑ　東京府　小島濱子

○

いとせめて君か妹と生れなは仕へまつるをなくさめにせん　陸前國　熊谷繁子

○

梅散りぬ櫻もちりて此春は病の床に半ばくらしぬ　磐城國　綿引しろ子

鶯をきゝて

亡き夫のことしおもへば鶯をこの春ばかりもの憂くぞきく　遠江國　芳村梅子

雪中梅

一枝は春をも待たで雪の中にほころびにけり紅梅の花　福岡　桐山圭枝

○

落葉堆き社の森の繪馬堂に春日滿ち充ち金碧薫れる　磐城　柏木露子

春の夕

露立ちて靜かに暮るゝ春の湖軒には匂ふ紅梅の花　下總　須原水鶴

鉢の小梅

きのふ迄梅がとたのしみし涙子逝かれて今朝花笑みぬ　下谷區　加藤瀧子

梅

もの思ふ文の机に一二輪慰め顔に窓前の梅　千葉縣　服部恒子

冬の月

山の端に弓はり月の影さえて鎭守の森に狐なくなり　三重縣　堀とみ子

霜

冬枯し土手の草葉に霜置きて傾く杭にせきれいのなく　伊勢國　竹窓女史

梅

嬉しくも梅の小路に迷ひ鬼空には月の影も霞みて　千葉縣　吉原靜江女史



俳句



巖谷小波先生選

天

歌主は紫被布や宵の春　仙臺市鐵砲町十二番地　佐藤日吉子

地

春の池緋鯉眞鯉の戀もあらん　富山縣福岡町江尻方　清野はる子

人

春雨や麥うつくしき丘の上　福島縣信夫郡餘目村下飯阪　星俊子

秀逸

餅搗の提灯つるす軒端かな　大阪　加藤千代子
戀猫の通路ふさぐ女哉　秋田　佐々木きく代
大伽藍池に散りこむ椿哉　浦和　久里林晃子
春の山女ばかりて登りけり　遠江　坂田泉子
何ごとかふれ行さまの胡蝶哉　大阪　百瀬千枝子
朧夜や木辻は夢の捨て所　札幌　林佐登子
朝河岸や初荷積み出す船數多　埼玉　野口惠津子

小春の掾に小猫のひろれかな　京都　波多野繁子
たんぽゝや捨られてある小人形　遠州　芳川梅子
乳不足に泣かろゝ母の夜寒かな　磐城　綿引しろ子
朧夜や船歌うたう馬子二人　小樽　白鳥花子
蝶二つ暮行く春の靜かなり　下谷　太田樂子
廣澤や水より起る秋の風　名古屋　木村金子
紅に染む千草に凄し冬の月　磐城　柏木哲子
夕月や柳の枝にぼんやりと　陸前　桂島とみ子
寢た家の外より白し冬の月　麴町　鵜澤花月
日永さを歌にし句にす梅の里　陸前　大槻丈子
木枯の風寒う月落ちんとす　紀伊　赤井てい子
朝霧の中にテニスの仕合哉　淡路　春子
春寒き手を握りたるわかれ哉　能登　福岡てい子
木の雪の落ちて木の雪落しけり　上毛　茂木敏子
パイプルのしぼりに代へし菫哉　越後　燕さく子
靜けさや山茶花の散る寺の庭　宇都宮　矢島松枝
小春風や土手に居眠る風の主　大和　峰畑節子
春雨や淺茅が宿に三すくみ　遠州　大村みゆき
つけ紐をとけば出けり花すみれ　神奈川　中村美津枝
神の井のくむ無くて春寒し　京都　長谷川みつ
池の水緋鯉のとんでぬるむかな　牛込　星影女史
梅が香や崖にのぞめる寺の庭　浦和　渡邊留子
春雨の門に物乞ふ女かな　岩代　日向春子
野道の梅ほの白し朝月夜　石見　千代延操
春ぞめの屏風にすみのちりにけり　臺灣　川原さだ子
猿曳や襖細目に三の君　相摸　倉橋よしえ
斥候や屠蘇に替えたる巖清水　下谷　加藤瀧月子
春雨に傘さしてみる柳かな　陸中　鎌田安子
筏士の卯の花折りて下りけり　相摸　長谷川増子
鐘樓の下五百株の梅開く　伊豆　山崎郁子
出過しは人も嫌ふぞ土筆　群馬　吉田まみ子

☞改定

毎號懸賞募集項目

日本女子大學校教授文學士醫井雨江先生選

○論　說（半紙又は美濃紙廿四字二十行以内）

○抒情文（仝　上）

○敍事文（仝　上）

○消息文（半紙又は美濃紙廿四字二十行以内）

女子文壇社編輯局選

○ハガキ文（はがき振假名付廿四字四行限）

廣津柳浪先生選

○短篇小說　讀切（總ふりがな付廿四字六十行内）

東京女子高等師範學校講師文學士尾上柴舟先生選

○新體詩（半紙一枚十句以内）

竹柏園主佐々木信綱先生選

○短　歌（半紙又は美濃紙二ッ切一首限）

巖谷小波先生選

○新俳　句（官私はがき一枚一句限）

▲以上各欄共一人新作一篇宛寄稿之事

山中古洞先生選

○圖　畫（二寸五分の三寸判風俗景色五枚以内）（雁皮紙着色無用）

▲此外女子文藝又は家庭敎育に關する事項其他の通信妨なし

投稿締切は毎月十五日に繰上げ申候

但編輯局選に係るハガキ文又は誌友倶樂部其他讀者通信は勉めて編輯上差支なき限り間際まで採用するとあるべし

毎號獎學賞品規定

▲小說▲論說▲消息文▲抒情文▲敍事文▲圖畫の賞品左の如し

○天賞：金壹圓五拾錢

○地賞：金壹圓

○人賞：金五拾錢

（總て相當價格の物品を贈呈すべし）

▲新體詩▲ハガキ文▲短歌▲俳句の賞品左の如し

○天賞：本誌三ヶ月分

○地賞：同　二ヶ月分

○人賞：同　一ヶ月分

（總て逐號贈呈す）

賞品は總て揭載披露後五十日を經過の後美麗の證狀を添へ贈呈すべし

天地人賞に當撰者は可成次號發行期日の廿日前に「寫眞」送付あれ美術寫眞版にて印刷紹介すべし

▲嚴守すべき投稿規定必一讀を要す

○投書は各欄とも決して政治的時事論に涉るべからざること、○用紙は規定の紙に限る○投書は一行廿四字詰一枚廿一行に認むべし但し句點も一字に數ふべし○投書には題の下には必らず本誌に做ひ住所姓名を明記し、書體は楷書にて假名は平假名を用ひ明瞭なるを要す○各種の投書は必ず別に認むべし○封筒には『女子文壇原稿』の文字を記すべし○投書の中には他の用事の文句を記すべからず○投書には各自句點を施すべし、圈點は一切施すを禁ず○投書は他人の作物を剽竊するを禁ず之を犯したる當選文は無効たるべし○投書は一切返附せず○此規定に背く原稿は一切沒收す○投書は不足、未納税は一切受取らざるべし○投書丈け取纏郵送するときは開封にして差出せば卅匁迄二錢にて事足れり

▲寫眞寄贈＝各地女學校舍及校長敎頭を始め卒業生又は敎育上參考となる寫眞寄贈あれ寫眞版に印刷して紹介すべし

▲其他の事項は毎號の「編輯だより」欄に就て知らるべし

投稿家へ謹告

▲投稿者は執筆前に近刊の分に揭出しある投稿項目規定を熟覽ありたし

▲熱心なる諸姉の投稿は勉めて校閱の上順次揭載必ず規定を守り佳作を投ぜられんとを希望す

▲愛讀者、投稿家、諸姉が紙上の交際を計らんたる寫眞を集めて折々口繪に挿入す此好機會に撮影して奮て寄贈あれ

誌友倶樂部

皆さん此記事は必ず一讀願ますよ

▼私は女子文壇一號より購讀いたして居ります他の雜誌も二三册購讀いたして居りますが此の女子文壇ほど私の心にかなひし理想の雜誌は他にありません、記者樣ます〵御勉强なすつて健全に發育させて下さいどうぞ（美濃内藤みち子）

▼一筆申上候妾の理想雜誌は今や御社より御發行致され喜しき限りに有之就ては幾年となく健全で成育を御祈り申候さて私も下手ながら御交際致し度く存居候まゝ記者樣始めお友達の御方樣は私の名を御記臆を願ます（下關市岡ひで子）

▼私共が理想の雜誌は今年より勇ましく生れ出てましたほんとに嬉しう存じますどうか今後も健全で私共を御導き下さいまし（群馬大愛讀者）

▼記者先生に御ねがひ申ます誌友諸孃の御筆蹟を口繪に出していたゞきたいのです私は和歌がよいと思ひます佐々木先生に和歌を選むていたゞいてか又は本誌和歌の天質のを出して毎號筆蹟を蒐集して下さい他の雜誌に先をこされないうちにどーぞ御ねがひ申ます誌友の諸孃幸に贊成して下さいまし皆樣御きげんようさやうなら（ちどり子）〔記者曰く考へてみませう〕

▼皆樣よ私は有望なる皆樣と御一緒に愛讀の榮を得ましたのでございますよろしく御昵懇を願ひます私は文學詩文を好んで居るのですが天性もなし素養もなしとても博學多才の皆樣の中に投書してまことにおはづかしい次第ですけれども……以後は懸命に勉强致しますから笑はないでどうぞお導き下さいませお願します（福岡高松ひで代）

▼私等の机の友たる女子文壇の御發行を御祝ひいたします愛讀者の皆さんふつゝかものですが御交際をねがひます記者先生何とぞ書も募集して下さいませんか皆さんはいかゞで御座いますか（牛込愛讀者の一人）

▼謹んで新年を賀しますあはれ戰捷國の新年に生れ出でし女子文壇の益々盛大ならむことをいのり申します（潮風涼しき越路の西川畔にて永しけ子）

▼御社發行の女子文壇愛讀者の一人ですが發刊の日を待ち兼ねて拜見いたしましたところ中中面白うございました如何でしよう歡迎された中小說新體詩等の秀逸以上の方の御寫眞を口繪の中に入れて被下い御願ひ申します（伊勢愛讀者）

▼記者樣に御伺ひいたし升がどうしても〵美文と雜文との區別が分りませんのではづかしうございますが誌上て御數へ下さるやう願上升先ご手數ながら御伺ひ迄ゝ候（岩代白古みき子）〔記者曰く次號から欄を改めましたから投稿規程を御覽なさい〕

▼私は、此の欄が設けられまして誠に皆さんとお交際の出來るのを嬉しう存じます◎なるべく天、地、人賞にお當撰になつた方は「お寫眞」をお掲げ願ひます◎また記者さん、越中華女史樣の申されたく『通信欄』を何卒設けて下さい。（深川の江坂いく子）〔記者曰く寫眞は未だ集りません、通信欄は追々に致しませう、當分本欄にて通知を乞ふ〕

▼一記者樣にお願ひ申ます御誌の口繪に軍人の家庭や其他えらいお方の家庭の寫眞を出して下さい二私女子大學へ入學致したうございますがどなたか學資の補助をして下さるお方はありますまいかどうぞ十二分の御惠みあらん事を卒業の上は必ず御返し申ます（桜月女）

▼記者先生方へ、只今女學世界や婦人界等の雜誌が發行されて居りますが、どうも妾らのやうな無學の者には、わかり兼ねますので困つて居ましたが、今年の新春!!!それも旅順陷落といふ誠にお芽出度い時に本誌が、生まれたので、賀に實に嬉しくてたまりません、といふのも本誌が記者先生方の一方ならぬ御盡力で、妾如き者にまでも、よく〵わかるやうお書き下さるお蔭だと思ひますので……これは深く〵御禮を申上ます、妾は此後此の御恩報じに、どし〵原稿（誠に拙いものでせうが）お送りいたしませうから、何卒妾の切なるこゝろを、お汲みとりの程偏に〵お願ひ申上げます……さらば……いざ（山形霞城の片ほとりにて、土屋せつ子）〔記者曰く無論掲載します〕

▼投稿締切を、も少し長くして被下いな女子文壇が每月三日でなければ手に入りません（正子）〔記者曰く投稿〆切は每月十五日としました〕

▼記者樣へ、ハガキ文や俳句を半紙を葉書だけの大さに切り他の文と共に封筒に入れては如何ですか、ハガキ文は葉書俳句は葉書他の文は封筒とすると大層郵税だけでも不經濟ですよ。（東京讀書女）〔記者曰くはがき文、俳句は此通りで宜敷う御座います〕

▼私ねー敬愛なる御姉樣方と繪端書交換致したうありますわどうかめづらしいのを一枚づゝ御送つてよ私も送りますかられーそれから上山千重子さん鳥取縣の御人ですつて私なんとなう戀しうありますわ私もれー鳥取縣の人よ去年の秋神戸の學校に來たのです誠に恐なる私ですが爾後御交通を御願ひ申しますあなたの御高名は諸雜誌で承つてますわ（神戸諏訪山のほとり神山關子）

▼誌友諸女子に一言申します、妾はもと藤枝町の流家へ生れまして、さま〵の雜誌へも投書して居りましたが、程なく此處藤枝を距る一里餘の、葉梨村へ嫁入りましたが、夫はさる遼陽の激戰に、戰死しました、て妾しは亡き夫のあと弔ふべく森庭てふ草の庵を結び、黑髪かいおろし身には緇衣を着、もくぎよを、たゝく身とはなりました。本誌上にて紹介すべき寫眞は、妾の某女學校へ學びし時寫したのです、皆樣よろしく御ひまたてを願ひます（駿州藤池たけ子）〔記者曰く次項の流隈郎氏の注告により暫く寫眞掲載見合ます〕

▲拜啓貴社ます〳〵御隆盛の段奉慶賀候扨て本月一日發行御誌第二號短篇小說に於て地賞を得候「連錢葦毛」なる一篇は曾て小生が編輯し致し候別封「芳友」に掲載候ひしを剽窃せしものに有之候藤枝は小生の鄕里に候も藤池某なる名は未だ聞及さる所にして恐らくは假名なるべしと存候まゝ御手數甚だ恐入候へ共本名御分明に候はゞ御一報煩はし度今に斯る敗德者の絕えざるは慨嘆の至りに御座候御誌は幸に創立の日尙淺く候へ共今より制裁を嚴にして社規の振肅をこそ願はしく候へ失禮に御座へ共心付き候まゝ右申上候敬具ー靜岡高等女學校內瀧閑郁（記者曰く御注告に基き夫れ〳〵手配せり茲に深く御厚意を謝す」

▼神聖なる女子文壇が初號早々から剽竊の爲に汚されたのは私共の誠に口惜しう存じて居つたので御座いますが第二號を見まして私は實に——清淨を尙ぶ處女の身にこんな敗德なお方かおあんなさるかと思ひますと、口惜しい淚かほろ〳〵、頰を下りました、千葉縣の吉原靜江女史樣小說欄の〔動員令〕はよもやあなたの作では御座いますまい、私は秀才文壇で一字一句もちがはないのを見ました、作者は加藤血淚と云ふ人で御座います、それから同じ千葉の小高せい女樣、〔斷絃〕は決してあなたのお作では御座いません、私は言文一致で同じものを見ました作者は秋汀生と云ふ人で御座います無學な私にさへ見出される位で御座いますから外にはまだいくらあるかも知れません、あゝ實に嘆かはしい事で御座います、それから女子文壇の誌友の方々へ、私は至つて無學な者で御座いますがどーか御見捨なさらずに、御交際して下さいまし、左樣なら（赤阪區新町五丁目四十一番地河村葉秋子）

▼瀧川きよ子孃の一讀を乞ふ君が投し玉へる本誌第一卷二號の俳句〔惑狀に戀の薰りや朝櫻？〕此句は明治三十七年五月二十日發行中學文壇第六年十集百四十一號に於て而も一等賞を得し、佐賀縣、森國渓月兄の作なり暗合か？一字の差

なし剽窃か？賞讃以て如何となし玉ふろやアゝ一號には新体詩の剽窃（土浦町東崎中山方山田雪子）あり二號に亦瀧川きよ子孃ありしため僕！山田太だ忌を惜む「第一號に余が罪をあばきし山田雪子孃あり又二號に於て瀧川きよ子孃を罵倒否注告す否れ敢て諸姉を籠落する事を好まんや賢明なる撰者閣下の推察を乞ふ」（神田原雪子）

▼あゝ記者よ記者隱武士は現れぬ卑怯文士は露れぬ茲に〔野調〕一等賞たるもの僞作者は文技女史、女史なるかな女史男の女裝したる破廉恥漢この人間を誰とかなす曰く秋葉英次郎そのものなりこの者ぞ貧品の奴隷となりて才子振るの惡物なり我幸か不幸かこゝに記者に通知す女子の筆戰塲に男子の現るゝを記者よ宜しく英次郎なるを叱責否々斷頭臺にひきずり出して以後この戰塲に起たざらしめよ（佐原烱眼女史）

▼記者さん和歌や俳句には同案と云ふこともあり升か文章には同案と云ふことは稀ですわねー女子文壇第一卷第一號の消息文中〔雪見にまれく〕文（麴町ゆかり女樣）の文は中學世界の臨時增刊秀才詞林の消息文中雪見に招く文（岐阜師範學校專修科生前田よし子さん）のと同じですわ手の少しちがつている許りですよ心もすが〳〵しき此雪げしき（心もすが〳〵しきゆきげしき）ましていつもながめあきつる東山のけふにかぎりてねりぎぬ着て凝たる姿もなか〳〵にすてがたき心地せられ候そが上に夜神の：：：（日頃はあの眺めあきつる西方山のけふはさまかへてねりぎぬ着てれたる姿めづらしく見らるゝをあはれ夜の神の：：）つもるうさはらし致し度（つもるうさばらしざまはしさ）お出かけなさるべく候、御出かけ玉はり度候、右に記したのは秀才詞林にあるのと引合せましたのよ亦い點の打てあるのが前田さんのです記者さんもよく御しらべなすつて下さいな記者さんかなしいのねー生れたばかりの女子文壇にこんな人があるとは私かなしいわ記者さんどーしたらいゝでせう何かいゝ御考はないのどーか嚴重なる御所置がねがひ度いわ皆さんも其通りの御心でせう私は高等四年生ですが字が下手で能く分り升まいがどーぞ御判じ下さいよ記者さん寒い氣候ですから御身を御大切になすつて下さいねさようなら（あい子）

▼先づ誌友倶樂部で一寸申し上げます、妾等にとつて神聖な、最愛なこの女子文壇の今や御社から產聲を上げてほんとに嬉しう御座ゐます然るに二月一日發行第二號に、云ふも恐ろしき、剽窃文があります否小說ですよ千葉縣の吉原靜江女史の〔動員令〕は本誌の兄弟の秀才文壇四卷四號で入賞を得た岩代加藤とやら人の作から盜みしものでしよう又た同縣小高せい女の君の〔斷絃〕てふものもやはり盜んだのです言文一致第十五年十一號の吉田秋汀とやら人から：：：實に歎嘆小高吉原の二姉よ罪を悔ひて再び筆をとり給へ（岩手盛岡の香雲女史）

實に新潟縣の女子は殘念であろうかの女子文壇の第二號で「人」を和歌で得た武藤技子は實男子にて中學三年生とか去る長岡町發行の長岡日報にて一等二等を得た武藤子と同人で此新聞に出した二首も：：○○で又女子文壇に出した「人」も栃木町の木村靜江子で實は木村思水の作で中學世界七卷六號秀逸十三にある（新潟縣忠告女子）

▼千葉縣印旛郡富里村五十一旅館皎月軒方小高せい子樣よ貴女は名譽と云ふ事を御存じですか貴女が女子文壇一卷一號（投書なすつた短篇小說〔追分節〕は一昨年の四月一日發行し即ち第十五年第六號の言文一致に掲載せられて居た中村紫星樣の追分節と一字一句の相違もないでは御存ませんか只福松が善作、お松がお花、猪助が新助、春吉が清吉なんです、あゝ妾は此の目出度戰擬の一月にまして初號の本壇を汚さるゝ貴女のお心が實に哀れでなりません、以後は屹度に悔悟遊ばすが可いと思てますわ（山口縣木村きよ子）

▼本誌第一卷第二號で地賞を得た藤池たけ子さんの『連錢葦毛』といふ小說は如蘭吟社發行の芳友第二卷一號の瀧閑郁さんの作を剽竊したのですよ（駿河しだ子）

編輯たより



▲峻厳なる冬の神に代りて慈愛深き春の神は、溢ふるゝ如き温情を捧げて來り申候、野も山も草も木も等しく此恩寵を受けて生新の氣萌え、空翔ふ小鳥もいと嬉ばしげに春の頌を謡ひ過ぎり申候、吾等は此好季に於て花にも似たる本誌をは、雛祭る家庭に忙しき諸姉の許に呈し得るを榮といたし候。

▲本誌は本號より新たに「英文欄」を設け、津田梅子先生の女子英學塾に教鞭を執り居らるゝ河井道子女史に懇囑して、成るべく平易にして趣味ある英文和譯を掲載いたし候、河井女史は米國に留學せられ、今歸朝して津田先生の下に育英に從事せらるゝ方に御座候、而も河井氏の謙遜なる猶之を津田先生に校閲を乞ひ、然る後本誌に寄せらるゝ由に候へば、同欄が如何に斯界に光彩を放つべきかは必ずしも茲に贅せず候。

▲同欄は最初は名家文壇中に掲ぐる筈なりしも、寧ろ巻末に附し逐號其部分を割いて綴行けば、後には秩然たる一巻の書となして永く机上に備ふるを得べしとの考へより、斯く毎號四頁巻末に附するに至りしものに御座候、諸姉は倦まず撓まず逐號斯欄を保存合綴して、趣味と學益とを得るに勉められんことを希望いたし候

▲本誌第一號第二號共甚だ剽文家多く有之、之が爲め種々調査の結果第一號入選者へは第二號三號の誌友倶樂部に注告の通知なき丈は、去十日を以て夫々美麗なる褒状に賞品を添へて送附致し候、但し剽窃の注告と共に其證據歴然たるものは悉く無効と致候間、諸姉に於ても此の如き不名譽を敢てせざる樣御注意あらまほしく候、事情斯の如くに候へば、本社は懸賞品贈與法につき種々の考究を致したる結果、第二號當選分よりは當選之發表後二ヶ月後に賞品贈呈のことゝ致し候、必らずしも賞を得んが爲めにのみ文を寄せざる、眞面目なる愛文家は本社の意を諒とせらるべく候

▲本誌は本號より表紙を更に改むる筈にて石版に着手中、印刷部にて誤まりて原版を毀損せし爲め遺憾ながら前號の如く刷製いたし候併し次號には必らず改版變更いたすべく候に付、讀者諸姉は之を諒として來るべき次號を待たれんこと希ひ候

▲本誌の内容が前號に比して甚しく相違せるは、一に改新の域に歩を進めたるものにて。出來得るだけ諸姉の投稿を多く掲載せんと勉めたるに因るものに候、故に諸姉は本號に於て掲載せられずとて、決して失望することなく、續々投稿せられなば、號を逐ふに從つて掲載すること疑ひ無之候

▲本誌第一號は去月中旬にて第四版全く賣切れ候へ共、第五版の義は豫約者五百名以上に達し候へば、今一回増刷に着手すべく候間、若し御需用諸姉は此際至急最寄賣捌店又は本社へ申込被下度候

▲本誌各欄の文藝入選者は、至急寫眞掲載致し度に付、早々御送附被下度候、又本誌は入選者の寫眞を掲載すると共に、汎く愛讀投稿諸姉が紙上の交際に便宜を與へん爲め、女子にして本誌の愛讀者投稿者の寫眞を、折々掲載することに致候、諸姉よ、願はくば本誌の微意を察し速かに寫眞を送り來らんことを祈候

▲本誌巻頭にある名譽賛成員は、決して他誌の如く無責任に名を列する人々には無之、何れも餘暇健筆を揮つて續々寄稿せらるべく候、本號にも數名の快諾を得て巻頭に追加いたし候、諸姉は宜しく夫等の人々を記臆し置くの必要有之べくと存候

▲諸姉が投稿は毎號山の如く編輯局に堆積し、第四號分の如きも豫告の〆切期日迄には、非常の多數と相成るべけれど、前申上候通り漸次繰上行き候へば沒書の心配は御無用に御座候、但し諸姉が佳作を先に投寄せらるれば、選者の目にも止まりて早く紙上に掲載さるゝなれば、勉めて研鑽佳作をものし、選者始め諸姉並に編輯者共に滿足する樣御奮發有之度候

▲前號に投稿欄を「論文」「抒情文」「叙事文」の三欄に變設の旨申上候に對して、本號の「美文」「雜文」二欄なるには定めし御不審を抱かるゝ方も有之べく候へ共、右は恰うど四號の分より變更の都合と相成に付、投稿諸姉は宜しく右の趣き御承知下され度候

▲懸賞圖案は本號小説欄に第一回選拔の分を挿入いたし候、猶圖案應募に關して、選者山中古洞先生より左の注意有之候、諸姉は篤と御閲讀

なさるべく候
懸賞畫は非常に多く集りましたが、天賞を得ると云ふに撰者は甚だ遺憾を感じました。て是非なく人賞壹個を增加しまして、地壹人人貳人を發表する事に決しました。番外の内にも私等にはよいと認めたか緣くない。それは林のこんもりした所を寫生したとか。幼い子供の遊んてるのを見取りがきにかいたとかて沒書に終らせるのが甚だ惜まれましたが他人が見ると唯眞黑に過たり人に見へなかつたりして寧ろ怪しまれようと思つて私の手許へ藏て了ひました。こんなのは是非女子一度夢へ直してもつと好い畫にして再び輸嬴を此壇上に決して頂きたいです。それから今度は西洋紙をお用ひになつたり彩色を遊ばしたりしたのが大分ありましたが。これは木版になるんですから必ず日本紙の質の薄いのを用ひて下さい。古洞生

▲本號編輯だよりは、之にて擱筆仕候匆々不一

◉本誌は本年度の春秋二回の臨時增刊は暫らく見合せる事に致候

◉婦女子達が讀んで益するもの出版都度寄贈を望む丁寧に批評可仕候

婦人界彙報

○府下中澁谷常磐松の實踐女學校にては支那留學生教育の目的にて教務係木村芳子を北京に留學させるやに聞く○米國市俄古北西大學女子部にては近來柔道の流行盛にして愈よ柔道部を設け女子部體育會長ヒューギン孃主幹することとなれり同孃は大の日本贔負にて柔道は女子體育第一の方法なりとの意見を抱ける人なり○近時都下に遊學する諸學校在學中の男女學生間には學業を放棄して破落戸と伍する者尠からず卑猥なる遊びに耽るもありて將來文教に及す影響すくなからざるより文部省に於ても棄て置かれず愈よ各學校に內訓して不品行者に對しては容赦なく退學處分を斷行し其氏名を各學校に通牒し轉校上にも注意嚴重なる制裁を如ふることに決したりと又警視廳に於ても今後は大に惡書生の取締を嚴にする方針なりと○東京市京橋區の小學校は生徒の父兄に向て生徒の家庭に於る日用語の矯正を求つゝありと其一二を擧れば男生の『おれ』『おいら』は『私』又は『僕』女生徒の『よくつてよ』は『宜しう御座います』『いやだわ』は『いやで御座います』の如し學校のみにて八釜しく云ふも家庭にて放任すれば何の効もなき處に氣の付きたるは大に善し學校のみならず一般學生殊に女學生等にも此事あらしめ度き事なり

定價

女子文壇（每號三宅氏水彩畫寫眞口繪數葉挿入）每月一日發行

一册（大判百二十頁）	前金拾錢	一册定價郵稅共金拾壹錢
六册	前金五拾七錢	六册定價郵稅共金六拾三錢
十二册	前金壹圓八錢	十二册定價郵稅共金壹圓廿錢

外國行郵稅共拾四錢

愛讀者の再讀を乞ふ

○（愛讀は男女を問はず）○本誌は前金の外送本不致候○御申込の前金相切れ候節は無斷送本停止仕候○代金過不足のなき樣注意被下度候○領收書は一切差出さず著本にて領收と見做被下度候○御注文の節何號より何册及御住所氏名等は明瞭に御認め可被下候○御郵便爲替には御自分にて一切記入せずに願上候○郵券代用は必ず定價の壹割增（可成壹錢券）に願上候○御狀の未納稅は一切受取不申候○御問合は返信料添ひ願上候發信の際御注意可被下候

廣告

掲載料

種別	一頁（二十四字六十四行）	半頁（二十四字三十二行）	一行（五號字二十四字）
普通	金九圓六十錢	金四圓八十錢	金拾五錢
特別（表紙二面四面）	金十二圓五十錢	御斷（半頁以下中止）	○

〆切　發行前十五日

▲廣告別特取扱

神田區千代田町二番地　博報堂
今區末廣町三十八番地　富士原秀穗
京橋區南佐柄木町　日本廣告株式會社
京橋區南大工町九番地　一星社

明治三十八年二月廿六日印刷
明治三十八年三月一日發行

不許轉載

編輯兼發行者　東京市京橋區大鋸町十一番地　野口竹次郎
印刷者　東京市京橋區西紺屋町二十六七番地　石川金太郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町二十六七番地　株式合社秀英舍

發行所　東京市京橋區大鋸町十一番地　女子文壇社

直接特約大賣捌所

東京市神田區表神保町三番地　東京堂書店
東京市京橋區尾張町二丁目　東海堂
東京市京橋區鎗屋町十三番地　北隆館合資會社
東京市神田區表神保町一番地　上田屋書店
東京市京橋區鎗屋町九番地　良明堂
新潟縣長岡町字表一之町　酒井屋書店



本號より諸姉の爲に頁を増して新に
津田梅子女史閲
河井道子女史述
英文
（毎號誌末へ四頁宛）
新設す
編輯 小附注進

to see the titles of the articles and illustrations, if there are any, before I settle down to read."

"Truly, that is your habit. In order to save your time, I shall tell you one thing, and that is, you can not find any English article in the Joshi Bundan," said the elder sister.

"Why isn't there any?" asked the other.

"I am sure I do not know. Go to the chief editor of the magazine and ask him why," said Yukiko laughing merrily.

"I am really in earnest," continued the younger. "It will be so helpful to us to have some easy idiomatic English to read just for pleasure. Of-course, not too long, not too difficult, but certainly not too dry and simple."

"Your demand will puzzle the editor. However, I think he too must have thought of having an English column, but perhaps there was no space for it. Let us wait until the March number and see whether there is any.

事の題目，挿繪（もしあらば)に一應目を通して置くのが私の風です」，と花子は云ひました。

「ほんとうに其は御前の癖です時間の儉約のために一言云ふて置う．それは女子文壇から英文記事を見出す事は出來ぬと云ふ事」，と姉は告げました。

「何故ないのですか」と小女は尋ねました。

「私がドーして知て居るものですか。編輯者に理由をきいて御覧」，とて雪子は面白そうに笑ひました。

「常談じやなく，私は本氣ですの。何か平易な熟語的の英文で慰に讀む様なものがあると，好い英學力の助になりましよう。勿論，長過ぎず，六ヶ敷過ぎず，そうかと云ふて又餘り乾燥無味でもなく」

「御前の注文には編輯人も御斷りだろう。しかし．私の思ふには同人も英文欄の事を御考になつたろうが書入れる餘地が無かつたせいでしよう。マー，三月のが發行まで待て英文の有無を見ましよう」。

readily," added Yukiko.

をひくね」と雪子はつけ加へました。

In the meanwhile, Hanako began to turn over the leaves very rapidly without stopping to read while her sister took out her knitting from a work-bag.

間も無く花子は讀みもせず，只大急ぎて紙を捲りはじめ，姉は仕事入の巾着より編物を取出しました。

"Indeed!" cried Hanako again. "Look, sister! here is Miss F—'s composition on 'War and Peace,' and this is Miss A—'s verse. How well she writes! Could this little story be Miss B—'s work? Why do you ask? Because she is so reserved and so humble that one might think she would not have her things published."

「マー！姉さん，御覽なさい．これはFさんの作文よ．これがAさんの歌．何て御上手でしょう。此短い物語はBさんのでしょうか。何故ですて？Bさんは大そう内氣で，謙遜家ですから，御自分のものを外へは御出しにはなるまいと誰でも一寸思ふのです。」

Yukiko burst aut laughing and said:—

雪子は吹出し笑をしつゝ，

"How much have you already read? It seems to me, you are talking all the time. The magazine will not fly away, so be calm and read it peacefully. I am surprised to see how enthusiastic you are over every thing."

「モー幾枚よんで？饒舌て斗りの樣に私には思へてよ。雜誌は飛て行かないから落付て緩々御讀みなさい。御前の物事に熱心になるには實に驚く外ない。

"You know," began Hanako, "it is my way always to run through a book or a magazine

「御存知ですね，私は何時も本なり雜誌なりを手にしますと，それを讀みかける前，きつと其記

you see for yourself how good it is," returned Yukiko without even lifting her eyes from the page.

ごらん」と雪子は紙上に目を注ぎしまゝで云ひました。

"But sister, I do not mean to hurry you. I just wanted to know whether it is the new number."

「併.姉さん.あなたを急かせるつもりではありません。只,今月のかどうかと,一寸知りたかつたのです。」

"Why?" saked Yukiko looking at her rosy plump sister.

「何故?」雪子は顔艶のよく,肉づきのよい妹をみて問ひました。

"Because," the latter said, "I hear that several compositions of my class-mates are published in it."

「何故ですて?アノ,私の同級生の作文がでて居るとききましたから。」

"I see, I see," nodded the elder. "There! I am through with it. It is really good. No wonder that each number went through several editions."

「成程.々々」と姉は頷き「サー.私は濟みました.實によく出來てる事.毎號が數版になるのは無理でない。」

"Are you really through with it? Please do not hurry on my account. I shall not bother you."

「ほんとに御濟みに成りまして?。御急ぎなさらないで頂戴。モー邪魔しませんから。」

So saying Hanako took the magazine rather hesitatingly from her sister. But at once she exclaimed :—

斯く云ひつゝ花子は姉より稍躊躇しつゝ雜誌を受取りしが直ちに,

"What a striking cover it has! Don't you think so?"

「マー!なんと目立つ表紙ではありませんか。そう思ひにならなくて?」と行成申しました。

"Yes, it catches the eyevery

「ほんにね.それは直に人の注意

英　文

津田梅子閲　　河井道子述

Let Us Wait.

"What are you reading so intently?" asked a girl of fifteen or sixteen as she came into a bright, sunny room where her elder sister was pouring over a magazine.

"The Joshi Bundan," answered the latter.

"The Joshi Bundan? Oh, is it the much-talked-of magazine which just came out last month? Is it as interesting as people say? What number is that? The February number?" the younger questioned in a breath without waiting for an answer.

"Yes," was the only reply.

"Yes what, sister?" said Hanako the younger, rather impatiently.

"Be patient, my dear. I'll let you hare this in a moment, and

待ちましよう.

「あなた何をそう御熱心におよみですの」と今しも日あたりのよき部屋に這入りきたりし十五六の小女は，某雑誌に餘念のなき姉に尋ねました。

「女子文壇」と姉は答へました。

「女子文壇と？あゝそれは先月新刊された，評判の雑誌ですか。皆の云ふ様に面白くて？それは何號？二月の？」と返事も待たず妹は一息に問ひつゞけました。

「エー」とのみの返答

「何がエーなのですか姉さん」と妹の花子が少しく氣短に申ました。

「マーおまち。今すぐに上るから，何程よいか自分で讀て見て